

石塚遺跡調査報告

— 文苑堂書店福田本店・新鮮市場福田店新築工事に伴う調査 —

2007 年 12 月

高岡市教育委員会

序

JR北陸本線で、高岡駅より金沢方面へ向かうとき、高岡駅を出てほぼ西側に進んだ列車は大きくカーブして南西方方向に向きを変え、ほぼ直線の路線を進みます。この西側一帯に拡がっているのが、ここに報告します石塚遺跡です。

当石塚遺跡は、昭和42年に発見されて以来、数々の発掘調査が実施されてまいりました。平成時代に入り、遺跡の北側を貫いている市道六家佐野線が供用されてからは、周囲の開発が進み、これに伴う発掘調査を実施してきました。

この度、この市道の北側に「文苑堂書店福田本店」と「新鮮市場福田店」が建設されることになり、工事に先立って発掘調査を実施しました。

この調査で、弥生時代中期と鎌倉時代を中心とする遺構・遺物が確認されました。弥生時代中期では、平地式建物や方形周溝墓が検出されました。また、管玉の製品や未製品、玉造りに関連する石製品が出土しました。集落内における玉造りの様相を探る上で興味深い資料です。鎌倉時代では、大型の掘立柱建物址が検出されました。当地には福田庄が存在していた可能性があり、これとのかかわりの可能性がある資料といえます。

最後になりましたが、この調査にご理解とご協力をいただいた、株式会社文苑堂書店、株式会社丸和フード、ならびに関係者の皆様に、厚く感謝の意を表します。

平成19年 12月

高岡市教育委員会
教育長 村井 和

例　　言

1. 本書は、文苑堂書店福田本店並びに、新鮮市場福田店の新築工事に伴う、石塚遺跡の発掘調査報告書である。
2. 当調査は、株式会社文苑堂書店並びに株式会社丸和フードから委託を受け、高岡市教育委員会の監理・監督のもと、株式会社アーキジオ（旧社名 株式会社中部日本歴史研究所）が実施した。
3. 現地調査期間は平成 17 年 7 月 11 日～同年 10 月 17 日（実働 64 日）で、調査区は以下の通りである。
文苑堂書店福田本店地区（「文苑堂地区」と略称）：高岡市福田 3,200 m²
新鮮市場福田店地区（「新鮮市場地区」と略称）：高岡市上北島 2,500 m²
4. 報告書作成期間は平成 17 年 10 月 18 日～平成 19 年 12 月 28 日である。
5. 調査関係者は以下の通りである。
株式会社文苑堂書店
代表取締役社長：吉岡隆一郎
株式会社丸和フード
代表取締役社長：秋山 哲
富山県高岡市教育委員会文化財課
文化財課長：饭島千恵子
〔保管文化財担当〕
主 韶：本林弘吉
副 主 韶：山口辰一
主 任：荒井 降
株式会社アーキジオ
代表取締役社長：津崎泰秋
事業本部長：佐伯 孝
文化財調査部部長：桑野正文
文化財調査課課長：新宅輝久
調査員：田中昌樹 井伊浩一郎 阿部将樹 松尾洋次郎
施工監理技師：細川俊之 黒田忠明
6. 現地調査は、田中・井伊・松尾が担当し、新宅・細川・黒田が補佐した。
7. 整理・報告書作成作業は、田中・井伊・阿誰・松尾が担当し、新宅が補佐した。
8. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より御教示、御援助を賜った。（順不同・敬称略）
赤澤徳明 上野 寧 越前慶祐 越前慎子 大野淳也 岡本淳一郎 岡田一広 金三洋英則 後藤浩之 下濱貴子
新宅 茂 杉山大晋 高橋治二 馬場伸一郎 林 大悟 久田正弘 廣瀬時習 堀井泰樹 堀内大介 正岡大実 町田賢一
光谷拓実 森 隆 安中哲徳 安 英樹
9. 第 6 章自然化学分析は、富山大学理学部教授酒井英男氏、同大学院博士課程岸田徹氏、同大学理学部松延礼佳氏、同骨頭明日香氏による古地磁気年代測定並びに地中レーダー探査を依頼し、同時に玉稿を賜った。
10. 本書の執筆分担は、以下の通りである。
第 1 章—山口、第 4 章及び 5 章第 2 節中の石製品—阿部、第 6 章—酒井・岸田・青木 それ以外—田中

凡　例

1. 本書に掲載した遺構図の方針は座標北であり、水平基準は海拔高である。
2. 座標は、世界測地系を使用している。
3. 本書における遺構記号及び遺構番号は、次の通りである。

S B - 据立柱建物 (01～) S D - 墓 (01～) S E - 井戸 (01～) S I - 平地式建物 (01～) S K - 土坑 (01～)
P - ピット (01～) S Z - 方形須溝墓 (01～) S X - その他不明遺構 (01～) D S - 土器集中箇所 (01～)
4. 断面図並びに土器鉢土における色調の内容は、小山正志・竹原秀雄編著『新版標示土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局並びに財団法人日本色彩研究所監修 2002年版)に準拠している。
5. 土層断面図における [] は、地山を表す。
6. 土色注記における数字は、Iなどのローマ数字が遺構全体に通じる基本層序とし、①などの算用数字は遺構個別の観察結果を表す。また同図面上に同算用数字が使用されている場合は、遺構ごとに土色注記を①から順に使用したためである。
7. 遺構図における平面図及び土層断面図の縮尺は、それぞれの図面に記載している。
8. 第21図のアミカケは [] 下層 (弥生時代中期～古墳時代前期)、[] 中層 (古代～中世)、[] 上層 (近世～近現代) を表す。
9. 遺構並びに遺物観察における法量の () は推定値である。また単位は、遺構はmを使用し、遺物はcmを使用している。
10. 遺構観察における「位置」は、今回の調査区において設定した独自のXY座標を記載している。世界測地系に換算すると、X 0 = 81720・Y 0 = -16520である。
11. グリッドは10m×10mを大グリッドとし、さらに2m×2mを小グリッドとした。グリッドの数値は南及び東へ2m進むごとに1ずつ増加する方式を採用している。
12. 本書における遺物番号は通し番号であり、詳細は次の通りである。

土器類 : 1001～ 木製品 : 2001～ 石製品 : 3001～
13. 遺物図における断面のアミカケは、[] を須恵器とし、[] を珠洲焼としている。また [] はコゲの付着範囲を、[] はススの付着範囲を表す。
14. 土器の口格 (底格) は、口縁端部外縁ではなく口縁部上端 (底部下端) で計測している。また器高 (残高) は、口縁部最上端から底部 (体部) 最下端で計測している。
15. 図版25中で個別番号が付記していない遺物は、紙面の都合上実測図を掲載できなかったものである。全て新鮮市場地区から出土したものである。また、図版25・26に掲載している遺物は全て実大である。
16. 一般的な弥生土器の福年観は以下の通りである。

指標／区分	弥生時代中期中葉			弥生時代中期後葉	
八日市地方	6	7	8	9	10
畿 内	III			IV	
石 川	小松		磯部	専光寺	

17. 本文中に記載されている引用・参考文献は筆者(編集機関)、発行年、タイトル、発行機関の順で表現し巻末にその一覧を記載している。

調査参加者名簿

免職 前川愛子 島倉智子 末田幸子 竹島昭子 萩野道子 堀よし子 野口輝子 永森道子
(以上(社)旧下村シルバー人材センター)
松井コウ 藤木百合子 (以上(社)は新済市シルバー人材センター)
寺岡秀作 野尻明 東爪武治 村田勝義 上見昭雄 (以上(社)旧福岡町シルバー人材センター)
米倉良紫 荒木船子 宮崎しげる 山本喜義 宮田久美太郎 谷場幸正 達深雪 山口定一
荒木清一 久保寿仲 上坂清三 渡邉宣教 石坂与祥雄 在沢清信 山田敏之 川合健治
上村良広 水上初造 川合仁志 宮岸正夫 中山政義 木下実 堀とよ 山田和子 宮川玉枝
中田透子 吉田信子 細木八重子 荒井とよ 中井静子 高瀬勇紀智 干堀勇 濱戸勝治
(以上(社)南砺市シルバー人材センター)
石田哲雄 江口實 大坪忠雄 小川勉 笠谷晃 梶原哲郎 新保勝正 中原正人 斎藤勝利
義口和弘 山田勇 宝田紀代春 舟木藤夫 林憲彦 堀田馨 新谷松男 西川精
大谷嘉泰 角澤勲 伊東鉄男 錦武夫 南弘喜 山田次男 山谷貞大 古久實 橋光男
堀清勝 松沢秀雄 秋山和雄
安藤朱実 鈴木静江 新保利恵 高山真弓 橋理香 浜浦和美 水巻麻里 宮口美香
整理 北川淑子 真田恭子 佐野謙美 新保利恵 高橋英子 新田三喜子 楠真理子 畑シノブ
浜浦和美 水巻麻里 宮口美香 渡辺賀枝子

協力者 福島庄一

協力機関 (社) 射水市シルバー人材センター (旧下村及び旧新湊市シルバー人材センター)
(社) 高岡市シルバー人材センター (旧福岡町シルバー人材センター)
(社) 南砺市シルバー人材センター
上北島・福田岡自治会

目 次

序
例言
凡例
目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡概観	3
第1節 周囲の環境及び歴史的地理的概観	3
第2節 周辺遺跡及び石塚遺跡の概観	5
第3章 調査概観	15
第1節 調査の方法と経過	15
第2節 検出遺構の概要	17
第3節 出土遺物の概要	18
第4章 文苑堂地区	19
第1節 概要	19
第2節 遺構	26
第3節 遺物	31
第4節 小結	40
第5章 新鮮市場地区	43
第1節 概要	43
第2節 遺構	48
第3節 遺物	76
第4節 小結	96
第6章 自然科学分析	103
第1節 高岡市石塚遺跡の噴砂と堆積物の考古地磁気研究	103
第2節 高岡市石塚遺跡における噴砂を対象とした地中レーダー探査	109
第7章 結語	113

図版目次

- 図版1 遺跡写真 石塚遺跡
1. 二上山を望む（南から）
2. 調査区全景（東から）
全景（上方から、上が北）
1. SX01 全景（南から）
2. SX02 全景（北から）
1. SK19 遺物出土状況（東から）
2. SK43 遺物出土状況（南から）
1. SD01 西側 中央土層断面（南から）
2. SD01 西側 遺物出土状況（南東から）
3. SD01 西側 槽出土状況（南から）
全景（上方から、上が北）
1. SI01 全景（南から）
2. SI01 灰穴炉と柱穴群（南から）
1. SZ01 全景（東から）
2. SZ01 遺物出土状況（南西から）
1. SZ02 全景（西から）
2. SZ02 (南周辺部) 土層断面（東から）
1. SX01 全景（東から）
2. SX01 遺物出土状況（南西から）
1. SX02 全景（南から）
2. SX03 全景（東から）
1. SX04 全景（南から）
2. SX04 b-b'西側土層断面（南から）
3. SX04 b-b'東側十層断面（南から）
1. SK06 遺物出土状況（東から）
2. SK19 上層断面（東から）
3. SK26 遺物山上状況（東から）
1. SK27~30 全景（北から）
2. SK27 遺物出土状況（南から）
1. SB01 全景（南から）
2. SB02 全景（上方から、上が北）
1. SB03 全景（上方から、上が北）
2. SB04 全景（南から）
1. SK01 土層断面（南から）
2. SK03 土層断面（南から）
3. SK07 遺物出土状況（北から）
図版18 遺物写真 文苑堂地区
図版19 遺物写真 文苑堂地区
図版20 遺物写真 新鮮市場地区
図版21 遺物写真 新鮮市場地区
図版22 遺物写真 新鮮市場地区
図版23 遺物写真 新鮮市場地区
図版24 遺物写真 新鮮市場地区
図版25 遺物写真 新鮮市場地区

挿 図 目 次

第1図 石塚遺跡位置図 (1/15万)	1
第2図 石塚遺跡推定範囲と各調査区位置図 (1/5,000)	2
第3図 庄川扇状地地形図 (1/15万)	4
第4図 石塚遺跡及び周辺の遺跡分布図 (1/30,000)	6
第5図 石塚遺跡既往の調査区位置図〔1〕 (1/1,000)	8
第6図 石塚遺跡既往の調査区位置図〔2〕 (1/1,000)	9
第7図 石塚遺跡既往の調査区位置図〔3〕 (1/1,000)	10
第8図 石塚遺跡既往の調査区位置図〔4〕 (1/1,000)	11
第9図 石塚遺跡既往の調査区位置図〔5〕 (1/1,000)	12
第10図 石塚遺跡既往の調査区位置図〔6〕 (1/1,000)	13
第11図 文苑堂地区 新鮮市場地区の位置関係図 (1/1,000)	16
第12図 文苑堂地区 基本層序 (1/40)	19
第13図 文苑堂地区 遺構全体図 (1/400)	21
第14図 文苑堂地区 遺構配置図北西部 (1/200)	22
第15図 文苑堂地区 遺構配置図北東部 (1/200)	23
第16図 文苑堂地区 遺構配置図南西部 (1/200)	24
第17図 文苑堂地区 遺構配置図南東部 (1/200)	25
第18図 文苑堂地区 S X 0 1 遺構平面図及び上層断面図 (1/40)	27
第19図 文苑堂地区 S X 0 2 遺構平面図及び下層断面図 (1/40)	28
第20図 文苑堂地区 S K 1 9・4 3 遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	29
第21図 文苑堂地区 S D 0 1 中央及び西侧自然流路土層断面図 (1/80)	30
第22図 文苑堂地区 S K 1 9・4 3 出土遺物実測図 (1/3)	32
第23図 文苑堂地区 S D 0 1 出土遺物実測図① (1/3)	34
第24図 文苑堂地区 S D 0 1 出土遺物実測図② (1/3)	36
第25図 文苑堂地区 出土木製品実測図 (1/3 1/6)	38
第26図 文苑堂地区 出土石製品実測図 (1/3)	39
第27図 文苑堂地区 古代・中世出土遺物実測図 (1/3)	40
第28図 新鮮市場地区 基本層序 (1/40)	43
第29図 新鮮市場地区 遺構全体図 (1/400)	45
第30図 新鮮市場地区 遺構配置図北部 (1/200)	46
第31図 新鮮市場地区 遺構配置図南端 (1/200)	47
第32図 新鮮市場地区 S I 0 1 遺構平面図及び下層断面図 (1/80)	49
第33図 新鮮市場地区 S Z 0 1 遺構平面図 (1/80)、土層断面図 (1/40) 及び遺物出土状況図 (1/20)	50
第34図 新鮮市場地区 S Z 0 2 遺構平面図 (1/80) 及び土層断面図 (1/40)	52
第35図 新鮮市場地区 S X 0 1 遺構平面図 (1/80) 及び土層断面図 (1/40)	54
第36図 新鮮市場地区 S X 0 2 遺構平面図及び土層断面図 (1/80)	56
第37図 新鮮市場地区 S X 0 2 上層断面図 (1/40)	57
第38図 新鮮市場地区 S X 0 3 遺構平面図 (1/80) 及び土層断面図 (1/40 1/80)	58
第39図 新鮮市場地区 S X 0 4 遺構平面図 (1/80) 及び上層断面図 (1/80)	60
第40図 新鮮市場地区 S X 0 4 上層断面図 (1/40)	61
第41図 新鮮市場地区 S K 0 6・1 9・2 6 遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	62
第42図 新鮮市場地区 S K 2 7～3 0 遺構平面図及び上層断面図 (1/80)	63

第43図	新鮮市場地区	S B 0 1、区画溝Ⅰ遺構平面図(1/100)	66
第44図	新鮮市場地区	S B 0 1 南北柱穴列エレベーション図(1/100)	67
第45図	新鮮市場地区	S B 0 1 東西柱穴列エレベーション図及び土層断面図(1/100)	68
第46図	新鮮市場地区	S B 0 2・0 3、区画溝Ⅱ遺構平面図(1/150) 及び土層断面図(1/100)	70
第47図	新鮮市場地区	S B 0 2・0 3 遺構平面図及び柱穴エレベーション図(1/100)	71
第48図	新鮮市場地区	S B 0 4 遺構平面図、柱穴エレベーション図及び上層断面図(1/100)	73
第49図	新鮮市場地区	S K 0 1～0 3・0 7 遺構平面図及び土層断面図(1/40)	75
第50図	新鮮市場地区	S I 0 1 山上遺物実測図①(1/3)	77
第51図	新鮮市場地区	S I 0 1 出土遺物実測図②(1/3)	78
第52図	新鮮市場地区	S I 0 1 出土遺物実測図③(1/3)	79
第53図	新鮮市場地区	S Z 0 1・0 2 出土遺物実測図(1/3)	81
第54図	新鮮市場地区	S X 0 1・0 2 出土遺物実測図(1/3)	82
第55図	新鮮市場地区	S X 0 3・0 4 出土遺物実測図(1/3)	83
第56図	新鮮市場地区	S K 0 6・1 9 出土遺物実測図(1/3)	86
第57図	新鮮市場地区	S K 2 7・3 0 出土遺物実測図①(1/3)	86
第58図	新鮮市場地区	S K 2 7・3 0 出土遺物実測図②(1/3)	88
第59図	新鮮市場地区	出土玉類実測図(1/1 1/2)	90
第60図	新鮮市場地区	施溝位置の模式図(石針)	92
第61図	新鮮市場地区	出土石製品実測図(1/1 1/2)	92
第62図	新鮮市場地区	古代山上遺物実測図(1/3)	93
第63図	新鮮市場地区	中世出土遺物実測図(1/3 1/6)	94
第64図	新鮮市場地区	近世出土遺物実測図(1/3)	95

別 表 目 次

別表 1	文苑堂地区	遺構一覧表	41
別表 2	文苑堂地区	土器觀察表	41
別表 3	文苑堂地区	木製品觀察表	42
別表 4	文苑堂地区	石製品觀察表	42
別表 5	新鮮市場地区	遺構観察表	97
別表 6	新鮮市場地区	上器觀察表	99
別表 7	新鮮市場地区	玉類觀察表	101
別表 8	新鮮市場地区	石製品觀察表	102

第1章 調査に至る経緯

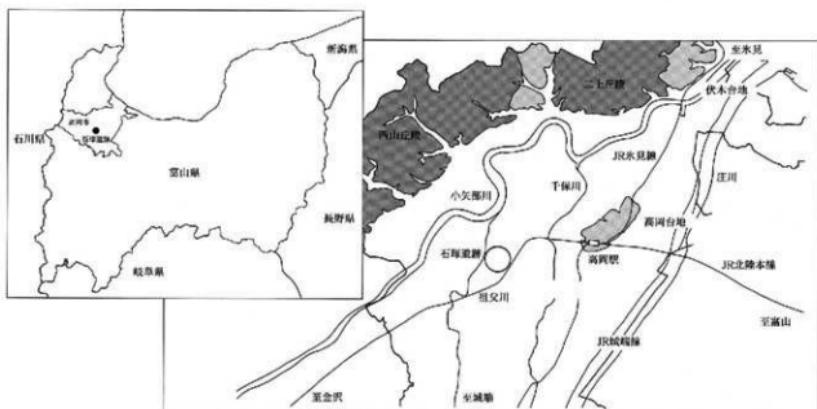
高岡市街地の南側郊外を東西に貫く「都市計画道路下伏間江福田線」は、当石塚遺跡付近では、遺跡の北側を東南東～西北西に走るものである。平成時代に入り供用開始後は、市道六家佐野線と称されている。この道路の周囲は開発が進み、店舗等の建設が増加している地区である。

平成16年度に株式会社文苑堂書店による店舗計画が、この道路の北側で立てられ、高岡市教育委員会は国庫補助事業として試掘調査を実施した。この調査により、弥生～古墳時代の土坑や溝、中世の掘立柱建物址等の遺構が検出され、当該期の遺物が出土した。

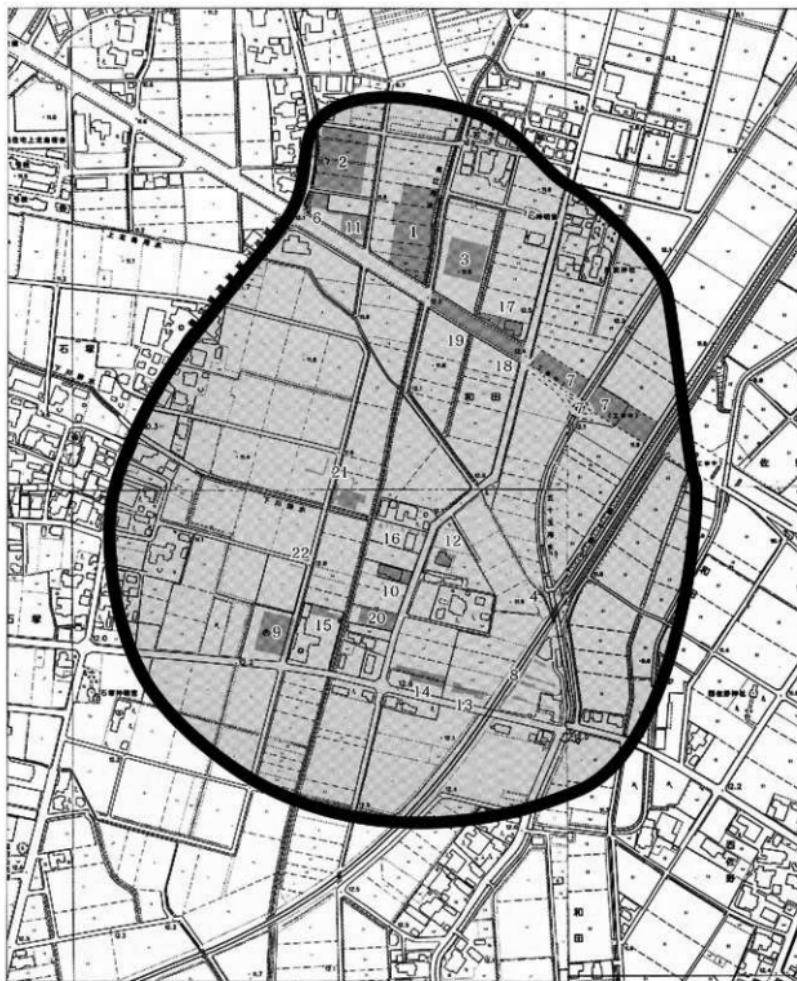
調査対象面積は13,894 m²で、試掘面積は2,058 m²である。開発予定地全体に遺跡が広がっていることが判明した。

平成17年度になり、開発計画が変更され、株式会社文苑堂書店による「文苑堂書店福田本店」と株式会社丸和フーズによる「新鮮市場福田店」の2つの店舗が建設されることになった。高岡市教育委員会と建築主体の両社及び設計担当の中川建築設計事務所を交え、協議を行い、建物の建設により遺跡が破壊される部分を対象に本発掘調査を実施することになった。

調査主体及び調査の指導・監理は高岡市教育委員会文化財課が行い、調査作業実務は民間の調査会社に委託して実施し、調査経費は開発側が負担することで協議が整った。調査は隣接した地区のため一帯として実施することで1社が一括して実施することになり、株式会社中部日本鉱業研究所（現在、株式会社アーキオ）が選ばれた。そして、「高岡市教育委員会・株式会社文苑堂書店・株式会社中部日本鉱業研究所」「高岡市教育委員会・株式会社丸和フーズ・株式会社中部日本鉱業研究所」のそれぞれ3者による覚書を締結し調査実施に至った。



第1図 石塚遺跡位置図（1/15万）



第2図 石塚遺跡推定範囲と各調査区位置図 (1/5,000)

- 1.文苑堂地区
- 2.新鮮市場地区
- 3.きぼう地区 (2003年調査)
- 4.福島地区 (1998年調査)
- 5.高岡理状線地図 (1998年調査)
- 6.白石地区 (1997年調査)
- 7.1997年都市計画道路地区
- 8.深田地区 (1996年調査)
- 9.安川地区 (1996年調査)
- 10.宮崎地区 (1996年調査)
- 11.老子地区 (1995年調査)
- 12.高田地区 (1993年調査)
- 13.建設地区 (1993年調査)
- 14.日本海ホーミー地区 (1991・94年調査)
- 15.森田地区 (1991年調査)
- 16.正和地区 (1991年調査)
- 17.林地区 (1991年調査)
- 18.1987年都市計画道路地区
- 19.1986年都市計画道路地区
- 20.1971年発掘調査地区
- 21.1968年発掘調査地区
- 22.1967年発掘調査地区

第2章 遺跡概観

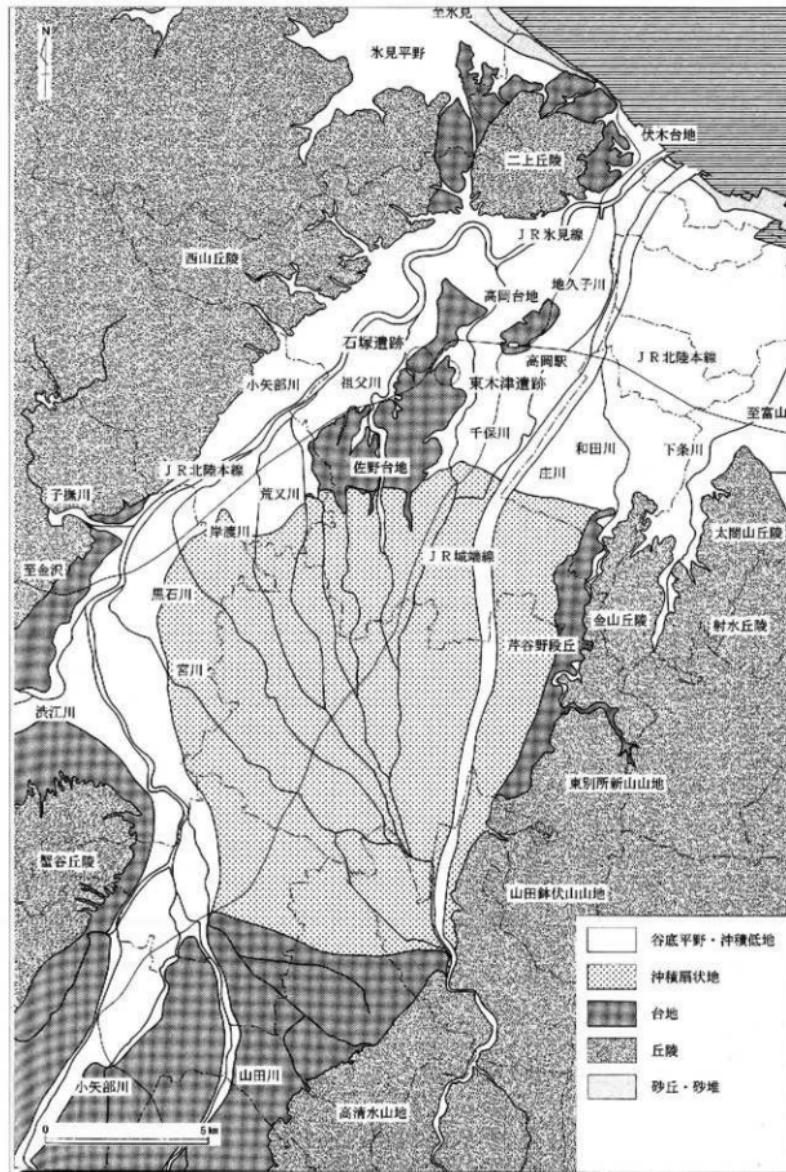
第1節 周囲の環境及び歴史的地理的概観

石塚遺跡は、現在の高岡市街地の南西郊外、祖父川と千保川に挟まれた標高11~12mの微高地に位置する。地形は、飛騨高地の中央部、岐阜県庄川村（現岐阜県高岡市）烏帽子岳を源とする、全長約132kmの庄川により形成されたいわゆる庄川扇状地である。庄川の位置が現在に近い状態になったのは、寛文10（1670）年から正徳4（1714）年にかけて加賀藩によって実施された河川改修と流路の固定化によるもので、それ以前は現在支流である千保川が庄川本流であった。しかし、この加賀藩による河川改修では、現在の高岡市能町地区で小矢部川と合流していたため、明治29（1896）年に伏木地区で相次いで洪水が発生する事態となった。この問題を解決するためと、伏木港建設のために小矢部川と庄川を分流する工事が行われ、明治45（1912）年工事が完了したことと現在のように富山湾に直接注ぐようになった。庄川扇状地を形成する支流は、いずれも扇状地の西端部を北流する小矢部川に注ぎ込んでいる。現在は庄川の上流部に幾多のダムが建造され、また砺波平野の灌漑用水源として利用されているため、河床の低下が著しくなっている。

往古の庄川によって形成された扇状地の扇端部には、佐野台地と高岡台地が存在する。佐野台地は、西は小矢部川、東は千保川の浸食により段丘化した標高10~20mの台地で、約17.6km²を測る。扇端部であることから湧水が非常に豊富であり、台地の縁辺部にはその伏流水がつくる小河川による侵食谷が形成される。さらに千保川の東側には高岡台地があり、先述した佐野台地と高岡台地は本来連続する台地であったと考えられる。

地質は、第4期一完新世平野の表層堆積物・河成堆積物・高位平野に相当する沖積地で、「庄川の高位扇状地に続く微高地の平野で、小河川によって少し開析され、低い台地状になっている。ここには、グライ土壤が多く、土壤中に泥炭や黒泥を含んだ部分が混じっており、湧水が認められている。また、古墳期の遺跡が広範に発見されていて、2千年前頃より新しい堆積物は少ないと推定できる。」と記載されている（角・野沢・井上 1989）。

当地域の歴史は、『富山県の地名（平凡社2001）』によると「石塚村と呼ばれ、南は辻村、西は六家村に接する。福田7村の1つである。村名の由来は、庚申を祀った大きな塚があることによる」と記載されている。福田7村とは、石塚村・佐野村・北島村・本保村・辻村・雄野町村・荒見崎村であり、合せて福田村と呼ばれていた。福田村は、中世には福田庄と呼ばれ「康永3（1344）年7月日の光性法親王解（妙法院文書）には、鳥羽院政期に越中を知行国とした徳大寺公能により福田庄が形成され、その弟で比叡山西塔東谷にある常住金剛院の円実法眼の私領とされた。さらに淨仁を経て円実の弟公性が相伝した。寛元3（1245）年4月17日の公性讓狀（妙法院文書）には、預所は慶性で、公性の姉である南御方（徳人寺育子か？）の報恩用途にあてられており、公性から太政法印（尊教・太政大臣西園寺公相の子）に譲られている。以後実静・亮性法親王（妙法院円跡）へと資本相承された。その結果、当庄は常住金剛院領となり、光性法親王以降、常住金剛院とともに妙法院（現京都市山科区）の支配下に入る。しかし、南北朝末期には、將軍家に奉公衆として近侍していた大船家領となっていたことから、大船家が御料所として預かっていたか、それ以前に居住していた越中石黒家の福田二郎範高の子孫である在地領主層や桃井直常などが倒幕運動にくみしたため、所領を没収され幕府料所とされたと考えられる。」と記載されている（平凡社2001）。



第3図 庄川扇状地地形図（1/15万）

第2節 周辺遺跡及び石塚遺跡の概観

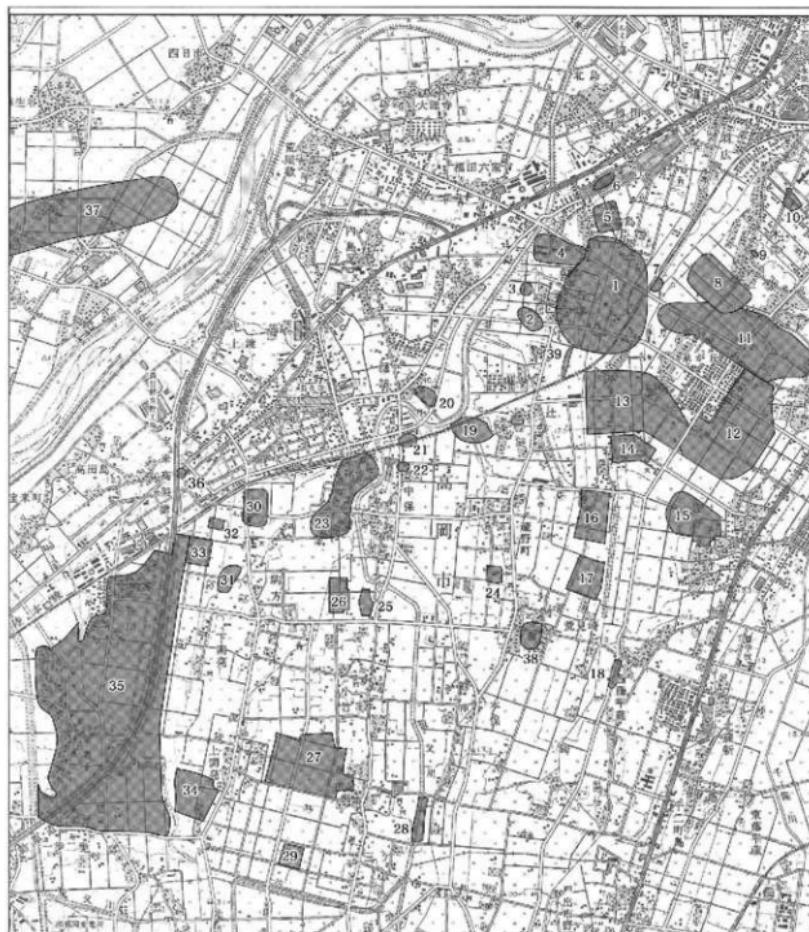
周辺遺跡の概観

石塚遺跡周辺の遺跡は通例、祖父川沿い・千保川沿いの大きく2地区に分けられる。遺跡の多くは佐野台地の縁辺部でかつ豊かな湧水を得る事が出来る侵食谷の近くに形成されている事から、その部分が生活に適した地であった事が窺える。以下に発掘調査が行われた遺跡を中心にその概観を述べていく。

祖父川沿いは、石塚遺跡周辺と立野地区の2地区に細分される。まず、石塚遺跡周辺には西側に縄文時代晩期の遺物散布地である「2. 石塚蛸保遺跡」が見られる。そして、現石塚集落の北側（石塚遺跡の北西側）は侵食谷が東西方向に延びており、谷の北側の台地上には、縄文時代晩期の土器と、珠洲焼・中世土師器と共に中世の土坑・溝などが確認されたことで石塚遺跡とは別の遺跡と判断した「4. 石塚江之戸遺跡」が立地し、また東側には弥生・古墳時代の遺物散布地である「7. 右名瀬B遺跡」が所在する。次に石塚遺跡から見ると南西方に向に位置する立野地区は、JR西高岡駅周辺に当たる。祖父川の右岸微高地に縄文時代晩期・弥生時代中期・古代の遺物散布地である「22. 中保A遺跡」が所在する。対岸には、「11. 東木津遺跡」との関係が考えられる「23. 中保B遺跡」が所在する。この遺跡は、古代の暗文土器や墨書き土器・転用鏡、それに舟串・人形などの木製祭祀具などと共に船着場とそれに伴う水路や倉庫と考えられている掘立柱建物群が確認され、古代水上交通の中繼点でありかつ官衙的な様相を含んだ遺跡ではないかとも考えられている。その西側には縄文時代晩期・古代・中世の遺物散布地である「30. 立野地頭田遺跡」が、佐野台地の西端部には、縄文時代晩期の土坑などが確認された「31. 胸方遺跡」、縄文時代晩期・古代・中世の遺物散布地である「33. 高田新西後遺跡」がそれぞれ分布する。そして佐野台地の最西端には、縄文時代晩期、特に弥生時代後期前後の短廻存複型集落で玉作り工房址や多数の周溝を持つ建物群、また古墳時代中期までの水出が確認された「35. 下老子佐川遺跡」が所在する。下老子佐川遺跡の北側には近世陸上交通路である「36. 近世北陸道遺跡」が所在する。祖父川沿いに分布する遺跡の特徴として、縄文時代後晩期に遺跡が形成され、一度途切れた後古墳時代から中世の間に再び遺跡が形成される様相がうかがえる。

一方千保川沿いは、弥生時代中期から終末期にかけて遺跡を形成し始め、引き続き中世まで遺跡が形成される様相がうかがえる。その中心となるのが、佐野台地の北東端で石塚遺跡の東側から千保川の間に位置する「11. 東木津遺跡」である。弥生時代から中世までの長期的な集落で、特に奈良時代から平安時代前期頃を中心とし、「郡」「田中」と書かれた墨書き土器を含む須恵器や土師器を作った大型掘立柱建物群が検出されている。中保B遺跡と同様、官衙的な要因を含む遺跡ではないかと考えられている。東木津遺跡の西半部からは、佐野台地が半島状に北東に延び、この上に南から順番に古代から近世の遺物散布地である「8. 木津神社遺跡」「9. 西木津遺跡」「10. 北木津遺跡」が立地する。その南側には、弥生時代終末期と古墳時代前期の堅穴住居や、古代から中世にかけての井戸・土坑・溝などが確認された「12. 下佐野遺跡」、弥生時代中期後半頃の方形周溝墓と弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居などが確認された「13. 右名瀬A遺跡」が所在する。この2者は、位置・時期的な条件から石塚遺跡との関係が大いに考えられる。

以上のように、佐野台地の縁辺部には多くの遺跡が立地し、中でも散布地を含め弥生時代中期から古墳時代前期、そして古代を中心とする2時期が目付く。どちらも、中核を成すような重要な遺跡が佐野台地に立地している事が分かり、古来よりこの地は人々が生活する上で重要な場所であった事がうかがえる。



第4図 石塚遺跡及び周辺の遺跡分布図 (1/30,000)

- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1.石塚遺跡 | 2.石塚城保遺跡 | 3.石塚五俵田遺跡 | 4.石塚江之戸遺跡 | 5.上北島遺跡 |
| 6.下北島住吉遺跡 | 7.石名瀬B遺跡 | 8.木津神社遺跡 | 9.西木津遺跡 | 10.北木津遺跡 |
| 11.東木津遺跡 | 12.下佐野遺跡 | 13.石名瀬A遺跡 | 14.西佐野千代遺跡 | 15.西訪遺跡 |
| 16.辻南遺跡 | 17.荒見崎北遺跡 | 18.西藤平成遺跡 | 19.辻遺跡 | 20.種詔遺跡 |
| 21.中保C遺跡 | 22.中保A遺跡 | 23.中保B遺跡 | 24.蕨野町遺跡 | 25.小竹B遺跡 |
| 26.小竹C遺跡 | 27.今市遺跡 | 28.本保遺跡 | 29.三ヶ遺跡 | 30.立野地戸遺跡 |
| 31.胸方遺跡 | 32.高田新西後遺跡 | 33.高田新西後遺跡 | 34.上間堀遺跡 | 35.下老子菅原遺跡 |
| 36.近世北陸道遺跡 | 37.赤丸古村遺跡 | 38.荒見崎村内遺跡 | 39.石塚六方遺跡 | |

石塚遺跡発掘調査の歴史

石塚遺跡は高岡市街地の南西郊外に位置する。昭和 43（1968）年に高岡工芸高等学校地理歴史クラブOB会（オジャラ会）が、小島俊彰氏の指導のもと発掘調査を実施したのが最初である（1968年発掘調査地区）。この地から遺物が出土する事は地元住民の間では古くから知られていたが、発掘調査によって畿内系の樹脂文の影響を受けた小松式上器やピット状遺構を確認した事で、弥生時代の遺跡である事が認識された。その後、昭和 55（1980）年に富山県埋蔵文化財センター指導の下、高岡市教育委員会が、住宅建設に伴う試掘調査を行い、昭和 56（1981）年に記録保存目的とした同地の本調査を実施した。また、当地が昭和 57（1982）年度の桜田地区黒営は場整備事業の計画地になったことから、昭和 56（1981）年 11 月に遺跡全体の範囲と遺構までの深度の確認を目的とする試掘調査を実施し、その結果、右岸遺跡は東西に約 800m、南北に約 700m の範囲と推定される広大な遺跡である事が判明した。

しかし、昭和 59（1984）年度に実施された都市計画道路建設工事中に土器の出土が確認された事から、遺跡の範囲が広がる事が想定され、昭和 60（1985）年に工事範囲を対象とした約 4,860 m²の試掘調査を行う事となった。試掘調査の結果、長江用水から東側で遺構・遺物が密であることが確認され、1986 年石塚遺跡の第 1 次発掘調査を行う事となった。そして現在、平成 17 年度までに、合計 26 回の発掘調査が行われている。その間に当初石塚遺跡と考えられていた範囲は、幾多の調査の結果、遺跡の性格から細分化され、現在では東西 650 m、南北 700 m の範囲におよそ確定されている。これまでの調査の結果と合せて、石塚遺跡は弥生時代中期、古墳時代前期～中期、古代～近世までの長期にわたる複合遺跡である事が確認されている。

石塚遺跡既往の調査成果（第 5～10 図、高岡市 2001 から転載）

石塚遺跡は、平成 17 年度までに試掘調査を含め 26 回に渡る調査が行われている。以下に、これまでどのような調査成果が上げられているのかを、調査区ごとに簡潔にまとめていく。

「1967 年発掘調査地区」：昭和 42（1967）年度実施。弥生時代の溝・ピット状遺構を確認。

「1968 年発掘調査地区（オジャラ会）」：昭和 43（1968）年度実施。弥生時代中期の周溝を持つ半地式建物 1 棟を確認。

「1981 年発掘調査地区」：昭和 56（1981）年度実施。弥生時代中期の土坑を確認。

「1986 年都市計画道路地区」：昭和 61（1986）年度実施。弥生時代中期の大型上坑 2 基、古墳時代前期の前方後方墳（？）1 基、中世の井戸 4 基・溝・上坑などを確認。

「1987 年都市計画道路地区」：昭和 62（1987）年実施。弥生時代中期の周溝状遺構 1 基、古墳時代前期の前方後方墳 1 基などを確認。

「林地区」：平成 3（1991）年度に実施。弥生時代中期の十坑墓、占墳時代前期の前方後方墳 1 基（87「確認済みの続き」）、1 基、古代の堅穴状方墳遺構 2 基、井戸址 1 基、中世後期の区画溝？を確認。

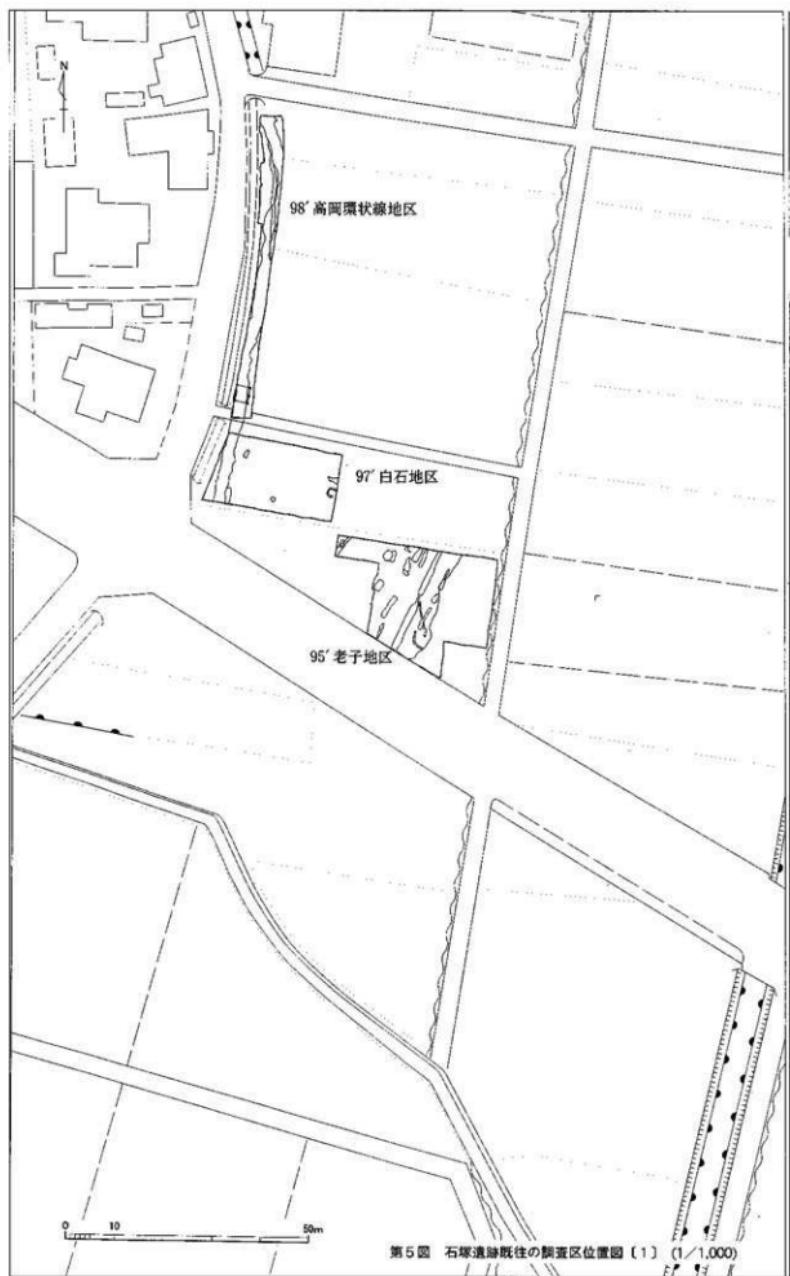
「森田地区」：平成 3（1991）年度に実施。弥生時代中期の周溝を共有する方形周溝墓 3 基を確認。

「正和地区」：平成 3（1991）年度に実施。弥生時代中期の土坑・溝・占墳時代前期～中期の上器類を確認。

「高田地区」：平成 5（1993）年度に実施。弥生時代中期の玉作り工房址 1 基・方形周溝墓 1 基・土坑 9 基・溝 9 条、古墳時代前期の堅穴住居址 1 基・掘立柱建物址 2 基・土坑 1 基・溝 1 条を確認。

「旭建設地区」：平成 5（1993）年度実施。弥生時代中期の十坑墓を確認。

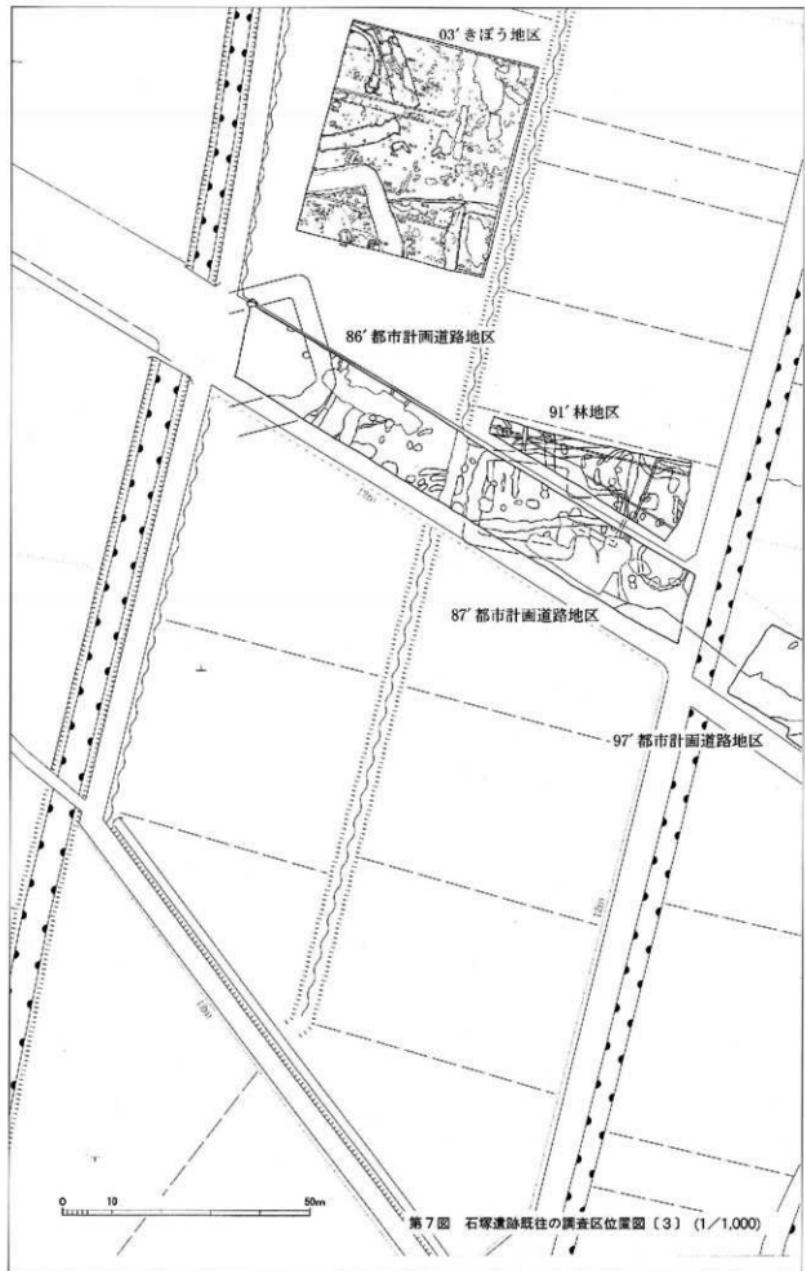
「日本海ホーム地区」：平成 6（1994）年度実施。弥生時代中期の土坑墓を確認。



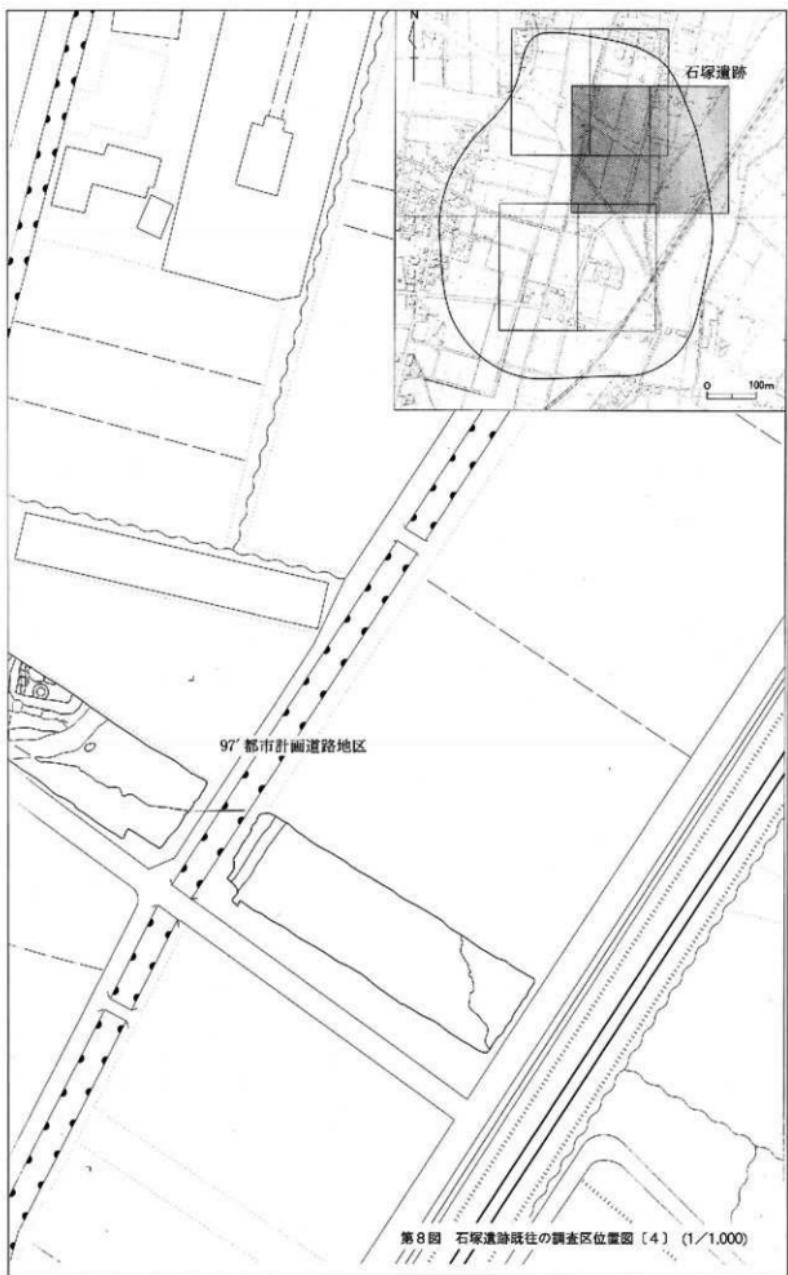
第5図 石塚遺跡既往の調査区位置図(1) (1/1,000)

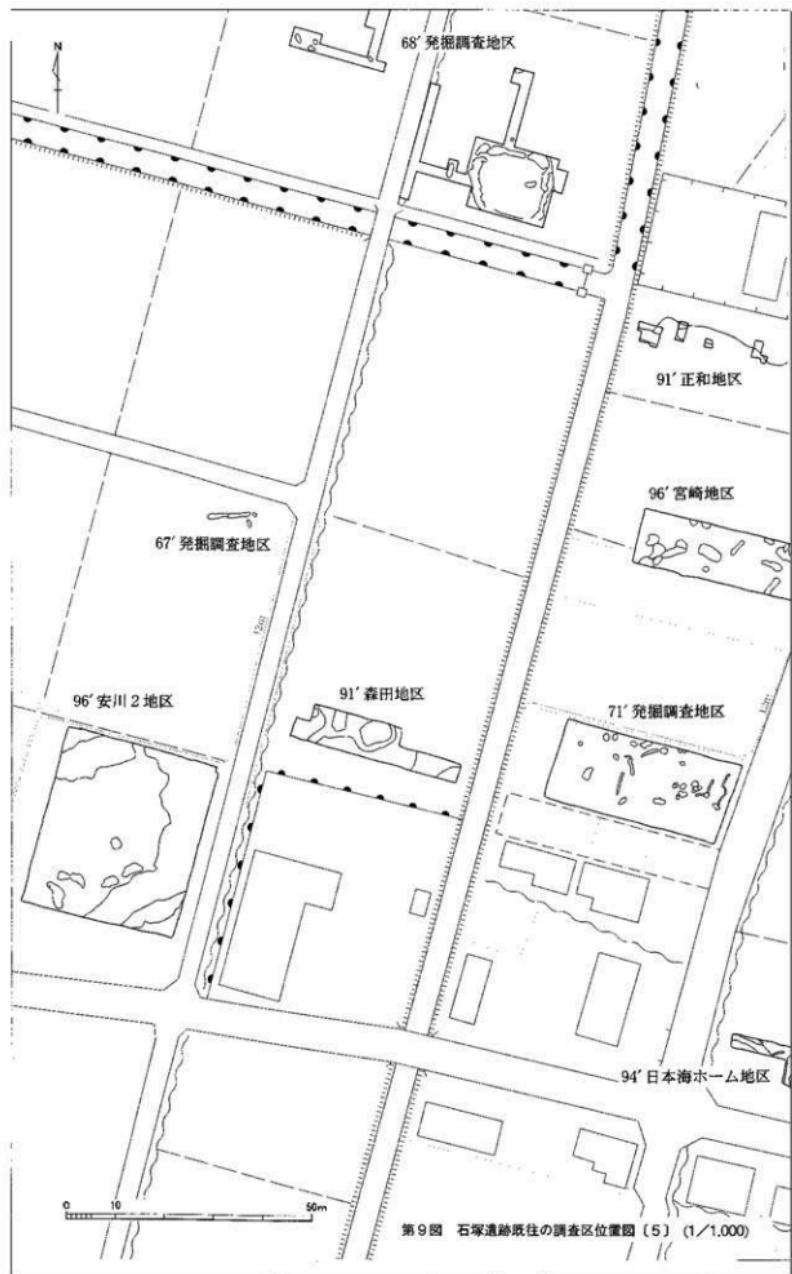


第6図 石塁遺跡既往の調査区位置図〔2〕(1/1,000)

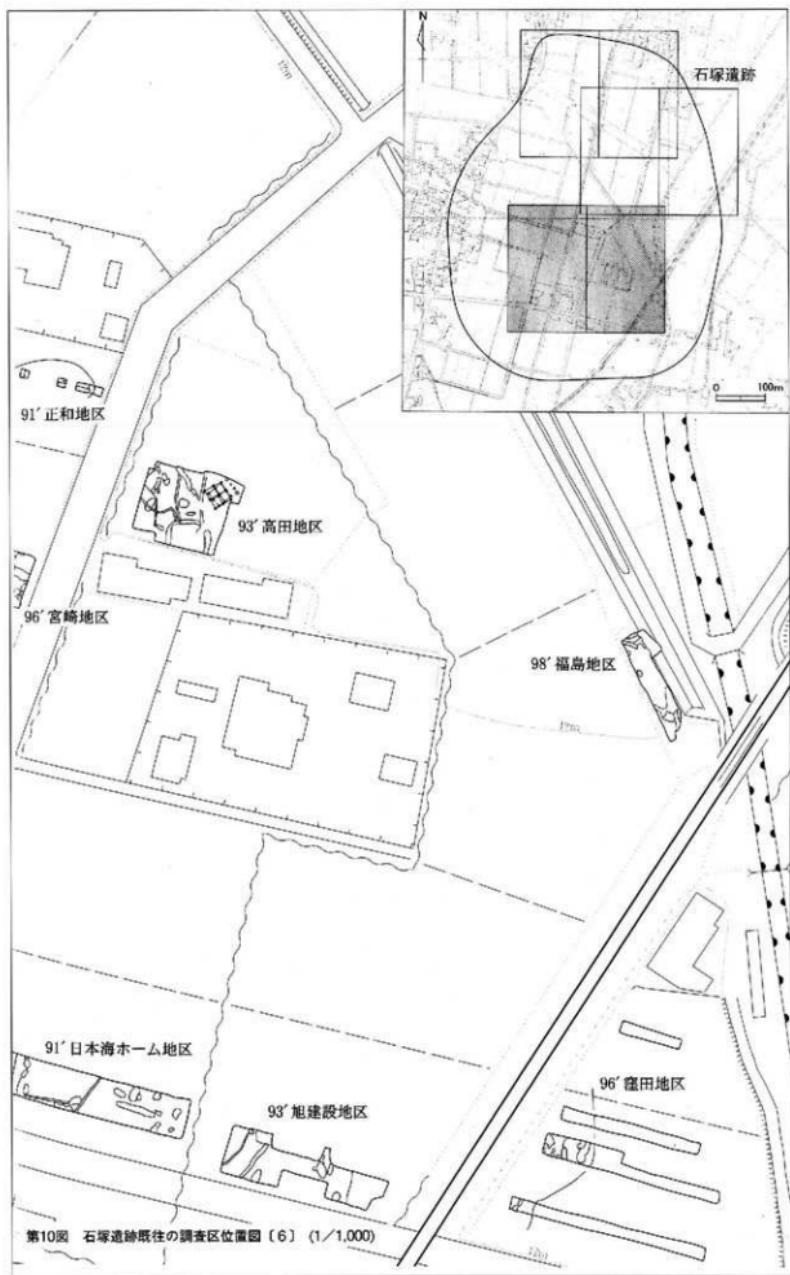


第7図 石塚遺跡既往の調査区位置図〔3〕(1/1,000)





第9図 石塚遺跡底往の調査区位置図(5) (1/1,000)



「老子地区」：平成 7（1995）年度実施。弥生時代中期の土坑・古墳時代中期の土器類、中世の土坑・溝、中世以前の地盤址を確認。

「宮崎地区」：平成 8（1996）年度に実施。弥生時代中期の土坑墓 3 基を確認。

「安川 2 地区」：平成 8（1996）年度に実施。縄文時代後期～晚期の凹地、弥生時代中期の凹地、地震址を確認。

「座田地区」：平成 8（1996）年度に実施。弥生時代中期の土坑・溝、凹地を確認。

「白石地区」：平成 9（1997）年度実施。古代の井戸址 1 基・土坑 2 基、中世の上坑 2 基を確認。

「1997 年都市計画道路地区」：平成 9（1997）年度実施。弥生時代中期の竪穴状遺構 1 基・土坑 6 基、古墳時代初頭の方墳 1 基・溝、古代の土坑 2 基、近世の溝 1 条を確認。

「福島地区」：平成 10（1998）年度実施。弥生時代中期の土坑 1 基・溝 2 条、古代の上坑 1 基・溝 1 条を確認。

「高岡環状線地区」：平成 10（1998）年度実施。弥生時代中期の土坑 1 基・溝 1 条・凹地、近代の土坑 2 基・溝 1 条、時期不明掘立柱建物 1 棟を確認。

「きぼう地区」：平成 15（2003）年度実施。弥生時代中期の平地式建物 1 棟・周溝墓 1 基・土坑・溝、古墳時代前期の方墳 2 基・土坑・溝、中世の井戸址 9 基を確認。

以上のように、石塚遺跡では縄文時代後期～晚期、弥生時代中期、古墳時代前期～中期、古代、中世、近世に渡っての遺構・遺物が確認されている。

遺跡全体からは総じて弥生時代中期の遺構・遺物が確認されている。周溝墓や土坑墓の数と住居の数を比較すると、前者の数が多いことが解る。またこの時期では、石塚遺跡の推定範囲内で明確な墓域や居住城が決められておらず、推定範囲内を転在しながら生活していた。つまりそこで生活していた人数は小集団であったか、もしくは同時にいくつかの集団がある程度の距離を置きながら生活していた可能性が考えられる。これは、遺跡の立地する自然環境、特に小矢部川・赤祖父川の氾濫が原因で住む場所を変えざるを得ない状況であった事が推測できる。それが古墳時代前期～中期になると「91' 林地区」「86'・87'・97' 都市計画道路地区」「03' きぼう地区」の所在する石塚遺跡北東側において、前方後方墳を含む石塚古墳群が形成されるようになる。現在のところ、この時期の居住域は石塚遺跡範囲内では確認されていないが、弥生時代中期とは違い、居住域と墓域、そしておそらく牛床域を明確に区分する集団へと変化していったものと考えられる。

古代になると、石塚遺跡の東側に「東木津遺跡」が形成され中心地がそちらへ移動することに伴い、この地では遺構・遺物が散見される程度となる。中世・近世でも、西側に隣接する「右岸江之戸遺跡」などで集落が形成されるが、石塚遺跡が中心地となるような集落が形成された痕跡は、既往の調査区において確認されていない。

第3章 調査概観

第1節 調査の方法と経過

調査は、株式会社文苑堂書店並びに株式会社丸和フードの委託を受け、高岡市教育委員会の監理・監督の下、株式会社アーキジオが実施した。平成17年6月24日に上記二者間でそれぞれ契約を行った後、7月4日に現地にて境界測量を実施した。両調査区とも現況は、水田並びに畑地であったことから、珪砂ブロックが埋設された状態であった。そのため、7月6日から7月7日にかけて0.4m級のバックフォウ1台を使用し、珪砂ブロックの除去を行った。

平成16年度に実施された、高岡市教育委員会の試掘調査の結果を踏まえ、7月11日から7月15日にかけて新鮮市場地区の表土掘削を0.7m級のバックフォウ1台を使用して行った。新鮮市場地区の重機掘削が終了した7月15日から7月22日にかけて、文苑堂地区の表土掘削を新鮮市場地区同様、0.7m級のバックフォウ1台を使用して行った。両地区とも平均掘削深度は0.2mであった。重機掘削終了後、両地区とも乾燥などによる調査区内の劣化を防ぐためにブルーシートを全面に配し保護した。

先行して重機掘削の終了した新鮮市場地区から、10mピッチでグリッド杭を打設した後、ベルトコンベアーを配置し、7月21日より20人の発掘作業員で包含層掘削を開始した。文苑堂地区も新鮮市場地区と同様にグリッド杭を打設した後、ベルトコンベアーを配置し、8月1日より18名の発掘作業員で包含層掘削を開始した。

包含層掘削終了後、新鮮市場地区は8月1日から8月5日にかけて、遺構検出を行った。検出の結果、調査区西側を中心に、中世の掘立柱建物が4棟、区画溝4基、方形の堅穴状土坑6基、溝や多数のビットが確認できた。また、調査区北側を中心、弥生時代の平地式建物1棟、周溝状遺構6基、溝や土坑、多数のビットが確認できた。遺構掘削前に、主だった遺構の検出状況写真の撮影を、ローリングタワー等を使用して行った。文苑堂地区は、8月17日から8月22日にかけて、遺構検出を行った。試掘結果と同様、調査区の四半分は、南北に延びる谷状の遺構が確認できたが、調査区東側では、遺構が散見できる程度であった。

遺構検出終了後、新鮮市場地区は8月11日より、調査区南側から北側に向かって遺構掘削を開始し、記録写真や記録図面を随時作成しながら10月6日に終了した。文苑堂地区は8月22日より、西側半分で検出した谷状遺構を南側から北側に向かって遺構掘削を開始し、記録写真や記録図面を随時作成しながら10月6日に終了した。

10月7日にラジコンヘリコプターを使用して、両地区とも航空写真測量を実施した。その後、高所作業車とローリングタワーを使用して、両地区とも全景写真と各遺構のブロック写真的撮影を行った。10月10日から基本層序図面作成などの残務作業と発掘資材や発掘道具等の撤収を行い、10月17日をもって現地での全ての作業を終了した。

整理作業は、現地での作業が終了した翌日、10月18日から開始した。現地で撮影した写真及び図面の整理を行なながら、遺物の洗浄、土器の硬化処理、注記、接合、復元を行った。平成18年1月から7月まで遺物実測を行い、その後、報告書掲載用の遺物・遺構図面や写真図版の作成、トレース、遺物の写真撮影、文章執筆を行った。平成19年1月30日に全ての原稿、図面、図版を入校した。その後、3月16日から校正を行いつつ同時に遺物・図面・写真アルバムなどの最終的な整理作業を行った。



第11図 文苑堂地区、新鮮市場地区の位置関係図 (1/1,000)

第2節 検出遺構の概要

両地区の中央を南北に流れる自然流路（文苑堂地区西側自然流路 S D 0 1）を挟んで東に面積 3,200 m² の「文苑堂地区」、その文苑堂地区から北西側に面積 2,500 m² の「新鮮市場地区」が位置する。文苑堂地区の東側には弥生時代中期後半の方形周溝墓と古墳時代前期の古墳群を検出している「きぼう地区」「都市計画道路地区」「林地区」が位置し、新鮮市場地区の西側と南側には、「高岡塚状貌地区」と「白石地区」「老子地区」が位置する。ほ場整備による削平及び近現代の暗渠や耕作などによる搅乱が著しく、遺構検出面及び遺構の保存状態は良好とは言い難い状態であったが、検出した遺構数は両地区合せ 629 個を数える。以下に、今回の調査において検出した遺構の概要を時代ごとに述べていく。

弥生時代

主に文苑堂地区全体と新鮮市場地区の北側半分で検出した。時期は中期後半から中期末、いわゆる八日市地方編年 7 期～9 期併行（福海 2003）の範疇に収まるものであり、周溝を持つ平地式建物 1 棟・方形周溝墓 2 基・周溝状遺構 3 基・周溝を持つ大型土坑 3 基・土器敷き炉 1 基・土坑・溝・自然流路・ピットを検出した。特に周溝を持つ大型土坑は石塚遺跡や近隣の当概期の遺跡からも検出されていない、類例のないものである。

古墳時代

文苑堂地区南東側には、石塚古墳群が確認されている事から、この時期に該当する何らかの遺構が検出されると考えていたが、明確な遺構は確認できなかった。自然流路は引き続き開口していたと考えられる。

古代

明確な遺構は確認できなかったが、自然流路は引き続き開口していたと考えられる。第 6 章で詳細を述べるが、地震の痕跡である噴砂が新鮮市場地区で確認できた。

中世

主に新鮮市場地区西側半分で、13 世紀代の区画溝を伴う絶柱と側柱の掘立柱建物を合計 4 棟確認し、方形状土坑 3 基・土坑・溝・ピットを検出した。特に 9 間（それ以上か）×4 間の絶柱の掘立柱建物は、近隣では南砺市（旧福光町）に所在する「梅原削摩堂遺跡」で確認されている程度で、あまり類を見ない規模のものである。自然流路はさらに覆土の堆積が進み、中世の段階で一度完全に埋没したと考えられる。

近世

明確な遺構は確認できなかったが、一度埋没した自然流路を幅 1.8m・深さ 0.6m の規模で再掘削し、開口していたと考えられる。

第3節 出土遺物の概要

両地区共に出土遺物は大きく分けて2時期に分類できる。一つは中世で、主に13世紀代の遺物である。もう一つは弥生時代で、主に中期中葉から中期後葉（八日市地方編年7期～9期併行）の遺物である。遺物はコンテナ数にして約50箱出土した。以下に、今回の調査において出土した遺物の概要を時代ごとに述べていく。

弥生時代

文苑堂地区、新鮮市場地区とも遺構及び包含層から出土している。土器は、中期中葉から後葉（八日市地方編年7期～9期併行）の壺類・壺類・鉢類などである。このうち最も出土量が多かったのは、8期～9期併行のものであり中期中葉から後葉にかけての過渡期と考えられるものだった。器種ごとの比率では、壺が最も多く、次いで壺・鉢となっている。比較的鉢類のバリエーションが富んでいる事が挙げられる。石器は、石鎌・スクレイバー・磨製石斧・石包丁の他に、特筆すべきものとして、管玉など玉作りにかかる遺物がまとまって出土している。完形品は、緑色凝灰岩製の管玉1点のみであるが、未製品は穿孔途中や研磨途中、形割り工程のものなどを含め多量に出土している。これらは、新鮮市場地区の方形周溝墓S Z O 2を構成する周溝部分をはじめ、溝や土坑などから多量に出土している。他に、玉鏡・砥石・楔状工具、穿孔具である石針といった工具類も出土している。石材は、緑色凝灰岩がほとんどであるが、石英・鉄石英・瑪瑙・琥珀なども出土している。鉄石斧は形割り工程途中のものが1点出土し、それ以外はいずれもチップのみで、完形や工程途中のものも含め未製品などはなかった。文苑堂地区西側自然流路（SD O 1）下層からは、容器である槽や部材などの木製品、磨製石斧などが出土している。

古墳時代

文苑堂地区西側自然流路（SD O 1）内の下層から、極少量の古墳時代前期の土師器残片や小型器台片などが数点出土しているのみで、それ以外では両地区とも確認できなかった。

古代

文苑堂地区西側自然流路（SD O 1）の中層及び新鮮市場地区の区画溝2などから、8世紀後半から9世紀前半の須恵器の壺A類・短頸壺・鉢類などが出土している。しかし、新鮮市場地区から出土したものは、区画溝2が埋没する際に混入したものと考えられる。

中世

新鮮市場地区から主に出土している。特に、掘立柱建物の区画溝や方形状土坑などから、13世紀代の珠洲の壺類・瓶類・擂鉢類、土師器皿類などの土器や、青磁や白磁などの陶磁器、砥石などの石製品が出土している。

近世

文苑堂地区及び新鮮市場地区的表土や包含層、文苑堂地区的SD O 1上層からの出土である。瀬戸美濃、有田、唐津、越中瀬戸などの皿や碗などの小破片が出土している。また、びん水と呼ばれる水性の整髪料を入れた小判型の容器であるビンダライ片も新鮮市場地区から出土している。

第4章 文苑堂地区

第1節 概要

基本層序（第12図）

基本層序は以下の通りである。

I層：にぶい黄褐色シルト（現耕作土・盛土）

II層：暗褐色シルト（弥生時代中期の遺物包含層）

III層：にぶい黄色砂質シルト（弥生時代中期遺構検出面。地山）

本調査区は、佐野台地の北端部に立地する事から、南から北に向かって緩やかに傾斜し、II層は北に向かうほど遺存状態が良好であると推測していたが、結果調査区のはば全てがほ場整備に伴う削平を受けており、調査区西側及び中央で検出した谷状遺構と考えていた自然流路（SD01）の堆積土内と調査区中央付近のみII層が検出できた。このことから、調査区北側でII層を確認でき、且つ遺構検出レベルがほぼ同じであった新鮮市場地区と比べると、ほ場整備による削平は著しかったと言え、本来の地形はやや高かったと考えられる。

遺構（第13～17図）

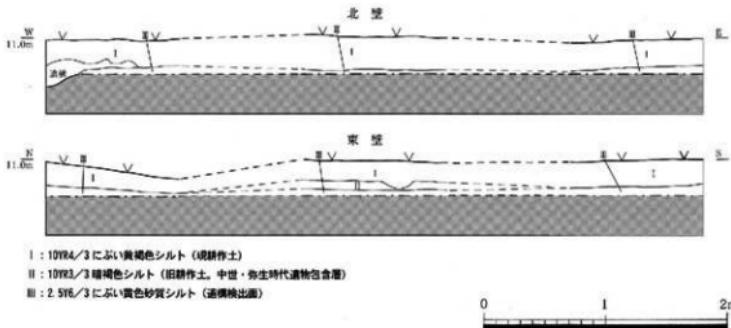
文苑堂地区で検出した遺構は以下の通りである。遺構検出面の標高は、海拔10.7～10.8mである。

周溝状遺構 2基

土坑 62基

自然流路

ピット 多数



第12図 文苑堂地区 基本層序 (1/40)

文苑堂地区で検出した遺構の多くは、弥生時代中期中葉から後葉にかけての時期であった。文苑堂地区は、平成16年度の試掘調査の結果から、調査区西半分が南北に延びる谷状もしくは凹地状遺構で占められていると考えられていたが、今回の調査の結果から、これらは全て自然流路であることが判り、同じ性質を持つことから全てSD01とした。調査区西端のものは、現況から最大深度約2.3mを測り、最下面のレベルが南から北に向かって低くなることや、覆土にラミナが多く含む事などから判断して、南から北に向かって流れている自然流路であることが確認できた。下層からは弥生時代中期中葉から後葉にかけてと古墳時代前期初頭の土器や、弥生時代中期中葉から後葉にかけての木製品などが出土し、中層からは8世紀後半～9世紀前半の須恵器と13世紀代の珠洲焼き・中世土師器などが出土し、そして上層からは近世陶磁器が出土した。この事から、西側自然流路SD01は弥生時代中期中葉から近世の長期に亘って、段階的に埋没したものと考えられる。また、調査区中央のものは、南側はほ揚弊偏によって削平されているが、現況から最大深度約0.38mを測り、地形と覆土の状況から判断して、南から北に向かって流れている浅い自然流路であることが確認できた。最下層では、弥生時代中期中葉から後葉の土器が出土し、上層では若干の珠洲焼きや中世土師器などが出土した。この事から中央自然流路SD01は主に弥生時代中期中葉から後葉頃から埋没を開始し、中世頃に埋没したと考えられる。東半分は遺構が散見できる程度であり、主な遺構として周溝状遺構が2基(SX01・02)、まとまった状態で遺物が出土した上坑2基(SK19・43)、ピット多数などが比較的調査区の東半分北側で確認できた。南側では多数のピット群が確認できた。周溝状遺構の1基は、調査区のほぼ中央に位置し、不整形な橢円形状を呈するSX01である。もう1基は調査区の東側外に広がるため全体像は不明であるが、方形を呈するものと考えられるSX02である。2基とも周溝内からは少量の上器片が出土しており、弥生時代中期後半のものと考えられる。またSX01・02とともに、周溝で区画された内側に、この周溝に伴う土坑やピットなどは確認できなかった。南側で検出した多数のピット群は、掘立柱建物などの痕跡ではなく、出土遺物から判断して近世以降の耕作に伴うハサ穴とも考えられるが、詳細は不明である。

遺物

文苑堂地区で出土した遺物は以下の通りである。

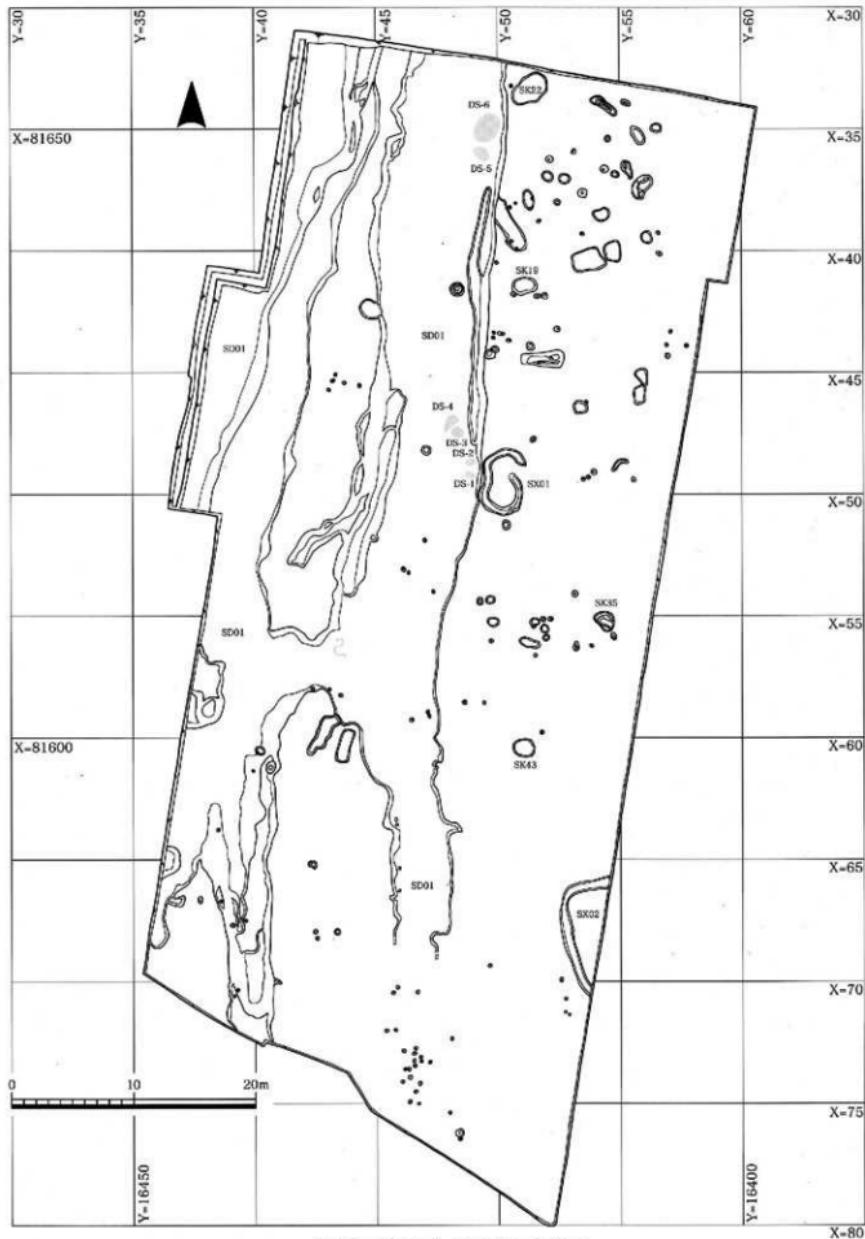
土器類：弥生土器、古墳時代土師器、古代須恵器、中世土師器、珠洲焼、青磁、白磁、近世陶磁器

土製品：土製円盤

木製品：柵、縫打具？、部材（板材・棒状）

石製品：磨製石斧、スクレイパー、横刃形石器（打製石包丁）、砥石

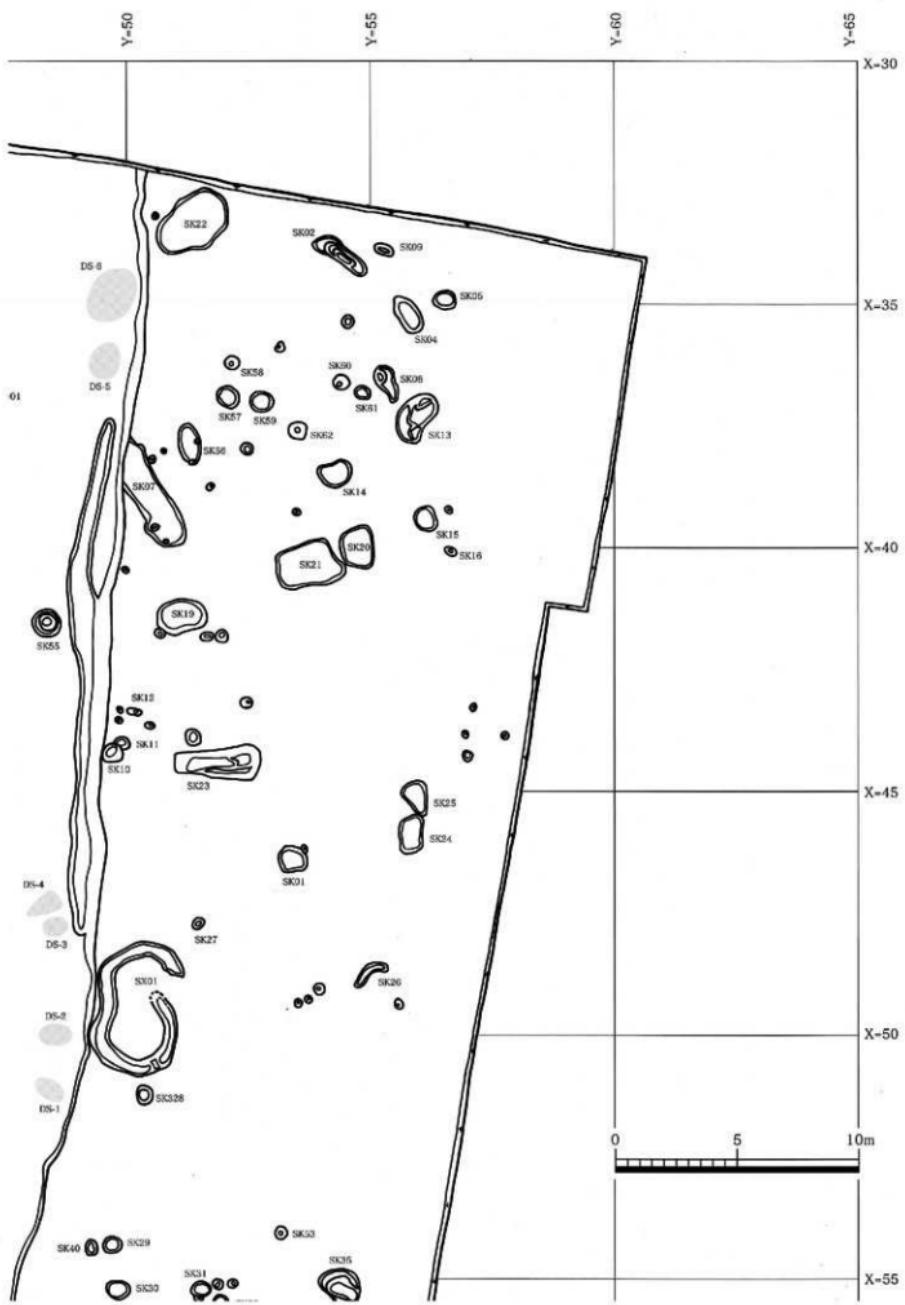
主にSD01自然流路や土坑から出土している。弥生土器が大半を占め、次いで珠洲焼、中世土師器、古代須恵器である。古墳時代土師器や青磁、白磁、近世陶磁器は、極少量であった。時期は、弥生土器は中期中葉から後葉（八日市地方編年7期～9期併行）、古墳時代土師器は前期初頭、古代須恵器は8世紀後半～10世紀代、珠洲焼や中世土師器は13世紀代と考えられる。青磁、白磁は小破片のため時期は不明である。木製品は、弥生時代中期中葉から後葉にかけての柵が1点と縫打具の可能性があるものが1点出土しており、他は用途不明の部材である。石製品は、弥生時代中期後半～古墳時代前期初頭にかけてのものと考えられる。



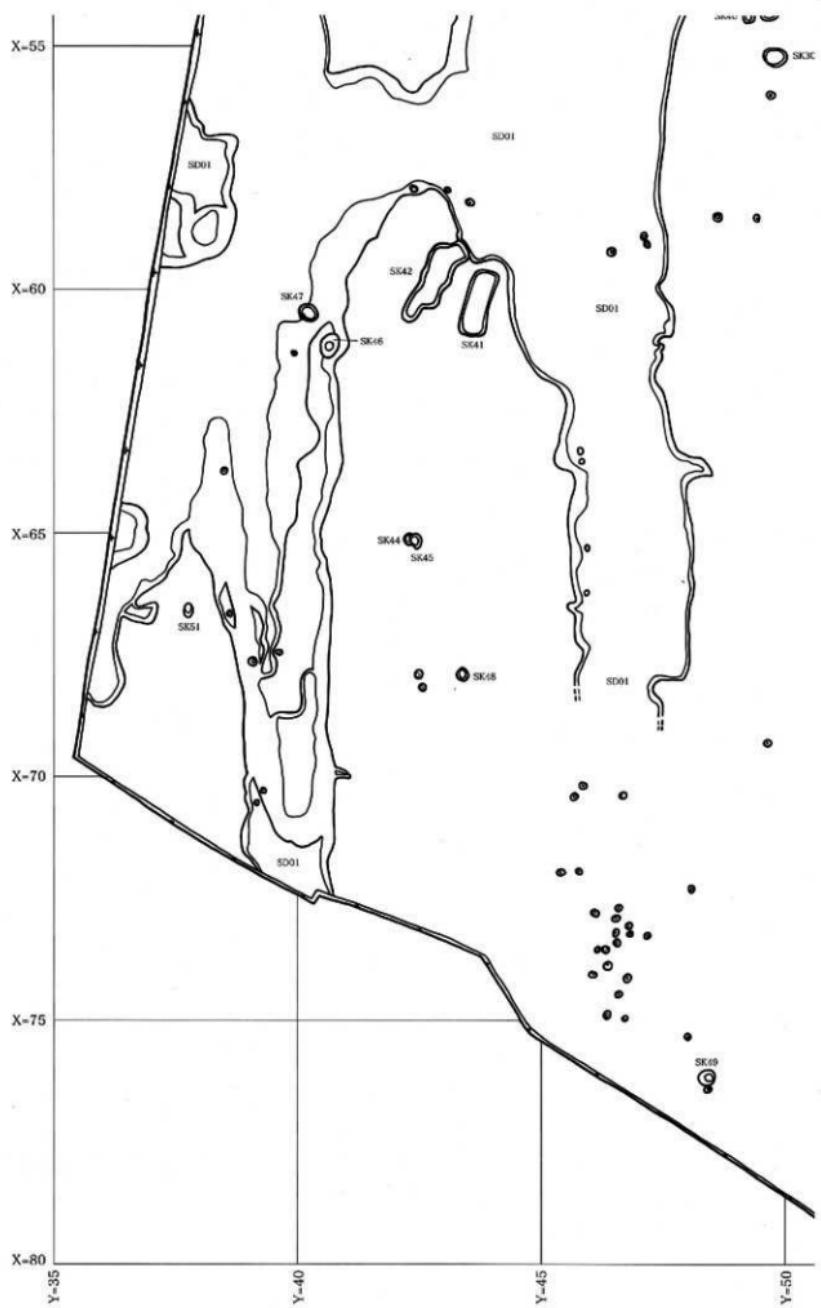
第13图 文苑堂地区 遗址全图 (1/400)



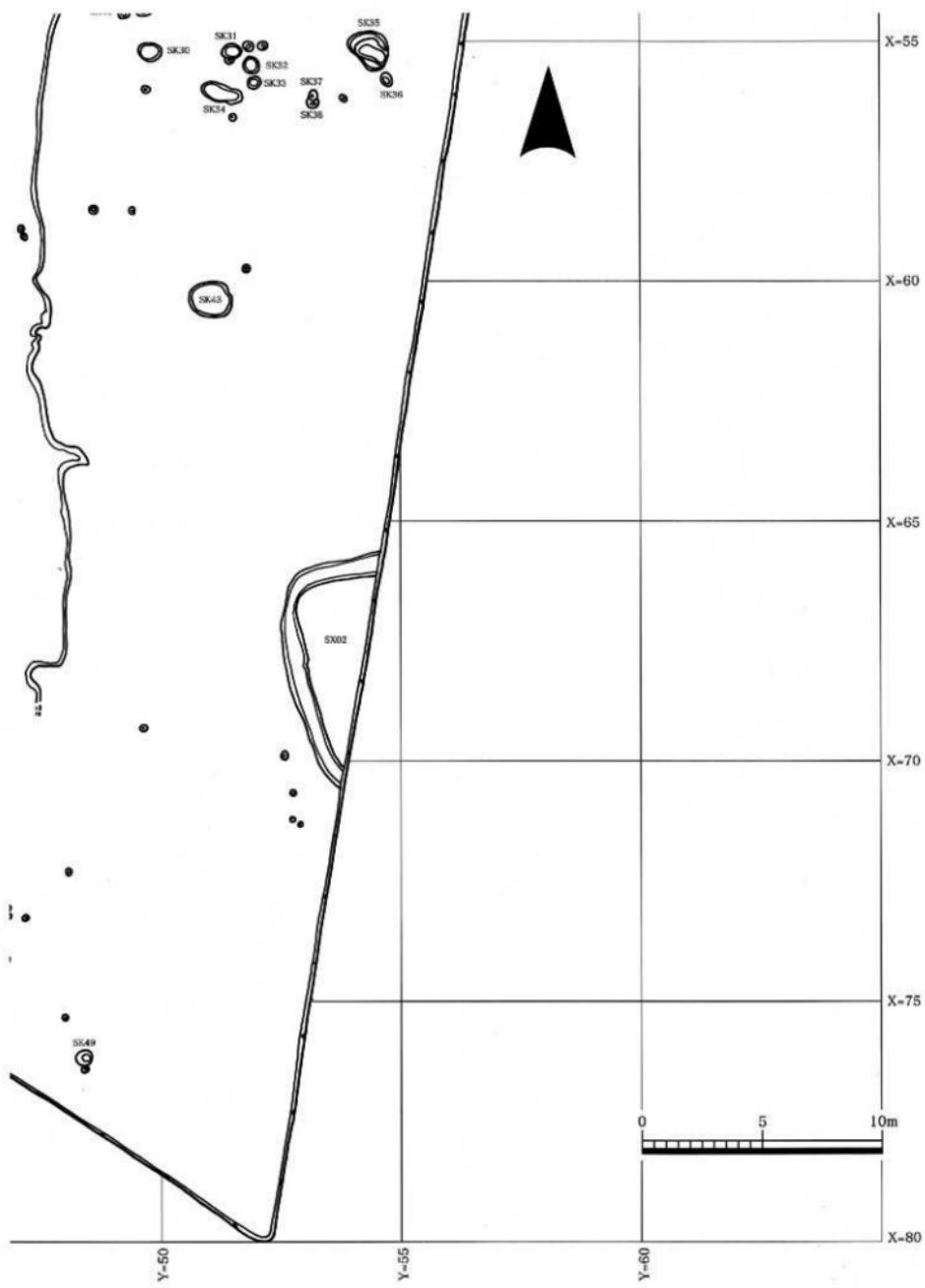
第14図 文苑堂地区 遺構配置図北西部 (1/200)



第15図 文苑堂地区 造構配図(北東部) (1/200)



第16図 文亮堂地区 遺構配図南西部 (1/200)



第17図 文亮堂地区 遺構配置図南東部 (1/200)

第2節 遺構

以下に、文苑堂地区で確認できた遺構を、「1. 弥生時代」「2. その他の時代」の2時期に分けて説明していく。説明を省略した遺構については、「別表1 文苑堂地区 遺構一覧表」を参照していただきたい。

1. 弥生時代

弥生時代の遺構は、周溝状遺構2基、土坑15基、ピット多数、自然流路を検出した。以下に、周溝状遺構、土坑、自然流路の順に説明していく。

周溝状遺構

S X O 1 (図版3 第18図)

調査区ほぼ中央に位置し、長軸5.5m、短軸3.76mを測る。南北方向に軸を持つ。平面形態は、東西それぞれの中央付近に凹部を持つ不整形を呈する。以前の暗渠の掘削により周溝の一部が破壊されているため、溝が全周していたかどうかは不明である。溝の幅は0.51m～0.72mを測り、南東側で最も広くなる。深さは0.2m～0.4mを測り、西側で最も深くなる。断面形態は舟底状を呈する。覆土の堆積状況は、土層観察の結果から周溝の内側から外側に向かって堆積していくものと考えられる。このことは、周溝内側の地形は外側よりも高く、周溝内に徐々に堆積をしていったとも考えられる。周溝の内側には、土坑やピットなど周溝に付随する遺構は確認できなかった。

遺物は、周溝北側に口縁部を南側に向けた状態で弥生時代中期中葉から後葉の甕が出土しているが、ほ場整備の際に破壊されてしまったのか口縁部はすでになく、底部から肩部にかけての縫合部分が残るのみであった。このことから、この甕は口縁部を上にして、傾いた状態であったことが推測できる。その他の遺物は小破片であり、赤彩などが施されたものではなく、また完形に復元できるものもなかった。

S X O 2 (図版3 第19図)

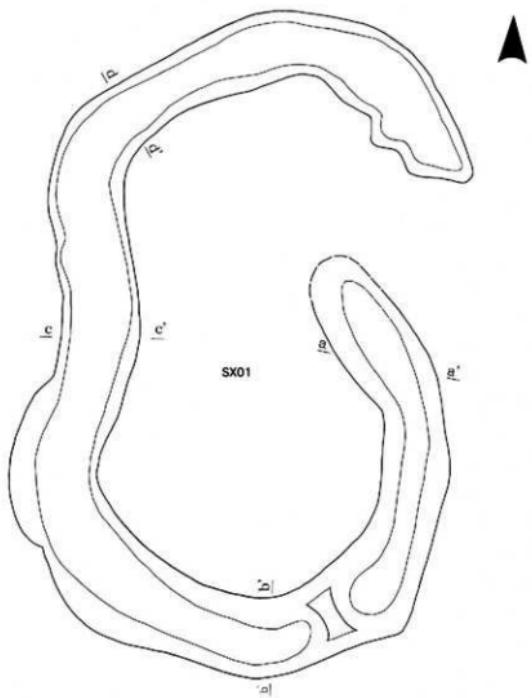
調査区南東側に位置し、長軸9.3m、短軸3.43mを測る。北北西～南南東方向に軸を持つ。周溝の東側及び南側が調査区外に広がるため全容は不明であるが、平面形態はおそらく方形状を呈するものと考えられる。溝の幅は0.5m～0.98mを測り、北東側で最も広くなる。深さは0.1m～0.36mを測り、北西隅で最も浅くなる。断面形態は舟底状もしくは逆台形状を呈する。覆土の堆積状況は土層観察の結果から、周溝の外側から内側に向かって堆積していく後、残りの部分は人為的に埋められたものとも考えられる。このことは、周溝外側の地形が内側よりも高かったと考えられる。周溝の内側には、土坑やピットなど周溝に付随する遺構は確認できなかった。

遺物は弥生時代中期中葉から後葉の上器小破片がわずかに出土した程度であり、赤彩などが施されたものではなく、また完形に復元できるものもなかった。

土坑

土坑SK19 (図版4 第20図)

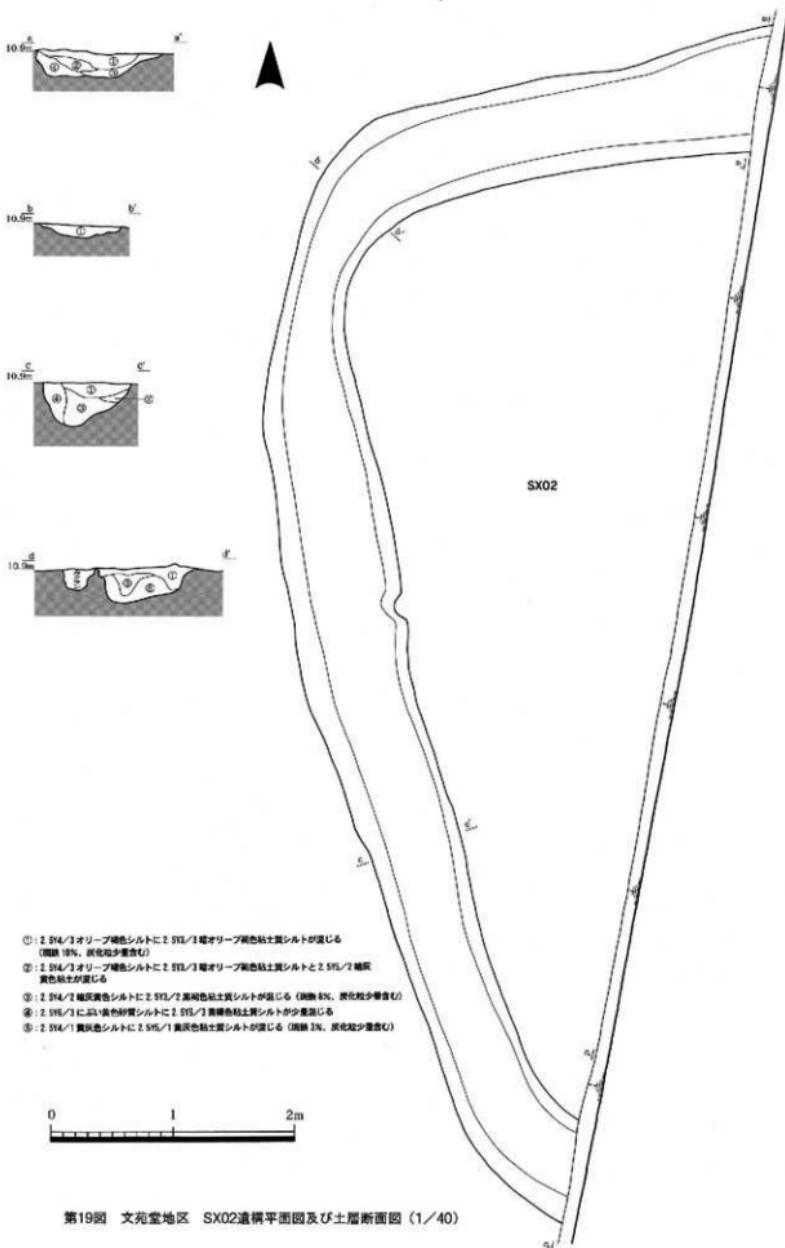
調査区北側に位置し、長軸1.96m、短軸1.35m、深さ0.51mを測る。東西方向に軸を持つ。平面は不整形で、断面形態は方形状を呈する。覆土の堆積状況は、土層観察の結果から②～④層までは安定した堆積が見られないことから、人為的に埋没した可能性が考えられる。①層は、一括して埋没したものと考えられる。



- ① : 1.8m / 3オリーブ緑色シートに 2.5m / 3緑オリーブ緑色粘土質シートが重なる (総厚 5%、炭化粧少巻きむ)
- ② : 2.9m / 2緑黄緑色シートに 2.9m / 3緑オリーブ緑色粘土質シートが重なる (総厚 7%、炭化粧少巻きむ)
- ③ : 2.9m / 2にない黄緑色シートに 2.3m / 3黄緑色粘土質シートが少巻渡じる。
- ④ : 緑形 / 2にない黄緑色シートに 1.0m / 2黄緑色シートが重なる (総厚 3%、炭化粧少巻きむ)
- ⑤ : 1.9m / 2黄緑色シートに 1.9m / 2黄緑色シートが重なる (総厚 4%、炭化粧少巻きむ)



第18図 文苑堂地区 SX01造構平面図及び土層断面図 (1/40)



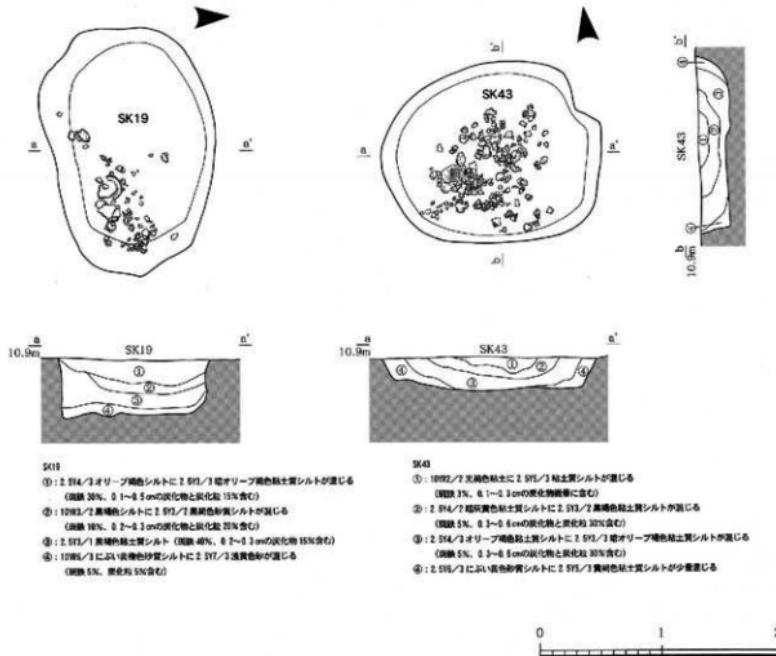
第19図 文苑堂地区 SX02遺構平面図及び土層断面図 (1/40)

遺物は、弥生時代中期中葉（八日市地方編年8期併行）の壺類（第22図1001）・壺類（第22図1002・1003）・鉢類（第22図1004・1005）が主に遺構の東側で②・③層から出土したが、赤彩などが施されたものではなく、また完形に復元できるものもなかった。

土坑SK43（図版4 第20図）

調査区中央やや南東側に位置し、長軸1.75m、短軸1.51m、深さ0.28mを測る。わずかに東西方向に軸を持つ。平面形態は不整形形、断面は舟底状を呈する。覆土の堆積状況は、土層観察の結果から安定したレンズ状堆積をしていることから、自然堆積したものと考えられる。

遺物は、弥生時代中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）の壺類や（第22図1006～1009）、横刃形石器（第25図3003）などが主に遺構中央にかたまつた状態で②・③層から出土したが、赤彩などが施



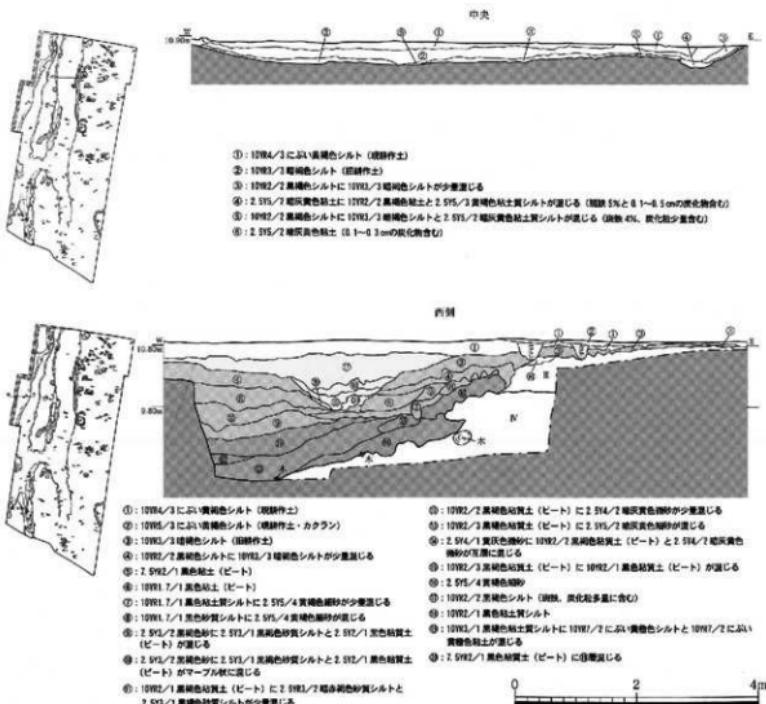
第20図 文苑堂地区 SK19・43遺構平面図及び土層断面図 (1/40)

されたものではなく、また完形に復元できるものもなかった。

自然流路

SD01 (図版5 第21図)

調査区西端を南北に延びる自然流路と、南側は削平されているが調査区中央を南北に延びる自然流路をまとめてSD01とした。西側自然流路は、流路の西側が調査区外へ広がるため全体像は不明であるが、現状で幅9.46m、最大深度2.3mを測り、大きく3層に分層できる。堆積状況から、18世紀以降に一度埋没した後、近世以降になって再開削された事が確認できた。また、堆積するに従って、徐々に流路の規模は小さくなっていた事も合せて確認できた。主に弥生時代中期後半から古墳時代初頭の時期に開口していた下層では、覆土に多くのラミナが確認できる事から、水流の早い流路であったことが考えられる。古代から中世にかけて開口していた中層では、下層と比べ覆土中にラミナがほとんど確認できなかつた事から、水流は早くなく、近世から近



第21図 文苑堂地区 SD01中央及び西側自然流路土層断面図 (1/80)

現代まで開口していた上層も、中層と同様と考えられる。中央自然流路は、ほ場整備による削平を受けているため全体像は不明であるが、幅9.0m、最大深度0.38mを測り、大きく2層に分層できる。下層は、出土遺物から主に弥生時代中期後半（八日市地方編年7期～8期併行）頃には開口しており、覆土中に少量のラミナが確認できた事からわずかに水流があったと見られる。上層は、出土遺物から中世頃には存在しており、土層観察の結果から流路ではあったものの水流は穏やかであったと考えられる。

遺物は、主に中央自然流路の東端に十勝集中箇所が6箇所あり、そこから中期中葉（八日市地方編年7期～8期併行）の壺類（第23・24図1010～1021）、甕類（第24図1022～1026）が出土しているが、赤彩などが施されたものではなく、復元の結果完形に復元できるものもなかった。このことから、中央自然流路の東側もしくは北東側に集落が存在し、そこから廃棄していたか、流れ込んだものとも考えられる。

2. その他の時代

文苑堂地区における弥生時代以外の遺構は、前述した自然流路SD01が弥生時代中期中葉の他に、古墳時代初頭、古代（8世紀後半～9世紀前半）、中世（13世紀代）、近世から近現代まで開口していたことが、出土遺物から考えられる。それ以外の遺構では、調査区南側に密集するピット群などが確認できたが、出土する遺物が小破片であった事から詳細な時期は不明である。

第3節 遺物

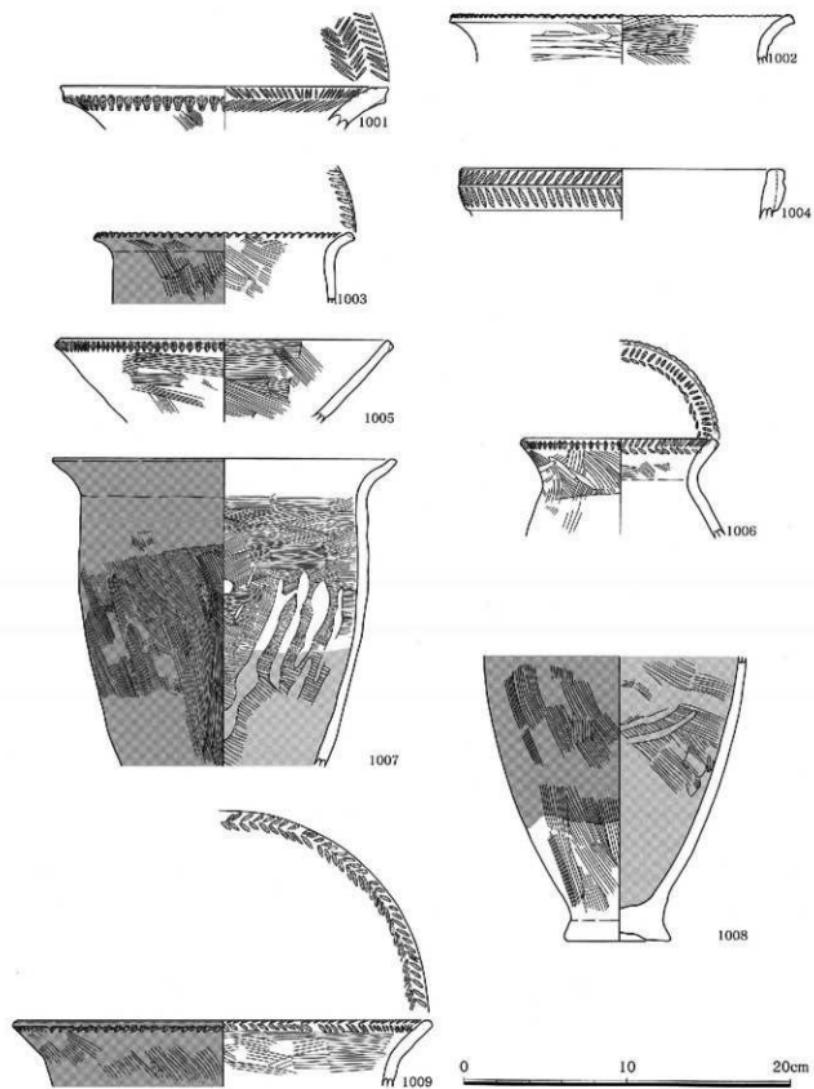
以下に、文苑堂地区の遺構から出土した遺物を「1. 弥生土器」「2. 弥生時代木製品」「3. 弥生時代石製品」「4. 古代・中世土器」の順に述べていく。掲載した遺物については、比較的残存率の高いものや、特徴的な遺物を中心としている。詳細については、遺物観察表（別表2～4）にて補足するものとする。また、遺物の出土状況に関しては、前節の各遺構の項目を参照していただきたい。

1. 弥生土器

SK19出土土器（図版18 第22図）

1001は壺の口縁部である。口径19.8cm、残高2.65cmを測る。全体的に厚みを持ち、大きく外反しながら口縁端部を半に納め、わずかに凹みを施す。文様は、外面に櫛描連続刺突文を施し、内面に櫛描矢羽状文を施す。調整は、内面はナデを施し、外面は横ナデとハケメを施す。時期は、八日市地方編年8期併行と考えられる。1002・1003は甕類で、時期は八日市地方編年8期併行と考えられる。1002は甕の口縁部から頸部である。口径20.6cm、残高3.0cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら、口縁端部を平に納める。文様は、口唇部に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内面は板ナデを施し、外面はハケメ後ヘラナデを施す。1003は甕の口縁部から肩部上方である。口径15.5cm、残高4.4cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら、口縁端部付近でやや強く外反する。また口縁端部は平に納める。文様は、口唇部に、櫛描連続刺突文を施す。調整は、内面は板ナデを施し、外面はハケメを施す。

1004・1005は鉢類で、時期は八日市地方編年8期併行と考えられる。1004は鉢の口縁部である。口径17.9cm、残高2.9cmを測る。器形は、外面に粘土紐を貼り付けて肥厚させた直線的な口縁部で、口縁端部は平に納める。文様は、外面に櫛描矢羽状文を施す。調整は、内面はナデを施し、外面はハケメ後ナデを施す。1005は鉢の口縁部から底部付近である。口径19.8cm、残高5.1cmを測る。器形は、底部から口縁部にかけて大きく



第22図 文苑堂地区 SK 19・43出土遺物実測図 (1/3)

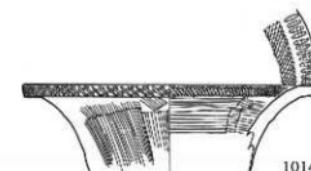
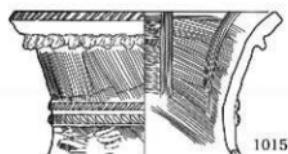
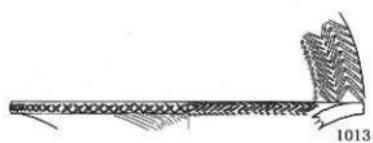
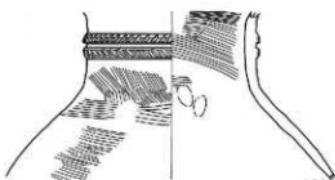
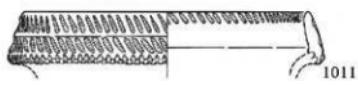
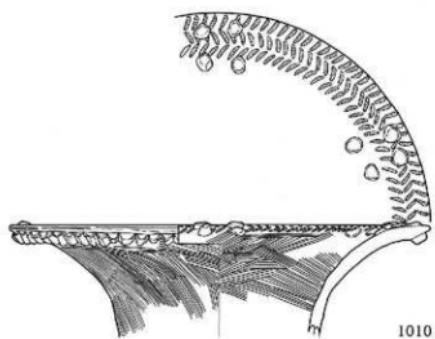
開き、口縁端部を半に納める。文様は、口縁部外面に櫛描連續刺突文を施す。調整は、内面はハケメとナナデを施し、外面はハケメ後ナデを施す。

S K 4 3 出土土器 (図版 18 第 22 図)

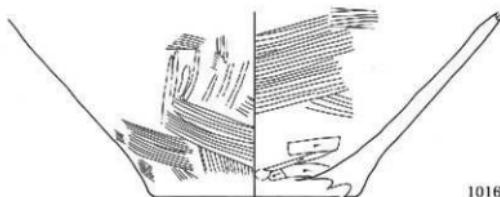
1006 から 1009 は甕類である。1006 は小型甕の口縁部から肩部上方である。口径 11.6 cm、残高 5.9 cm を測る。器形は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反しながら、口縁端部をやや丸く納める。文様は、口縁部外面に櫛描連續刺突文を施し、内面は櫛描矢羽状文を施す。調整は、内面はハケメとナデを施し、外面はハケメ後ナデを施す。時期は、八日市地方編年 8 期併行と考えられる。1007 は甕の口縁部から底部付近である。口径 20.8 cm、残高 18.8 cm を測る。器形は、頸部から口縁部にかけて外反しながら、口縁端部付近で鋭く内湾し端部を丸く納める。肩部はあまり張り出さず、綫長を呈する。調整は、内面はナデとハケメ後横ナデを施し、外面は口縁部と頸部下方にナデと頸部下方から底部にかけてハケメを施す。時期は、八日市地方編年 8 期～9 期併行と考えられる。1008 は甕の肩部から底部である。底径 6.3 cm、残高 17.3 cm を測る。器形は、1007 と同様体部は綫長で、底部は凹底を呈する。調整は、内面は板ナデ後ラナデを施し、外面はナデとハケメを施す。外面には帯状に煤が付着し、それに対応するように内面にも帯状にコグが付着する。時期は、八日市地方編年 8 期～9 期併行と考えられる。1009 は甕の口縁部である。口径 25.2 cm、残高 4.0 cm を測る。器形は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら、口縁端部をやや丸く納める。文様は、外面に櫛描連續刺突文を施し、内面に櫛描矢羽状文を施す。調整は、内外面ともにハケメを施す。時期は、八日市地方編年 8 期併行と考えられる。

S D O 1 出土土器 (図版 18 第 23・24 図)

1010 から 1016 は壺類で、時期は概ね八日市地方編年 8 期併行だが、1015 のみ 7 期～8 期併行と考えられる。1010 は壺の口縁部から頸部である。口径 25.8 cm、残高 7.1 cm を測る。器形は、頸部から口縁部にかけて大きく外反しながら広がり、口縁端部を細く丸く納める。口縁部外面は指による連続圓圧の貼り付け突帯が巡る。文様は、口縁部内面に櫛描矢羽状文を施す。また 4 個で 1 組の円形浮文が、配置の関係から 4 組付くと考えられる。調整は、内外面ともハケメを施す。1011 は壺の口縁部である。口径 15.65 cm、残高 3.15 cm を測る。器形は、受口屈曲部からやや内傾しながら、端部を細く丸く納める。文様は、外面に櫛描連續刺突文を縦に 2 列と、その直下にやや小さめの櫛描連續刺突文を施し、内面にも櫛描連續刺突文を施す。調整は、内外面共にナデを施す。1012 は壺の頸部から体部である。残高 10.3 cm を測る。器形は直線的に伸びる頸部から、あまり肩部が張り出さない体部へと緩やかに広がる。文様は、頸部に横 2 条の貼り付け突帯を巡らせ、それぞれに櫛描連續刺突文を施す。調整は、内面はナデとハケメ・指オサエを施し、外面はナデとハケメを施す。1013 は壺の口縁部である。口径 19.5 cm、残高 1.65 cm を測る。全體に厚みを持ち、大きく外反しながら口縁端部を平に納め、わずかに凹みを施す。文様は、外面に格子文を施し、内面は櫛描矢羽状文を 2 段施す。調整は、内面はナデを施し、外面はハケメを施す。1014 は壺の口縁部から頸部である。口径 17.6 cm、残高 5.3 cm を測る。器形は、頸部から口縁部にかけて大きく外反しながら、口縁端部付近でさらに開く。口縁端部は平に納める。文様は、口縁部外面に格子文を施し、口縁部内面に櫛描矢羽状文を意識したと考えられる縦 2 列の櫛描連續刺突文を施す。調整は、内面は板ナデとナデを施し、外面はハケメを施す。1015 は壺の口縁部から頸部である。口径 16.0 cm、残高 8.7 cm を測る。器形は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら、口縁端部を平に納める。また口縁部外面には、指による摘み出し突帯と、頸部には縦 2 段の貼り付け突帯がそれぞれ巡る。文様は、口縁部外面と頸部貼り付け突帯部に櫛描連續刺突文を施し、口縁部内面に櫛描重下文を施す。調整は、内面は横ナデとハケメを施し、外面は頸部貼り付け突帯下部にハケメ後ミガキ、口縁部にハケメ後横ナデと頸部にハ



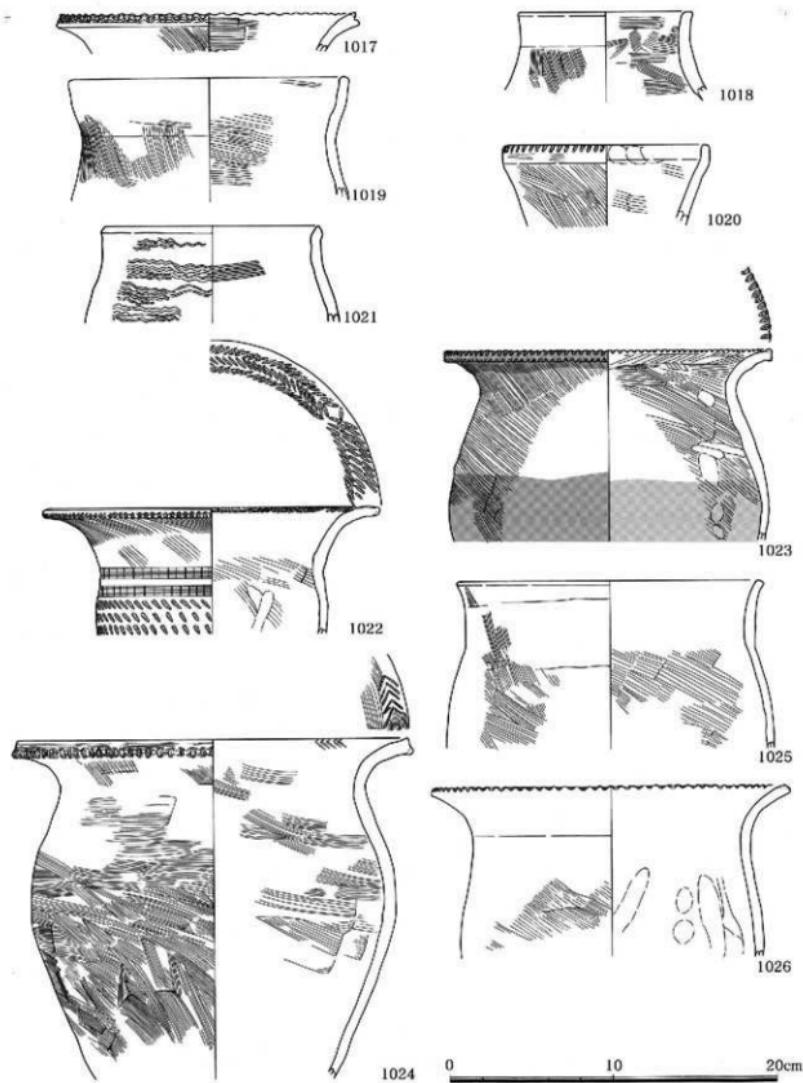
0 10 20cm



第23図 文苑堂地区 SD01出土遺物実測図① (1/3)

ケメをそれぞれ施す。1016は大型壺の体部から底部である。底径12.4cm、残高11.25cmを測る。底部は欠損しており詳細は不明である。調整は、内面は板ナデと弱いヘラケズリ・指オサエをそれぞれ施し、外側はハケメ後ミガキを施す。

1017から1021は壺類で、時期はそれぞれ八日市地方編年8期～9期併行と考えられる。1017は壺の口縁部から頸部である。口径17.9cm、残高2.4cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて大きく外反しながら、口縁端部付近から肥厚させる。口縁端部は、工具を用いた凹凸によるフリル状突起を施す。調整は、内面は板ナデを施し、外側はハケメを施す。1018は短形壺の口縁部から体部上方である。口径10.4cm、残高5.5cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がりながら、口縁端部をやや丸く納める。頸部から体部にかけてゆるやかに広がるが、肩部はあまり張り出さない様相を呈する。調整は、内面は口縁部を横ナデ、体部はナデ後ハケメを施し、外側は丁寧なハケメと横ナデを施す。1019は壺の口縁部から体部上方である。口径16.5cm、残高6.45cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部でわずかに内湾しながら端部を丸く納める。頸部から体部にかけては緩やかに広がるが、肩部はあまり張り出さない様相を呈する。調整は、内面は板ナデ後ナデとハケメを施し、外側は丁寧なハケメとナデを施す。1020は壺の口縁部から頸部である。口径11.8cm、残高4.9cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて外傾しながら、口縁部で屈曲し直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く納める。文様は、口縁部外面に櫛描連續刺突文を施す。調整は、内面はハケメとナデを施し、外側はハケメを施す。1021は短頭壺の口縁部から体部である。時期は、八日市地方編年8期～9期併行と考えられる。口径13.0cm、残高5.9cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて上方に伸びながら、口縁端部をやや丸く納める。体部は寸胴で、中央付近で最大径を測る。文様は、外面に4条1単位の櫛描波状文を縱に4段施す。調整は、内面はハケメとナデを施し、外側はナデを施す。1022から1026は甕類で、時期はそれぞれ八日市地方編年8期～9期併行だが、1021のみ8期併行と考えられる。1022は甕の口縁部から肩部付近である。口径20.6cm、残高7.7cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて外反しながら、口縁端部付近で大きく開く。口縁端部は平に納める。体部は、肩部がほとんど張り出さず縱長の様相を呈する。文様は、口縁部外面に櫛描連續刺突文、頸部下に櫛描簾状文2段、肩部に櫛描連續刺突文を縱に3列施し、口縁部内面に櫛描矢羽状文を施す。調整は、内面はハケメ後ナデを施し、外側はハケメとナデを施す。1023は甕の口縁部から肩部下方である。口径19.6cm、残高11.7cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて大きく外反しながら、口縁端部を平に納める。また端部内面はわずかに肥厚する。体部は、肩部が口径と同じ程度に張り出す様相を呈する。文様は、口唇部と口縁部外面下段に櫛描連續刺突文を施す。調整は、内面はハケメと指オサエ、ヘラナデを施し、外側は丁寧なハケメを施す。口縁部及び肩部外面には帯状に煤が付着し、それに対応するように内面にも帯状にコゲが付着する。1024は甕の口縁部から底部付近である。口径23.8cm、残高20.7cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて大きく外反しながら、口縁端部を平に納める。また端部内面はわずかに肥厚する。体部は、肩部が口径と同じ程度に張り出し、1023と比較すると縱長の様相を呈する。文様は、口縁部外面に櫛描連續刺突文を施し、口縁部内面に櫛描矢羽状文を一部分のみ施す。調整は、内外面とも丁寧なハケメを施す。1025は甕の口縁部から肩部である。口径18.2cm、残高10.3cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけてわずかに外反しながら、口縁端部を平に納める。体部は、頸部から緩やかに膨らみ肩部はわずかに張り出す。調整は、内外面ともにハケメ後ナデを施す。1026は甕の口縁部から肩部である。口径22.0cm、残高10.4cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら、口縁端部付近でさらに外反する。口縁端部はやや丸く納める。体部は、頸部から緩やかに膨らみ肩部はわずかに張り出す。文様は、口唇部に櫛描連續刺突文を施す。調整は、内面はナデと指ナデ、指オサエを施し、外側はハ



第24図 文菟堂地区 SD01出土遺物実測図② (1/3)

ケメと横ナデを施す。外面に煤が付着するが、内面にはそれに対応するコゲは付着していない。

2. 弥生時代木製品（図版19 第25図）

2001から2007は、西側自然流路（SD01）下層から出土している。時期は、同じ層位から出土したそれぞれの上器から判断すると、弥生時代中期中葉から古墳時代初頭と考えられる。樹種は、目視による観察結果から判断すると針葉樹で、主にスギ科目と考えられる。

2001は板状を呈する、用途不明木製品である。全長68.7cm・幅9.0cm・厚さ2.1cmを測る。両端は欠損しているため全体像は不明であるが、長軸5.7cm、短軸2.9cmと長軸7.0cm、短軸2.9cmの隅丸方形形状のほぞ穴を17.5cmの間隔で2箇所施す。表面にはわずかに加工痕が見られる。2002は板状を呈する、用途不明木製品である。全長33.25cm・幅5.0cm・厚さ2.0cmを測る。欠損しているため全体像は不明であるが、長軸7.8cm、短軸2.9cmの隅丸方形形状のほぞ穴を1箇所施す。表面にはわずかに加工痕が見られる。2003は板状を呈する、用途不明木製品である。全長94.4cm・幅10.6cm・厚さ4.0cmを測る。断面は台形を呈する。欠損しているため全体像は不明であるが、長軸5.1cm、短軸2.9cmの隅丸方形形状のほぞ穴を団上中央付近に1箇所施す。2004は板状を呈する、用途不明木製品である。全長88.4cm・幅10.8~16.1cm・厚さ2.5cmを測る。欠損しているため全体像は不明である。表面にはわずかに加工痕が見られる。2005は棒状を呈する、用途不明木製品である。全長122.0cm・幅4.3cm・厚さ4.0cmを測る。欠損しているため全体像は不明であるが、団上下部に抉が加工されている。2006は棒状を呈する、用途不明木製品である。全長153.5cm・幅6.1cm・厚さ2.75~7.8cmを測る。欠損しているため全体像は不明であるが、団上下部付近に抉が加工されており、また中央やや上には孔が穿たれている。

2007は用途不明木製品である。全長69.5cm・幅2.9cm・厚さ0.9cmを測る。両先端に刃の様な加工を施す。形状から判断して、織機の縫打具の可能性も考えられる。

2008は無脚の槽で、形状及び法量から判断して弥生時代中期中葉のものと考えられる。全長43.7cm・幅18.0cm・全高9.8cm・厚さ2.3~5.1cmを測る。両木口部分に明瞭な加工痕が見られる。

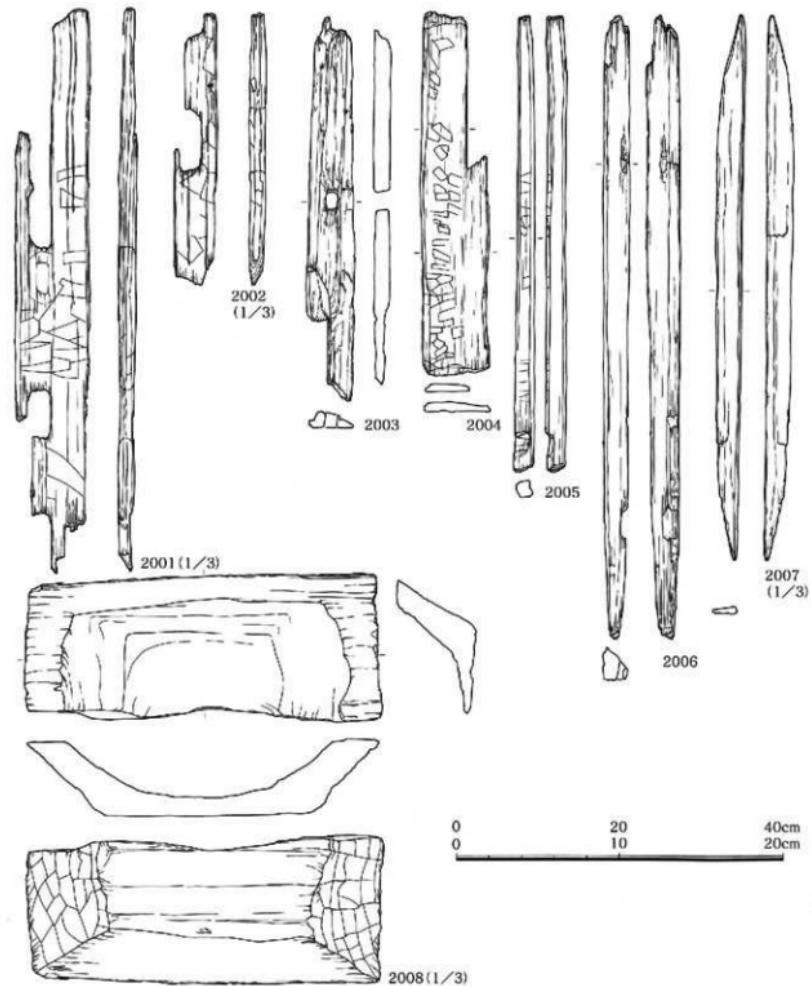
3. 弥生時代石製品（図版19 第26図）

スクレイパー、打製石刀、磨製石斧、砥石が出土している。遺構の他、自然流路（SD01）埋没地点から、砥石や磨製石斧の完形が出土している。時期は、同じ層位から出土した土器と比較すると、それぞれ弥生時代中期中葉から後葉にかけてと古墳時代初頭と考えられる。

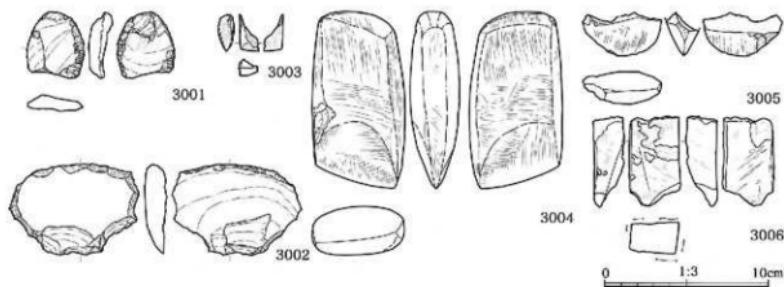
3001はSK35から出土したスクレイパーと考えられる。白色の凝灰岩で、両側刃に規則的に調整を行い、刃部を形成している。側刃部の一方は片面調整である。

3002はSK43から出土した横刃形石器（打製石刀）と考えられる。リングの発達した貝殻状剥片を素材としている。形状は弱直背凸刃である。刃部付近に使用痕は見られない。背部は調整を行い整形している。

3003から3006は磨製石斧である。3003はSK19から出土した磨製石斧の刃部側縁の破片である。石材は斑晶を多く含む流紋岩である。製作時の研磨によってできた縦線が明瞭である。使用痕は見られない。角度から両凹刃の刃部であると考えられる。3004はSD01から出土した完形の磨製石斧である。刃部は偏刃で、両凸刃に近い形状である。刃部には使用痕が見られ、基部の角には敲打痕がある。3005はSD01から出土した磨製石斧の刃部の破片で、刃部は円刃、断面が両凸刃である。使用痕が見られる。3006はSD01から出土した砥石で形状は直方体であるが、正面は斜め方向に磨耗している。底面は4面で、擦痕が明瞭に見られる。



第25図 文苑堂地区 出土木製品実測図 (1/3 1/6)

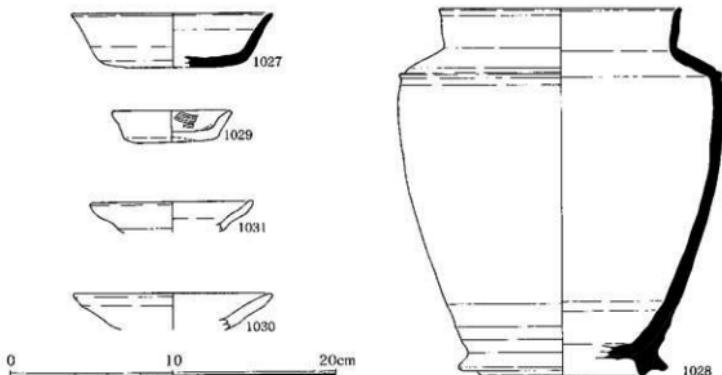


第26図 文菟堂地区 出土石製品実測図 (1/3)

4. 古代・中世土器 (図版19 第27図)

1027・1028は須恵器で、時期は概ね8世紀後半から9世紀前半と考えられる。1027は壺Aで、SD01中層から出土している。口径12.2cm、底径9.0cm、器高3.3cmを測る。器形は、ヘラ切りされた平坦な底部から屈曲し、斜方向に直線的に体部が開く。口縁部は端部付近で短く外反し、端部を丸く納める1028は高台付の短頸壺で、SD01中層から出土している。口径14.7cm、底径9.8cm、器高22.4cmを測る。器形は、頸部から口縁部にかけて直線的に短く立ち上がり、端部を丸く納める。肩部は明瞭に張り出し、底部から体部は緩やかに立ち上がる。高台部は、くちばし状を呈する。調整は、内面はタタキ後ロクロナデを施し、外面は底部にヘラケズリとタタキ後ロクロナデを施す。

1029から1031は中世土師器皿で、時期は概ね13世紀代と考えられる。1029はSD01から出土している。口径7.3cm、底径4.0cm、器高2.0cmを測る。器形は、一部欠損しているが、平底気味の平坦な底部から口縁部が外傾気味に短く直線的に開き、端部は面を有する。調整は、内面は板ナデ後ナデと指オサエを施し、外面はナデを施す。1030はSD01から出土している。口径12.2cm、残高2.2cmを測る。器形は、底部から大きく外傾しながら口縁部が開き、端部をやや細く丸く納める。調整は、内外面ともにナデを施す。1031はSK22から出土している。口径9.8cm、底径6.0cm、器高1.8cmを測る。器形は、底部からゆるやかに外傾しながら開き、口縁部付近で内湾しながら、端部を丸く納める。調整は、内外面ともにナデを施す。



第27図 文苑堂地区 古代・中世出土遺物実測図(1/3)

第3節 小結

発掘調査前は、近接する過去の調査区の成果(86'・87' 都市計画道路地区、91' 林地区、03' きぼう地区)から、石塚古墳群に関係する何らかの遺構や遺物が、特に調査区南側で確認できると考えていた。しかし、今回文苑堂地区で検出した遺構は、主に調査区北側に集中し、内容は周溝状遺構2基と土坑62基、自然流路などであり、明確な形での古墳や土坑墓、竪穴住居や平地式建物は確認できなかった。出土した遺物は、一部八日市地方編年7期併行に属する壺(1015)が出土しているが、大半が弥生時代中期中葉から後葉(八日市地方編年8期~9期併行)のものであった。この事から、石塚古墳群およびそれに関連する遺構群の西端は、きぼう地区と文苑堂地区の間に位置すると考えられる。

次に文苑堂地区に土器を残していった人々の住居は何處にあるのかを考えると、まず目に付くのが平地式建物や方形周溝墓が確認されている東側に隣接するきぼう地区である。しかし、きぼう地区で確認された弥生時代中期に該当する遺構の時期は、出土遺物から判断して、主に八日市地方編年9期併行に相当し、文苑堂地区と比べると時的に新しくなる事から、きぼう地区から持ち込まれたとは考え難く、また、SD01を挟んで西側から、わざわざ持ち込んだのであろうか。以上の事から判断して、当調査区内において北側に行くほど遺構を密に検出した事から、調査区より北側、もしくは調査区より東あるいは北東方向に当概期の住居域が存在する可能性を考えたい。

調査区北側に位置するSK59を中心にして、土坑(SK02・04・07・13・20・21・22)が途切れながらも環状に巡る周溝の様相を呈しているように見えたことから、周溝を持つ半地式建物を想定したが、明確に炉と確認できるものがなく、また柱穴も並ばないなど住居という決め手に欠いた。これについては今後の類例を待って再度検討を試みたい。

別表1 文苑堂地区 遺構一覧表

遺構番号	グリッド				法面(m)	主軸方向	平面形態	備考	旧遺構番号
	X	Y	長軸	短軸					
1. 周辺状況構									
SK01	47	50	5.5	3.76	0.2~0.4	南北	不規形	既生	SD202
SK02	66~71	52~54	9.3	3.43	0.1~0.36	北北西~南南東	不規形	既生	SD203
2. 土坑									
SK01	47	53	1.17	1.30	0.15	不規形			SK301
SK02	34	54	1.16	(0.77)	0.11	不規形			SK302
SK03	35	54	2.00	0.61	0.21	楕円形			SK303
SK04	36	55	1.64	0.86	0.29	楕円形			SK304
SK05	36	56	0.92	0.79	0.17	円形			SK305
SK06	39	52	0.48	0.45	0.14	円形			SK306
SK07	39	50	4.73	1.22	0.24	不規形			SK307
SK08	37	55	1.64	1.30	0.24	不規形			SK308
SK09	35	55	0.72	0.37	0.25	楕円形			SK309
SK10	45	49	0.93	0.75	0.28	不規形			SK310
SK11	45	49	0.72	(0.50)	0.20	楕円形			SK311
SK12	44	50	0.59	0.27	0.23	楕円形			SK312
SK13	38	55	2.11	1.27	0.36	不規形			SK313
SK14	39	54	1.32	1.13	0.16	不規形			SK314
SK15	40	56	0.97	0.96	0.13	円形			SK315
SK16	41	56	0.48	0.30	0.19	楕円形			SK316
SK17	42	51	0.46	0.31	0.32	楕円形			SK317
SK18	42	51	0.48	0.46	0.32	円形			SK318
SK19	42	51	1.96	1.35	0.51	不規形			SK319
SK20	41	54	1.77	1.49	0.28	不規形			SK320
SK21	41	53	2.90	1.92	0.23	不規形			SK321
SK22	34	51	3.24	2.17	0.26	不規形			SK322
SK23	45	51	3.52	1.21	0.52	不規形			SK323
SK24	46	55	1.63	1.03	0.29	不規形			SK324
SK25	46	55	1.44	0.87	0.22	不規形			SK325
SK26	49	55	1.43	0.40	0.17	不規形			SK326
SK27	48	51	0.50	0.37	0.21	楕円形			SK327
SK28	52	50	0.70	0.67	0.25	円形			SK328
SK29	55	48	0.75	0.72	0.20	円形			SK329
SK30	56	49	0.83	0.72	0.17	楕円形			SK330
SK31	56	51	0.84	0.69	0.24	不規形			SK331
SK32	56	51	0.70	0.65	0.24	円形			SK332
SK33	56	51	0.50	0.45	0.17	円形			SK333
SK34	57	51	1.78	1.24	0.18	不規形			SK334
SK35	56	54	1.78	1.41	0.24	不規形			SK335
SK36	56	54	0.54	0.43	0.29	楕円形			SK336
SK37	57	53	0.45	0.33	0.23	楕円形			SK337
SK38	57	53	0.53	(0.50)	0.41	楕円形			SK338
SK40	57	49	0.65	0.45	0.18	楕円形			SK340
SK41	61	43	2.77	1.03	0.23	長方形			SK341
SK42	61	42	3.91	1.11	0.24	不規形			SK342
SK43	61	51	1.75	1.51	0.28	不規形			SK343
SK44	66	42	0.45	(0.42)	0.28	円形			SK344
SK45	66	42	0.59	0.53	0.29	不規形			SK345
SK46	62	40	0.95	0.75	0.48	楕円形			SK346
SK47	61	40	0.84	0.63	0.20	楕円形			SK347
SK48	68	43	0.54	0.53	0.24	円形			SK348
SK49	77	48	0.65	0.63	0.36	円形			SK349
SK50	68	39	0.35	0.34	0.26	円形			SK350
SK51	67	37	0.56	0.47	0.19	円形			SK351
SK52	43	44	1.86	1.45	0.27	不規形			SK352
SK53	54	53	0.50	0.49	0.21	円形			SK353
SK54	49	47	0.74	0.71	0.54	円形			SK354
SK55	42	48	1.12	1.08	0.52	円形			SK355
SK56	38	51	(1.61)	0.87	0.22	楕円形			SK356
SK57	38	52	0.99	0.89	0.17	円形			SK357
SK58	37	51	0.57	0.50	0.33	円形			SK358
SK59	38	52	0.93	0.88	0.18	円形			SK359
SK60	37	54	0.17	0.66	0.35	円形			SK360
SK61	37	54	0.68	0.60	0.19	円形			SK361
SK62	38	53	0.81	0.75	0.44	角丸形			SK362

別表2 文苑堂地区 土器觀察表

遺構番号	遺構	分類	器種	法面(cm)			色調	出土	焼成	成形及び器面開削		備考(文様など)
				口徑	底径	高さ				内面	外壁	
1001	GK19	弥生	壺	(18.80)	-	(2.85)	内:12.8cm/外:16.8cm 内:10.8cm/外:12.8cm	密	良	ナデ	ハケメ 横縞織錦斜文	網目織錦斜文 網目羽状文
1002	GK19	弥生	壺	(20.80)	-	(3.00)	内:12.5cm/外:17.8cm 内:10.8cm/外:12.8cm	密	良	板ナデ	ハケメ奥ヘナデ	網目織錦斜文
1003	GK19	弥生	壺	(15.80)	-	(4.40)	内:16.9cm/外:19.8cm 内:10.9cm/外:12.8cm	やや密	良	板ナデ	ハケメ	網目織錦斜文
1004	GK19	弥生	鉢	(17.90)	-	(2.90)	内:12.8cm/外:17.8cm 内:10.8cm/外:12.8cm	密	良	ナデ	ハケメ後ナデ	
1005	GK19	弥生	鉢	(18.80)	-	(5.10)	内:12.5cm/外:17.8cm 内:10.8cm/外:12.8cm	密	良	ハケメ ナデ	ハケメ後ナデ	網目織錦斜文
1006	GK43	弥生	壺	11.80	-	(5.90)	内:10.9cm/外:12.8cm 内:7.5cm/外:8.8cm	密	良	ハケメ ナデ	ハケメ後ナデ	網目織錦斜文 網目羽状文
1007	GK43	弥生	壺	(20.80)	-	(18.80)	内:10.9cm/外:12.8cm 内:10.9cm/外:12.8cm	密	良	ナデ ハケメ後ナデ ナデ	ハケメ ナデ	網目羽状文

測量番号	測線	分類	種類	法面 (cm)			色調	地土	焼成	成形及び表面調整		備考 (文様など)
				口径	延長	基高				内面	外面	
1008	SK43	弥生	壺	-	8.30	(17.30)	内: 2.5YR 1/黄灰 外: 10YR 2/灰灰褐色	密	黄	板ナデ ナデ ハラナデ	ハケメ ナデ	円底 外縁等にスズ 内面茶色化
1009	SK43	弥生	壺	(25.20)	-	(4.00)	内: 10YR 7/3赤い黄橙～7.5YR 7/6 橙 外: 10YR 7/3赤い黄橙	密	黄	ハケメ	ハケメ	燒成表面剥落 燒成表面剥落 燒成表面剥落
1010	SD01	弥生	壺	(25.80)	-	(7.10)	内: 10YR 7/3赤い黄橙 外: 7.5YR 7/3赤い黄橙	密	黄	ハケメ	ハケメ	指による連続印記 燒成表面剥落 円形浮出
1011	SD01	弥生	壺	(15.85)	-	(0.15)	内: 10YR 7/3赤い黄橙 外: 10YR 7/3赤い黄橙	密	黄	ナデ	ナデ	燒成道統刻文
1012	SD01	弥生	壺	-	-	(10.20)	内: 2.5Y 7/2灰黃～NA/灰 外: 2.5Y 7/3灰黃	やや密	やや良	ハケメ ナデ ハラナデ	ハケメ ナデ	燒成道統刻文
1013	SD01	弥生	壺	(19.90)	-	(0.85)	内: 2.5Y 7/2灰黃 外: 10YR 7/3赤い黄橙	密	黄	ナデ	ハケメ	格子文 燒成表面剥落 燒成道統刻文 指による浮出
1014	SD01	弥生	壺	(17.80)	-	(5.30)	内: 2.5Y 7/2灰白 外: 10YR 7/3赤い黄橙	やや密	やや良	板ナデ ナデ	ハケメ ナデ	燒成表面剥落 燒成道統刻文 指による浮出
1015	SD01-DS-5	弥生	壺	(16.00)	-	(0.70)	内: 2.5Y 7/2灰白 外: 5YR 7/6灰白	やや密	やや良	ハケメ ナデ ハラナデ	ハケメ ナデ ハケメ	燒成道統刻文 燒成表面下 指によるつまみ出し尚都
1016	SD01-DS-1	弥生	壺	-	(12.40)	(11.75)	内: 2.5Y 7/3灰白 外: 2.5Y 7/2灰白	密	黄	板ナデ 密いハラナデ ハラナデ	ハケメ 後モキ	
1017	SD01	弥生	壺	(17.80)	-	(2.40)	内: 2.5Y 7/2灰黃 外: 2.5Y 7/3灰黃	密	黄	板ナデ	ハケメ	工具を用いた圧凹による フリル状変化
1018	SD01-DS-5	弥生	壺	(10.40)	-	(9.50)	内: 7.5YR 7/6板 外: 7.5YR 7/6板	密	黄	板ナデ ナデ後ハケメ	ハケメ	
1019	SD01-DS-1	弥生	壺	(16.90)	-	(0.45)	内: 10YR 7/3赤い黄橙 外: 10YR 7/3赤い黄橙	密	黄	ハケメ	ハケメ	
1020	SD01-DS-4	弥生	壺	(11.80)	-	(4.90)	内: 2.5Y 7/2灰黃 外: 2.5Y 7/3灰黃	密	黄	ハケメ	ハケメ	燒成道統刻文
1021	SD01	弥生	壺	(13.00)	-	(5.90)	内: 10YR 7/3赤い黄橙 外: 2.5Y 7/2灰黃	密	黄	ハケメ ナデ	ナデ	燒成波状文
1022	SD01	弥生	壺	(20.80)	-	(7.70)	内: 10YR 7/3赤い黄橙 外: 7.5YR 7/6板	密	黄	ハケメ後ナデ	ハケメ ナデ	燒成道統刻文 燒成波状文 燒成波状文
1023	SD01	弥生	壺	(19.80)	-	(11.70)	内: 2.5Y 7/2灰黃 外: 2.5Y 7/3灰黃	密	黄	ハケメ ハラナデ ハラナデ	ハケメ	焼:コゲ付 燒成道統刻文
1024	SD01	弥生	壺	(23.80)	-	(20.7)	内: 10YR 7/3赤い黄橙 外: 2.5Y 7/3灰黃	密	黄	ハケメ	ハケメ	燒成道統刻文 燒成波状文 (一部)
1025	SD01-DS-6	弥生	壺	(18.20)	-	(10.30)	内: 10YR 7/3赤い黄橙 外: 10YR 7/3灰黃	密	黄	ハラナデ後ナデ	ハラナデ後ナデ	ハラナデ
1026	SD01-DS-5	弥生	壺	(22.00)	-	(10.40)	内: 2.5Y 7/2灰黃 外: 10YR 7/3灰黃	やや密	やや良	ハラナデ ハラナデ ハラナデ	ハラナデ ハラナデ ハラナデ	外縁薄付 燒成道統刻文
1027	SD01	漆器	坪A	(12.20)	(8.00)	3.30	内: 7.5YR 1/青灰 外: 2.5Y 1/青灰	密	灰	ロクロナデ		鹿部ヘア切り
1028	SD01	漆器	細鑲嵌	(14.70)	(8.80)	22.40	内: 7.5YR 1/灰 外: 7.5YR 1/灰	密	灰	ロクロナデ タラキロクロナデ ヘラ刷り	ロクロナデ タラキロクロナデ ヘラ刷り	
1029	SD01	中世 土器	豆	7.30	4.00	2.00	内: 7.5YR 6/6 外: 7.5YR 6/6	やや密	やや良	ナデ	ナデ後ナデ ハラナデ	非ロクロ成型
1030	SD01	中世 土器	豆	(12.20)	-	(2.20)	内: 10YR 4/2赤い黄橙 外: 10YR 4/2赤い黄橙	やや密	やや良	ナデ	ナデ	非ロクロ成型
1031	SK22	中世 土器	豆	(9.80)	(8.00)	(1.80)	内: 2.5Y 2/灰白 外: 2.5Y 2/灰白	密	黄	ナデ	ナデ	非ロクロ成型

別表3 文苑堂地区 木製品観察表

測量番号	グリッド		測線	種類	法面 (cm)			備考
	X	Y			全长	幅	厚さ	
2001	45	38	SD01	鈎村(板状)	86.7	9.0	2.1	5.7cm × 2.9cm 上7.2cm × 2.9cm のほぞ穴2箇所
2002	44	38	SD01	鈎村(板状)	33.25	5.0	2.0	7.8cm × 2.6cm のほぞ穴
2003	44	39	SD01	鈎村(板状)	94.4	10.6	4.0	5.1cm × 2.9cm のほぞ穴
2004	39	43	SD01	鈎村(板状)	88.4	10.6～18.1	2.5	
2005	39	43	SD01	鈎村(神状)	122.0	4.3	4.0	鉄加工有り
2006	39	43	SD01	鈎村(神状)	153.5	6.1	2.75～7.8	鉄加工有り
2007	45	39	SD01	櫛板(縫打目?)	89.5	2.9	0.9	
2008	39	43	SD01	櫛板(無縫)	43.7	18.0	2.3～5.1	高さ: 9.8cm

別表4 文苑堂地区 石製品観察表

測量番号	グリッド		測線	種類	法面 (cm)			石材	備考
	X	Y			全长	最大幅	最小幅		
3001	—	—	SK35	スレーブバー?	(3.0)	(~)	(~)	11.53	凝灰岩
3002	—	—	SK43	(打製石包丁)	7.7	5.6	(~)	1.30	73.85 安山岩
3003	—	—	SK19	磨製石斧	(2.2)	(1.1) (刃断面)	(~)	(1.1)	1.61 流紋岩(下昌石)
3004	39	43	SD01	磨製石斧	10.5	4.9	4.7	3.10	322.0 蛇紋岩
3005	41	49	SD01	磨製石斧	(2.0)	(刃断面)	(~)	(1.8)	18.12 凝灰岩
3006	51	43	SD01	砥石	(5.3)	3.1	(~)	1.40	47.10 凝灰岩

第5章 新鮮市場地区

第1節 概要

1. 基本層序 (第28図)

基本層序は以下の通りである。

I層：にぶい黄褐色シルト（現耕作土・盛土）

II層：黒色土（中世遺物包含層。南側は弥生時代遺物包含層でもある）

IIIa層：黒褐色シルト（中世遺構面及び弥生時代中期の遺物包含層）

IIIb層：暗灰黄色シルト（中世及び弥生時代中期遺構検出面。地山）

文苑堂地区に隣接することから、新鮮市場地区も南から北に向かって緩やかに傾斜する地形であり、II層及びIIIa層は北側及び北東側でのみ検出できた。文苑堂地区同様は場整備に伴う削平が南側ほど顕著に見られる。

2. 遺構 (第29~31図)

新鮮市場地区で検出した遺構は以下の通りである。遺構検出面の標高は、海拔10.7~10.8mである。

周溝を持つ平地式建物 1棟

溝 31条（周溝、区画溝除く）

方形周溝墓 2基

方形状土坑 3基

周溝状遺構 1基

土器焼き炉 1基

周溝を持つ大型土坑 3基

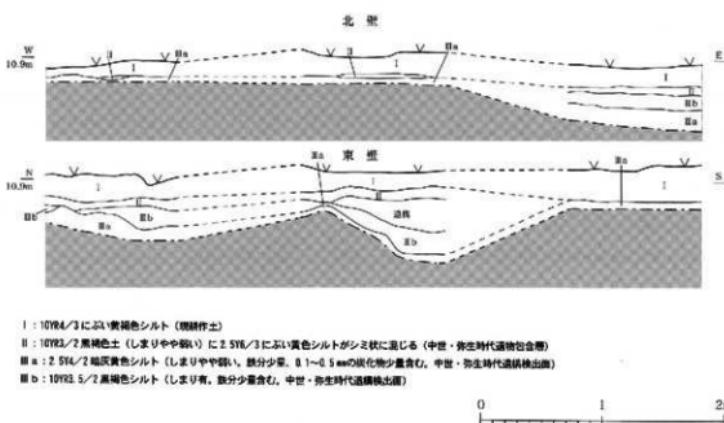
土坑 40基（方形状土坑、大型土坑、小土坑除く）

掘立柱建物 4棟

井戸 1基

区画溝 4基

ピット 多数



第28図 新鮮市場地区 基本層序 (1/40)

大きく分けて2時期の遺構が検出できた。1つは、調査区北半分に集中しており、出土した遺物から主に弥生時代中期中葉から後葉（八日市地方編年7期～9期併行）の遺構であることが確認できた。もう1つは、調査区西半分に集中しており、出土した遺物から主に13世紀代の中世の遺構であることが確認できた。

弥生時代中期の遺構では、調査区北西隅に周溝を持つ平地式建物（S I O 1）が1棟確認できた。途中で切れるものの環状に巡る周溝を持ち、灰穴炉を中心とした8角形を呈する8個の柱穴と、その内部に2間×1間の方形を呈する6個の柱穴で構成される。8角形を呈するものの、周溝が環状に巡ることから、この柱穴列も円形を意識していると考えられる。方形周溝墓は、周溝の形態から2種類が確認できた。1つは調査区北側に位置し、方形もしくは一隅ないしは一部が切れると考えられるもの（S Z O 1）が確認できた。周溝南東隅から塗と甕が1点ずつ出土している。もう1つは調査区東側に位置し、四隅が切れると考えられるもの（S Z O 2）が確認できた。周溝状遺構（S X O 1）は、調査区中央東側に位置し、L字状を呈すると考えられるもので、南西隅から土器がまとまって出土した。周溝を持つ大型土坑は、長軸7mを測る大型土坑の四方に周溝を持つもので、3基（S X O 2～0 4）が調査区中央西側、調査区中央東側、調査区中央東端でそれぞれ確認できた。この3基はほぼ東西方向に並ぶように位置している。その他の遺構では、調査区北側に土坑群（S K 2 7～3 0）・土器敷き炉と考えられる土坑（S K 2 6）が、調査区南側に土坑（S K 0 6）などがそれぞれ確認できた。

中世の遺構は、区画溝を作り掘立柱建物4棟、方形状土坑3基などが確認できた。L字状もしくはコの字状にはほぼ東西・南北に延びる区画溝が2基（区画溝2・3）と若干北北西に軸を持つ直線状の区画溝（区画溝1）が1基、北北東に軸を持つL字状の区画溝（区画溝4）が1基確認できた。区画溝1の中には、9間（以上か）×4間の絶縁の掘立柱建物（S B O 1）が1棟、切り合い関係からその前段階として4間×2間の絶縁の孤立柱建物（S B O 4）が1棟確認できた。中央の区画溝2の内側には、3間×2間の側柱の掘立柱建物（S B O 2・0 3）2棟が確認できた。南側の区画溝3の中は、ピットが数十基確認できたが、調査区南側は特に削平が著しく区画内に対応する掘立柱建物は確認できなかつた。調査区南西隅で確認できた区画溝4も、やはり削平が著しく区画内に対応する掘立柱建物は確認できなかつた。方形状土坑は、南側の区画溝3内に1基（S K 0 1）、中央の区画溝2内に2基（S K 0 2・0 3）の合計3基が確認できた。その他の土坑では、調査区南西側にほぼ完形の中世土器皿3枚を含む計4枚が出土した土坑（S K 0 7）1基などが確認できた。

3. 遺物

新鮮市場地区で出土した遺物は以下の通りである。

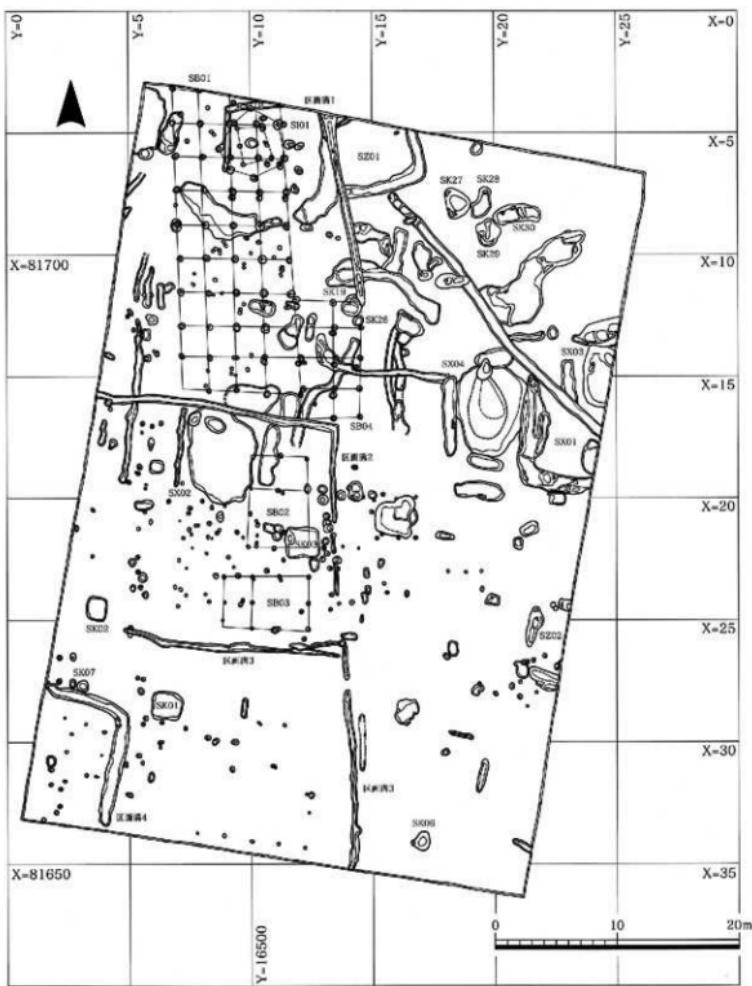
土器類：弥生土器、古代須恵器、中世土器師、株洲焼、青磁、白磁、近世陶磁器

上製品：上製円板、紡錘車

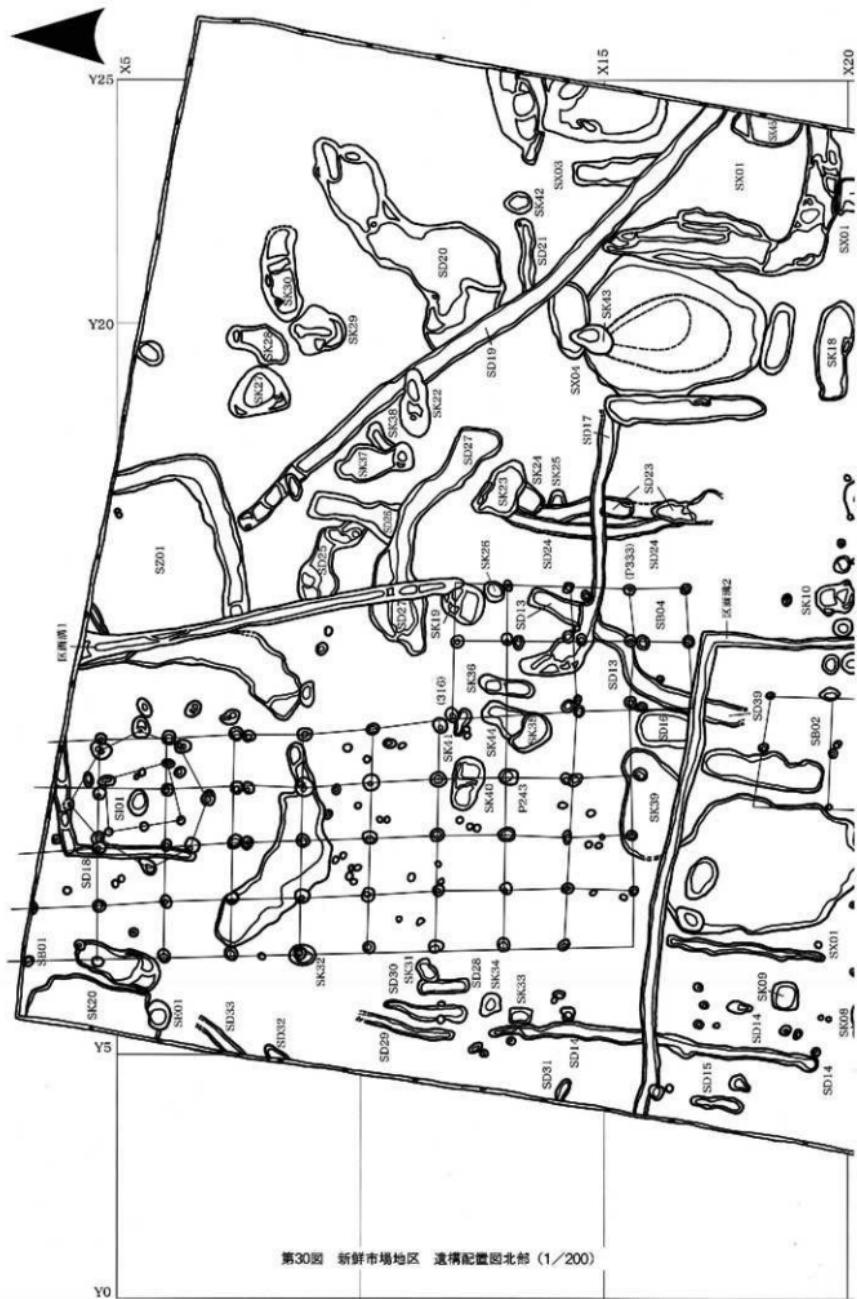
木製品：部材（板材・棒状）

石製品：管下製品・石針・楔状工具・玉鏹・砾石・石包丁・石鏹・磨製石斧・スクレイパー

弥生土器が大半を占め、次いで株洲焼、中世土器師、須恵器である。時期は、文苑堂地区と同様で、弥生土器は中期中葉から後葉（八日市地方編年7期～9期併行）、古代須恵器は8世紀後半～10世紀代、株洲焼や中世土器皿は13世紀代である。特筆すべき遺物は土作りにかかる石製品の種類と数量であり、石塙遺跡でこれほどまとまって出土し、かつある程度製作工程が復元できた例は他地区では見られないものであった。



第29図 新鮮市場地区 遺構全体図 (1/400)



第30図 新鮮市場地区 造構配置図北部 (1/200)



第31図 新鮮市場地区 遺構配置図南部 (1/200)

第2節 遺構

以下に、新鮮市場地区で確認できた遺構を、「1. 弥生時代」「2. 中世」の2時期に分けて説明していく。説明を省略した遺構については、「別表5 新鮮市場地区 遺構一覧表」を参照していただきたい。

1. 弥生時代

弥生時代の遺構は、周溝を持つ平地式建物1棟、方形周溝墓2基、周溝状遺構1基、周溝を持つ大型土坑3基、溝10条、土坑31基、ピット多数を検出した。以下に、新鮮市場地区で検出した弥生時代の遺構を、周溝を持つ平地式建物、方形周溝墓、周溝状遺構、周溝を持つ大型土坑、主な土坑の順に説明していく。

周溝を持つ平地式建物

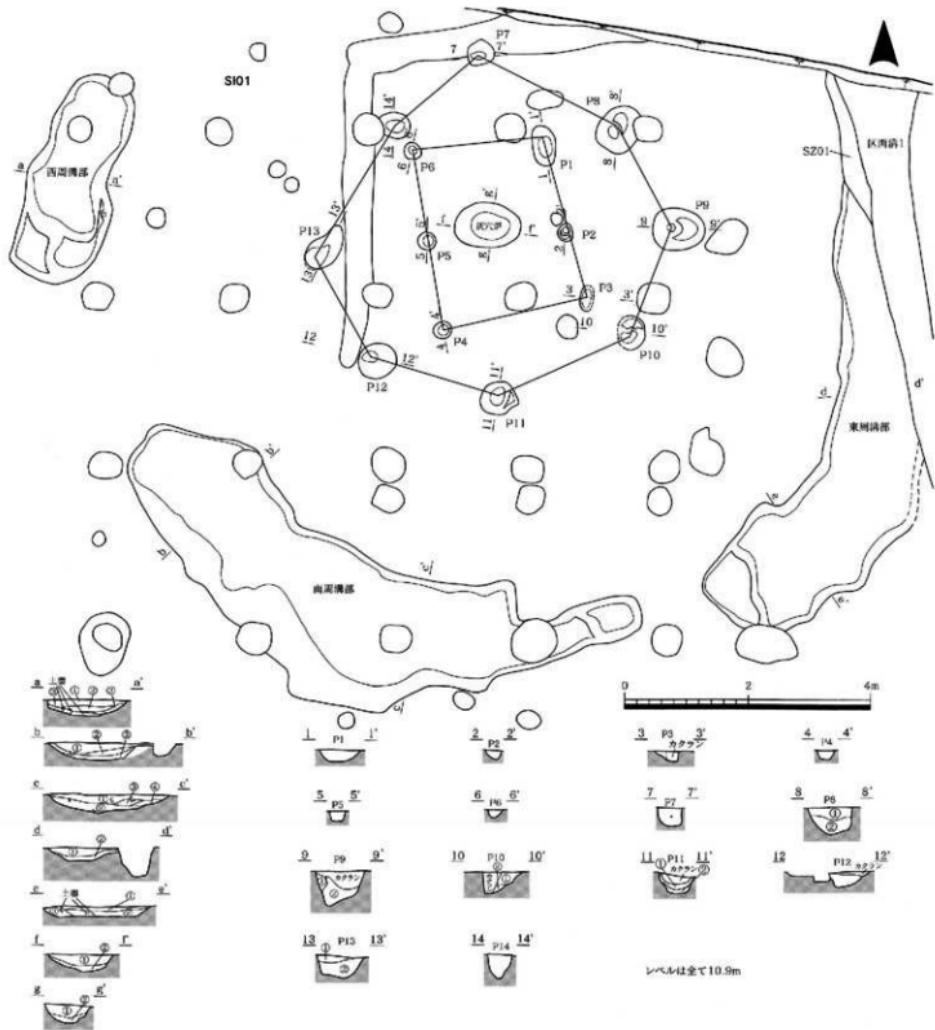
周溝を持つ平地式建物S I O 1（図版7 第32図）

調査区北西隅に位置する。北側は調査区外へ広がるため全体像は不明であるが、西周溝部、南周溝部、東周溝部の状況から判断して、おそらく部分的に途切れながら楕円もしくは不正円形に巡る周溝を作らうものと考えられる。規模は周溝部分を含め、長軸15.4m（東西）、短軸11.6m（南北）を測る。多角形状の柱穴列が、建物部分の外周とすると、建物の床面積は約25m²（7.5坪）で、周溝外側までが建物の外周とすると、床面積は約143m²（43坪）と推定できる。周溝の途切れる部分と、柱穴の並び方や間隔から、入り口部分は南南東側もしくは北北西側にあったと考えられる。

建物部分は、中心にN—5°～Wに軸を持つ2間×1間の柱穴が配置される。柱間はそれぞれ1.4m（P1～2）・1.2m（P2～3）・2.4m（P3～4）・1.5m（P4～5）・1.5m（P5～6）・2.2m（P6～1）で、深さ0.14m～0.25mを測る。柱穴の断面形状は、台形もしくは船底状を呈する。その外側に8本の柱穴（P7～14）が8角形状に配置されるが、周溝が円形を呈する事から8角形ではなく円形を意識したものと考えられる。柱間はそれぞれ、2.6m（P7～8）・2.0m（P8～9）・1.8m（P9～10）・2.4m（P10～11）・2.2m（P11～12）・2.0m（P12～13）・2.5m（P13～14）・1.8m（P14～7）で、深さ0.29m～0.59mを測る。柱穴の断面形状は、台形もしくは三角形を呈する。全ての柱穴には柱根は残っておらず、柱痕跡が確認できたものもなかったことから、S I O 1を廃棄する際には、再利用できる柱は全て引き抜いたと考えられる。次の建物あるいは他の何かに転用したのだろうか。

炉は、ほぼ中心に位置する。長軸1.07m、短軸0.75m、深さ0.32mを測る。平面形態はおおよそ楕円形で、断面形状は船底状を呈する。土層観察の結果からこの炉は、底面に最大厚10cm程度の炭層が確認できた。しかし、炉内部やその周辺に焼土や被熱した痕跡などが確認できなかった事から、灰穴炉としての機能が考えられる。

周溝部分は、西・南・東が確認できた。西周溝部は短くはあるが、長軸3.53m、短軸1.3m、深さ0.24mを測る。断面形状は船底状を呈する。S I O 1の中では、最も遺物が多く出土している。南周溝部は、長軸9.02m、短軸2.58m、深さ0.3～0.55mを測る。断面形状は舟底状を呈する。十層観察の結果から、a-a'・b-b'は当初自然堆積をし始め、その後どちらも①層が人為的に埋まつたものと考えられる。東周溝部は、北側が方形周溝墓S Z O 1の周溝部分と掘立柱建物S B O 1に付随する区画溝1に削半されたため全体像は不明であるが、長軸8.2m、短軸2.05m、深さ0.18～0.22mを測る。断面形状は台形状を呈する。遺物は主に南側から集中して出土している。



P1: ①100% / 黑褐色土 (しまり有) に 2 3% / 3 に ない黄色シルトブロック (8%) と 1 10% / 2 黄褐色土シミ状に混じる

P2: ②10% / 2 黄褐色土 (しまり有) に 2 3% / 3 に ない黄色シルトがシミ状に少量混じる (0.1~0.2 cmの液化物含む)

P3: ③10% / 黑褐色シルト (しまり有) に 2 3% / 3 に ない黄色シルトがシミ状に少量混じる

P4: ④10% / 黑褐色シルト (しまり有) に 2 3% / 3 に ない黄色シルトがシミ状に (4%) 混じる (0.2~0.4 cmの液化物少量含む)

P5: ⑤なし

P6: ⑥なし

P7: ⑦なし

P8: ⑧なし

P9: ⑨なし

P10: ⑩なし

P11: ⑪なし

P12: ⑫なし

P13: ⑬なし

P14: ⑭なし

P15: ⑮なし

P13: ①100% / 2 黒褐色土 (しまり有, 0.3~1.8 cmの液化物をや多く含む)

②100% / 黑褐色土 (しまりやや弱め), 0.3~1.6 cmの液化物を多量に含む)

P14: ①100% / 2 黑褐色土 (しまりやや弱め) に 2 3% / 3 に ない黄色シルトがシミ状に (40%) 混じる
黒褐色土: ①11% の液化と同様

②11% の液化と同様

③10% に 2 3% / 3 に ない黄色シルトがシミ状に (8%) 混じる

黒褐色土: ①11% の液化と同様

②11% の液化と同様

③10% に 10% / 3 に ない黄褐色土が少量混じる

④10% に 2 3% / 3 に ない黄色シルトがシミ状に (0.8~0.9%) 混じる

東側溝部: ①100% / 2 黑褐色土 (しまり有)

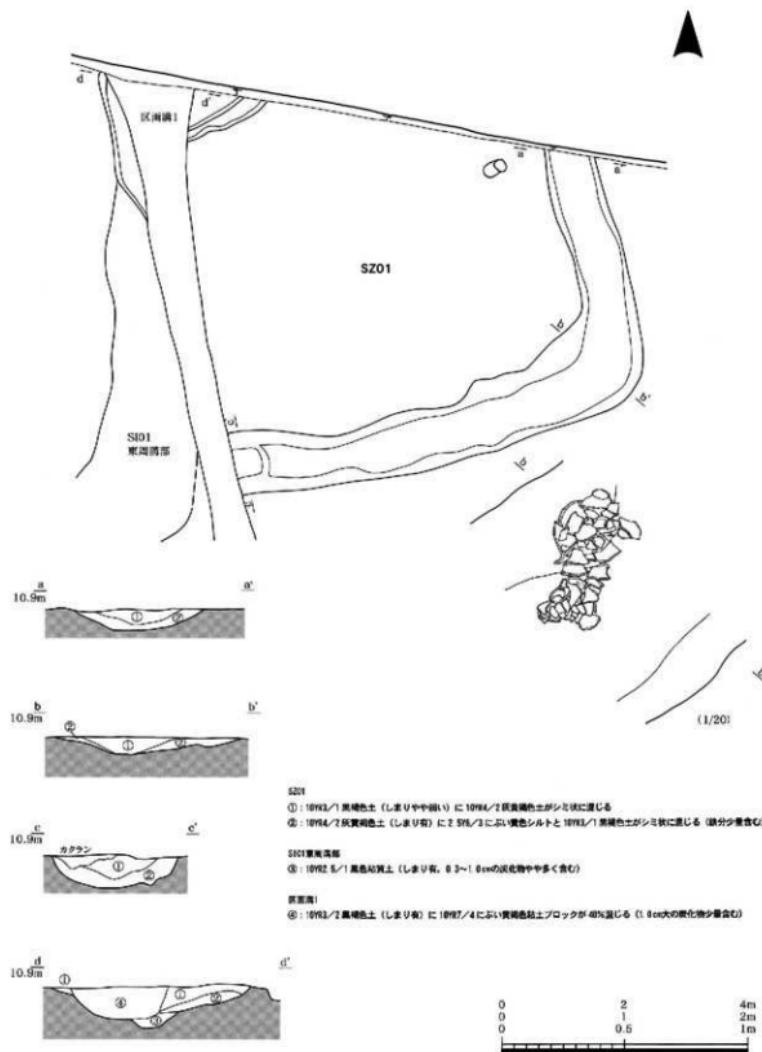
②10% 黑褐色液化土 (しまりやや弱め), 0.3~0.5 cmの液化物多量に含む)

③10% に 2 3% / 3 に ない黄色シルトがシミ状に混じる

穴沢部: ①100% / 2 黑褐色土 (しまり有, 0.3~0.5 cmの液化物少量含む)

②100% / 1 黑褐色土 (しまりやや弱め) に 2 3% / 3 に ない黄色シルトと 1 黑褐色土がシミ状に (5%) 混じる (0.2~0.5 cmの液化物多量に含む)

第32回 新鮮市場地区 SI01透構平面図及び土層断面図 (1/80)



第33図 新鮮市場地区 SZ01遺構平面図 (1/80)、土層断面図 (1/40) 及び遺物出土状況図 (1/20)

遺物は、そのほとんどが周溝部からの出土であり、土器は壺類（第50図1032～1044）・壺類（第51図1045～1050）・鉢類（第52図1051～55）・ミニチュア土器（第52図1056）・勾玉状上製品（第52図1057）・土製紡錘車・土製円盤などが、石器は石鏃、緑色凝灰岩製の管玉木製品・チップ、石鏃・石針などの工具類が出土している。時期は概ね中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）と考えられる。復元の結果ほぼ完形に復元できたものは1047・1056のみで、大部分が破片であった。また赤彩などが施されたものもなかったことから、日常的に使用していた土器を廃棄したもので、住居廃絶に伴う祭祀的行為を行った可能性は低いと考えられる。

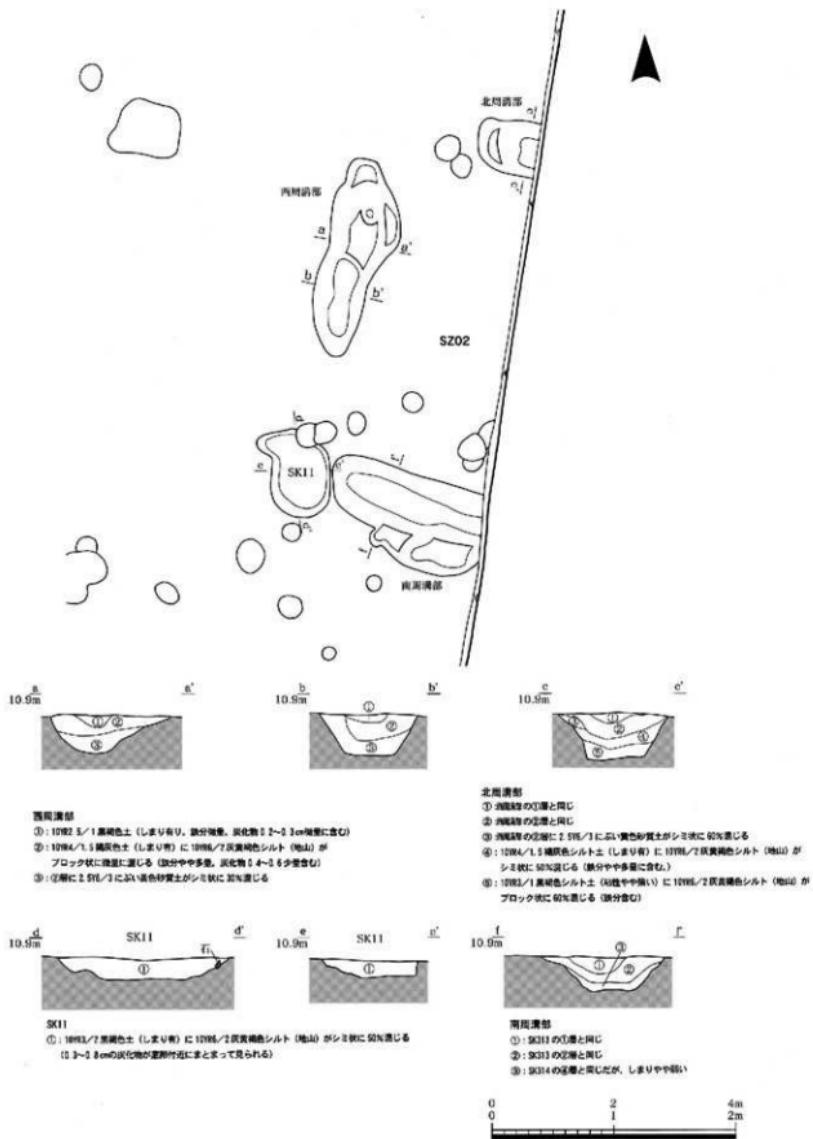
方形周溝墓

方形周溝墓S Z O 1（図版8 第33図）

調査区北側中央付近、周溝を持つ平地式建物S I O 1の東側に隣接する。調査区北側外に広がることと、ほ場整備による削平を受けているため全体像は不明であるが、方形形状の周溝が確認できている。この事から、平面形態は方形状もしくは4隅のうち1箇所だけが切れるタイプ、あるいは北辺の中央付近が陸橋状に切れるタイプと考えられる。規模は、長軸7.48m（南北方向）、短軸7.02m（東西方向）、周溝の幅1.0m～1.43m、深さ0.15m～0.22mを測る。断面形状は舟底状を呈する。主軸はN-10°～Wである。周溝覆上の堆積状況は、①層：黒褐色土に灰黄褐色土がシミ状に混じる、②層：灰黄褐色土に黒褐色土とぶい黄色シルトがシミ状に混じる、であり、順次堆積したものと考えられる。

遺物は、周溝南東隅から中期後葉（八日市地方編年9期並行）と考えられる完形の壺（第53図1058）とほぼ完形の甕（第53図1059）が1個体ずつ出土している。出土状況は横倒しで、それぞれの口縁部を向かい合わせた状態で潰れており、ほぼ南北方向に並んだ状態で出土している。また、土器を埋置するための土坑やピット状の掘り込みは確認できなかった。これは土器の出土したb-b'の十寸断面図から判断すると、①層内で土器を確認しており、他の上層断面図と比較するとb-b'のみ②層がレンズ状に堆積していないことから、②層が堆積する以前から上層が有ったと判断できる。土器を取り上げる際に、内部に詰まつた土は土壤洗浄を行い、その後採取したものは目視による観察を行ったが、骨や玉類といった副葬品は確認できなかった。以上の事から、これらの出土土器は合せ式土器柄の可能性は低いと考えられるが、土器片が周囲に飛び散っていないことや完形に復元できた事から、この2個の土器は少なくとも、埴丘上に設置されたものが落ちてきたものではなく、また投げ捨てられたものでもなく、最初から口縁部を向かい合わせになるように周溝内に寝かせて設置したものが、覆土の堆積による土圧とその後のほ場整備の影響などにより破碎したものと考えられる。供獻土器の可能性が示唆できるが、赤彩などを施していないことや、人為的に打ち欠いた箇所や土器の製作段階からわざと設けた円孔などが無かった事から、いわゆる「器としての機能を放棄した状態」ではないと考えられるため、ここではあえて積極的に供獻土器という表現は差し控えることとする。他には石鏃が1点（第61図3085）出土している。

西側に隣接する周溝を持つ平地式建物S I O 1の東周溝部との切り合い関係（d-d'）と出土した土器の時期から判断して、S Z O 1はS I O 1が廃絶した後に築造されると考えられる。今回の調査区で検出した全ての遺構の中で、出土した土器を見る限りでは、最も新しい時期の遺構と考えられる。埋葬施設（上体部）を確認するために入念な平面精査を行ったが、ほ場整備時の削平が著しいため、主体部の痕跡を確認することはできなかったが、平面形態及び土器の出土状況などから判断してS Z O 1は方形周溝墓の可能性が高いと考えられる。



第34図 新鮮市場地区 SZ02透構平面図 (1/80) 及び土層断面図 (1/40)

方形周溝墓S Z O 2 (図版9 第34図)

調査区東側、周溝状造構S X O 1の南側で検出した。調査区東側外に広がるため全体像は不明であるが、おそらく四隅が切れるタイプで、いわゆる「東海型の方形周溝墓」と考えられる。規模は、S Z O 2全体では長軸7.6m(南北方向)、短軸3.2m(東西方向)、深さ0.28m~0.44mを測る。断面形状は逆台形状を呈する。主軸はN=9°—Eである。個別に観察すると、北周溝部は、長軸1.26m、短軸1.04m、深さ0.4mを測る。西周溝部は、長軸3.29m、短軸0.96m、深さ0.41mを測る。南周溝部は、長軸2.69m、短軸1.49m、深さ0.28mを測る。覆土の堆積状況は、土層観察の結果から①層：黒褐色土上、②層：褐灰色土に灰黄褐色シルト(地山)がブロック状に混じる、③層：灰褐色土に黄色砂質土がシミ状に混じる、④層：褐灰色シルト土に灰黄褐色シルト(地山)がシミ状に混じる、⑤層：黒褐色シルト土に灰黄褐色シルト(地山)がブロック状に混じる、である。埋没過程は、北周溝部の⑥層が最初に埋没していた事が解る。次いで北・南周溝部の④層が埋没し、西・北周溝部の③層、最後は3つの周溝の②層・①層が同時に埋没して行ったと考えられる。また北・南周溝部はレンズ状堆積をしていることから、周溝の外側、もしくは内側どちらか1方からの急激な土砂の流れ込みはほとんど無いものと考えられる。

遺物は、周溝内から中期中葉から後葉(八日市地方編年8期~9期併行)の壺類・甕類(第53図1060)・鉢類(第53図1061)が出土している。全て破片で出土しており、赤彩などが施されたものではなく、完形に復元できるものもなかった。また、玉作り製作の際に出たと考えられる緑色凝灰岩や鉄石英の管玉未製品やチップ、工具である玉縫や石針などの石製品、瑪瑙片が、本地区の中で最も多く出土している。北・南周溝部は②層より下層からはチップ等は出土していないが、西周溝部からは最下層である③層からも出土しており、周溝が埋没し始めた頃からチップが混入し始めていたと考えられる。

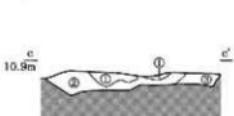
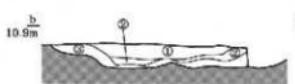
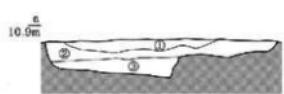
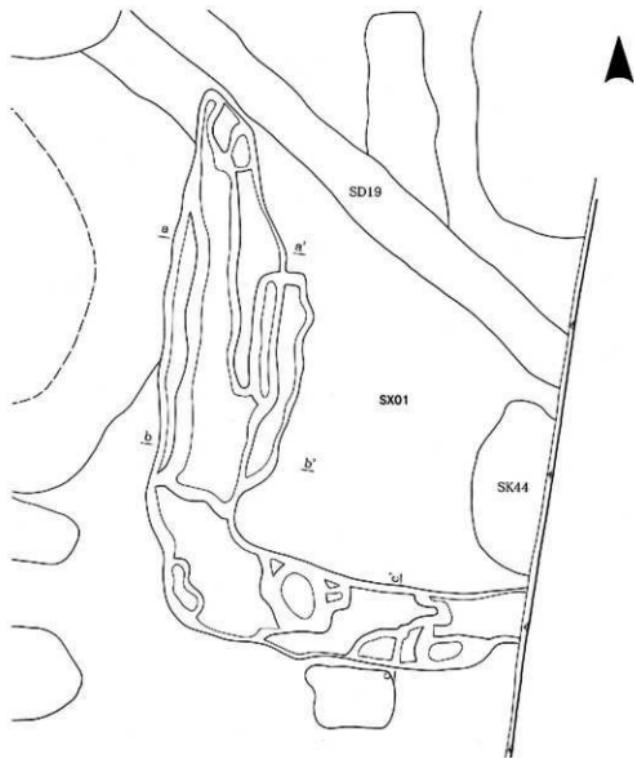
周溝の残存状態から判断すると、ほ場整備の際に削平は受けているものの主体部と考えられる土坑が残っている可能性が高いと考え、周溝内側の平面精査を行ったが、S Z O 1同様埋葬施設(主体部)を確認することはできなかった。出土十器から判断すると、S Z O 2は方形周溝墓S Z O 1(八日市地方編年9期併行)よりも古い時期に造成されていると考えられる。

周溝状造構

周溝状造構S X O 1 (図版10 第35図)

調査区東側、周溝を持つ大型土坑S X O 3の南側で周溝を持つ大型土坑S X O 4の東側に位置する。調査区東側外に広がるため全体像は不明であるが、北側に周溝となる造構の痕跡が確認できなかった事から、コ字状の平面形態の可能性を指摘できるが、現状はL字状の平面形態を呈している。規模は、長軸8.87m(南北方向)、短軸6.0m(東西方向)、幅0.92~2.5m、深さ0.08~0.29mを測る。断面形状は概ね逆台形状を呈する。主軸はN=5°—Eである。覆土の堆積状況は、①層：黒色土に灰黄褐色土がシミ状に混じる、②層：黒褐色土に黑色土とにぶい黄色シルトがそれぞれシミ状に混じる、③層：黒褐色土に黒褐色土とにぶい黄色シルトがシミ状に混じる、であり、いずれも水平堆積をしている事から、自然堆積をしたものと考えられる。①層は覆土から判断して、中世以降の削平及び搅乱により堆積したものと考えられる。

遺物は、周溝の南東隅から集中して中期中葉から後葉(八日市地方編年8期~9期併行)の壺類(第54図1062・1063)・甕類(第54図1064・1065)・鉢類、石針の未製品が出土している。赤彩などが施されたものではなく、完形に復元できるものもなかった。中世以降に削平及び搅乱を受けていたため、遺物は元位置を留めておらず、出土状況からでは出土した土器を廃棄したものなのか、意図的に埋置したものなのかを判断する事は困難である。



第35図 新鮮市場地区 SX01造構平面図(1/80) 及び土層断面図(1/40)

難であった。

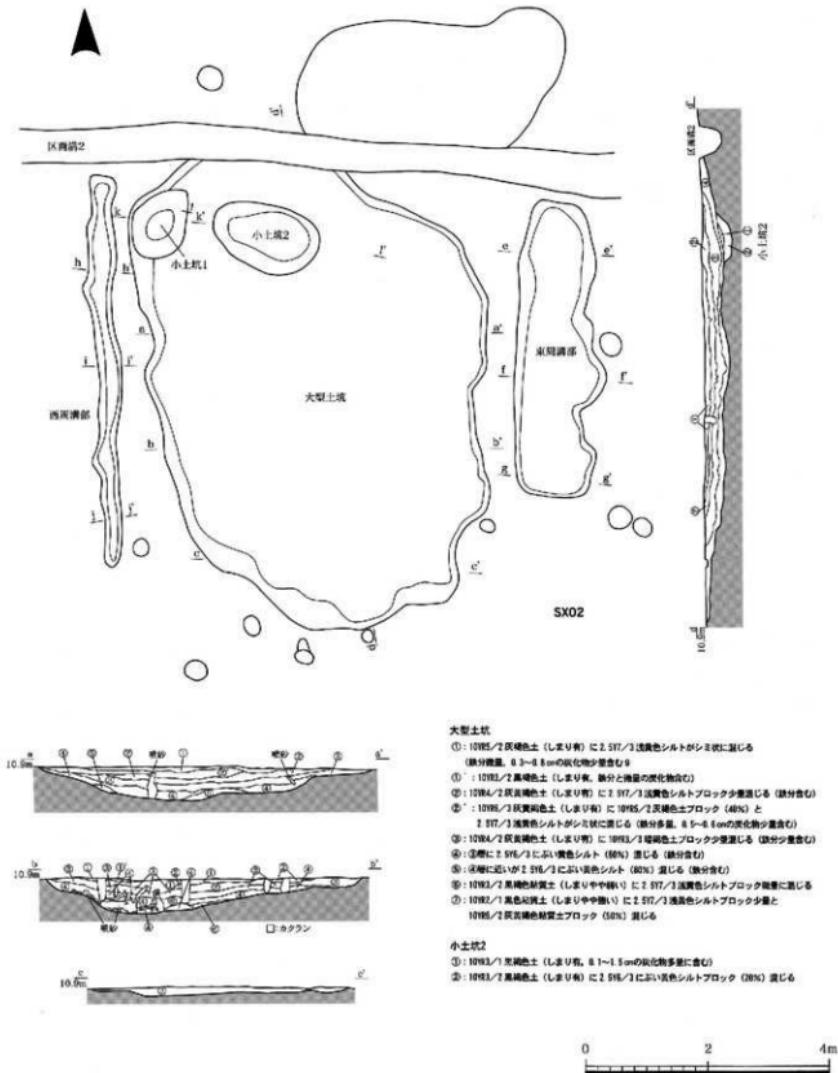
西側に隣接する周溝を持つ大型土坑SX04の平面形態が、4方に周溝を伴うものと考えられることから、SX04の東周溝とSX01の南北方向の周溝は重複していると考えられる。平面形態及び上層の堆積状況から判断した結果、SX04の東周溝部の痕跡は土層断面図a-a'の③層の掘形が、深さと幅から判断して相当すると思われる。しかし、b-b'ではこの掘形が確認できなかった事から、SX04の東周溝部は西周溝部よりやや低いものと考えられる。この事から、SX01はSX04の東周溝部を再掘削したことが確認でき、出土した遺物から判断してSX01はSX04よりも新しいと考えられる。また、周溝内側にあるSK44は、調査区東外側に広がるもの、検出当初埋葬施設（土体部）ではないかと考え人念に精査を行ったが、木棺の痕跡は確認できず、また遺物も破片で且つまばらに散らばって出土しており、完形に復元できるものもなかつた事から、土体部ではないと判断した。

周溝を持つ大型土坑

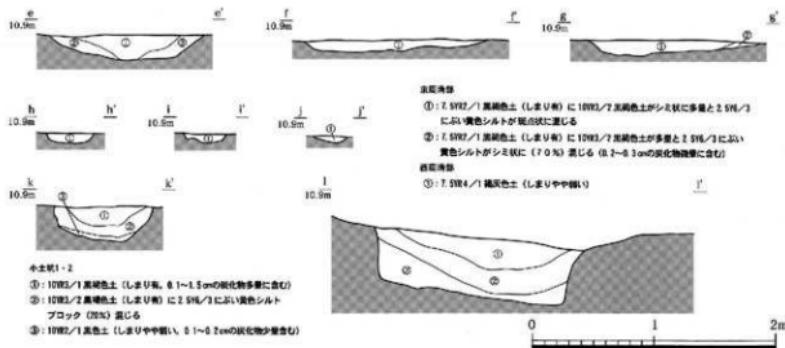
周溝を持つ大型土坑SX02（図版11 第36・37図）

調査区中央西側で、掘立柱建物SB01の南側に位置する。北側は区画溝2に切られており、また全体的にほ場整備による削平を受けている。本来の平面形態は、中心の大型上坑の4方向に周溝が配置される平面形態を呈すると考えられるが、現状では周溝は東側及び西側を確認するのみである。規模はSX02全体では現状で、南北7.6m、東西8.4m、深さ0.06~0.65mを測り、断面形態は舟底状を呈する。上軸はN-5°-Eで、周溝状構造SX01と同じ軸を持つ。個別に観察すると、東周溝部は、長軸4.82m、幅1.04m~1.5m、深さ0.09m~0.2mを測る。西周溝部は、長軸6.37m、幅0.24m~0.5m、深さ0.06m~0.09mを測る。大型土坑は、長軸7.6m、短軸5.6m、深さ0.3~0.65mを測る。また大型土坑の北側には、小土坑1及び2が位置する。小土坑1は、長軸1.25m、短軸0.9m、深さ0.34mを測る。小土坑2は、長軸1.77m、短軸1.12m、深さ0.67mを測る。大型土坑を発掘した際にこの2基の小土坑が底面で新たに検出された事から、大型土坑が埋没する途中もしくは埋没してから掘削されたものではなく、開口している時にすでに掘削されていたことが解った。従って、小土坑1・2は中央大型土坑に付随する何らかの土坑と考えられる。他に付随する土坑やピットは確認できなかった。東周溝部の堆積状況は、①層：黒褐色土にシミ状の黒褐色土と斑状にぶい黄色シルトが混じる、②層：黒褐色土にぶい黄色シルトがシミ状に混じる、③層：黒色土、である。西周溝部の堆積状況は、①層：褐色灰色土である。自然堆積か人為堆積かの判断は現状では困難である。大型土坑の覆土の堆積状況は、①層：灰褐色土に浅黄色シルトがシミ状に混じる、②層：灰褐色土に浅黄色シルトブロックが混じる、③層：灰褐色土に暗褐色土ブロックが少量混じる、④層：灰褐色土にぶい黄色シルトが多量に混じる、⑤層：④層に近いがにぶい黄色シルトが④層よりも多量に混じる、⑥層：黒褐色粘質土に浅黄色シルトブロックが微量に混じる、⑦層：黒色粘質土に浅黄色シルトブロックが少量と灰褐色粘質土ブロックが混じる、である。層厚に均一性が見られる事から、人為的に埋められたものと考えられるものの、明確に版築されたような痕跡は確認できなかった。周溝と大型土坑の切り合い関係は、削平を受けている事により確認できなかったが、後述する周溝を持つ大型土坑SX03・04と平面形態が類似する事から、おそらく中央の大型土坑を先に掘削し、その後周溝を掘削したものと考えられる。

遺物は、小土坑1及び2、東周溝部と西周溝部、大型土坑と全ての遺構から中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）の甕類・壺類・鉢類・底部穿孔土器（第54図1066）、綠色凝灰岩の管玉未製品が出土している。また大型土坑の最上層からは中世土器類も出土している。全て破片で出土しており、赤彩などが施



第36図 新鮮市場地区 SX02遺構平面図及び土層断面図(1/80)



第37図 新鮮市場地区 SX02土層断面図(1/40)

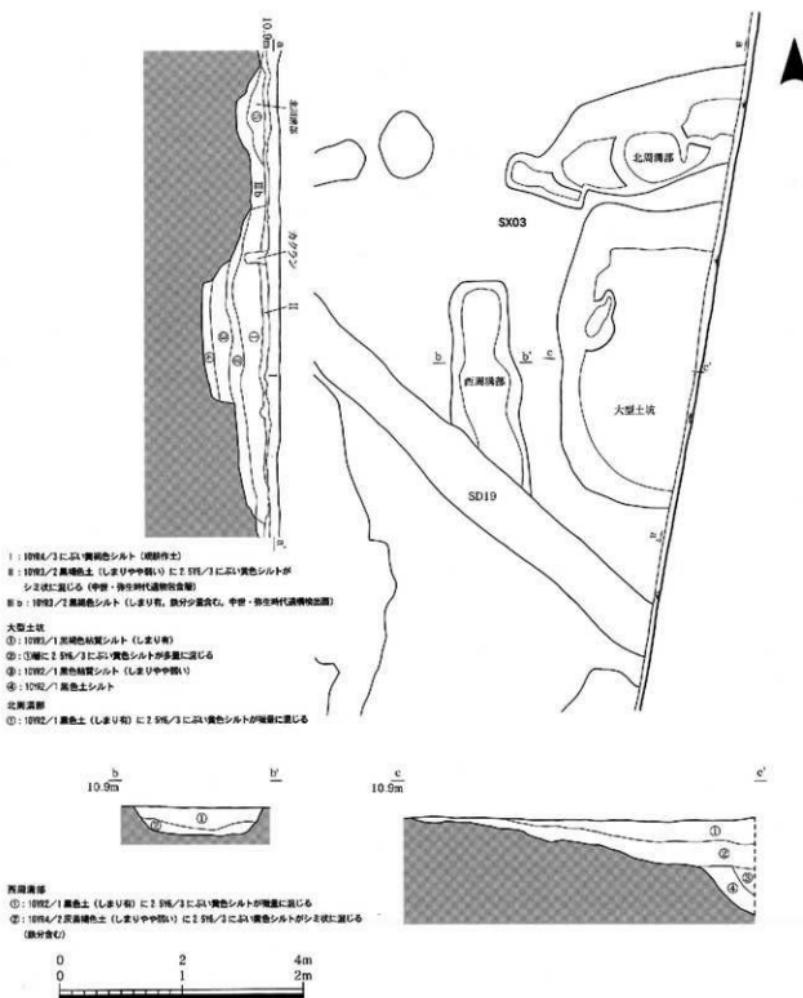
されたものはなく、また完形に復元できるものもなかった。中世土器は混入したものと考えられる。

大型土坑と周溝は当初別々の遺構として捉えていたが、出土した遺物に明確な時期差がない事や、SX03・04と同様の平面形態と土層の堆積状況であることから、大型土坑及び小土坑と周溝は合せて1つの遺構と考えられる。

周溝を持つ大型土坑SX03（図版11 第38図）

調査区中央東端、周溝状遺構SX01の北側で、且つ周溝を持つ大型土坑SX04の北東側に位置する。南側はSD19に切られており、また調査区東外側に広がるため全体像は不明である。本來の平面形態は、周溝を持つ大型土坑SX02・04と同様に、中央の大型土坑の4方向に周溝が配置される平面形態を呈すると考えられるが、現状では周溝は北側及び西側を確認するのみである。規模は、SX03全体では現状で、南北8.0m、東西5.0m、深さ0.26m～0.67mを測り、断面形態は舟底状あるいは逆台形状を呈する。主軸は大型土坑の平面形態から判断してN=90°～Eであり、SX02・04とは違いおそらく東西方向に軸を持つものと考えられる。個別に観察すると、北周溝部は、現状で長軸4.5m、幅0.9m～1.83m、深さ0.22m～0.57mを測る。西周溝部は、現状で長軸3.0m、幅1.12m、深さ0.25m～0.29mを測る。大型土坑は、現状で長軸5.12m、短軸2.17m、深さ0.13m～0.39mを測る。北周溝及び西周溝部の覆土の堆積状況は、①層：黒色土にぶい黄色シルトが微量に混じる、②層：灰黄褐色土にぶい黄色シルトがシミ状に混じる、であり、いずれも水平堆積をしていることから、自然堆積をしたものと考えられる。大型土坑の覆土の堆積状況は、①層：黒色土にぶい黄色シルトが微量に混じる、②層：黒褐色シルト、である。西端付近のみの検出であったことから単層のみで、SX02の様に層厚に均一性があるとは言い切れず、人為的に埋めたと考える事も自然堆積したと考える事も可能である。しかし、明確に版築されたような痕跡は確認できなかった。周溝と大型土坑の切り合い関係は確認できなかったが、SX02・04と平面形態が類似する事から、中央の大型土坑を先に掘削し、その後周溝を掘削したものと考えられる。

遺物は、北及び西周溝部と大型土坑と全ての遺構から、中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）



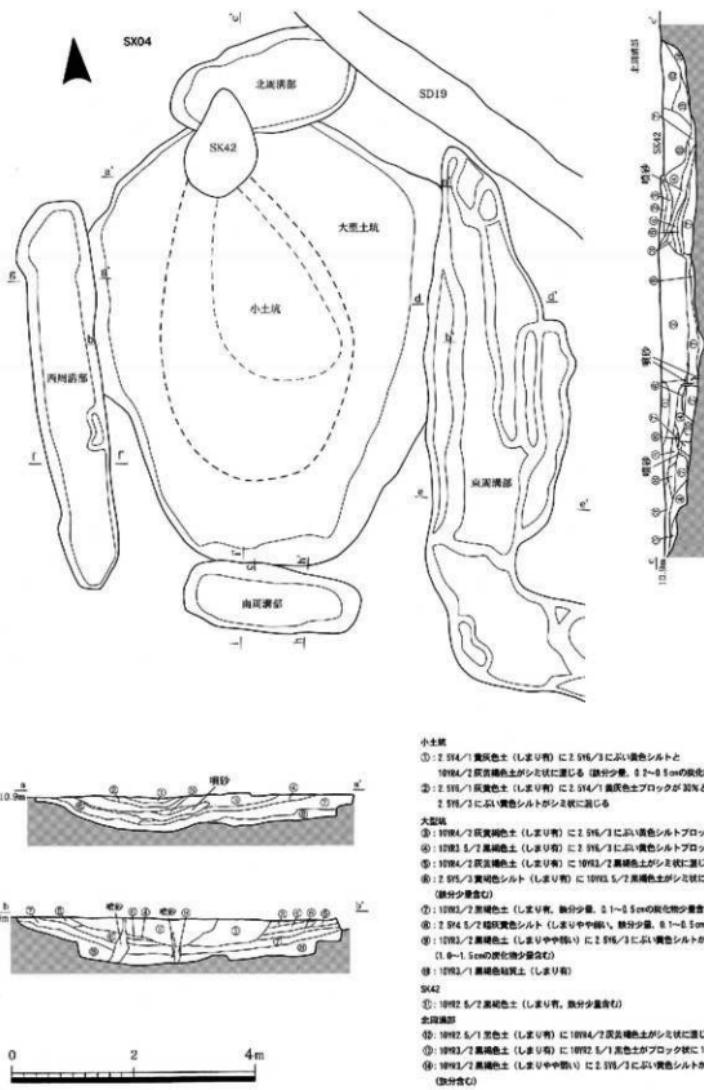
第38図 新鮮市場地区 SX03造構平面図 (1/80) 及び土層断面図 (1/40・1/80)

の壺類（第 55 図 1067）・甕類（第 55 図 1068）・鉢類（第 55 図 1069）や少量ではあるが緑色縞灰岩のチップなどが出土している。土器は全て破片で出土しており、赤彩などが施されたものではなく、また完形に復元できるものもなかった。

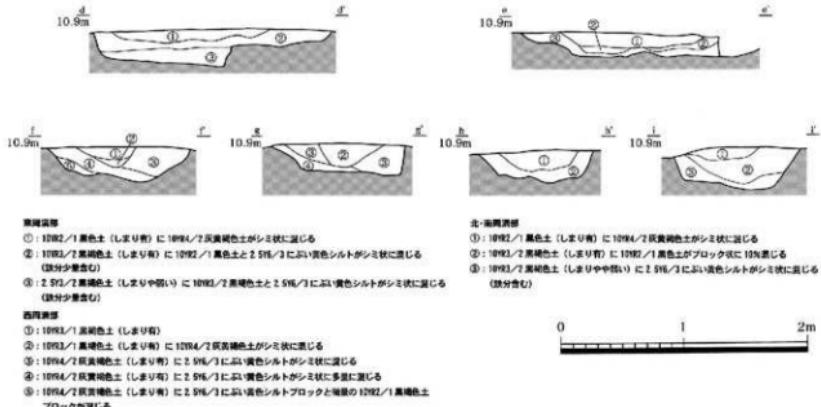
周溝を持つ大型土坑 S X 0 4（図版 12、第 39・40 図）

調査区中央東側、周溝状造構 S X 0 1 の西側で、且つ周溝を持つ大型土坑 S X 0 3 の南西側に位置する。北側の一部は S D 1 9 に切られており、東側は S X 0 1 と重複しているが、平面形態は周溝を持つ大型土坑 S X 0 2・0 3 と同様、中央の大型土坑の 4 方向に周溝が配置される平面形態を呈すると考えられる。規模は S X 0 4 全体で、南北 10.0m、東西 8.0m、深さ 0.11m～0.6m を測り、断面形態は舟底状あるいは逆台形状を呈する。主軸は大型土坑から判断して N=0°～E で、南北方向に軸を持つ。個別に観察すると、北周溝部は、現状で長軸 2.9m、幅 1.59m、深さ 0.13m～0.37m を測る。西周溝部は、現状で長軸 6.46m、幅 1.27m、深さ 0.14m～0.36m を測る。南周溝部は、現状で長軸 2.97m、幅 1.14m、深さ 0.24m～0.35m を測る。東周溝部は、重複している事から正確な規模は不明であるが、西周溝部とさほど違いはないと考えられる。中央大型土坑は、現状で長軸 7.1m、短軸 5.44m、深さ 0.11m～0.6m を測る。また大型土坑の中にさらに小土坑が確認できた。現状で、長軸 4.88m、短軸 3.12m、深さ 0.48m を測る。この小土坑は当初、大型土坑が擾乱を受けた部分だと判断して掘削を開始したため、正確な平面形態は不明になってしまったが、土層断面図からかろうじて第 38 図のように復元することができた。土層観察の結果から、小土坑は大型土坑が完全に埋没してから後に掘削されていることが解り、S X 0 2 に付随する小土坑 1 及び 2 とはその性格を異にするものと考えられる。他に付随する土坑やピットは確認できなかった。北及び南周溝部の覆土の堆積状況は、①層：黒色土に灰黃褐色土がシミ状に混じる、②層：黒褐色土に黒色土ブロックが混じる、③層：黒褐色土ににぶい黄色シルトがシミ状に混じる、である。西周溝部の覆土の堆積状況は、①層：黒褐色土、②層：黒褐色土に灰黃褐色土がシミ状に混じる、③層：灰黃褐色土ににぶい黄色シルトがシミ状に混じる、④層：灰黃褐色土ににぶい黄色シルトがシミ状に多量に混じる、⑤層：灰黃褐色土ににぶい黄色シルトブロックと微量の黒褐色土ブロックが混じる、である。西周溝部の①・②層は覆土から判断して、おそらく中世以降の擾乱の痕跡と考えられる。東周溝部は S X 0 1 の項で述べた通り、a-a' の③層が S X 0 4 に伴う東側周溝部分と考えられる。大型土坑の覆土の堆積状況は、③層：灰黃褐色土ににぶい黄色シルトブロックが混じる、④層：黒褐色土ににぶい黄色シルトブロックが混じる、⑤層：灰黃褐色土に黒褐色土がシミ状に混じる、⑥層：黄褐色シルトに黒褐色土がシミ状に混じる、⑦層：黒褐色土、である。S X 0 2 同様、層厚に均一性が見られる事から人為的に埋めたものと考えられるものの、明確に版築されたような痕跡は確認できなかった。小土坑の覆土の堆積状況は、①層：黄灰色土ににぶい黄色シルトと灰黃褐色土がシミ状に混じる、②層：灰黃褐色土に黄灰色土ブロックとにぶい黄色シルトが混じる、である。堆積の順序に統一性が見られない事や、周辺で同様の堆積状況を示す遺構が無い事から、①層はブロック状に混じるものであると判断し、覆土は一括で且つ人為的に埋められたものと考えられる。周溝と大型土坑の切り合い関係は、大型土坑を先に掘削し、その後に周溝を掘削している事が明確に確認できた。

遺物は、小土坑、東西南北それぞれの周溝部から中期中葉から後葉（八日市地方編年 8 期～9 期併行）の壺類（第 55 図 1070・1071）・甕類（第 55 図 1072・1073）・鉢類が、また大型土坑からは当調査区全体で最も占める時期に相当する八日市地方編年 7 期併行の甕類（第 55 図 1074）を含む 8 期併行の上器が出土している。1074 は大型土坑北側の最下層部（⑦層）から、底部から伴部下半を欠いてはいるが比較的まとまった状態で出土している。また、少量ではあるが東周溝部からは緑色縞灰岩の管玉未製品も出土している。他の遺構からは土器は全て破片で出土している。出土した全ての土器は赤彩などが施されたものではなく、また完形に復元できるも



第39図 新鮮市場地区 SX04遺構平面図及び土層断面図（1／80）



第40図 新鮮市場地区 SX04土層断面図 (1/40)

のもなかつた。

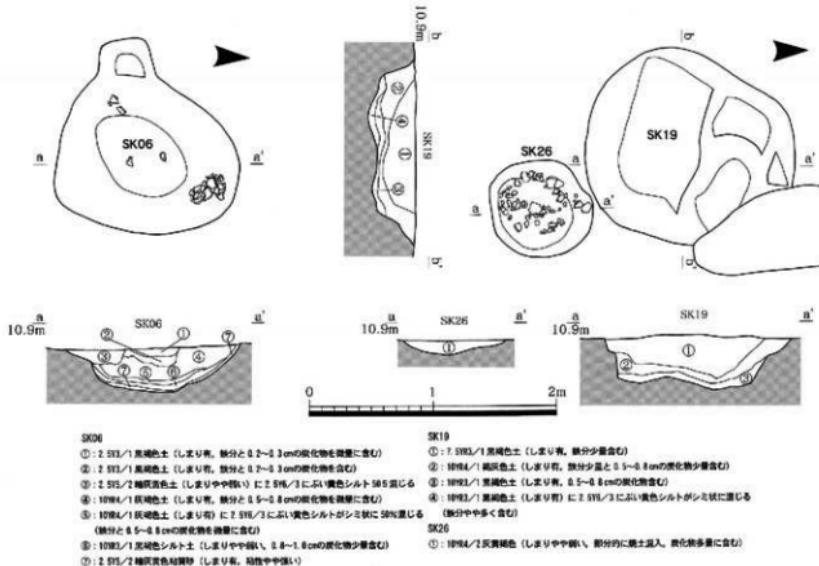
S X 0 2 と違う所は、大型土坑が埋没した後に小土坑を掘削している事である。周溝から出土した土器と小土坑から出土した土器の時期差がほとんどなかったことから、小土坑は周溝が埋没するのと同じくして埋没したものと考えられる。当初、4方向の溝を確認できたことから、これらの溝はいわゆる「東海型」の方形周溝墓であり小土坑はその埋葬施設（主体部）であると考えた。しかし、土層観察の結果から、小土坑から棺材の痕跡や副葬品が確認できなかったため主体部ではないと判断した。以上の事から、S X 0 4 は S X 0 2 ・ 0 3 の様に大型土坑が埋没する前に小土坑を掘削するタイプではないが、周溝と大型土坑の切り合ひ関係と、堆積状況が類似する事から、S X 0 2 ・ 0 3 と同様の遺構と考えたい。

土坑

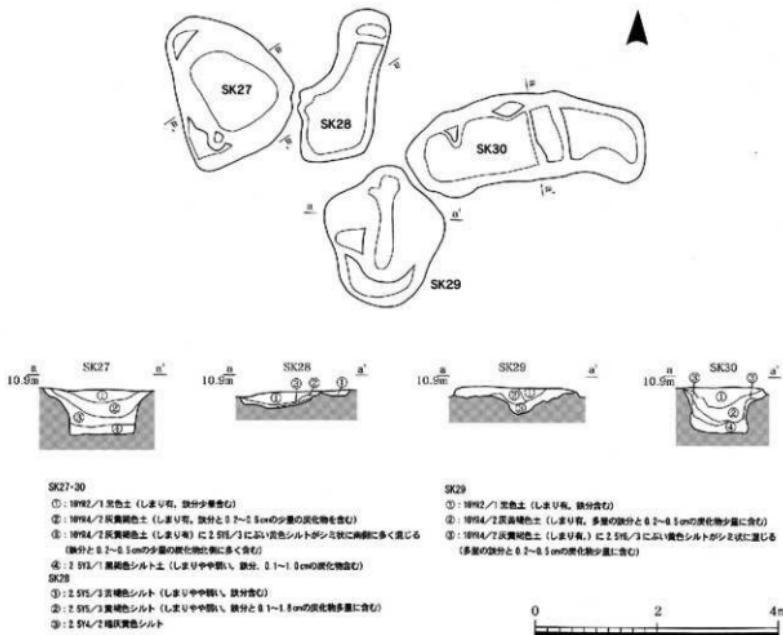
土坑SK06 (図版13 第41図)

調査区の南東側に位置する。規模は、長軸1.68m、短軸1.4m、深さは0.4mを測る。ほ場整備の影響で削平を受けているため、本来の深さよりは浅いものと考えられる。平面形態は若干不定形を呈するものの概ね梢円形で、断面形態は舟底状を呈する。覆土の堆積状況は土層観察の結果から、①層～③層までは中世以降の擾乱を受けたもので、⑤層～⑦層までが安定したレンズ状堆積をしている。つまり⑥層～⑦層までが自然堆積した後④層が一度に堆積したものと考えられる。

遺物は、中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）の甕類（第56図1075）がおよそ1個体分と、壺類・鉢類などの小破片、緑色磁灰岩の管玉木製品（不整形態）が出土している。赤彩などを施したものはない。北側から出土した甕（1075）は、底部の一部と大部分の口縁部が欠損していることから、破損した土器を廃棄したものと考えられる。



第41図 新鮮市場地区 SK06・19・26遺構平面図及び土層断面図 (1/40)



第42図 新鮮市場地区 SK27~30造構平面図及び土層断面図 (1/80)

土坑SK19 (図版13 第41図)

調査区の中央やや北側に位置する。規模は、長軸 1.74m、短軸 1.5m、深さ 0.54m を測る。ば場整備の影響と区画溝1による削平を受けているため、本来の深さよりは浅いものと考えられる。平面形態は若干不定形を呈するものの概ね隅九方形で、断面形態は逆台形を呈する。覆土の堆積状況は土層観察の結果から、当初②層から④層が自然堆積した後①層が一括して人為的に堆積したと考えられる。また、①層から中世の遺物と亦生時代の遺物が混在して出土していることから、①層は中世以降の擾乱と考えられる。

遺物は、中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）の甕瓶（第56図1076）・壺瓶（第56図1077・1078）・鉢類などの破片が出土している。赤彩などを施したものではなく、完形となるものもなかった。また、方形容器底S Z O 2同様、緑色凝灰岩や鉄石英・チャートの管玉の未製品やチップ、玉錐、石針などの工具類が多数出土していることから、この付近で玉作りを行っていたことがうかがえる。今調査での唯一の管玉完製品

や子石核などが出土した遺構である。

土坑SK26（図版13 第41図）

調査区の北側、SK19の南側に隣接する。規模は、長軸0.88m、短軸0.72m、深さ0.1cmを測る。ほ場整備の影響で削平を受けていたため、本来の深さよりも浅いものと考えられる。平面形態は概ね楕円形で、断面形態は舟底状を呈する。覆土の堆積状況は削平のため単層であり、灰黄褐色土に部分的に焼土と炭化物が混じるものである。現状では、自然堆積か人為堆積かの判断は難しい。遺構東寄りから被熱した土器片が環状に出土しており、またその中心部分は特に被熱を受けていた。

遺物は、中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）の甕類・壺類・鉢類などが出土しているが、完形となるものはなかった。また、SK19と同様、土作りを行っていたと考えられる管玉の未製品やチップ、石針などの工具類が多量出土している。

以上のことから判断すると、SK26は上器敷きとして使用されていたと考えられる。

土坑SK27～30

調査区の北側で、SZ01の東側に位置する。規模や主軸方向、断面形態などそれぞれ違いがあるが、平面形態はそれぞれ不整形を呈する。遺物の出土量に違いはあるものの、出土状況がそれぞれ似ている事から、壊れた土器を捨てていた一連の土坑と考えられる。以下にそれぞれの詳細を述べていく。

土坑SK27（図版14 第42図）

規模は、長軸2.47m、短軸1.81m、深さ0.64mを測る。ほ場整備の影響で削平を受けていたものの、削平はわずかであったと考えられる。わずかにN-26°-Wの方向に軸を持つ。断面形態は逆台形状を呈する。覆土の堆積状況は、④層が人為堆積をした後、③層～①層が順次堆積したものと考えられる。

遺物は、主に底面から中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）の甕類（第57・58図1083・1084・1086・1087）・壺類（第57図1079～1081）の破片が多量に出土したが、赤彩などが施されたものではなく、また完形に復元できるものもなかった。

土坑SK28（図版14 第42図）

規模は、長軸2.7m、短軸1.29m、深さは南から北に向かって深くなり、北隅で0.53mを測る。ほ場整備の影響で、やや削平を受けていたものと考えられる。軸はN-19°-Eの方向に軸を持つ。断面形態は逆台形状を呈する。覆土の堆積状況は③層、④層、②層の順に堆積した後、中世以降の攪乱である①層が堆積したものと考えられる。

遺物は、中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）の甕類・壺類の破片が少量出土しているが、赤彩などが施されたものではなく、また完形に復元できるものもなかった。

土坑SK29（図版14 第41図）

規模は、長軸2.3m、短軸1.87m、深さ0.38mを測る。ほ場整備の影響でかなり削平を受けたものと考えられる。N-4°-Eの方向に軸を持つ。断面形態は舟底状を呈する。覆土の堆積状況は③層、②層と順次堆積したものと考えられる。

遺物は、中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）の甕類の破片が少量出土しているが、赤彩などが施されたものではなく、また完形に復元できるものもなかった。緑色凝灰岩のチップが少量出土している。

土坑SK30（図版14 第42図）

規模は、長軸3.98m、短軸1.41m、深さ0.78mを測る。ほ場整備の影響で削平を受けていたものの、削平はわずかであったと考えられる。W-6°-Sの方向に軸を持つ。覆土の堆積状況は、④層・③層が自然堆積

をした後、②層・①層が順次堆積したものと考えられる。

遺物は、最下層の④層から中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）の壺類（第57図1078・1082）・甕類（第58図1085・1088～1091）・鉢類（第58図1092）など多量の破片が出土しているが、赤彩などが施されたものではなく、また完形に復元できるものもなかった。また緑色凝灰岩のチップが少量出土している。

2. 中世

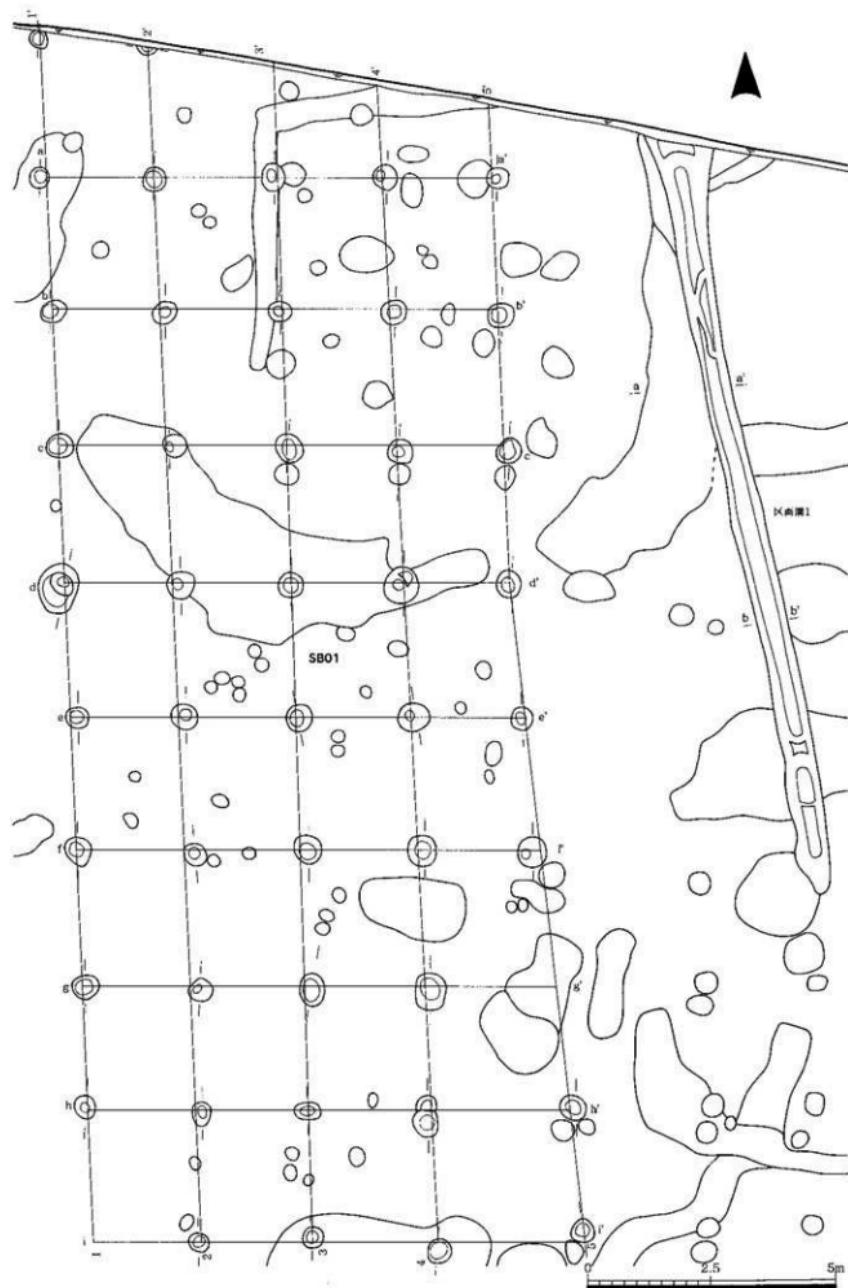
中世の遺構は、北西側に現状で9間×4間の南北棟続柱建物（SB01）が1棟と、これとほぼ同じ軸を持つ直線状の区画溝1が確認できた。次に中央のL字状もしくはコの字状に延びる区画溝2の内側には、3間×2間の南北棟及び東西棟のいわゆる「中抜け側住建物」2棟（SB02・03）が確認できた。次に南側の区画溝3（SD02・04・05）であるが、この内側は削半が著しいため区画溝3に対応する掘立柱建物は確認できなかつた。また、調査区南西隅で確認できた区画溝4の区内にも柱穴が多数確認できることから、掘立柱建物が存在していたと考えられるが、削半が著しいため確認できなかつた。SB01の東側には、柱穴の切り合い関係からその前段階として4間×2間の南北棟続柱建物（SB04）が1棟確認できた。土坑では、区画溝3内に1基（SK01）、区画溝2内に2基（SK02・03）、合計3基の方形状土坑が確認できた。それぞれ掘立柱建物に付随していたものと考えられる。その他、ほぼ完形の十師器皿3枚などが出土した上坑（SK07）1基を含む4基などが確認できた。溝は7条確認できた。以下に、掘立柱建物とそれに伴う区画溝、掘立柱建物、土坑の順に説明していく。

掘立柱建物とそれに伴う区画溝

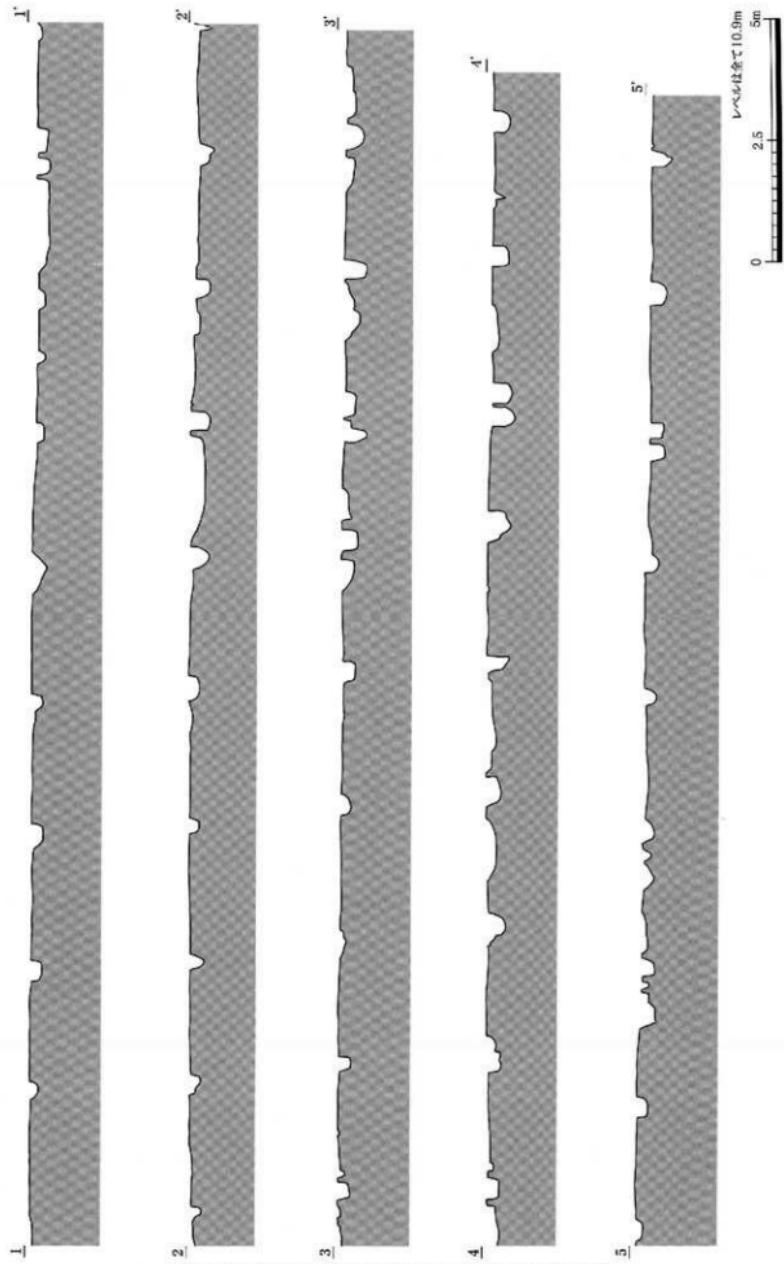
掘立柱建物SB01とそれに伴う区画溝1（図版15 第43図～45図）

調査区北西隅に位置する。SB01は、9間×4間の南北棟続柱建物である。北側は調査区外に延びる様相を呈するため、実際は南北9間以上の建物になる可能性がある。桁行25m×梁行9.2m、9間×4間の場合面積は230m²（約70坪）である。主軸はN-4°～Wである。地山面は建物の北側と南側で約10cmの高低差がある。柱洞形は、平均長軸0.53m、平均短軸0.47mを測り、平面形態はおおよそ円形で、断面形態は逆台形もしくは舟底状を呈する。西側を1、東側を5の桁行柱穴列の平均深度は、1が0.22m、2が0.32m、3が0.29m、4が0.32m、5が0.3mを測る。また、北側をa、南側をjの梁行柱穴列の平均深度は、aが0.2m、bが0.34m、cが0.33m、dが0.3m、eが0.35m、fが0.25m、gが0.31m、hが0.28m、iが0.24m、jが0.25mを測る。東から西へ行く程、そして北から南に行く程柱穴掘形の深度は浅くなっていることが解る。のことから、旧地形は西側高く、また南側高かったと判断できる。柱穴の覆土は、黒褐色もしくは黒色土をベースとし、にぶい黄色シルトがシミ状に混じる。柱根は出土せず、柱痕跡が確認できたものは土層観察の結果から、P7-4など14基のみである。柱の直径は平均で0.19mを測る。柱痕跡が少ないとすることは、SB01を廃棄する際に再利用できる柱根は抜き取り、転用したものとも考えられる。付随する区画溝1が南側で切れている事から、SB01の出入り口は南東に位置した可能性が考えられる。連替えたことがc・h・i列から判断できるが、部分的に柱を据え換える程度のものであり、同じ区画内での連替えはあまり行なわれていなかつたと考えられる。

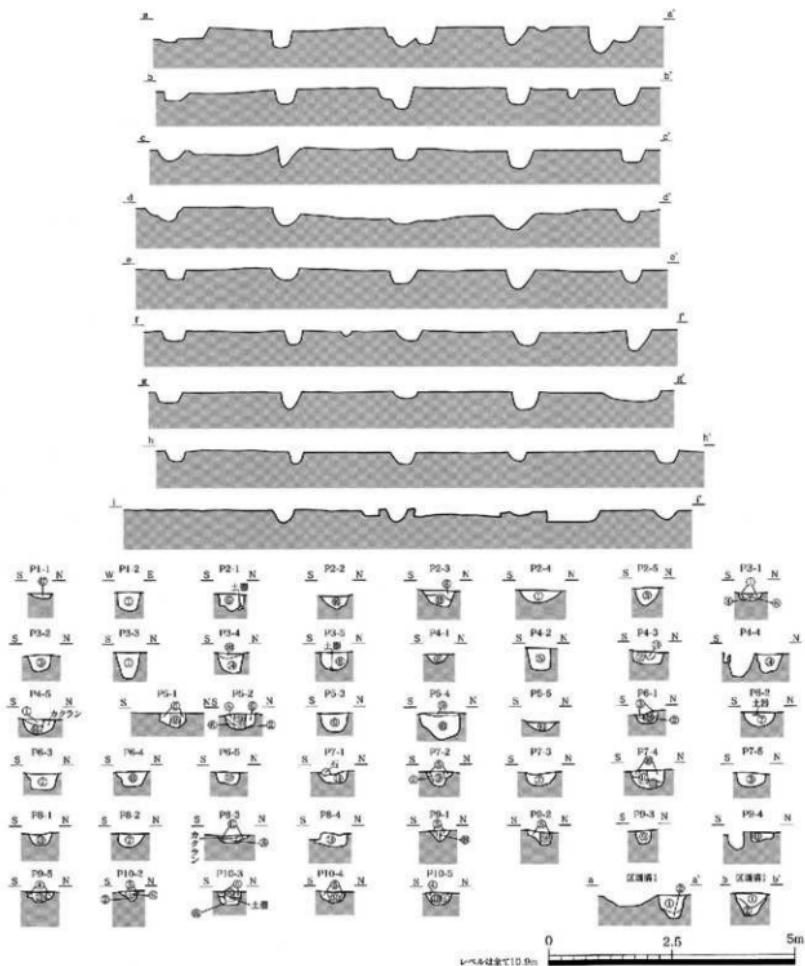
区画溝1は、SB01の東側に位置する。長軸15.83m、幅0.82m、深さ0.56mを測る。SB01の軸方向と一致することから、SB01に付随する区画溝と考えられる。北側は調査区外へ延びるため全体像は不明であるが、後述する区画溝2などと同等の機能を持つものとすると、平面形態はL字状もしくはコ字状と考えられ



第43図 新鮮市場地区 SB01・区画溝1造構平面図 (1/100)



第44図 新鮮市場地区 SB01南北柱穴列エレベーション図 (1/100)



第45図 新鮮市場地区 SB01東西柱穴列エレベーション図及び土層断面図（1/100）

る。断面形態は逆台形状を呈する。覆土は土層観察の結果、①層：黒褐色土ににぶい黄褐色粘土ブロックが混じる、②層：黒褐色粘土質土に灰黄褐色土ブロックが混じる、であり、②層が自然堆積した後①層が一括で堆積していることが判る。

遺物は、柱穴や区画溝から弥生時代中期中葉から後葉（八戸市地方編年8期～9期併行）の土器類、珠洲甕類・鉢類（第62図1106）、中世上部器皿が全て破片の状態で出土している。弥生土器は周溝を持つ平地式建物S101などから混入したものと考えられる。復元の結果、完形となるものは無かった。また遺物の出土状態から判断して、建物を廃棄する際に祭祀的な行為は行っていなかったと考えられる。中世遺物の時期は、珠洲焼から判断して概ね古岡編年のII期（13世紀前半）と考えられる。

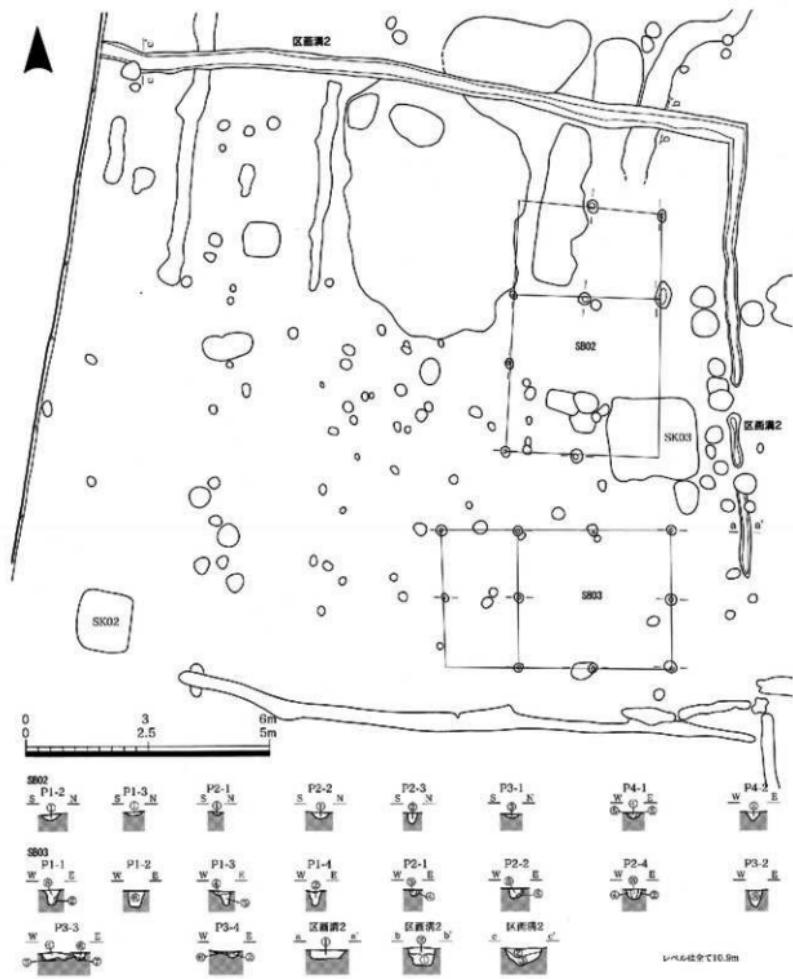
後述する掘立柱建物SB04との新旧関係は、区画溝1の南先端部に柱穴の残穴を確認しており、その残穴がSB04の北東隅の柱穴であると考えられることから、SB01はSB04が廃棄された後に築造されたものである。また、掘立柱建物SB02の様に、掘立柱建物内及び周辺に方形状土坑は確認できなかった。

掘立柱建物SB02・03とそれに伴う区画溝2（図版15・16 第46図～47図）

SB02は調査区西側中央、区画溝2内に位置する。柱が中抜けの形態で、3間×2間の南北棟の「中抜け側柱建物」である。桁行7.8m×梁行4.6m、面積35.88m²（約11坪）である。主軸はN-3°-Eである。北西隅は周溝を持つ大型上杭SX02の中央大型土坑の掘削時に掘り過ぎてしまったが、おおよそ確認する事ができた。地山面は、建物の北側と南側での高低差はほとんどない。柱掘形は平均長軸0.39m、平均短軸0.32mを測り、平面形態はおおよそ円形だが方形を呈するものもある。断面形態は逆台形もしくは舟底状を呈する。西列を1、東列を2の柱穴列の平均深度は、1が0.1m、2が0.23mを測る。また、北列をa、南列をcの柱穴列の平均深度は、aが0.14m、bが0.15m、cが0.15mを測る。北から南への深度にさほど違はないが、東から西へ行く程柱穴の深度は浅くなっている。このことから、旧地形は西側高かったと判断できる。柱穴の掘形覆土は、黒褐色土あるいは褐灰色土に黄色地山ブロックが混じる。柱根は出土せず、柱痕跡が確認できたのは土層観察の結果から、P4-1のみである。柱の直径は0.17mを測る。柱痕跡が少ないということは、削平が著しいこともあるが、SB02を廃棄する際に再利用できる柱根は抜き取り、転用したものとも考えられる。建替えた痕跡が確認できなかったことから短期的な建物であったと考えられる。また、今調査区で、唯一方形状土坑（SK03）が付随すると考えられる建物である。

SB03はSB02の南側に位置する。3間×2間の東西棟で、SB02同様「中抜け側柱建物」である。桁行7.1m×梁行4.3m、面積30.53m²（約10坪）である。主軸はN-89°-Wである。南西隅は周辺の遺構の残り具合から判断して、ほ場整備の影響で削平されたものと考えられる。地山面は、建物の北側と南側で約5cmの高低差がある。柱掘形は平均長軸0.31m、平均短軸0.27mを測り、平面形態はおおよそ円形だが方形を呈するものもある。断面形態は逆台形もしくは舟底状を呈する。西列を1、東列を3の柱穴列の平均深度は、1が0.27m、2が0.28m、3が0.28mを測る。また、北列をa、南列をbの柱穴列の平均深度は、aが0.3m、bが0.29mを測る。北から南、東から西へのそれぞれの深度にさほど違はない。このことから、旧地形は高低差がほとんどなかったと判断できる。柱穴の掘形覆土は、黒褐色土あるいは褐灰色土に黄色地山ブロックが混じる。柱根は出土せず、柱痕跡を確認できたのは土層観察の結果から、P2-4のみである。柱の直径は0.15mを測る。柱痕跡が少ないということは、SB03を廃棄する際に再利用できる柱根は抜き取り、転用したものとも考えられる。一部建替えた痕跡がaから判断できるが、部分的に柱を拆え換える程度のものであり、同じ区画内での建替えはあまり行われていなかったと考えられる。

区画溝2はSB02・03などを区画する溝である。長さ南北14m・東西20m、幅0.22m、深さ0.16m～0.28



- ① 10183/1 黄褐色土（しまり有）に 10184/1 黄褐色土と 2,316/3 にびい黄色シルトが
シミ状に混じる
 ② 7,318/1 黄褐色土（しまり有）に 2,517/3 黄色土ブロック（50%）と 10184/1 黄褐色土が
シミ状に混じる
 ③ 10184/1 黄褐色土（しまり有）にやや多量の 10183/1 黄褐色土とシミ状に 2,517/3 黄色土が
混じる
 ④ 10184/1 黄褐色土（しまり有）に 2,517/3 黄色土がシミ状に混じる
 ⑤ 10184/1 黄褐色土（しまり有）に 2,517/3 黄色土ブロック（10%）と 10184/1 黄褐色土が
シミ状に混じる

② : 7,318/1 黄褐色土（しまり有）に 10184/1 黄褐色土がシミ状に混じる
 区画溝2:

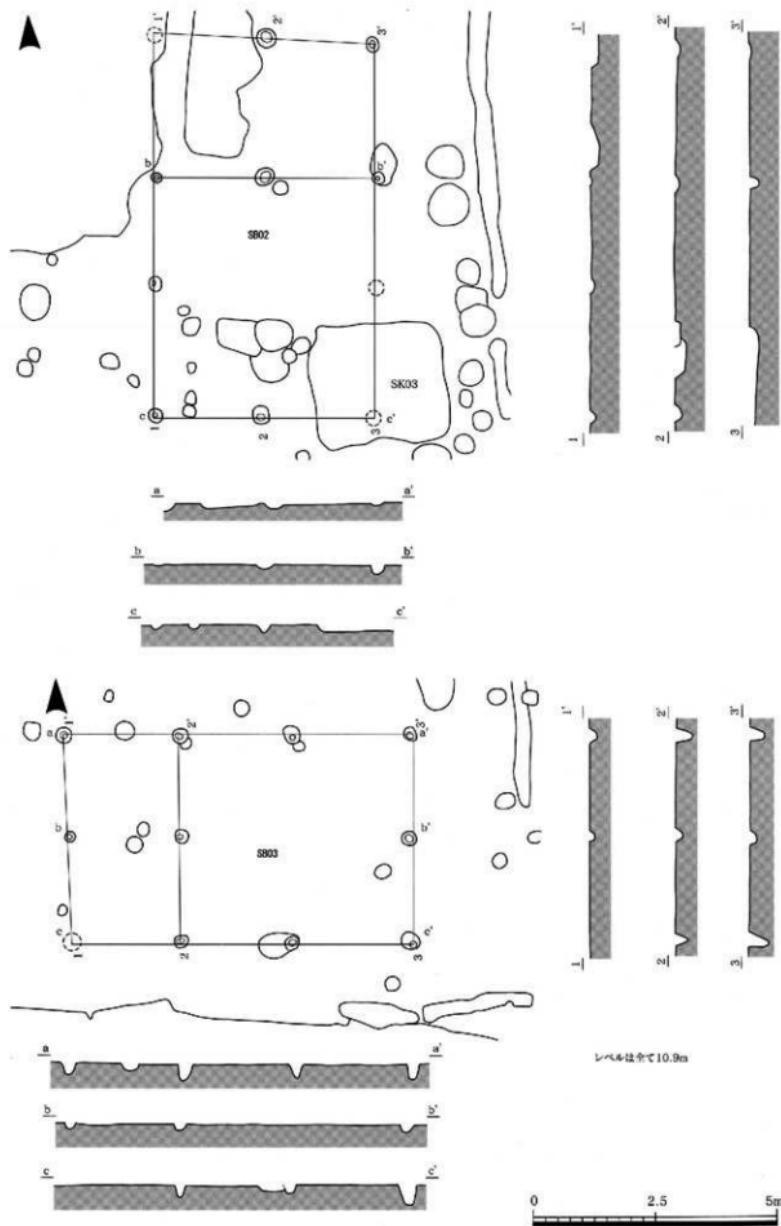
① : 10184/1 黄褐色土（しまり有）に 2,517/3 にびい黄色シルトブロック（30~50%）と
10183/1 黄褐色土がシミ状に混じる

② : 7,318/1 黄褐色土（しまり有）に 2,517/3 にびい黄色シルトがシミ状に混じる

(6.5~1.8mの位置を示す)

③ : 10183/1 黄褐色土（しまり有）に 2,517/3 にびい黄色シルト（10%）と 10184/1 黄褐色土が
シミ状に混じる

第46図 新鮮市場地区 SB02-03、区画溝2遺構平面図(1/150) 及び土層断面図(1/100)



第47図 新鮮市場地区 SB02・03建物平面図及び柱穴エレベーション図 (1/100)

を測る。平面形態はL字形で、西側は調査区外へ延び、南側は区画溝3の屈曲部の3.6m手前で終息する。断面形態は逆台形もしくは舟底状を呈する。覆土は上層観察の結果から、南に行くほど削平が著しく单層であるが、東西方向は2層である。

遺物は主に区画溝2から、弥生時代中期頃の土器類、須恵器類、珠洲壺類（第62図1103）・鉢類、瓦質土器、中世土師器皿が全て破片の状態で出土している。弥生土器や須恵器は、柱穴内や区画溝内に混入したものと考えられる。復元の結果、完形となるものはなかった。また遺物の出土状態から判断して、建物を廃棄する際に祭祀的な行為は行っていなかったと考えられる。時期は出土した珠洲焼から判断して概ね吉岡編年Ⅱ期（13世紀前半）と考えられる。

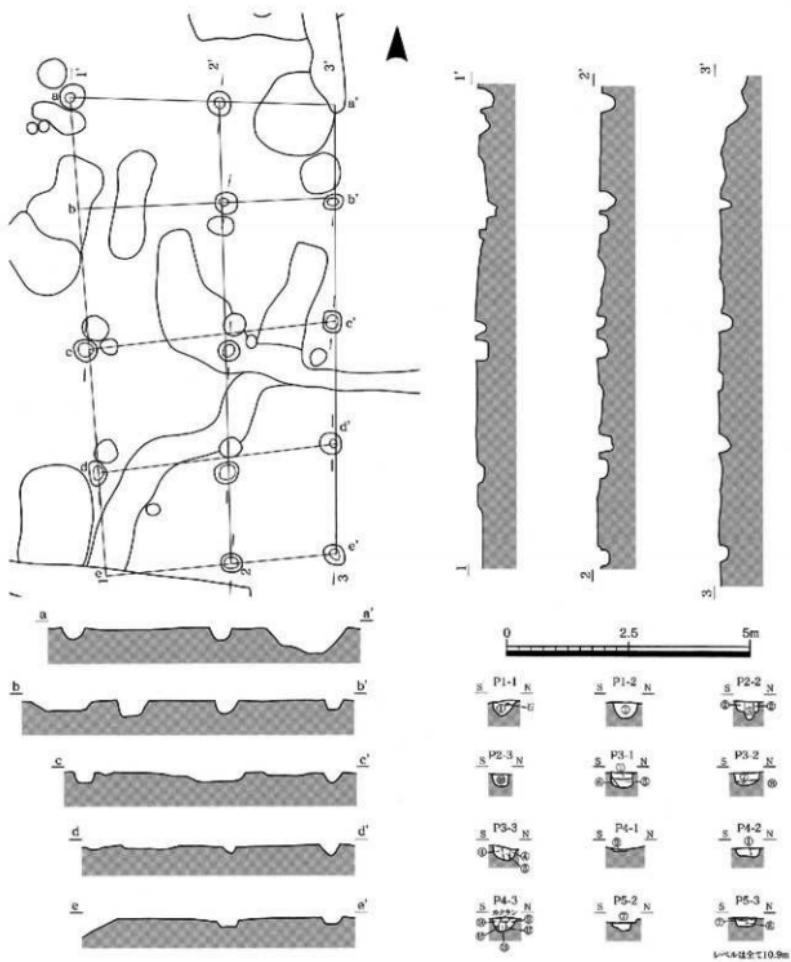
掘立柱建物

掘立柱建物SB04（図版16 第48図）

調査区北西隅に位置する。SB04は、4間×2間の南北棟純柱建物である。桁行10m×梁行5.2m、面積52m²（約16坪）である。主軸はN-E°—Wである。北東隅は区画溝1で削平され、南西隅は区画溝2で削平されている。地山面は、建物の北側と南側での高低差はほとんどない。柱柵形は、平均長軸0.47m、平均短軸0.41mを測り、平面形態はおおよそ円形だが方形を呈するものもある。断面形態は逆台形もしくは舟底状を呈する。西側を1、東側を3の桁行柱穴列の平均深度は、1が0.27m、2が0.25m、3が0.26mを測る。また、北側をa、南側をcの梁行柱穴列の平均深度は、aが0.33m、bが0.3m、cが0.27m、dが0.21m、eが0.21mを測る。東から西への深度にさほどの違いはないが、北から南に行く柱穴の深度は浅くなっていることが判る。このことから、旧地形は南側程高かったと判断できる。柱穴の覆土は、黒褐色～墨色土をベースとし、にぶい黄色シルトがシミ状に混じる。柱根は出土せず、柱痕跡が確認できたものは土層観察の結果から、P2-2など3基である。柱の直径は平均0.17mを測る。柱痕跡が少ないという事は、SB04を廃棄する際に再利用できる柱根は抜き取り、転用したものとも考えられる。一部建替えた痕跡がb～d列から判断できるが、部分的に柱を据え換える程度のものであり、同じ区画内での建替えはあまり行われていなかったと考えられる。

遺物は、弥生時代中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）の土器類、珠洲壺類（第62図1104）・鉢類（第62図1105）、中世土師器皿が全て破片の状態で出土している。弥生土器は混入したものと考えられる。復元の結果、完形となるものはなかった。また遺物の出土状態から判断して、建物を廃棄する際に祭祀的な行為は行っていなかったと考えられる。時期は出土した珠洲焼から判断して概ね吉岡編年Ⅱ期（13世紀前半）と考えられる。

付随する区画溝は無く、SB01との軸方向の違いや柱穴の切り合い関係から、SB04は当調査区の掘立柱建物の中で最も古い時期のものと考えられる。また、SB02の様に、掘立柱建物内及び周辺に方形形状土坑は確認できなかった。



- ①: 1093/1 黄褐色土（しまり岩）に 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトブロック (40~50%)
と 1094/2 黄褐褐色土をシミ状に混じる
②: 1094/2 黄褐褐色土（しまり岩）に 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトブロックが微量に混じる
③: 1093/1 黄褐色土（しまりやや弱）に 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトブロック (60%) 混じる
④: 1093/1 黄褐色土（しまり岩）に 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトブロック (40%) 混じる
⑤: 1093/1 黄褐色土（しまり岩）に 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトブロック (40~50%) 混じる
⑥: 1094/2 黄褐褐色土（しまり岩）に 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトブロック (40~50%) 混じる
⑦: 1093/1 黄褐色土（しまり岩）に 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトブロック (40~50%) 混じる
⑧: 1093/1 黄褐色土（しまり岩）に 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトブロック (40~50%) 混じる
⑨: 1094/2 黄褐褐色土（しまり岩）に 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトブロック (40~50%) 混じる
⑩: 1093/1 黄褐色土（しまり岩）に 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトブロック (2%)
と 1092/1 黑色土ブロック微量に混じる
⑪: 2.5% / 1 黑色土ブロック微量に混じる
⑫: 2.5% / 1 黄褐色土（しまり岩）に 1094/2 黄褐褐色土と 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトが
シミ状に混じる
⑬: 2.5% / 1 黄褐色土（しまり岩）に 1094/2 黄褐褐色土と 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトが
シミ状に混じる
⑭: 2.5% / 1 黑色土ブロック微量に混じる
⑮: 2.5% / 1 黑色土ブロック微量に混じる
⑯: 2.5% / 1 黑色土（しまり岩）に 1094/2 黄褐褐色土がシミ状に微量に混じる
⑰: 2.5% / 1 黑色土（しまり岩）に 1094/2 黄褐褐色土と多量の 2.5% / 3 に ぶい黄色シルトが
シミ状に混じる

第48図 新鮮市場地区 SB04造構平面図、柱穴エレバーション図及び土層断面図 (1/100)

土坑

土坑SKO1（図版17 第49図）

調査区の南西側に位置する。規模は、長軸2.81m、短軸2.78m、深さは0.24mを測る。平面形態は隅丸方形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する。ほ場整備の影響で削平を受けているため浅いものと考えられる。覆土の堆積状況は単層であり、石組や石列など痕跡も含めて確認できなかった。検出した場所から、区画溝3内に存在した掘立柱建物に付随した方形状土坑と考えられるが、その性格や機能などは不明である。

遺物は弥生土器と中世土師器の細破片のみ出土している。

土坑SKO2（図版49図）

調査区の西側で、SKO1の北西に位置する。規模は、長軸2.16m、短軸1.91m、深さは0.11mを測る。平面形態は隅丸方形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する。ほ場整備の影響で削平を受けているため浅いものと考えられる。覆土の堆積状況は単層であり、石組や石列など痕跡も含めて確認できなかった。検出した場所から、区画溝2内に存在した掘立柱建物に付随した方形状土坑と考えられるが、その性格や機能などは不明である。

遺物は弥生土器と中世土師器の細破片のみ出土している。

土坑SKO3（図版17 第49図）

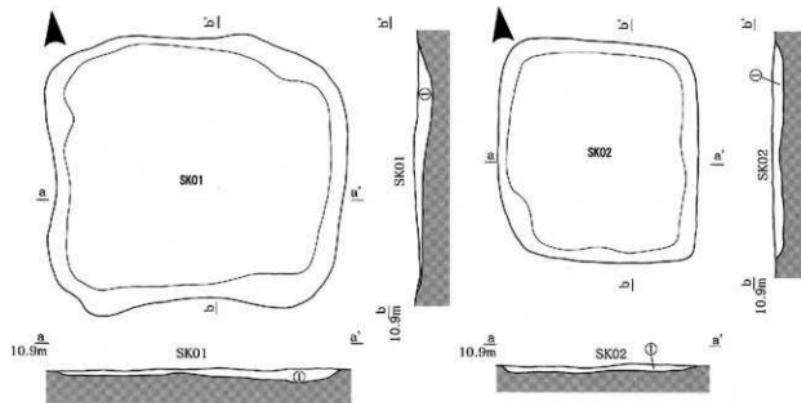
調査区の中央付近に位置する。規模は、長軸2.71m、短軸2.35m、深さは0.29mを測る。平面形態は隅丸方形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する。ほ場整備の影響で削平を受けているため浅いものと考えられる。覆土の堆積状況は単層であり、石組や石列など痕跡も含めて確認できなかった。検出した場所から、SB02に付随する方形状土坑と考えられるが、その性格や機能などは不明である。

遺物は弥生土器片、吉岡編年II期（13世紀前半）の珠洲鉢類、中世土師器片などが出土している。

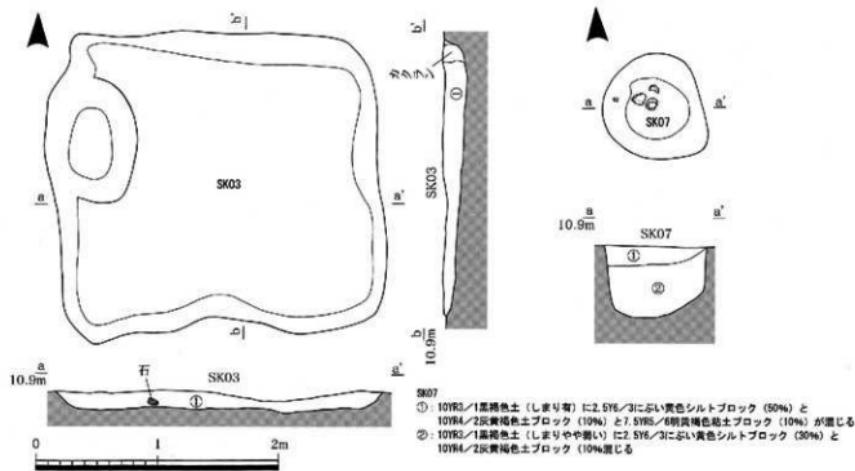
土坑SKO7（図版17 第49図）

調査区の南西に位置する。規模は、長軸0.95m、短軸0.86m、深さは0.6mを測る。平面形態は梢円形を呈し、断面形態は舟底状を呈する。遺構の遺存状態は良好であった。堆積状況は、遺物の出土状況から②層が一括して人為堆積した後、①層も同じく一括で堆積したものと考えられる。

遺物は、見込み部分にハケ状工具の痕跡を明瞭に残した、ほぼ完形の中世土師器皿3枚を含め合計4枚（第62図1097～1099）が②層から出土している。この土坑を廃棄する際に何らかの祭祀的行為を行ったと考えられる。埋没時期は出土遺物から判断して、概ね13世紀代と考えられる。また①層からは9世紀前半頃の須恵器碗の破片（第62図1094）が出土しているが、混入したものと考えられる。



SK01
 ①: 10YR3/1黒褐色土（しまり有）に10YR4/2灰黃褐色シルトブロック（40%）混じる（0.3~0.4cmの炭化物少量含む）
 SK02
 ①: 7.SW8/1黒褐色土（しまり有）に10YR4/1褐灰色土がシミ状に10%と2.SW6/3にぶい黄色シルトブロック10%混じる
 SK03
 ①: 7.SW8/1黒褐色土（しまり有）に10YR4/1褐灰色土がシミ状と2.SW6/3にぶい黄色シルトブロック30%混じる



第49図 新鮮市場地区 SK01~03-07遺構平面図及び土層断面図 (1/40)

第2節 遺物

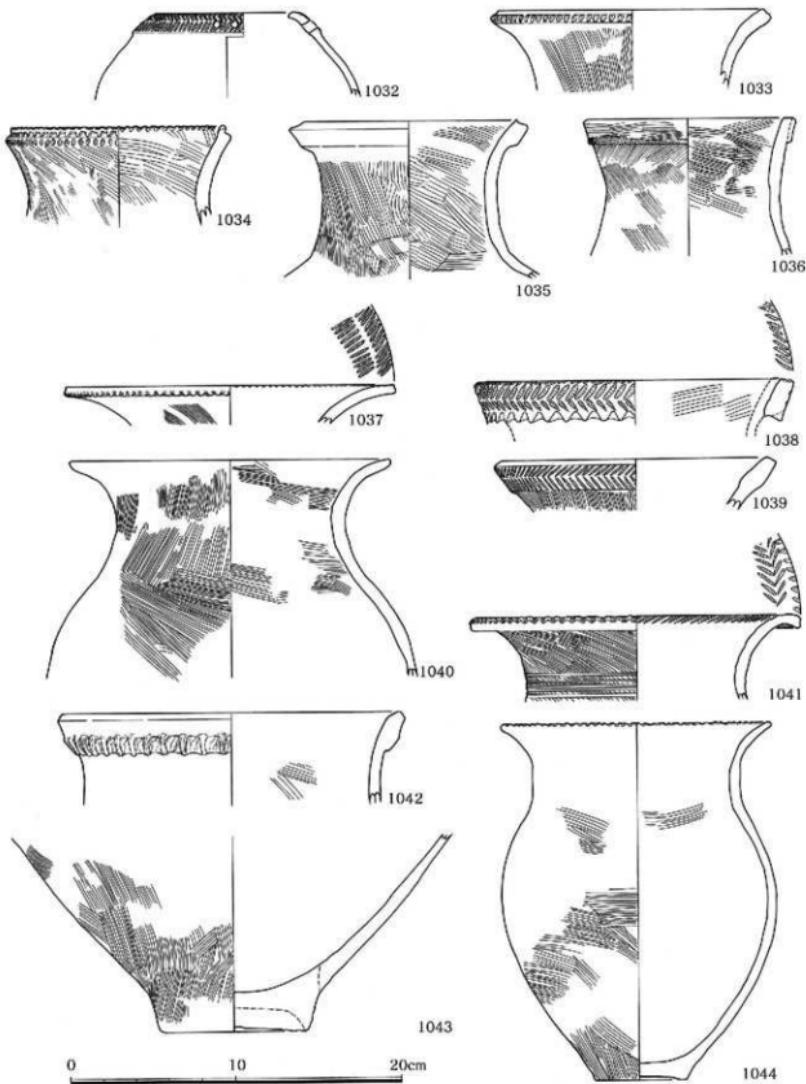
以下に、新鮮市場地区の遺構から出土した遺物を、「1. 弥生土器（土製品含む）」、「2. 弥生時代石製品」、「3. 古代土器」、「4. 中世土器」、「5. 近世上器」の順で述べていく。掲載した遺物については、比較的残存率の高いものや、特徴的な遺物を中心としている。詳細については遺物観察表（別表6～8）にて補足するものとする。

1. 弥生土器（土製品含む）

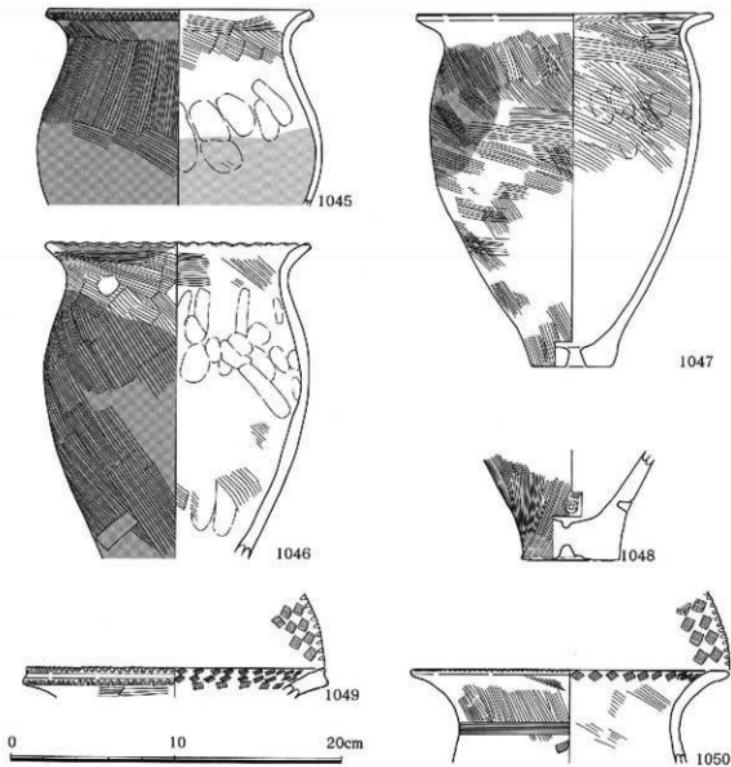
S I O 1 出土土器・土製品（図版20 第50図～52図）

遺物は、主に各周溝内、特に西周溝及び南周溝からまとまった状態で出土している。時期はそれぞれ、中期中葉から後葉（八戸市地方編年8期～9期併行）と考えられる。

1032から1044は壺類である。1032は無柄壺の口縁部から肩部上方である。口径8.5cm、残高5.2cmを測る。器形は、体部から緩やかに内湾しながら口縁部に至り、口縁端部は丸く納める。また外側は若干肥厚する。文様は、口縁外面に櫛描矢羽状文を施す。口縁部に円孔を2個施すが、他に対応する2孔が有ったかどうかは破片のため不明である。調整は、内面にナデを施すが、外面は摩滅が著しいため不明瞭である。1033は壺の口縁部から頸部である。口径16.0cm、残高4.9cmを測る。器形は、頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至り、口縁端部は平に納める。文様は、口縁端部外面に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内外面ともにハケメを施す。1034は壺の口縁部から頸部である。口径12.8cm、残高6.2cmを測る。器形は、頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至り、口縁端部は工具の押圧による小波状口縁を呈する。文様は、口縁外面に三角刺突文を意識したと考えられるものと、その下段に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内外面ともハケメを施す。1035は壺の口縁部から頸部である。口径12.8cm、残高9.7cmを測る。器形は、頸部から直線的に立ち上がりながら口縁部に至り、口縁端部付近で外反する。口縁端部は平に納める。また、外側は肥厚する。調整は、内外面ともハケメを施す。1036は壺の口縁部から頸部である。口径12.45cm、残高8.4cmを測る。器形は頸部から直線的に立ち上がりながら口縁部に至り、口縁端部付近でわずかに外反する。口縁端部は平に納める。調整は、内外面ともハケメを施す。1037は壺の口縁部である。口径19.8cm、残高2.4cmを測る。器形は、大きく外反しながら口縁部に至り、口縁端部はやや凹みを施す。文様は、口縁外面に櫛描矢羽状文を、外面に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内面はナデを施し、外側はハケメを施す。1038は壺の口縁部である。口径17.7cm、残高2.6cmを測る。器形は、やや外傾しながら、外面に工具と指を用いた摘み出し隆背（涙状隆背）を施し、口縁端部は平に納める。内面に剥離痕が有る。文様は、口縁外面に櫛描矢羽状文、口唇部に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内面にハケメが確認できるが、壺本体側口縁部に施したハケメが転写されたものである。1039は壺の口縁部である。口径15.85cm、残高3.1cmを測る。器形は、外傾しながら口縁端部付近で肥厚し、口縁端部は平に納める。文様は、外側に櫛描矢羽状文を施す。調整は、口縁部及び内面はナデを施し、頸部外側はハケメを施す。1040は壺の口縁部から肩部上方である。口径19.1cm、残高13.3cmを測る。器形は、頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至り、口縁部でさらに強く外反する。口縁端部はやや細く丸く納める。肩部は欠損しているが、体部中央よりも上方にあるものと考えられる。調整は、内外面ともハケメを施す。1041は壺の口縁部から頸部である。口径18.8cm、残高5.2cmを測る。器形は、頸部から外反しながら口縁部に至り、口縁端部付近で垂下する。また、端部に工具を用いた凹圧による波状口縁を施し、端部は若干凹みを持つ。文様は、口縁部内面に櫛描矢羽状文を施す。頸部外側が欠損しているため断定はできないが、少なくとも5条の櫛描直線文を施す。

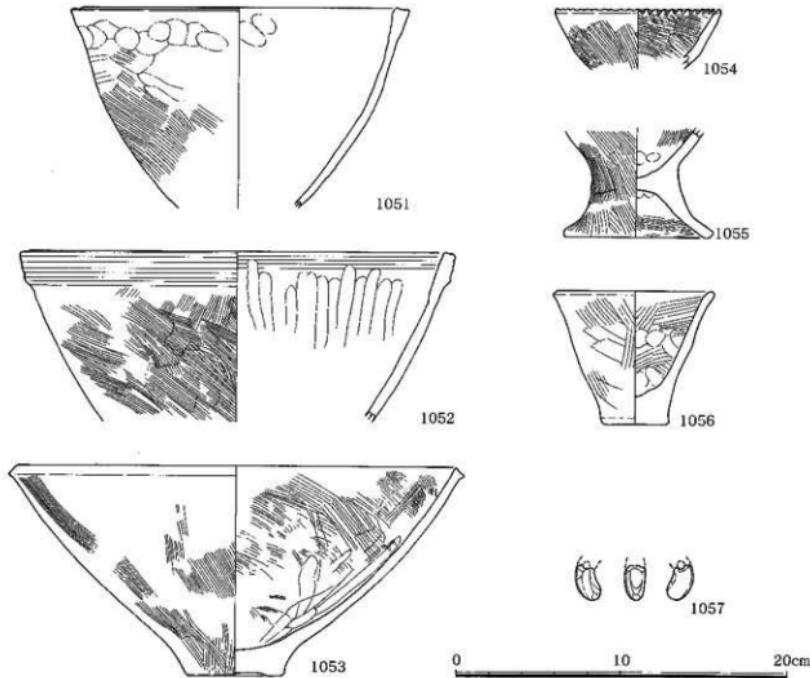


第50図 新鮮市場地区 SI01出土遺物実測図① (1/3)



第51図 新鮮市場地区 SI01出土遺物実測図② (1/3)

調整は、内面はナデを施し、外面はハケメを施す。1042は壺の口縁部から頸部である。口径 20.4 cm、残高 5.7 cm を測る。器形は、頸部から直線的に立ち上がりながら口縁部に至り、口縁端部付近で若干外反する。口縁端部は平に納める。外面に粘土紐を貼り付け、指などを用いた摘み出し隆帯を施す。調整は、頸部内面にハケメ、口縁部の内外面にナデを施す。頸部外面は摩滅が著しいため不明瞭である。1043は大型壺の底部である。底径 7.3 cm、残高 11.95 cm を測る。器形は、底部外面は中央付近で若干の凹があり、肩部にかけて大きく広がることから、体部中央付近で最大径を測ると考えられる。調整は、内面は剥離がひどく不明瞭であるが、わずかにハケメの痕跡が確認できる。外面はハケメを施す。1044はほぼ完形の壺である。口径 16.0 cm、底径 5.4 cm、器高 21.9 cm を測る。器形は、頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がりながら口縁部に至り、口縁端部付近でやや強く外反する。口縁端部は平に納める。また口縁端部は、工具を用いた凹圧による小波状口縁を呈する。



第52図 新鮮市場地区 SI01出土遺物実測図③ (1/3)

肩部は体部の中央付近に位置し、底部は若干凹む。調整は、内外面ともハケメを呈する。

1045から1050は甕頸である。1045は甕の口縁部から肩部下方である。口径15.6cm、残高12.5cmを測る。器形は、頸部から外反しながら口縁部に至り、口縁端部は平に納める。肩部は最大径を測り体部中央付近に位置する。文様は、口縁端部に樹描連刺文を施す。調整は、頸部内面はハケメ、体部内面に指ナデを施し、外面はハケメを施す。1046は甕の口縁部から底部付近である。口径15.6cm、残高19.3cmを測る。器形は頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至り、口縁端部は平に納める。また、口縁端部は工具を用いた凹圧による小波状口縁を呈する。肩部は、体部中央やや上方に位置し、口縁部とほぼ同じ直径を測る。調整は、内外面ともハケメを施し、内面はさらにナデを施す。1047はほぼ完形の甕である。口径18.0cm、底径4.7cm、器高21.4cmを測る。器形は、頸部から強く外反しながら口縁部に至り、口縁端部はわずかに丸く納める。肩部は体部中央やや上方に位置し、図上左側の膨らみが大きく歪みを生じる。底部は、内外面から穿孔されている。調整は、内外面とも丁寧なハケメを施す。1048は甕の底部である。底径5.9cm、残高6.8cmを測る。器形は、残存する形状から1047と同じ形状を呈すると考えられる。底部及び底側部に穿孔箇所があるが、全て途中まで完全に

穿孔するに至っていない。調整は、内面はナデを施し、外面は丁寧なハケメを施す。1049は甕の口縁部である。口径 17.6 cm、残高 1.8 cm を測る。器形は、大きく外傾しながら、口縁端部は平に納める。文様は、口縁端部上下に櫛描連続刺突文を施し、また内面に 3 段の櫛描斜行短線文を施す。調整は、内面は摩滅のため不明瞭であるが、外面はハケメを施す。1050は甕の口縁部から頸部である。口径 18.4 cm、残高 5.7 cm を測る。器形は頸部から外反しながら口縁部に至り、口縁端部付近でさらに強く外反する。口縁端部は若干細く丸く納める。文様は、口縁端部内面に櫛描連続刺突文と口縁部内面に 2 段の櫛描斜行短線文を施す。体部外面は、5 条の櫛描直線文、その下に櫛描斜行短線文を施す。調整は、内外面ともハケメを施す。

1051から 1055 は鉢類である。1051 は鉢の口縁部から底部付近である。口径 18.7 cm、残高 12.3 cm を測る。器形は、底部から緩やかに内湾しながら口縁部に至り、口縁端部付近で肥厚する。口縁端部は若干回みを施す。調整は、内面は指オサエとナデを施し、外面にハケメと指オサエ、ナデを施す。1052 は鉢の口縁部から底部付近である。口径 25.0 cm、残高 10.4 cm を測る。器形は、底部から外傾しながら口縁部に至り、口縁端部付近で肥厚する。口縁端部は若干回みを施す。調整は、内面は縦方向のナデを施し、体部外面はハケメを施す。また、口縁部外面のハケメは櫛描直線文を意識して施したものと考えられる。1053 は鉢の口縁部から底部である。口径 26.4 cm、底径 5.55 cm、器高 12.8 cm を測る。器形は、底部から口縁部にかけて僅かに内湾しながら大きく開く。口縁端部は若干肥厚し、回みを施す。調整は、内外面ともハケメを施し、内面にはさらにナデを施す。1054 は小型鉢の口縁部から底部付近である。口径 9.9 cm、残高 3.7 cm を測る。器形は、底部から外傾しながら口縁部に至り、口縁端部を丸く納める。文様は、口縁端部に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内外面ともハケメを施す。器形から、台付鉢の可能性が考えられる。1055 は台付鉢の台部である。底径 8.5 cm、残高 6.8 cm を測る。器形は、底部からやや強く広がりながら台脚部に至り、台脚端部を平に納める。調整は、内外面ともハケメを施し、内面にはさらに指オサエを施す。1056 はミニチュア七器である。口径 9.3 cm、底径 3.6 cm、器高 8.2 cm を測る。器形は、底部から直線的に外傾しながら口縁部に至り、口縁端部付近で僅かに外反する。口縁端部は丸く納める。調整は、内面はハケメと指オサエを施し、外面はハケメとハケメ後ナデ消しを施す。

1057 は欠損部分に穿孔の痕跡が確認できることから勾玉形土製品と考えられる。残長 2.1 cm、幅 1.2 cm、厚さ 1.2 cm を測る。ナデにより成形されている。

S Z O 1 出土土器（図版 21 第 53 図）

遺物は周溝内南東隅から完形の壺とほぼ完形の甕が 1 個体ずつ出土している。時期はそれぞれ、中期後葉（八日市地方編年 9 期併行）と考えられる。

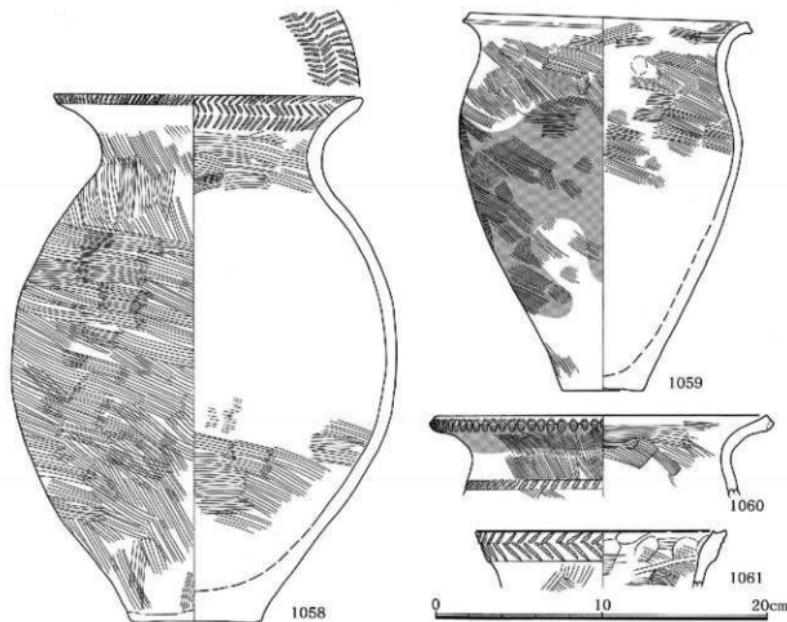
1058 は完形の壺である。口径 18.5 cm、底径 8.0 cm、器高 32.5 cm を測る。器形は、頸部から強く外反しながら口縁部に至り、口縁端部は若干細く丸く納める。体部は、肩部が中央付近でやや張り出し倒卵状を呈する。底部は平底を呈する。文様は、口縁端部外面に櫛描連続刺突文を施し、口縁部内面に櫛描矢羽状文を施す。調整は内外面ともハケメを施す。

1059 は完形の甕である。口径 17.6 cm、底径 5.0 cm、器高 22.8 cm を測る。器形は、頸部から強く外反しながら口縁部に至り、口縁端部はわずかに回みを施す。肩部は体部中央や上方に位置し、図上左側の膨らみが若干大きくわずかに歪みを生じる。底部は平底を呈する。調整は、内外面とも丁寧なハケメとナデを施す。

S Z O 2 出土土器（図版 21 第 53 図）

遺物は各周溝部から甕類・壺類・鉢類の小破片が、それぞれまばらに出土している。時期はそれぞれ、中期中葉から後葉（八日市地方編年 8 期～9 期併行）と考えられる。

1060 は甕の口縁部から頸部である。口径 20.0 cm、残高 5.0 cm を測る。器形は、頸部から口縁部にかけて大き



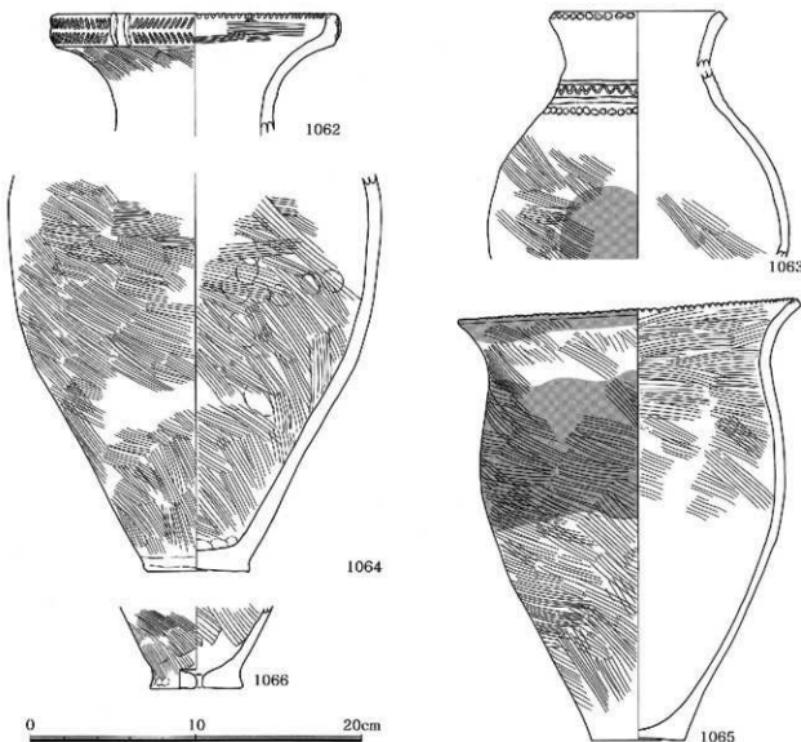
第53図 新鮮市場地区 SZ01-02出土遺物実測図 (1/3)

く外反しながら、口縁端部はやや凹みを施す。文様は、口縁外面と肩部上方に櫛描連續刺突文を施す。調整は、内外面ともハケメを施す。1061は小型鉢の口縁部である。口径 14.9 cm、残高 3.5 cm を測る。器形は、やや外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部は凹みを施す。文様は、口縁外面に櫛描矢羽状文を施す。調整は、内面はハケメとナデ、指オサエを施し、外面はハケメを施す。

S X O 1 出土土器 (図版 21 第 54 図)

遺物は周溝内南西隅から壺類・壺類がまとまって出土している。時期はそれぞれ、中期中葉から後葉（八日市地方編年 8 期～9 期併行）と考えられる。

1062 は壺の口縁部から頸部である。口径 16.4 cm、残高 7.5 cm を測る。器形は、頸部から強く外反しながら受口肩曲部に至り、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部は平らに納める。文様は、口縁端部内面に櫛描連續刺突文を施し、口縁部外面は櫛描矢羽状文と 2 本 1 組の棒状浮文を少なくとも 2箇所施す。調整は、内面はハケメとハケメ後ナデを施し、外面はハケメとナデを施す。1063 は壺の口縁部から体部下方である。口径 10.0 cm、残高 15.3 cm を測る。器形は、頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至り、口縁端部は平に納める。肩部は、体部中央やや上方に位置し、1058 に近い様相を呈する。文様は、口縁端部外面に竹管文を施し、頸部外面に上からヘラ描沈線文 1 条、ヘラ描山形文、ヘラ描沈線文 1 条、竹管文の順に施す。調整は、内外面ともハケ



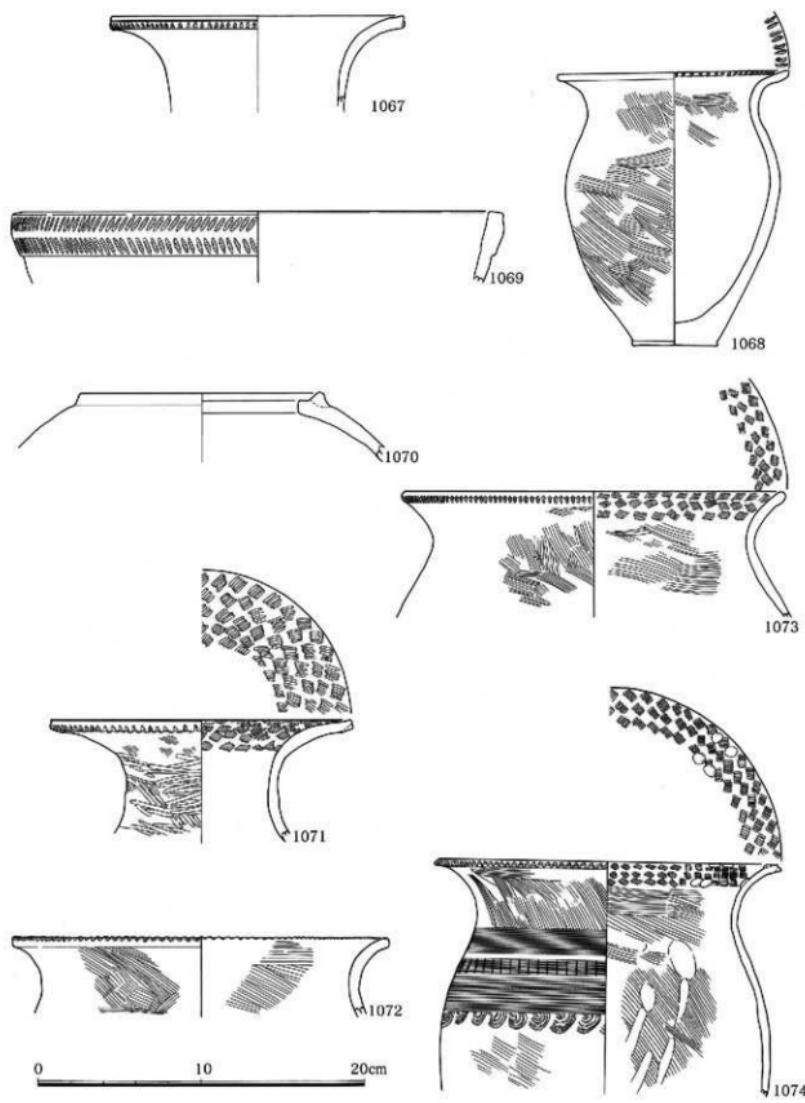
第54図 新鮮市場地区 SX01-02出土遺物実測図 (1/3)

メを施し、内面にはさらにナデを施す。

1064は壺の肩部から底部である。底径6.2cm、残高24.3cmを測る。肩部はあまり張り出さず体部は縦長の形状を呈する。底部は平底を呈する。調整は、内外面ともハケメを施し、内面はさらに指オサエを施す。1065はほぼ丸形の壺である。口径20.7cm、底径5.6cm、器高26.4cmを測る。器形は、頸部から外反しながら口縁部に至り、口縁端部は平に納める。肩部は、体部中央やや上方に位置する。底部は平底を呈する。全体的に器形に歪みがある。文様は、口縁部内面に櫛描連續刺突文を施す。調整は、内外面ともハケメとナデを施す。体部外面に帶状に煤が付着し、内面は外面の煤に対応するように帶状にコゲが薄く付着する。

SX02出土土器 (第54図)

遺物は小土坑1・2及び大型土坑、周溝部から甕類・壺類の小破片が出土している。時期は、中期中葉から後葉（八日市地方編年8期～9期併行）と考えられる。



第55図 新鮮市場地区 SX03-04出土遺物実測図 (1/3)

1066は壺の底部で小土坑1から出土している。口径5.4cm、残高5.0cmを測る。器形は、残存する形状から1064や1065と同じ形状を呈すると考えられる。調整は内外面ともハケメとナデを施し、外面には指オサエを施す。底部穿孔土器である。

S X O 3 出土土器 (図版22 第55図)

遺物は大型土坑の北東隅から壺類・壺類・鉢類がまとまって出土している。各周溝部からはそれぞれ小破片が出土している。時期は、中期中葉から後葉（八日市地方縦年8期～9期併行）と考えられる。

1067は壺の口縁部から頸部である。口径17.6cm、残高5.85cmを測る。器形は、頸部から外反しながら口縁部に至り、口縁端部付近でさらに大きく外反する。口縁端部は若干凹みを施す。文様は、口縁部外面に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内外面とも摩滅が著しく不明瞭である。

1068は小型壺である。口径14.2cm、底径5.2cm、器高16.6cmを測る。器形は、頸部から強く外反しながら口縁部に至り、口縁端部はやや丸く納める。肩部は、体部中央や上方に位置する。底部は平底を呈する。文様は、口縁部内面に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内面はハケメと横ナデ、ナデを施し、外面はハケメと横ナデを施す。

1069は大型鉢の口縁部である。口径28.7cm、残高4.35cmを測る。器形は、やや外傾しながら口縁端部付近でわずかに内傾する。口縁端部は平に納める。また、口縁部は肥厚する。文様は、口縁外面に櫛描矢羽状文を施す。調整は、内外面とも横ナデを施す。

S X O 4 出土土器 (図版22 第55図)

遺物は小土坑及び大型七坑、各周溝部から壺類、壺類、鉢類がまとまって出土している。時期はそれぞれ中期中葉だが、1074が八日市地方縦年7期併行と古く、それ以外は8期併行と考えられる。

1070・1071は壺類である。1070は無形壺である。口径14.8cm、残高4.2cmを測る。器形は、体部から内湾しながら口縁部に至り、口縁外面に粘土絆を貼り付け段を形成する。口縁端部は平に納める。調整は、内外面ともナデを施す。1071は壺の口縁部から頸部である。口径18.4cm、残高7.5cmを測る。器形は、頸部から直線的に立ち上がりながら口縁部に至り、口縁部で大きく外反する。口縁端部はやや凹みを施す。文様は、口縁部外面に櫛描連続刺突文を施し、口縁部内面に5段の櫛描斜行短線文を施す。調整は、内面はナデを施し、外面はハケメ後ヘラミガキを施す。

1072から1074は壺類である。1072は壺の口縁部から頸部である。口径22.8cm、残高4.85cmを測る。器形は、頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至り、口縁端部は平に納める。文様は、口縁端部内面に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内外面ともハケメを施す。1073は壺の口縁部から肩部上方である。口径23.0cm、残高7.7cmを測る。器形は、頸部から外反しながら口縁部に至り、口縁端部はやや丸く納める。文様は、口縁部外面に櫛描連続刺突文を施し、口縁部内面に3段の櫛描斜行短線文を施す。調整は、内外面ともハケメと横ナデを施す。1074は壺の口縁部から肩部下方である。口径20.8cm、残高14.2cmを測る。器形は、頸部から外反しながら口縁部に至り、口縁端部付近でさらに外反する。口縁端部は平に納める。肩部は、体部中央付近に位置する。文様は、外面は口縁部に櫛描連続刺突文、頸部から体部上半にかけて上から順に、5本1単位の櫛描直線文を2段、櫛描旋状文、6本1単位の櫛描直線文を2段、線圖文を施す。調整は、内面はハケメとナデを施し、外面はハケメを施す。

S K O 6 出土土器 (図版22 第56図)

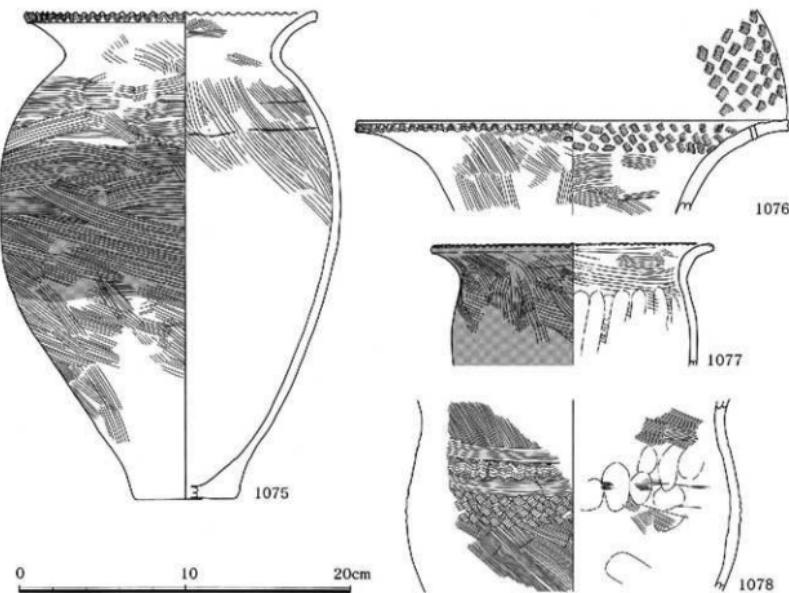
遺物は北隅から壺1個体と壺類・鉢類の小破片が出土している。時期は、中期中葉から後葉（八日市地方縦年8期～9期併行）と考えられる。

1075 はほぼ完形の甕である。口径 17.6 cm、底径 6.1 cm、器高 29.8 cm を測る。器形は、頸部から強く外反しながら口縁部に至り、口縁端部は工具を用いた凹圧によるフリル状突起を施す。肩部は、体部中央や上方に位置し、あまり張り出さない。図上左侧の應らみが大きいため歪みを生じる。底部は一部欠損しているが平底を呈する。調整は、内外面ともハケメとナデを施す。外面には帶状に煤が付着するが、内面にはそれに対応するコゲは付着していない。水を煮沸したものとも考えられる。

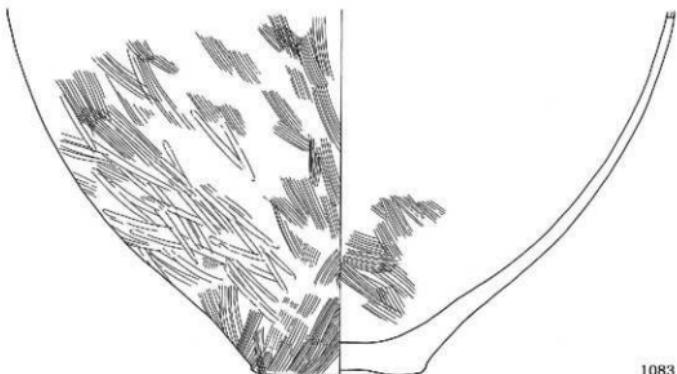
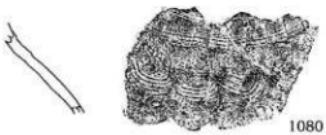
SK19出土土器 (図版 22 第 56 図)

遺物は甕類、壺類の破片がまとまって出土している。時期は、中期後半（八日市地方編年 8 期～9 期併行）と考えられる。

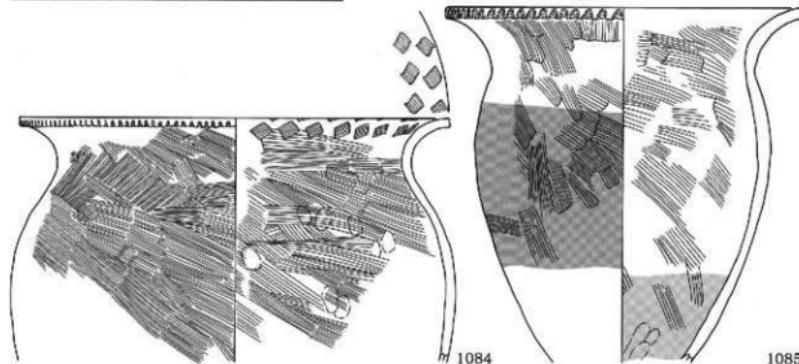
1076 は甕の口縁部から頸部である。口径 26.0 cm、残高 5.8 cm を測る、器形は、頸部から大きく外反しながら口縁部に至り、口縁端部は工具を用いた凹圧によるフリル状突起を施す。口縁部に円孔を 1 個施すが、他に対応する孔が有ったかどうかは破片のため不明である。文様は、口縁部内面に 5 段の櫛描斜行短線文を施す。調整は、内外面ともハケメを施す。1077 は甕である。口径 16.7 cm、残高 7.4 cm を測る。器形は、頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至り、口縁端部付近でさらに強く外反する。口縁端部はわずかに丸く納める。文様は、口縁端部内面に櫛描連続突文を施す。調整は、内面はハケメ後ナデを施し、外面はハケメを施す。外面全体に薄くススが付着する。1078 は甕の体部である。残高 11.8 cm を測る。肩部は体部のほぼ中央付近に位置する。文様は上から順に、6 または 7 条 1 単位の櫛描直線文、6 条 1 単位の櫛描波状文、6 条 1 単位の櫛描



第56図 新鮮市場地区 SK06-19出土遺物実測図 (1/3)



0 10 20cm



第57図 新鮮市場地区 SK27-30出土遺物実測図① (1/3)

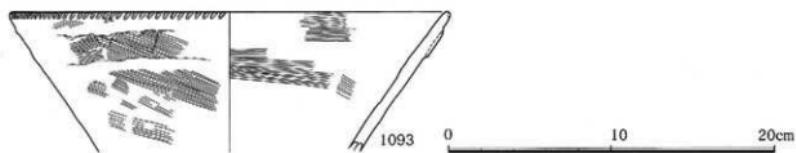
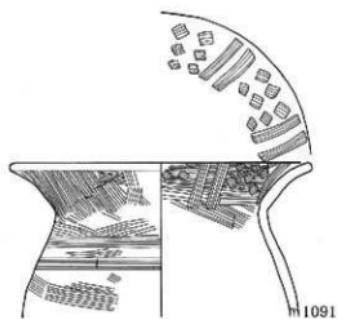
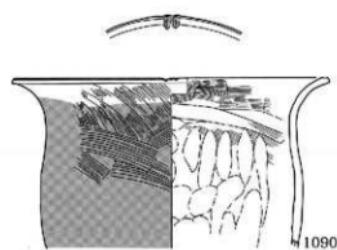
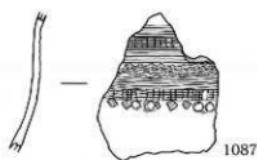
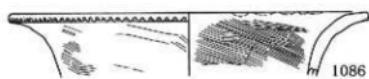
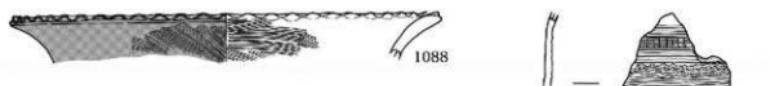
直線文、3段の櫛描斜行短線文を施す。調整は、内面はハケメと指オサエを施し、外面はハケメを施す。

SK 27・30出土土器（図版 22・23 第 57 図）

遺物は主に土坑底辺部から、壺類、壺類、鉢類破片が多量に出土している。時期は、中期後半（八日市地方編年 8 期～9 期併行）と考えられる。

1079 から 1083 は壺類である。1079 は壺の口縁部から頸部である。口径 11.4 cm、残高 4.1 cm を測る。器形は、頸部から外傾しながら口縁部に至り、口縁端部は平に納める。外面に指を用いた摘み出し陰帯を施す。調整は、頸部内面にハケメ、口縁部の内外面にナデを施す。1080 は壺の体部である。残高 5.5 cm を測る。文様は、上から順に 4 条 1 単位の櫛描直線文、櫛描蘆状文、5 または 6 条 1 単位の櫛描波状文、櫛描連弧文を施す。調整は、内面は摩滅が著しく不明瞭であるが、外面はハケメを施す。1081 は壺の体部である。残高 5.1 cm を測る。文様は、上から順に櫛描斜行短線文、櫛描蘆状文、線圖文を順に施す。調整は、内面にハケメを施すが、外面はハケメ後ミガキを施す。1082 は無形壺の口縁部から体部である。口径 14.8 cm、残高 3.15 cm を測る。器形は、体部から緩やかに内湾しながら口縁部に至り、口縁端部付近は肥厚する。口縁端部はわずかに凹みを施す。文様は、口縁外に櫛描矢羽状文を施す。口縁部に円孔を 2 個施すが、他に対応する孔が有ったかどうかは破片のため不明である。調整は、内外面ともナデを施す。1083 は壺の底部である。底径 9.8 cm、残高 22.4 cm を測る。器形は、底部から体部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる。底部は若干凹底を呈する。調整は、内面はハケメを施し、外面はハケメ後ミガキを施す。

1084 から 1092 は甕類である。1084 は甕の口縁部から肩部である。口径 25.9 cm、残高 14.9 cm を測る。器形は、頸部から外反しながら口縁部に至り、口縁端部はわずかに凹みを施す。肩部は、体部中央や上方に位置しこの甕の最大径を測る。文様は、口縁部外面に櫛描連続刺突文を、口縁部内面に 2 段の櫛描斜行短線文を施す。調整は、内面は丁寧なハケメと指オサエを施し、外面は丁寧なハケメを施す。1085 は甕の口縁部から底部付近である。口径 21.0 cm、残高 21.65 cm を測る。器形は、頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至り、口縁端部は平に納める。肩部は、体部や上方に位置する。文様は、口縁部外面に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内面はハケメ後横ナデを施し、外面はハケメを施す。1086 は甕の口縁部から頸部である。口径 21.8 cm、残高 3.9 cm を測る。器形は、頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至り、口縁端部付近で強く外反する。口縁端部は平に納める。文様は、口縁部外面に櫛描連続刺突文を施す。調整は、内面はハケメと横ナデ、指オサエを施し、外面はハケメと横ナデを施す。1087 は甕の頸部から体部である。残高 8.5 cm を測る。文様は、上から順に 4 条 1 単位の櫛描直線文、櫛描蘆状文、4 条 1 単位の櫛描直線文、4 条 1 単位の櫛描波状文、4 条 1 単位の櫛描直線文、櫛描蘆状文、櫛描斜行短線文と並列して 2 個で 1 組の円形浮文を施す。調整は、外面にハケメを施すが、内面は摩滅が著しいため不明瞭である。1088 は甕の口縁部から頸部である。口径 25.9 cm、残高 2.9 cm を測る。器形は、頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至り、口縁端部は工具の凹圧によるフリル状突起を施す。調整は、内外面とも丁寧なハケメを施す。1089 は甕の口縁部から頸部である。口径 15.6 cm、残高 3.85 cm を測る。器形は、頸部から強く外反しながら口縁部に至り、口縁端部付近でさらに外反する。口縁端部はわずかに丸く納める。文様は、口縁部外面に櫛描連続刺突文を、口縁部内面に 2 段の櫛描斜行短線文を施す。調整は、内面はハケメを施し、外面は丁寧なハケメを施す。1090 は甕の口縁部から体部である。口径 19.2 cm、残高 10.4 cm を測る。器形は、頸部から外反しながら口縁部に至り、口縁端部は平に納める。肩部は、体部や上方に位置するが、あまり張り出さない。文様は、口唇部に櫛描刺突文を 2 個のみ施す。破片のため、刺突文が他にも有ったかどうかは不明である。調整は、内面はハケメとナデを施し、外面はハケメを施す。1091 は甕の口縁部から体部である。口径 18.2 cm、残高 9.1 cm を測る。器形は、頸部からくの字状に外反しながら口縁部に至り、口



第58図 新鮮市場地区 SK27-30出土遺物実測図② (1/3)

縁端部は平に納める。肩部は、体部中央付近に位置する。文様は、体部外面に4条1単位の櫛描直線文を2段施し、口縁部内面に2段ないしは3段の櫛描斜行短線文と4条1単位で2本1組の櫛描垂下文を施す。調整は、内面はハケメとハケメ後ナデを施し、外面はハケメを施す。1092は甕の口縁部から体部である。口径19.6cm、残高14.4cmを測る。器形は、頸部から緩やかに外傾しながら口縁部に至り、口縁端部は平に納める。肩部は、体部中央付近に位置する。調整は、内外面ともハケメとナデを施す。

1093は甕の口縁部から体部である。口径26.7cm、残高8.6cmを測る。器形は、体部から直線的に外傾しながら口縁部に至り、口縁端部はやや細く丸く納める。口縁部外面に剥離痕跡があることから、貼付け突帯が付いていたものと考えられる。文様は、口縁部外面に櫛描連続刻突文を施す。調整は、内外面ともハケメを施す。

2. 弥生時代石製品

新鮮市場地区の調査では、管玉製品と管玉製品製作に関連する石製品、石鏸、スクレイバー、磨製石斧、石包丁、砥石が出土している。特にS Z O 2周溝部、SK 1 1・1 9・2 6から多くの管玉未成品、チップ、石針、石鏸が出土しており、製作工程がある程度復元することができた。

管玉・管玉未成品（図版24 第59図）

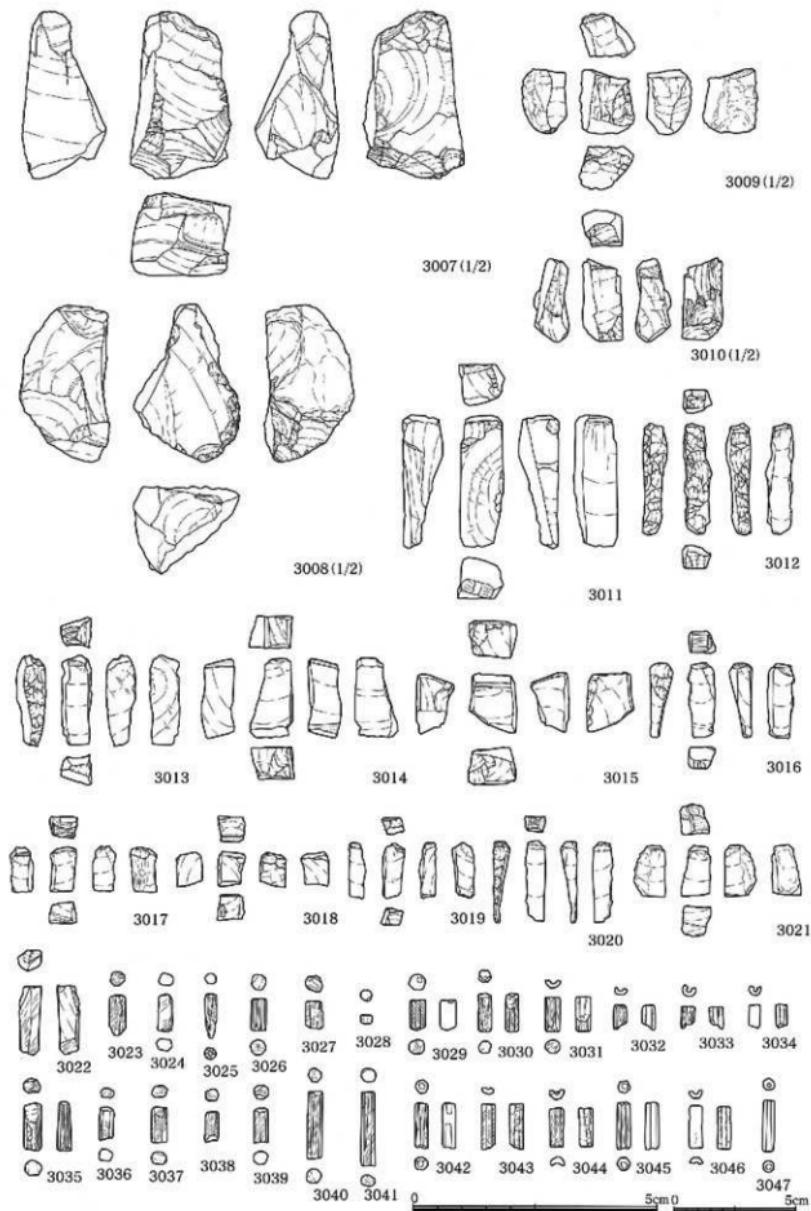
出土した管玉・管玉未成品は、剥片・チップを除いて約200点で出土している。多くは製作途中の未成品や破損品で、完成品は3047の1点のみである。石材は鉄石英も見られたが、多數は緑色凝灰岩で占められていた。今回出土した管玉未成品は、施溝後に分割される弥生中期に見られる技法が用いられている。

3007・3008は管玉の材料となる石核である。3007はすべての面に剥離が施され、直方体に加工していることがわかる。3008は剥離面が3面で、不純物部分を意図的に剥離している。

3009以降の段階から施溝が見られ、施溝分割を行っていたことがわかる。3009は立方体に、3010・3011は直方体に加工したものである。剥離面が3面以上あり、3010では剥離後に形を整形するため研磨を行っている痕跡が見られた。

3013から3021はさらに四角柱体を製作する段階になるものである。3012・3013・3016・3020は押圧剥離が施されている。3013は、分割施溝面に分割を行う予定と考えられる施溝が施されている。3013・3016・3017・3021は施溝面に研磨整形と考えられる痕跡が見られる。3022から3028、3035～3041は四角柱体の剥離整形を終えて、研磨整形を行っているものである。3022・3035は研磨整形を開始した初期の段階である。3028は鉄石英の管玉未成品であり、少量ではあるが、立方体に加工したものやチップがSK 1 1・1 9から出土している。3027・3033・3042など施溝の痕跡が一方の端部に見られる研磨整形途中のもの、3019は一方の端部を尖らせる形で研磨されたものが見られた。3041は、最大長が約15mmで研磨整形段階の管玉未成品では一番長いものである。3029～3031・42は穿孔段階に入った管玉未成品である。厚みが約3～2.5mmで研磨が進んだ段階で行っている。径1mm程度の穿孔で、3029～3031は片面穿孔が行われている。3029・3030は深さ1mmも満たない穿孔である。3042は両面穿孔途中のものである。3032～3034・3043～3045は穿孔段階で破損したもので、穿孔内部の様子から3043・3044は両面穿孔のものである。3046は穿孔が終了した管玉未成品である。3047は最大長が10.5mm、最大径が2.5mmであり、光沢を有している。今回の調査で、SK 1 9から出土した唯一の管玉の完成品である。

今回管玉の未製品を含め各段階の最大長を計測している中で、大きく2種類に分類できる事に気付いた。1つは最大長10mm～15mm前後のもので、もう1つは5mm～7mm前後のものである。通常は前者のものが主流と考えられるが、後者の数も角柱体の段階で相当数ある事から短いタイプの管玉の存在を検討する必要があると考えられる。また、出土した管玉のうち穿孔されているものについては、穿孔時に生じる痕跡があまり見られ



第59圖 新鮮市場地區 出土玉類實測圖 (1/1 1/2)

ないことから、丁寧な穿孔方法を確立していたと考えられる。

石針・石針未成品（図版 25 第 61 図）

S Z O 2・S K 1 1・1 9・2 6などからは管玉製品と管玉製作に使用されたと考えられる、石針や石針未成品が約 100 点出土しており、石核・剥片・チップも出土している。

3048 は石針の素材となる剥片で、自然面が残っている。意図的に削離していると考えられる。このような素材となる剥片は、他に 10 点ほど見られた。3049～3051 は立方体に近い形状に整形を行ったものである。3050 は長軸の半分の位置に、施溝途中と考えられる溝が見られ、面を平らにするための研磨も行われている。3051 は自然面が残っている。3052～3061 はさらに四角柱体に整形する前段階のものである。3052 は立方体に近い形状で、分割予定の位置に施溝途中の痕跡がみられる。3053・3054 は直方体に分割後、研磨整形を行っている。3055・3056 は押圧剥離を行っている。3057～3061 は施溝分割のみで、3059 は施溝面を研磨している。3062 は二角柱体、3063～3068 は四角柱体である。3062～3064・3067・3068 は研磨整形を行っている。3062・3063 は、一つの角を丸くするように研磨を行っている。3063 は丸く整形した角を削離させるように施溝を入れている。3064 は 3 面研磨されている。3065・3066 は施溝分割の整形で、3067・3068 は全面研磨整形されている。3069・3070 は多角柱体である。研磨整形が全面に施されている。石錐完成品は 25 点出土している。7 点は研磨による整形段階で稜線が明瞭に見られ、先端が平らなことから未使用品であると考えられる。3071 は一番長い石針で、最大長が約 11mm である。稜線が不明瞭であることから使用品であると考えられる多くは、先端が丸く崩壊しているが、3072・3073 は先端形状がいわゆる平錐と呼ばれるものである。3074 は先端形状が圓状にくぼんでいる。

楔状工具（第 59 図）

3075 は S K 1 1・3076 は S K 1 9 から出土した楔状工具と考えられる。3075 は断面形状が三角形、3076 は方形であるが、いずれも尖っている先端部がつぶれている。石材は瑪瑙である。他に石核、チップも出土している。

石鋸（第 61 図）

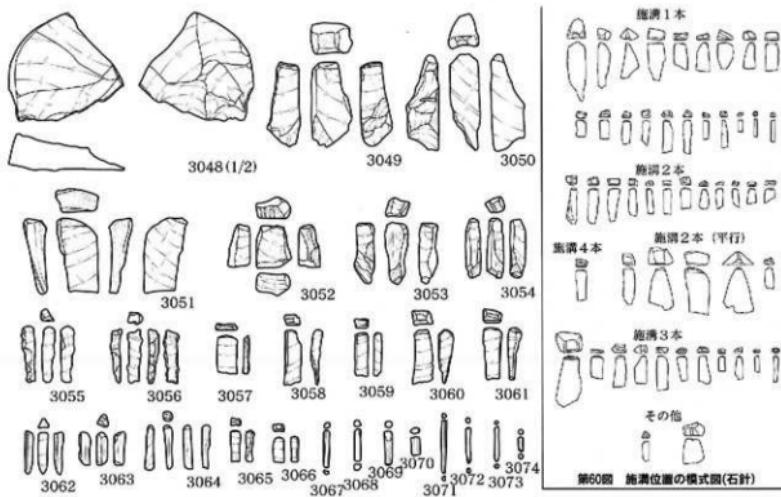
施溝分割を行う擦切り工具が刃部の確認できるもので 3 点出土している。刃部の有する 3 点が完形品か定かではないが、他に小破片やチップも出土している。石材は珪化木・結晶片岩と考えられる。3078 は S K 1 1 から出土した、両側辺に刃部を有するもので、石材は珪化木と考えられる。3077 は S I O 1 西周溝部、3079 は S D 1 7 から出土した、片側辺に刃部があるもので、3077 は珪化木、3079 は結晶片岩と考えられる。いずれの 3 点も、石の片理に対して平行に刃部が作られ、刃部は丸みを帯びている。

砥石（第 61 図）

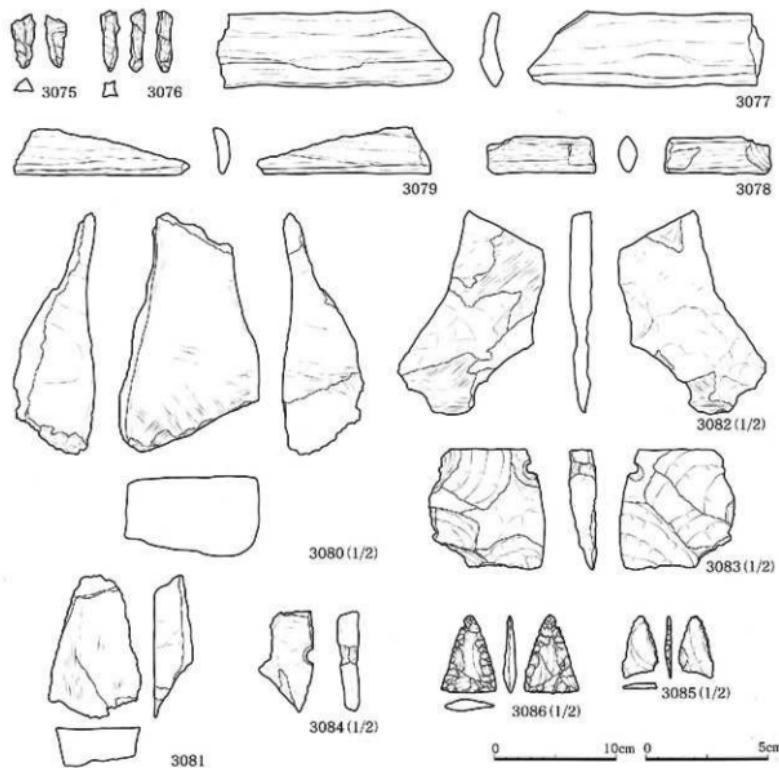
3080 は S B 0 1 (P 2 4 3) から出土した、粒子の細かい凝灰岩である。仕上げ用砥石であると考えられる。砥面は 5 面で、3 面は表面が磨かれ滑らかである。2 面は割れた面を、砥面として利用を始めたばかりで凹凸が激しい。砥面の表面には擦痕がみられる。3081 は II 層である遺物包含層 (X 1 6 Y 2 3 地点) から出土した、凝灰岩の砥石である。粒子が細かく仕上げの砥石と考えられる。砥面は 1 面で、長軸方向に擦痕が見られる。出土した 2 点の砥石の砥面には、筋状の溝は見られない。これらの砥石が、管玉製作に用いられたかは不明である。

石包丁（第 61 図）

3082～3084 は、S I O 1 東周溝部、S K 3 9・P 2 2 3 から出土した、石包丁の破片と考えられる。いずれも形状は不明である。3082・3084 は表面を削離調整後に荒い研磨整形を行っている。3083 は刃部が残っており、使用による光沢が見られる。3083・3084 は穿孔され、穿孔径は約 5mm である。いずれも両面回転穿孔である。



第60図 施溝位置の模式図(石計)



第61図 新鮮市場地区 出土石製品実測図 (1/1 1/2)



第62図 新鮮市場地区 古代土器実測図 (1/3)

石鎚 (第61図)

3085はS I 0 1 東周溝部、3086はS Z 0 1 周溝部から出土した石鎚である。側縁形状は2点とも直線で、石材は安山岩である。3085は無形の平基で、両面の辺縁全部に調整が行われている。3086は無形の弱凹基で、片面両面の辺縁のみ、角度の急な調整を行っている。

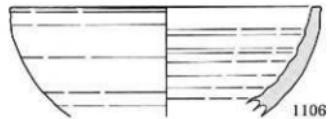
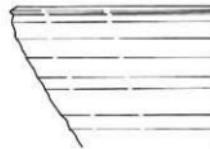
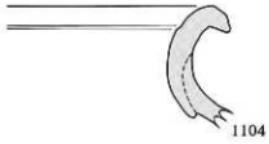
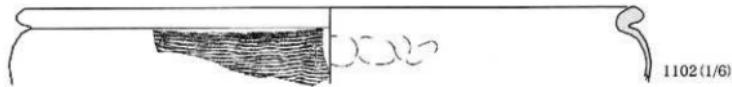
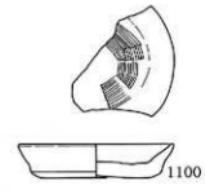
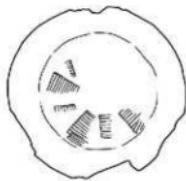
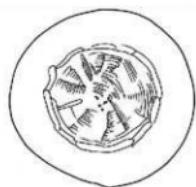
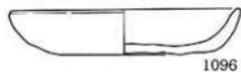
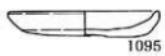
3. 古代土器 (図版23 第62図)

1094は、須恵器碗の口縁部から体部で、SK 0 7 ①層から出土している。口径 15.8 cm、残高 3.2 cmを測る。器形は、内溝しながら口縁部に至り、口縁端部は内面をわずかに肥厚させ平に納める。調整は、外外面とともにロクロナデを施す。時期は9世紀前半と考えられる。

4. 中世土器 (図版23 第63図)

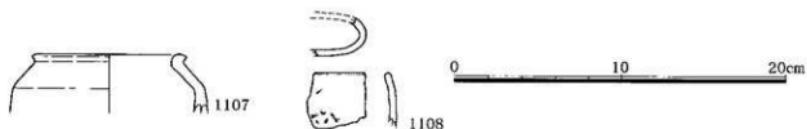
1095～1100は中世十師器皿で、非ロクロ成形である。時期は概ね13世紀代と考えられる。1095はS X 0 4大型土坑上層から出土している。口径 9.15 cm、底径 5.25 cm、残高 1.5 cmを測る。外縁しながら口縁部に至り、口縁端部付近で内側に内傾する。口縁端部は丸く納める。調整は1段の横ナデを施す。1096は区画溝3 (S D 0 2) から出土している。口径 13.9 cm、底径 7.35 cm、器高 2.75 cmを測る。器形は、平底気味の底部からやや内溝気味に口縁部が立ち上がり、口縁端部は丸く納める。調整は、外外面ともナデを施す。1097～1099はS K 0 7 から一括で出土している。1097は、口径 11.1 cm、底径 6.18 cm、器高 2.1 cmを測る。1098は、口径 10.6 cm、底径 5.45 cm、器高 2.5 cmを測る。1099は、口径 10.6 cm、底径 5.9 cm、器高 2.25 cmを測る。器形は1097から1099は、やや凹みを持つ底部から外縁しながら口縁部が立ち上がり、口縁端部は丸く納める。調整は、1段の横ナデを施し、見込み部分には板状工具によるナデを放射状に施す。1100はP O 4 から出土している。口径 9.4 cm、底径 6.4 cm、器高 2.1 cmを測る。器形は、平底の底部から外縁ながら口縁部が立ち上がり、口縁端部は細く尖り気味に納める。調整は、1段の横ナデを施し、見込み部分には板状工具によるナデを放射状に施す。1097～1100は、内面に放射状のハケ状工具のナデ痕跡を明瞭に残す。

1101は瓦質土器の鉢の口縁部で、P 1 3 から出土している。口径 29.4 cm、残高 4 cmを測る。器形は、わずかに内溝しながら立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚させる。口縁部に櫛描波状文を施す。1102～1104は珠洲焼の大型甕である。1102はSK 0 9 から出土している。口径 76.0 cm、残高 9.3 cmを測る。方頭状の口縁部で、「く」の字状に短い頭部を持つ。肩部は口縁部よりわずかに張り出し、底部に向かって収束していく様相を呈する。調整は、外表面はタタキを施し、内面は当て具痕を明瞭に残す。時期は、古岡編年のIII期(13世紀中頃)と考えられる。1103は大甕の口縁部から頭部で、区画溝2 から出土している。口径 73.2 cm、



0 20 40cm
0 10 20cm

第63圖 新鮮市場地區 中土器測量圖 (1/3 1/6)



第64図 新鮮市場地区 近世土器実測図 (1/3)

残高 5.8 cm を測る。器形は、頸部から大きく外反しながら口縁部に至り、口縁端部は外に挽き出し細く丸く納める。調整は、内外面ともロクロナデを施す。時期は、吉岡編年のⅡ期（13世紀前半頃）と考えられる。1104は大甕の口縁部から頸部で、区画溝1から出している。残高 7.5 cm を測る。器形は、頸部から外反しながら口縁部に至り、口縁端部は外に挽き出し若干垂下させ細く丸く納める。内面に粘土紐の接合痕が見られる。調整は、内外面ともロクロナデを施す。時期はそれぞれ、吉岡編年のⅡ期（13世紀前半頃）と考えられる。

1105・1106は珠洲焼の鉢の口縁部から体部である。時期はそれぞれ、吉岡編年のⅡ期（13世紀前半頃）と考えられる。1105は、P 3 3 3 から出土している。口径 18.8 cm、残高 6.7 cm を測る。器形は、内湾しながら口縁部に至り、口縁端部はわずかに凹みを施す。調整は、内面外面ともにロクロナデを施す。1106は、区画溝1から出土している。口径 24.0 cm、残高 8.6 cm を測る。器形は、やや内湾しながら口縁部に至り、口縁端部付近はロクロナデによりわずかに内傾する。内外面ともにロクロナデを施す。

5. 近世土器 (図版 23 第 64 図)

1107は越前焼に似ているものの不明陶磁器で、短頸斬の口縁部から体部である。S X 0 2 東周溝部の上層から出土している。口径 8.8 cm、残高 3.6 cm を測る。器形は、頸部から「く」の字に短く屈曲しながら口縁部に至り、口縁端部は丸く納める。体部は、肩部があまり張り出さない。1108は磁器（染付け）のビングライである。残高 3.4 cm を測る。器形は、やや内湾しながら口縁部に至り、口縁端部は丸く納める。包含層から出土している。

第3節 小結

弥生時代中期中葉から後葉（八日市地方編年7期～9期併行）と中世の遺構と遺物があり、特に弥生時代中期では明確な時期差が確認できた。

弥生時代中期では、まず周溝を持つ平地式建物 S I O 1 はその東側に隣接する方形周溝墓 S Z O 1 より古い時期であることが、出土遺物と周溝の切り合い関係から判明している。このことは、S I O 1 を廃絶した後隣接した場所に墓を作るということが言え、居住域と墓域を明確に区分しない当時の様相をうかがい知る事が出来る。一方、周溝状遺構 S X 0 1 や北陸地域では今のところ類例のない周溝を持つ大型土坑 S X 0 2 ～ 0 4 などは、方形周溝墓や住居類と推測することは可能であるが、どちらも確固たる根拠に乏しいため今回は敢えてその性格を明確にはしなかった。ただ、大阪府守口市に所在する「八雲遺跡」で、縱長の大型土坑を中心に 4

方向に周溝が配置される「土坑式堅穴建物」の類例がある。しかし、この大型土坑の内部には明確な柱穴と炉が確認されていることから、S X 0 2～0 4がこの類例に合致するかどうかは今後慎重な検討が必要である。新鮮市場地区の遺構の中で、性格の位置づけに最も困難を要したのがS Z 0 2である。現地調査の時点から、方形周溝墓か土作り工房址かで見解が分かれた。平面及び断面形態から判断すれば、やや小振りではあるものの四隅の切れた「東海型の方形周溝墓」に見えるが、周溝内から管玉本製品や製作道具類及び緑色凝灰岩のチップなどが、単純に混じったと考えるにはあまりにも多量に出土しているということが、方形周溝墓と即断できなかった最大の理由である。結果的に遺構の形状から方形周溝墓としたが、今後検討を要する課題である。土器敷き炉と考えられるSK 2 6を中心としてSD 1 7・2 7を周溝とする平地式建物の存在が考えられたが、柱穴が確認できず住居としての決め手に欠いたことから、今後の類例を待って再度検討を試みたい。遺物の特徴として、土器では鉢類に口縁が直線的に開くもの（1053・1083）を含むなど型式が多様である事や、櫛摺痕状文や斜行短線文が丁寧に施文されていることが石塚遺跡の特徴として挙げられる。また玉作関連遺物が多く出土していることも注すべき点である。明確な玉作り工房址は確認できなかったが、管玉を主として、石針、石劍などの管玉製作に使用する工具類も數多く出土している。石針の製作については、管玉製作同様に、施溝を行って分割していることがわかる。すべて施溝は同じ面で、施溝が2本以上ある場合、施溝面から分割する継取りであることがわかる。他地域である石川県小松市八日市地方遺跡や新潟県柏崎市下谷地遺跡でも同様の特徴が見られる事から、北陸地方で共通していると言える。

中世では、13世紀代の掘立柱建物4棟とそれに伴う区画溝2基、その他区画溝2基、方形土坑3基、土坑1基がある。遺物では、その時期に相当する土師器皿、珠洲焼（吉岡編年II期～III期）などがある。掘立柱建物では、石塚周辺では今までに類を見ない大型の総柱建物（S B 0 1）が注目される。また、それぞれの掘立柱建物は連結された様相がほとんどかがえないことや、出土した遺物が13世紀代と時期の幅がほとんどないことから、比較的短期的な集落であったと判断できる。特異な例としては、当地区と同じく13世紀代の中世集落を確認した「きぼう地区」では9基もの井戸が検出されているにもかかわらず、当調査区内にはこの時期の井戸が1基も確認できなかったことである。集落の近くに水の豊富な場所がありそこへ水を汲みに行っていたものとも考えられる。遺物の特徴として、内面にハケ状工具のナデ痕跡を明瞭に残す土師器皿があげられる。工具の痕跡は本来ナデ消すものだが、わざと消さずに残したものと考えられる。

別表5 新鮮市場地区 遺構一覧表

遺構番号	詳細	グリッド		法量(m)			主軸方向	平面形態	備考	旧遺構番号
		X	Y	長軸	短軸	深さ				
1. 平地式建物										
S101	本体	4~10	5~12	(15.4)	(11.6)	—	N-5° -W	隅丸方形		SK330
	南周溝	6	6	3.53	1.30	0.24		西北西-東南東		SD234
	東周溝	8~10	6~10	9.02	2.58	0.3~0.55		南北		SD236
	灰穴炉	5~9	11~12	8.20	2.05	0.18~0.22		楕円形		SK370
2. 方形周溝墓										
S201	本体	5~8	13~16	(7.48)	7.02	0.15~0.22	N-10° -W	弥生 方形?		
	周溝	5~8	12~16	7.48	1.43	0.22		西南西-東北東		SD239
	本体	25~28	21~22	7.6	(3.20)	0.28~0.44	N-9° -E	弥生 東海型		
S202	北周溝	25	22	1.26	1.04	0.40		東-西		SK314
	西周溝	25	21	3.29	0.96	0.44		南北		SK313
	南周溝	27~28	21~22	2.69	1.49	0.28		北西-南東		SD212
3. 周溝状遺構										
SX01	本体	15~20	20~23	8.87	(6.0)	0.08~0.29	N-5° -E	L字状		
	周溝	15~20	20~23	14.87	0.92~2.7	0.08~0.29	南北	東-西		SD246
4. 周溝を持つ大型土坑										
SX02	本体	16~20	8~10	(7.6)	8.4	0.06~0.65	N-5° -E			
	大型土坑	19	6~8	(7.6)	5.60	0.3~0.65	南北	楕円形		SX401
	小土坑1	17	7	1.25	0.90	0.34		楕円形		SK358
	小土坑2	17	8	1.77	1.12	0.67		楕円形		SK359
SX03	東周溝	17~20	10	4.82	1.04~1.5	0.09~0.2	北北東-南南西			SD218
	西周溝	17~20	6	6.37	0.50	0.29	南北			SD219
	本体	13~17	22~24	(8.0)	(5.0)	0.26~0.67	N-90° -E			
SX04	大型土坑	15~17	23	5.12	2.17	0.67	不整形			SX403
	北周溝	13~14	22~24	4.50	0.9~1.83	0.22~0.57	東北東-西南西			SD267
	西周溝	15~16	22	3.00	1.12	0.18~0.29	南北			SD245
SX04	本体	15~19	17~21	10.0	8.0	0.11~0.6	N-0° -E			
	大型土坑	15~18	19~21	7.1	5.44	0.11~0.6	南北			SX402
	小土坑	16~18	20~21	4.88	3.12	0.48	南北			SK367
	北周溝	14~15	18~20	2.90	1.59	0.37	東-西			SD270
SX04	西周溝	15~18	17	6.46	1.27	0.36	南北			SD248
	南周溝	19	19	2.97	1.14	0.35	東-西			SK323
	東周溝	15~18	21	(5.50)	(1.04)	0.08~0.29	南北			SD246
5. 捩立柱建物										
SB01	本体	4~16	6~10	(25.0)	9.2	桁間:2.7 梁間:2.3	N-4° -W	9×4の鉄柱		
	区画溝1	5~12	12~14	15.83	0.82	0.56	北北西-南南東			SD237
SB02	本体	18~22	9~12	7.8	4.6	桁間:2.7 梁間:2.25	N-3° -E	3×2の鉄柱		
	区画溝2の一部	16~24	3~13	14.04(東西) 20.07(南北)	0.22	0.16~0.28	南北	西北西-東南東		SD215
SB03	本体	23~25	8~12	7.1	4.3	桁間:2.4 梁間:2.15	N-29° -W	3×2の鉄柱		
	区画溝2の一部	16~24	3~13	14.04(東西) 20.07(南北)	0.22	0.16~0.28	南北	西北西-東南東		SD215
SB04	本体	11~16	12~14	10.0	5.2	桁間:2.4 梁間:2.5	N-2° -W	4×2の鉄柱		
6. 潟										
SD01	区画溝4	28~34	1~4	16.72	0.94~1.46	0.08~0.27	北北東-南南西	中世?		SD201
SD02	区画溝3	26~35	13~14	18.74	0.24~0.61	0.04~0.21	南北	中世		SD202
SD03		29~31	14	4.65	0.45	0.36	南北	中世		SD203
SD04	区画溝3	26~27	4~13	17.96	0.72	0.26	西北西-東南東	中世		SD204
SD05		26	11~12	1.12	0.52	0.24				SD205
SD06		26	4	0.95	0.45	0.33	南北	中世		SD206
SD07		29	9	1.58	0.33	0.22	南北			SD207
SD08		34~35	20~21	1.78	0.51	0.29	西北-南東	弥生		SD208
SD09		31~32	19	2.76	0.63	0.48	北北東-南南西	弥生		SD209
SD10		30	17~18	2.21	0.36	0.28	西北西-東南東	弥生		SD210
SD11		28	13~14	1.32	0.55	0.40	東-西			SD211
SD12		22	17	1.51	0.57	0.45	東-西			SD213
SD13		14~18	11~14	9.75	0.93	0.52	北北東-南南西	弥生		SD217
SD14		13~20	4~5	13.42	0.79	0.25	南北	弥生		SD220
SD15		17~18	3	2.07	0.53	0.41	南北			SD221
SD16		16~17	10~11	2.06	1.44	0.22	南北	中世		SD227

遺構番号	詳細	グリッド		法面(m)			主軸方向	平面形態	備考	旧遺構番号
		X	Y	長幅	短幅	深さ				
SD17		14~16	12~17	13.60	0.37~1.43	0.05~0.21		北北西~南南東	中世	SD229
SD18		4~7	8~10	9.23	0.46~0.63	0.1~0.36		南~北、東~西	中世	SD235
SD19		8~18	15~24	33.54	0.99	0.04~0.32		西北~西南	中世	SD240
SD20		9~13	19~23	9.94	3.50	0.02~0.22		東北~西南		SD243
SD21		13~14	20~21	2.96	0.71	0.39		東~西		SD244
SD22		15~18	17	6.46	1.27	0.36		南北~北北西		SD248
SD23		14~16	15~16	6.72	1.05	0.07~0.17		北北西~北北東		SD249
SD24		13~17	15	7.23	0.64	0.47		南北~北北東		SD250
SD25		9~10	13~15	4.50	0.65~1.63	0.06~0.31		東西		SD254
SD26		9~11	15	3.63	0.78~1.71	0.2~0.25		南北~北北東		SD255
SD27		11~13	12~17	10.34	0.77~2.36	0.04~0.31		北北西~南南東	弥生	SD257
SD28		12~13	5	2.01	0.57	0.47		南北~北		SD258
SD29		11~12	4~5	2.72	0.40	0.36		南北~北	弥生	SD259
SD30		11~13	5	3.33	0.57	0.29		南北~北		SD260
SD31		15	3	0.86	0.41	0.30		北西~南東	弥生	SD263
SD32		9	4	0.68	0.45	0.30		北東~西南	弥生	SD264
SD33		7~8	4~5	1.75	0.49	0.40		北東~西南	弥生	SD265
SD34		14~15	18~20	2.90	1.59	0.37		東~西		SD266

7. 土坑

SK01	方形状土坑	29	6	2.81	2.78	0.24	圓丸方彌	中世	SK301
SK02	方形状土坑	25	3	2.16	1.91	0.11	圓丸方彌	中世	SK302
SK03	方形状土坑	22	11	2.71	2.35	0.29	圓丸方彌	中世	SK303
SK04	礫砂を切る	21	15	3.89	3.67	0.43	不整彌	中世	SK304
SK05		29	16	2.28	1.84	0.18	不整彌	弥生	SK305
SK06		34	16	1.88	1.40	0.40	不整彌	弥生	SK306
SK07	祭祀行為?	28	2	0.95	0.86	0.60	円彌	中世	SK307
SK08		21	5	1.52	0.79	0.15	不整彌	弥生	SK308
SK09		19	5	1.17	1.03	0.18	方彌	中世	SK309
SK10		20	13	1.67	0.97	0.37	不整彌		SK311
SK11	玉作U關係	27	20	1.42	0.94	0.18	不整彌	弥生	SK312
SK12		28	19	1.13	0.56	0.32	不整彌		SK315
SK13		26	18	1.17	0.76	0.16	圓丸長方彌		SK316
SK14		24	19	1.21	1.02	0.23	方彌	弥生	SK317
SK15		22	20	1.00	0.71	0.22	橢円彌		SK318
SK16		21	21	1.67	1.00	0.40	不整彌	弥生	SK319
SK17		20	22	1.63	1.10	0.11	圓丸長方彌	弥生	SK320
SK18		20	19	3.97	1.37	0.18	不整彌		SK322
SK19	玉作り關係	12	13	1.74	1.50	0.54	圓丸方彌	曾玉完形品出土	SK328
SK20		5	5	5.50	1.96	0.33	不整彌	中世	SK329
SK21		6	18	(1.22)	0.93	0.33	(橢円形)	弥生	SK334
SK22		11	17	2.77	1.12	0.42	不整彌		SK335
SK23		13	16	2.60	1.84	0.27	不整彌	弥生	SK336
SK24		14	15	1.52	1.10	0.25	不整彌		SK337
SK25		14	15	0.83	0.61	0.19	不整彌	弥生	SK338
SK26	土器敷き詰	9	11	0.88	0.72	0.10	橢円彌		SK368
SK27		8	18	2.47	1.81	0.64	不整彌		SK344
SK28		8	19	2.70	1.29	0.53	不整彌	弥生	SK345
SK29		9	19	2.30	1.87	0.38	不整彌	弥生	SK346
SK30		9	20	3.98	1.41	0.78	不整彌	弥生	SK347
SK31		12	6	1.06	0.54	0.23	不整彌	弥生	SK348
SK32		9	7	1.09	0.76	0.15	不整彌		SK349
SK33		14	5	0.95	0.58	0.27	長方彌	弥生	SK350
SK34		13	5	1.09	0.83	0.20	不整彌		SK351
SK35		14	11	1.80	1.04	0.51	不整彌	弥生	SK354
SK36		13	12	2.24	0.84	0.44	不整彌	弥生	SK355
SK37		11	16	3.32	0.81	0.47	不整彌		SK356
SK38		11	17	1.22	0.90	0.23	不整彌	弥生	SK357
SK39		16	9	4.63	(2.35)	0.25	(不整彌)	弥生	SK360
SK40		13	10	2.13	1.20	0.24	圓丸長方彌	弥生	SK361
SK41		12	11	1.12	0.38	0.29	不整彌		SK362
SK42		13	22	1.06	0.88	0.25	橢円彌	弥生	SK363
SK43		15	19	1.76	1.22	0.38	橢円彌		SK364
SK44		13	11	2.00	1.33	0.31	不整彌	弥生	SK365
SK45		18	23	2.59	1.26	0.26	不整彌	弥生	SK366
SK46		21	16	1.50	0.61	0.22	不整彌	弥生	SK340

8. 井戸

SE01	6	5	1.04	0.96	0.81	不整彌	遺世?	SE801
------	---	---	------	------	------	-----	-----	-------

別表6 新鮮市場地区 土器観察表

規範番号	遺構	分類	断面	寸法(cm)			色調	胎土	焼成	形成及び埋設状態		備考(文様など)
				口径	底径	高さ				内面	外面	
1032	SI01 (西周溝)	弥生	壺	(8.50)	-	(5.20)	内:7.5YR7/6暗 外:7.5YR6/6暗	粗	良	ナデ? (摩訶若しい)	不明瞭(摩訶) ナデ	柄指連続刻文 柄指失羽状文
1033	SI01 (西周溝)	弥生	壺	(16.00)	-	(4.90)	内:2.5Y7/2灰黄 外:10YR7/3にぶい黄緑	粗	良	不明瞭(摩訶) ナデ	柄指連続刻文	
1034	SI01 (西周溝)	弥生	壺	12.80	-	(6.20)	内:2.5Y7/1黄 外:10YR7/3にぶい黄緑	密	良	ハケメ	ハケメ	工具を用いた凹圧による小波状口縁 柄指連続刻文
1035	SI01 (西周溝)	弥生	壺	12.80	-	(9.30)	内:10YR7/3にぶい黄緑 外:10YR7/3にぶい黄緑	密	やや良	浅いナデ ハケメ	浅いナデ ハケメ	
1036	SI01 (西周溝)	弥生	壺	12.45	-	(8.40)	内:10YR7/3にぶい黄緑 外:10YR7/3にぶい黄緑	やや密	やや良	ハケメ	ハケメ	口部板ナデ
1037	SI01 (西周溝)	弥生	壺	(18.00)	-	(2.40)	内:10YR8/2灰黄褐 外:10YR8/2灰黄褐	やや密	やや良	ナデ	ハケメ ナデ	柄指連続刻文 柄指失羽状文
1038	SI01 (南周溝)	弥生	壺	(17.70)	-	(2.60)	内:10YR8/2灰白 外:2.5Y7/2灰白	やや密	やや良	不明瞭(摩訶) ナデ	ナデ	柄指連続刻文 柄指失羽状文 工具を用いた擦み出し跡等
1039	SI01 (西周溝)	弥生	壺	(15.85)	-	(3.10)	内:7.5Y7/4にぶい橙 外:7.5Y7/4にぶい橙	やや密	やや良	ナデ	ハケメ ナデ	
1040	SI01 (南周溝)	弥生	壺	(19.10)	-	(13.30)	内:2.5YR8/4橙～2.5YR8/3灰黄 外:10YR8/4にぶい橙～2.5Y4/1灰	やや密	やや良	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	
1041	SI01 (南周溝)	弥生	壺	(18.80)	-	(5.20)	内:10YR8/2白反 外:10YR7/3にぶい黄緑	やや密	やや良	ナデ ハケメ後ナデ	ハケメ	工具を用いた凹圧による波紋口縁 柄指連続刻文 柄指失羽状文 柄指失纏文
1042	SI01 (西周溝)	弥生	壺	(20.40)	-	(3.70)	内:2.5Y8/3灰黄 外:2.5Y7/4灰黄	密	良	ハケメ ナデ	ナデ	指などを用いた摘み出し跡等
1043	SI01 (西周溝)	弥生	壺	-	(7.30)	(11.95)	内:2.5Y8/2灰白 外:7.5YR7/3にぶい橙	密	良	刺繡	ハケメ	
1044	SI01 (西周溝)	弥生	壺	(18.00)	5.40	(21.90)	内:10YR8/4灰黄褐 外:7.5Y7/6暗～10YR8/4灰黄褐	やや密	やや良	ハケメ	ハケメ	工具を用いた凹圧による小波状口縁
1045	SI01 (西周溝)	弥生	壺	(15.60)	-	(12.50)	内:10YR8/2黒褐 外:10YR8/2黒褐	密	良	ハケメ 指ナデ	ハケメ	柄指連続刻文
1046	SI01 (西周溝)	弥生	壺	(15.60)	-	(19.30)	内:2.5Y7/2灰黄 外:10YR8/3にぶい黄緑～10YR8/2灰黄褐	密	良	ハケメ ナデ	ハケメ	工具を用いた凹圧による小波状口縁
1047	SI01 (西周溝)	弥生	壺	18.00	4.70	21.40	内:7.5YR7/1明褐色～10YR8/3灰黄褐 外:7.5YR7/1明褐色～10YR8/3灰黄褐	密	良	ハケメ ナデ	ハケメ	底部圓面穿孔
1048	SI01 (西周溝)	弥生	壺	-	5.80	(8.80)	内:7.5YR8/1暗 外:10YR8/3にぶい黄緑	密	良	ハケメ	ハケメ	底部圓面及び倒側部穿孔途中
1049	SI01 (南周溝)	弥生	壺	(17.80)	-	(1.80)	内:2.5Y8/3灰黄 外:2.5Y8/3灰黄	密	良	不明瞭(摩訶) ナデ	ハケメ	柄指連続刻文 柄指失纏文
1050	SI01 (南周溝)	弥生	壺	(18.40)	-	(5.70)	内:10YR7/3にぶい黄緑～SYR8/1オリーブ墨 外:3YR8/4にぶい墨～10YR8/1墨	密	良	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	摩訶行殖文 摩訶連続刻文 摩訶墨文
1051	SI01 (南周溝)	弥生	鉢	(18.70)	-	(12.30)	内:2.5Y8/2灰白 外:2.5Y8/3灰黄	密	良	指オサエ ナデ	ハケメ ナデ	ハケメ 指オサエ ナデ
1052	SI01 (南周溝)	弥生	鉢	(25.00)	-	(10.40)	内:10YR8/2灰黄褐 外:2.5Y8/3灰黄	密	良	ナデ	ハケメ	
1053	SI01 (西周溝)	弥生	鉢	26.40	5.55	(18.20)	内:10YR8/2灰黄褐～10YR8/1陶灰 外:10YR8/3にぶい黄緑	やや密	やや良	ハケメ ナデ	ハケメ	
1054	SI01 (南周溝)	弥生	鉢	(9.80)	-	(3.70)	内:10YR7/3にぶい黄緑 外:10YR7/3にぶい黄緑	密	良	ハケメ	ハケメ	柄指連続刻文
1055	SI01 (南周溝)	弥生	付合鉢	-	8.50	(6.80)	内:10YR8/2灰黄 外:2.5Y8/3灰黄	密	良	ハケメ 指オサエ	ハケメ	
1056	SI01 (西周溝)	弥生	小鉢	9.30	3.60	8.20	内:10YR7/3にぶい黄緑 外:10YR7/3にぶい黄緑	やや密	やや良	ハケメ 指オサエ	ハケメ	
1057	SI01 (南周溝)	弥生	勾玉状土器品	1.20	-	(2.10)	内:10YR7/3にぶい黄緑 外:10YR7/3にぶい黄緑	やや密	やや良	ナデ	欠損部に穿孔あり	
1058	SI01 (南周溝)	弥生	壺	18.50	8.00	32.50	内:3YR7/6暗 外:3YR7/6暗	密	良	ハケメ	ハケメ	柄指連続刻文 柄指失羽状文
1059	SI01 (南周溝)	弥生	壺	17.80	5.00	22.80	内:10YR8/1灰黄～10YR8/2灰黄褐 外:10YR8/2灰黄～10YR7/3にぶい黄緑	密	良	ナデ ナデ	ハケメ ナデ	外面ス付蓋
1060	SI02 (西周溝)	弥生	壺	(20.00)	-	(5.00)	内:10YR7/3にぶい黄緑 外:10YR8/2灰黄	密	良	ハケメ ナデ	ハケメ	柄指連続刻文
1061	SZ02 (南周溝)	弥生	鉢	(14.90)	-	(3.50)	内:2.5YR7/4にぶい黄緑 外:2.5YR7/3にぶい黄緑	密	良	ハケメ 指オサエ	ハケメ	柄指失羽状文
1062	SX01 (南周溝)	弥生	壺	(16.40)	-	(7.50)	内:2.5Y7/4にぶい黄緑 外:10YR8/2灰黄～10YR7/4にぶい黄緑	やや密	やや良	ハケメ ハケメ後ナデ	ハケメ ナデ	摩状厚文 柄指失羽状文 柄指連続刻文
1063	SX01 (南周溝)	弥生	壺	10.80	-	(15.30)	内:10YR7/4にぶい黄緑 外:10YR5/4にぶい黄緑	密	やや良	ハケメ ナデ	ハケメ	円形刻文 波状文 山形文
1064	SX01 (南周溝)	弥生	壺	-	8.20	(24.30)	内:2.5Y8/1灰白 外:2.5Y8/3灰黄	密	良	ハケメ 指オサエ	ハケメ	
1065	SX01 (南周溝)	弥生	壺	20.70	5.60	26.40	内:2.5Y8/1灰白 外:10YR7/3にぶい黄緑	密	やや良	ハケメ	ハケメ	柄指連続刻文

図版 番号	測量 分類	分類	容積	造量(cm)			色調	新土	焼成	形状及び表面調査		備考(文様など)
				口径	底径	器高				内面	外面	
1066	SX02 (小土坑)	弥生	壺	-	(5.40)	(5.10)	内: 10YR7/3にない黄土 外: 10YR8/3にない黄土	密	良	板ナデ ナデ	ハケメ ナデ	座面開口部孔
1067	SX03 (西周漢)	弥生	壺	(17.80)	-	(5.85)	内: 10YR7/3にない黄土 外: 10YR7/3にない黄土	やや密	やや良	不明瞭(座面) ナデ	不明瞭(座面) ナデ	焼成連続刻文
1068	SX03 (大型土坑)	弥生	壺	14.20	5.20	16.60	内: 10YR8/2灰白 外: 2.5YR7/灰白	密	良	ハケメ 板ナデ ナデ	ハケメ 板ナデ	外表面開口あり 焼成連続刻文
1069	SX03 (西周漢)	弥生	鉢	(26.70)	-	(4.35)	内: 10YR7/3にない黄土 外: 2.5YR7/灰白	やや密	やや良	板ナデ	ハケメ ナデ	焼成連続刻文
1070	SX04 (大型土坑)	弥生	無蓋盆	(14.80)	-	(4.20)	内: 2.5Y7/2灰黄 外: 10YR8/4灰黄土	やや密	やや良	ナデ	ナデ	焼成連続刻文
1071	SX04 (大型土坑)	弥生	壺	(18.40)	-	(7.50)	内: 2.5Y8/2灰白 外: 2.5Y8/2灰白	密	良	ナデ	ハケ後ミガキ	焼成連続刻文 焼成連続刻文
1072	SX04 (大型土坑)	弥生	壺	(22.60)	-	(4.85)	内: 2.5Y7/2灰白 外: 2.5Y7/2灰白～10YR7/3にない黄土	密	良	ハケメ	ハケメ	焼成連続刻文
1073	SX04 (大型土坑)	弥生	壺	(23.00)	-	(7.70)	内: 10YR8/3灰黄土 外: 10YR7/3にない黄土	密	やや良	ハケメ 板ナデ	ハケメ 板ナデ	焼成連続刻文 焼成連続刻文
1074	SX04 (大型土坑)	弥生	壺	(20.80)	-	(14.20)	内: 10YR8/2灰白 外: 10YR7/3にない黄土	密	良	ハケメ ナデ	ハケメ	内: 亂文 外: 亂文 焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文
1075	SK06	弥生	壺	17.60	6.10	(29.80)	内: 2.5Y8/1灰白～2.5Y7/4浅黄 外: 10YR8/4浅黄～10YR5/2灰黄土	密	やや良	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	外表面にスル 工具の凹凸によるフリル状突起
1076	SK19	弥生	壺	(26.00)	-	(5.80)	内: 2.5Y5/1灰灰 外: 10YR8/2灰白	密	良	ハケメ	ハケメ	円孔 工具の凹凸によるフリル状突起 焼成連続刻文
1077	SK19	弥生	壺	16.70	-	(7.40)	内: 10YR7/3にない黄土 外: 10YR7/3にない黄土	密	やや良	ハケメ 後ナデ	ハケメ	スヌーカー全体に付着 焼成連続刻文
1078	SK19	弥生	壺	-	-	(11.80)	内: 2.5Y7/2灰黄 外: 2.5Y8/2灰黄	密	良	ハケメ 指オサエ	ハケメ	焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文
1079	SK27	弥生	壺	(11.40)	-	(4.10)	内: 10YR7/3にない黄土 外: 10YR7/4にない黄土	密	良	ハケメ ナデ	ナデ	工具と指による凹凸つまみ
1080	SK27	弥生	壺	-	-	(5.50)	内: 2.5Y7/2灰黄 外: 2.5Y7/3灰黄	やや密	良	不順歯(座面)	ハケメ	焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文
1081	SK27	弥生	壺	-	-	(5.10)	内: 2.5Y8/1灰白 外: 2.5Y8/2灰白	密	良	ハケメ	ハケメ	内: 亂文 外: 亂文 焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文
1082	SK30	弥生	無蓋盆	(14.80)	-	(3.15)	内: 10YR8/3浅黄土 外: 10YR8/3浅黄土	密	良	ナデ	ナデ	円孔 焼成消失状況
1083	SK30	弥生	壺	-	9.80	(22.40)	内: 10YR7/3にない黄土 外: 10YR7/4にない黄土	密	良	ハケメ	ハケメ 後ナデ	焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文
1084	SK27	弥生	壺	(25.90)	-	(14.30)	内: 10YR8/2反黄褐色～10YR8/1灰黄 外: 2.5Y7/3灰黄～10YR5/2灰黄土	密	良	ハケメ 指オサエ	ハケメ	焼成連続刻文 焼成連続刻文
1085	SK27	弥生	壺	(21.00)	-	(21.85)	内: 10YR8/1褐色 外: 10YR8/3にない黄土	密	良	ハケメ ナデ	ハケメ	外表面に凹 内面コゲ付着 焼成連続刻文
1086	SK27	弥生	壺	(21.80)	-	(3.80)	内: 10YR8/4にない黄土 外: 10YR8/4にない黄土	やや密	良	ハケメ 指ナデ 指オサエ	ハケメ 指ナデ	焼成連続刻文
1087	SK27	弥生	壺	-	-	(8.30)	内: 2.5Y5/1灰黄 外: 2.5Y4/2灰褐色～2.5Y8/6種	密	良	不順歯(座面)	ハケメ	焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文 円孔済
1088	SK30	弥生	壺	(25.90)	-	(2.80)	内: 10YR7/3にない黄土 外: 10YR8/2灰黄土	密	良	ハケメ	ハケメ	工具の凹凸によるフリル状突起
1089	SK30	弥生	壺	(15.80)	-	(3.85)	内: 10YR8/4にない黄土 外: 10YR7/3にない黄土	密	良	ハケメ	ハケメ	焼成連続刻文 焼成連続刻文
1090	SK30	弥生	壺	(19.20)	-	(10.40)	内: 10YR8/3にない黄土 外: 10YR8/3にない黄土	やや密	やや良	ハケメ ナデ	ハケメ	口唇部に焼成跡
1091	SK30	弥生	壺	(18.20)	-	(8.40)	内: 2.5Y7/3灰黄 外: 2.5Y8/3灰黄～10YR8/2灰黄土	密	良	ハケメ 後ナデ	ハケメ	焼成連続刻文 焼成連続刻文 焼成連続刻文
1092	SK30	弥生	壺	(19.80)	-	(14.40)	内: 10YR7/2にない黄土 外: 2.5Y8/3灰黄～10YR8/2灰黄土	密	良	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	焼成連続刻文 焼成連続刻文
1093	SK30	弥生	鉢	(28.70)	-	(8.60)	内: 10YR8/3浅黄土～5Y5/1灰 外: 10YR8/3浅黄土～10YR5/2灰黄土	密	良	ハケメ	ハケメ	焼成連続刻文 焼成連続刻文
1094	SK07 (上層)	漆器漆	壺	(15.80)	-	(3.20)	内: 2.5Y8/1灰黄 外: 2.5Y8/1灰	密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
1095	SK04 (中世 土器)	土器	壺	9.15	5.25	1.50	内: SYR7/4にない白土 外: 1.5YR7/3にない白土	密	良	ナデ	ナデ	大型土坑上層
1096	SD02 (中世 土器)	土器	壺	13.90	7.35	2.75	内: 2.5YR7/3にない白土 外: 1.5YR7/4にない白土	密	良	ナデ	ナデ	
1097	SK07	中世 土器	壺	11.10	6.18	2.10	内: 2.5YR7/3白土 外: 10YR7/4にない白土	密	良	板ナデ ナデ	ナデ	
1098	SK07	中世 土器	壺	10.60	5.45	2.50	内: 10YR7/3にない白土 外: 10YR7/4にない白土	密	良	板ナデ ナデ	ナデ	

品番 番号	造形 グリッド	分類	樹種	流量(cm)			色調	胎土	焼成	成形及び器皿調整		備考(支撑など)
				口径	底径	高さ				内面	外面	
1099 SK07	中世 土瓶器	直	10.60	5.90	2.25		内:10YR7/4にぶい黄橙 外:10YR7/4にぶい黄橙	密	良	横ナデ 横ナデ	横ナデ	
1100 P04	中世 土瓶器	直	(9.40)	(8.40)	2.10		内:7.5YR7/8橙～10YR7/4にぶい黄橙 外:7.5YR7/8橙～10YR7/4にぶい黄橙	密	良	横ナデ 横ナデ	横ナデ	
1101 P13	瓦質	鉢	(29.40)	-	(4.00)	内:N4/0灰 外:N4/0灰		やや密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口唇部に波状文
1102 SK09	珠洲	壺	(76.00)	-	(9.30)	内:7.5Y/1灰 外:N4/0灰	密	良	ロクロナデ 当て具痕	ロクロナデ タキナ		
1103 区画溝2	珠洲	壺	(73.20)	-	5.80	内:7.5Y/1灰 外:7.5Y/1灰～8YR2/1黒	密	良	ロクロナデ	ロクロナデ		
1104 SBO4 (P333)	珠洲	壺	(43.00)	-	(7.50)	内:9YR7/8灰 外:7.5Y/1灰	密	良	ロクロナデ	ロクロナデ		
1105 SBO4 (P333)	珠洲	鉢	(18.80)	-	(6.70)	内:N3/0暗灰 外:7.5Y/2灰	密	良	回転ヘラ削り後 ロクロナデ	回転ヘラ削り後 ロクロナデ		
1106 区画溝1	珠洲	鉢	(24.00)	-	(8.90)	内:N3/0灰 外:N3/0灰	密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	区画溝1本	
1107 SX02	越前?	短縄壺	(8.80)	-	(3.60)	内:7.5Y/4にぶい黄 外:7.5Y/4にぶい黄	密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	東南溝上層	
1108 合成器	織錦	ビンディング	-	-	(3.40)	内:7.5Y/2灰白 外:7.5Y/2灰白	密	良	ロクロナデ	ロクロナデ	織付け	

別表7 新鮮市場地区 玉類観察表

品番 番号	造形 グリッド	胎土	種類	流量(mm)			石材	形態	色調	工程	施溝・穿孔 困惑	
				全量	最大幅	最大厚						
3007 SK42		曾玉系石材	柱	68.5	40.0	34.0	88.0	緑色凝灰岩	不整形体	緑	石様の成形(方形体)	
3008 SK04		曾玉系石材	柱	65.0	45.0	35.0	75.0	緑色凝灰岩	不整形体	緑	石様の成形(未完成)	
3009 SK04		曾玉系石材	片割	26.0	22.0	18.0	1.8	緑色凝灰岩	方形容体	緑	施溝分割	施溝2本
3010 SK04		曾玉系石材	片割	35.0	19.5	13.5	9.5	緑色凝灰岩	長方形容体	緑	施溝分割+研磨(子石柱)	施溝1本
3011 SK19		曾玉系石材	片割	27.0	8.6	18.0	2.3	緑色凝灰岩	長方形容体	緑	子石柱-長方形容体(縦・横)	施溝1本+施溝途中?
3012 GK11		曾玉系石材	柱	23.0	5.2	5.2	0.7	緑色凝灰岩	長方形容体	墨緑	押圧削除+施溝分割(緑)	施溝1本
3013 SK11 ①層		曾玉系石材	柱	16.2	8.0	8.0	0.8	緑色凝灰岩	長方形容体	緑	施溝分割+押圧削除(緑)	施溝1本+施溝途中?
3014 S202 ②層 (雨漏れ)		曾玉系石材	柱	17.2	8.9	8.8	1.2	緑色凝灰岩	長方形容体	黄緑	施溝分割(緑)	施溝1本
3015 SK19		曾玉系石材	柱	12.5	9.5	7.5	1.1	緑色凝灰岩	方形容体	緑	施溝分割(緑・横)	施溝2本
3016 GK11		曾玉系石材	柱	15.2	5.1	4.2	0.4	緑色凝灰岩	長方形容体	墨緑	施溝分割+押圧削除	施溝3本
3017 SK11		曾玉系石材	柱	9.0	5.5	4.1	0.3	緑色凝灰岩	長方形容体	緑	施溝分割+研磨(緑)	施溝2本
3018 SK11		曾玉系石材	柱	7.2	5.5	5.0	0.3	緑色凝灰岩	方形容体	緑	施溝分割	施溝1本+施溝途中?
3019 SK11		曾玉系石材	柱	11.1	4.5	3.5	0.2	緑色凝灰岩	長方形容体	黄緑	施溝分割(緑)	施溝1本
3020 SK11		曾玉系石材	柱	19.5	4.2	3.5	0.2	緑色凝灰岩	長方形容体	緑	施溝分割+押圧削除(緑)	施溝3本 逆溝途中? みぶなしで施か?
3021 SK11		曾玉系石材	柱	10.5	6.0	6.2	0.5	緑色凝灰岩	長方形容体	墨緑	施溝分割(緑)	施溝2本
3022 SK48		未成品曾管	柱	14.0	4.5	4.1	0.4	緑色凝灰岩	多角柱体	緑	研磨加工途中	施溝1本
3023 SK19 ⑤層 (雨漏れ)		未成品曾管	柱	3.0	3.0	3.0	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	黄緑	研磨加工途中	研磨加工途中
3024 S202 ⑥層 (雨漏れ)		未成品曾管	柱	7.9	3.1	2.2	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	墨緑	研磨加工途中	全体的に風化
3025 GH19		未成品曾管	柱	9.0	2.5	2.0	0.1	緑色凝灰岩	(多角柱体)	淡緑	研磨加工途中	研磨の一方向を中心としている (用途不明)
3026 GH48		未成品曾管	柱	6.8	3.0	3.0	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	緑	研磨加工途中	
3027 SK11		未成品曾管	柱	6.0	3.5	3.0	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	墨緑	研磨加工途中	
3028 SK19 ①層		未成品曾管	柱	2.0	2.5	2.0	0.0	鐵石英	多角柱体	赤	研磨加工途中	
3029 S202 ④層 (雨漏れ)		未成品曾管	柱	6.5	3.5	3.0	0.1	緑色凝灰岩	研磨完成	墨緑	研磨加工途中(仕上げ)	穿孔途中
3030 GH48		未成品曾管	柱	7.9	2.7	2.3	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	黄緑	研磨加工途中	穿孔跡有
3031 S202 ④層 (雨漏れ)		未成品曾管	柱	7.0	3.0	2.8	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	墨緑	研磨加工途中	穿孔途中
3032 GH19 ①層		未成品曾管	柱	4.8	2.8	1.5	0.0	緑色凝灰岩	ほぼ完成	緑白	研磨加工+穿孔(仕上げ)	
3033 GH19 ①層		未成品曾管	柱	4.2	3.0	2.2	0.0	緑色凝灰岩	ほぼ完成	緑	研磨加工+穿孔(仕上げ)	
3034 GH19 ②層 (雨漏れ)		曾玉(研机)	(4.8)	2.4	(2.0)	0.0	緑色凝灰岩	完成品(硬被)	緑	研磨ぼけ終了 売孔途中?		
3035 S202 ④層 (雨漏れ)		未成品曾管	柱	10.0	4.5	3.0	0.2	緑色凝灰岩	多角柱体	墨緑	研磨加工途中	研磨に研磨跡? 施溝跡?
3036 S202 ④層 (雨漏れ)		未成品曾管	柱	(6.8)	3.0	2.5	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	墨緑	研磨加工途中	研磨に研磨した跡が見られる
3037 SK19 ③層		未成品曾管	柱	7.5	3.5	2.5	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	墨緑	研磨加工途中	
3038 GK11		未成品曾管	柱	(6.5)	3.0	3.0	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	墨緑	研磨加工途中	
3039 P221		未成品曾管	柱	7.0	3.0	2.8	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	墨緑	研磨加工途中	研磨に済らしき跡跡
3040 SK19		未成品曾管	柱	14.0	3.1	3.0	0.2	緑色凝灰岩	多角柱体	墨緑	研磨加工途中	
3041 SK11		未成品曾管	柱	15.5	3.0	2.5	0.2	緑色凝灰岩	多角柱体	緑	研磨加工途中	
3042 SK11		未成品曾管	柱	16.2	2.8	2.8	0.1	緑色凝灰岩	研磨完成	緑	研磨加工+穿孔途中(仕上げ)	両端から穿孔

規数 番号	直標 グリッド	部位	種類	法量(mm)				石材	形態	色調	工程	底溝・穿孔 備考
				全長	最大幅	最大厚	重量(g)					
3043	SZ02 (直周溝)	未成品管玉	(3.5)	2.9	(1.4)	0.0	緑色凝灰岩	ほぼ完成	球	研磨加工途中(仕上げ)	穿孔済(両端から)	
3044	SZ02 (直周溝)	②層	未成品管玉	8.0	3.0	2.0	0.1	緑色凝灰岩	多角柱体	濃緑	研磨加工途中(仕上げ)	穿孔途中
3045	SK11	未成品管玉	(8.0)	3.0	2.8	0.1	緑色凝灰岩	僅く完成	球	研磨加工途中(仕上げ)	穿孔済	
3046	SZ02 (直周溝)	管玉(破損)	9.0	3.0	(1.5)	0.0	緑色凝灰岩	多角柱体	淡緑	完成品	全体的に黒化	
3047	SK19	管玉	10.5	2.6	2.3	0.1	緑色凝灰岩	完成品	淡緑	完成品	使用済は見られず	

別表8 新鮮市場地区 石製品観察表

規数 番号	直標 グリッド	部位	種類	法量(mm)				石材	形態	色調	備考	
				全长	最大幅	最大厚	重量(g)					
3048	SZ01 (直溝)	石針素材剥片	44.5	47.0	13.0	26.166	安山岩	不整形			素材剥片	自然面あり
3049	SK19	未成品石針	17.0	8.0	6.0	1.349	安山岩	長方形体			施溝3	
3050	SK11	未成品石針	20.0	7.0	6.0	0.81	安山岩	長方形体			施溝3?	側面に施溝?
3051	SK11	未成品石針	1.6	8.0	0.4	0.074	安山岩	長方形体			施溝2	
3052	SK11	未成品石針	9.0	7.0	4.1	0.37	安山岩	長方形体			施溝1?	
3053	SK11	未成品石針	12.5	4.0	4.0	0.292	安山岩	長方形体			施溝2	
3054	SK11	未成品石針	12.0	4.0	3.0	0.173	安山岩	長方形体			施溝1	一面研磨
3055	SK11	未成品石針	11.5	3.0	2.0	0.062	安山岩	長方形体			施溝1	二面研磨
3056	SK11	未成品石針	11.0	3.0	2.0	0.079	安山岩	長方形体			施溝1	
3057	SK11	未成品石針	7.0	3.2	2.6	0.095	安山岩	長方形体			施溝2	
3058	SK11	未成品石針	10.5	3.0	1.7	0.092	安山岩	長方形体			施溝1	
3059	SK19	未成品石針	9.5	2.5	2.0	0.085	安山岩	長方形体			施溝1	
3060	SK11	未成品石針	11.0	4.0	3.2	0.182	安山岩	長方形体			施溝3	
3061	SK11	未成品石針	11.0	4.0	2.5	0.121	安山岩	長方形体			施溝4	
3062	SK11	未成品石針	8.5	2.0	1.5	0.037	安山岩	三角柱体			施溝1?	
3063	SK11	未成品石針	7.0	2.2	1.9	0.049	安山岩	三角柱体			全面研磨	
3064	SK19	未成品石針	9.0	1.5	1.5	0.046	安山岩	四角柱体			施溝3	
3065	SK11	未成品石針	8.0	1.6	1.2	0.03	安山岩	長方形体			施溝1	
3066	SK11	未成品石針	5.0	2.2	1.5	0.033	安山岩	長方形体			施溝3	
3067	SK11	未成品石針	7.0	1.0	1.0	0.018	安山岩	多(四)角柱体			研磨加工途中	
3068	SK11	未成品石針	6.0	1.2	1.0	0.015	安山岩	四角柱体			研磨加工途中	
3069	SK11	未成品石針	6.6	1.1	1.1	0.024	安山岩	多角柱体(仕上げ)			研磨加工途中	
3070	SK11	未成品石針	3.6	1.6	0.9	0.012	安山岩	多角柱体(仕上げ)			研磨加工途中	
3071	SK11	未成品石針	10.5	0.8	0.8	0.015	安山岩	多角柱体			研磨加工途中	
3072	SK11	石針	7.0	0.8	0.8	0.012	安山岩	完成品(使用)			先端 平鋸状	
3073	SK11	石針	6.8	0.7	0.6	0.007	安山岩	完成品(使用)			先端 平鋸状	
3074	SK11	石針	2.8	1.0	0.8	0.005	安山岩	完成品(使用)			先端 ストロー形状	
3075	SK11	根状工具	11.0	5.0	2.5	0.12	ムラカミ	三角柱体			先端つぶれしている	
3076	SK19	根状工具	12.5	3.9	2.9	0.18	ムラカミ	長方形体			先端つぶれしている	
3077	SZ01 (直周溝)	石板(玉盤)	48.5	15.0	0.4	3.81	珪化木	長方形(中部)			刃部一片削のみ	
3078	SK11	石板(玉盤)	22.2	7.2	0.4	0.77	珪化木	長方形(小部)			刃部一片削側で使用	
3079	SD17	石板(玉盤)	34.0	9.1	0.3	1.03	絆晶片岩?	三角形状			刃部一片削のみ	
3080	SB01 (P243)	鉢石	(9.0)	52.0	3.1	177.88	凝灰岩				通り-5面	
3081	X19×23 Ⅲ層	紙石	58.0	38.5	1.1	34.17	凝灰岩				紙面-1面	
3082	SD01 (直周溝)	石包丁	(51.0)	(33.0)	9.0	35.74	砂岩				刃部一 俊用底あり 部分的に製作過程での研磨あり	
3083	SK42	石包丁	(48.0)	(48.0)	11.0	19.42	砂岩				穿孔-両端から回転穿孔	
3084	P223 ①層	石包丁	(18.0)	(41.0)	8.5	7.24	砂岩				穿孔-両端から回転穿孔。裏面に若干研磨跡あり(製作加工)	
3085	SD10 (直周溝)	石盤	24.0	(14.0)	2.5	0.85	安山岩				至一無玉、弱凹凸 製作一画面接觸調整 急斜面接	
3086	SZ01 (直溝)	①層	石盤	32.0	22.0	5.0	2.39	安山岩			至一無玉、平基 製作一画面接觸調整 緩斜面接	

第6章 自然科学分析

第1節 高岡市石塚遺跡の噴砂と堆積物の考古地磁気研究

富山大学理学部 酒井英男, 松延礼佳, 香頭明日香

1. はじめに

自然科学が考古学に貢献する重要な研究テーマは年代推定である。 ^{14}C 年代推定法が一般的に知られているが、日本では地磁気変動を用いる年代推定法も利用できる。本稿では、石塚遺跡（図1）において、平成17年度の発掘により現れた噴砂に、地磁気年代推定法を適用した結果を報告する。

2. 研究方法

地磁気年代推定

土壤や岩石に含まれている磁性鉱物である磁鉄鉱や赤鉄鉱は残留磁化を担う性質がある。そのため、火山岩は噴火後の冷却時に、遺跡の焼土や遺物は高温までの加熱や焼成後の冷却過程に、地磁気の方向へ残留磁化を獲得する。この残留磁化は、再び加熱を被ったり移動したりしなければ数百万年経っても変化は少なく安定に保存される。それ故、火山岩や考古学試料の残留磁化を読みとることで、過去の地磁気が研究できる。そして研究データの蓄積により、地磁気変動を明らかにすることができます。

富山大学では、広岡公夫名誉教授を中心として日本国内の遺跡において地磁気の研究を進め、主に窯跡の焼土や土器を用いて、過去20000年間における地磁気の方向（偏角と伏角）と強さの変動を研究してきた（図2）。得られた詳細な地磁気変動は、年代推定の方法として利用できる段階となっている。そして年代の不明な遺構では、焼土や上層の磁化を地磁気変動と対比することにより年代の検討が実施され、遺構の保存条件が良い場合には数10年の精度で年代推定が可能となっている。

従来の研究は、西南日本の特に近畿地域の遺跡の焼土について多数行われてきた。最近、地磁気変動には地域による差があることが、北陸や東海地方での研究が進むにつれてわかつてきた。こうした地磁気変動の地域による特徴が明らかになれば、年代推定法の精度は更に向かうと期待される。

噴砂の研究

水中に堆積する土壤にも磁性鉱物が含まれており、堆積した当時の地磁気の方向に残留磁化を獲得する。加熱を受けた試料に比べて磁化の強さは弱いが、堆積後に乱れる等なければ、残留磁化は安定に保存される。近年、磁力計の測定精度が向上したことにより、堆積物も地磁気研究の対象となってきた。

地震の際に、地盤が液状化することにより、地中の土砂が地下水と共に地表に吹き出したものが噴砂である。噴砂は、地下での液状化現象の発生、つまり地盤を裏付けるひとつの情報となるので災害の研究において重要な対象である（寒川, 1999）。液状化の状態から噴砂が地表へ噴出して形成される時、噴砂に含まれる磁性鉱物は地磁気の方向に残留磁化を獲得すると考えられる。我々は、噴砂の磁化を用いて過去の地震の年代や地盤の変形を研究できると考え、噴砂が報告された幾つかの遺構や露頭での研究を進めている（酒井他, 1998, 2006b, 2007a, 2007c等）。過去の液状化および地震の貴重な研究対象である噴砂は、年代推定が容易でなく遺構との切り合いに基づく年代も不明瞭な場合が少なくない。残留磁化を用いる年代推定法が確立できれば、その意義は大きい。

3. 噴砂の研究試料の採取と実験の概要

石塚遺跡は、高岡市中央部の石塚・上北島・福田地区にまたがり、庄川扇状地末端の標高約10メートルの微高地に位置する（図1）。1986年から高岡市教育委員会により発掘調査が続けられており、その結果、同遺跡は、弥生時代中期・古墳時代前期～中期・古代～近世までの長期にわたる複合遺跡である事が判明した。2005年度の調査では、西側の新鮮市場地区から弥生時代中期の平地式建物や方形周溝墓・大型土坑等が発掘された。そして噴砂の噴出が広範囲に広がることが認められた。本研究の噴砂の調査は、図1のサイト TH01 とサイト TH21 と名付けた地域において行った。サイト TH01 は造構 SK304 のほぼ東西方向の垂直な露頭面に設定しており、7個の定方位試料を10ccのプラスチックキューブケースにより採取した。サイト TH21 は造構 SX402 および近傍に設定し、発掘面の噴砂の範囲から10数個の定方位試料をプラスチックケースで採取した。図3には噴砂の分布と採取地点を写真で示している。

実験では、まず全試料について自然残留磁化（natural remanent magnetization: NRM）を測定した。その後、二次的な磁化を除くための交流消磁実験を行った。消磁は、段階的に磁場の強さを上げて二次磁化の除去を検討しながら行い、30mT(mT: milli tesla, 磁場強度の単位)の磁場段階まで実施した。また、試料の帯磁率と帯磁率異方性の測定も行った。残留磁化の測定および段階交流消磁実験は、富山大学のバスルー型超伝導磁力計(2G Enterprises社: 760R)を使用して行った。帯磁率とその異方性の測定には、AGICO社製のKappa bridge (KLV-3S)を用いた。

以上の研究方法の詳細は、酒井他（2006a, 2007b, 2007d等）に示しているので参照されたい。

4. 実験結果と結果の検討

段階交流消磁実験

図4には、交流消磁実験の例をザイダーベルト図（Zijderveld, 1967）として示している。プロットがほぼ直線上で原点に向かっていることは、残留磁化は安定であり、二次磁化が少ないことを示している。各試料の実験結果では、サイト TH21 の試料はサイト TH01 の試料よりも二次的な磁化は少なかった。消磁実験で安定な残留磁化が得られた試料のデータを平均して、各サイトの残留磁化方向を求めた。表1に、実験結果をまとめている。また、図5には、残留磁化方向をショミットネット図に示している。両サイトの磁化は、ほぼ同じ方向にあることがわかる。

サイト名	偏角 (°)	伏角 (°)	α_{95} (°)	磁化強度(Am ² /kg)	個数
TH01:	-14.4	51.5	2.4	5.48×10^{-6}	5
TH21:	-12.1	52.2	2.5	1.76×10^{-6}	10

表1 各サイトの噴砂の残留磁化（磁化強度は自然残留磁化の値を示す）

帯磁率と帯磁率異方性

帯磁率の測定ではサイト TH21 がサイト TH01 より僅かに大きい帯磁率を示した。表1の残留磁化強度もサイト TH21 の方が強いので、噴砂の磁性鉱物量あるいは粒度に、噴砂の噴出場所による違いがあると考えられる。帯磁率の異方性的解析では、両サイト共に、異方性の主軸が集まる有意な異方性は認められなかった。帯磁率と帯磁率異方性は噴砂の形成状況と関係するので、今後の重要なパラメータと考えられる。

噴砂の考古地磁気年代推定

各サイトの磁化方向を当時の地磁気の記録として、地磁気変動との対比により年代推定を行った。その際には近年、北陸地域の研究から得られた地磁気変動（広岡, 1997）を比較する対照として用いることにした。図6のシムミットネットの拡大図に、AD700年からAD1100年までの変動を曲線で示している。図2の、主に西南日本で研究された変動とは、緯度による影響も含まれる違いがある。北陸地域の研究には図6の変動曲線の方が適している。

図5において、各サイトの磁化方向は平均を黒丸で示し、誤差範囲(95%の信頼角)の平均を開む円で示している。地磁気変動曲線との対比では、TH01(SK304)とTH21(SX402)の年代は、A.D. 750年からA.D. 970年の範囲と推定された。考古学的な調査から、TH01(SK304)の噴砂は、弥生時代中期の遺構を壊し、中世の土坑に削平されているので、噴砂の地磁気推定年代は妥当である。そして地磁気年代からは、サイト TH21(SX402)の噴砂もほぼ同時代の形成と推定される。

富山県内において、從来知られている地震としては、貞觀地震（A.D. 863年）、天正地震（A.D. 1586年）、安政地震（A.D. 1858年）がある。今得た年代では、噴砂は貞觀地震の時代に噴出したと考えられる。理科年表より、A.D. 416年からA.D. 1185年までの期間に富山県の近傍で発生した地震を調べても貞觀地震以外に想定される地震は考え難い。以上のことから、石塚遺跡に噴砂を発生して被害を及ぼしたと想定される地震は、A.D. 863年の貞觀地震であった可能性が高いと考える。

5.まとめ

高岡市石塚遺跡において、過去の地震の際に地盤の液状化により噴出した噴砂の残留磁化を研究した。地磁気変動から検討した結果、噴砂が磁化を獲得した年代はA.D. 750~970年と推定された。この地磁気推定の年代には、富山県で報告されている地震として、AD863年の貞觀地震がある。噴砂の地磁気年代からは、石塚遺跡に影響した地震は貞觀地震である可能性が高いと結論する。

参考文献

- Hirooka, K. (1971): Archaeomagnetic study for the past 2,000 years south west Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ. ser. Geol. & Mineral., 38, 167-207.
- 広岡公夫 (1997)：北陸における考古地磁気研究「中・近世の北陸－考古学が語る社会史－」，北陸中世土器研究会編，桂書房，560-583.
- Sakai, H. and K. Hirooka (1986): Archaeointensity determinations from western Japan, J. Geomag. Geoelectr., vol.38, 1323-1329.
- 酒井英男・広岡公夫 (1983): 古地磁気・岩石磁気からみた所層運動, 月刊地誌, 7, 394-398.
- 酒井英男・金井友里・岸田 翔 (2006 a): 富山市打山遺跡の焼土の古地磁気測定, 富山市打出遺跡発掘調査報告書－一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告, 富山市埋蔵文化財調査報告7, 富山市教育委員会, 170-178.
- 酒井英男・正和紗久里・岸田 翔・伊藤 孝・飯田 雄 (2006 b): 噴砂や断層近傍の土壤の磁化特性の研究－ベットボトルによる液状化の実験と古地磁気の年代推定, 立山カルデラ研究紀要, 第7号, 立山カルデラ砂防博物館, 31-36.
- 酒井英男, 山本雄治, 不破裕司, 酒井秀治(2007 a):対屋II遺跡の洗土と噴砂の考古地磁気研究, 江別市対屋2遺跡(9), 北海道埋蔵文化財センター調査報告書, 第240, 北海道埋蔵文化財センター, 191-194.

- 酒井英男・松延礼佳・岸田 薫・菅頭明日香・岡田一太（2007 b）：矢張下島遺跡で発掘された焼土と焼石の磁気の研究、『矢張下島遺跡調査報告』「南砺市埋蔵文化財調査報告書18」、29-42。
- 酒井英男・松延礼佳・岸田 薫・伊藤 孝・野垣好史（2007 c）：富山市小出城遺跡に現れた小断層の考古地磁気研究、『富山市小出城跡発掘調査報告書』、富山市埋蔵文化財調査報告14、富山市教育委員会、59-62。
- 酒井英男・松延礼佳・伊藤 孝・野原大輔（2007 d）：砺波市久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気による年代推定、「久泉遺跡発掘調査報告III」、砺波市教育委員会
- 寒川 旭（1999）：地盤考古学—遺跡が語る地震の歴史ー、中公新書、pp251。
- Zijderveld, J.D.A. (1967) : A.C. demagnetization of rocks-analysis of results, Methods in Paleomagnetism, edited by Collinson, D.W., Creer, K.M. and Runcorn, S.K., New York, Elsevier, 254-286

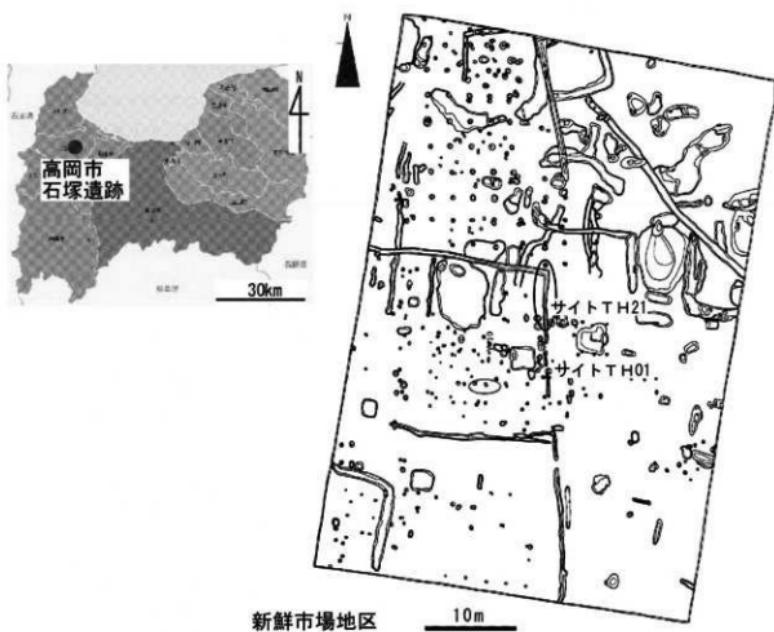


図1 高岡市石塚遺跡の位置、噴砂の資料採集地点

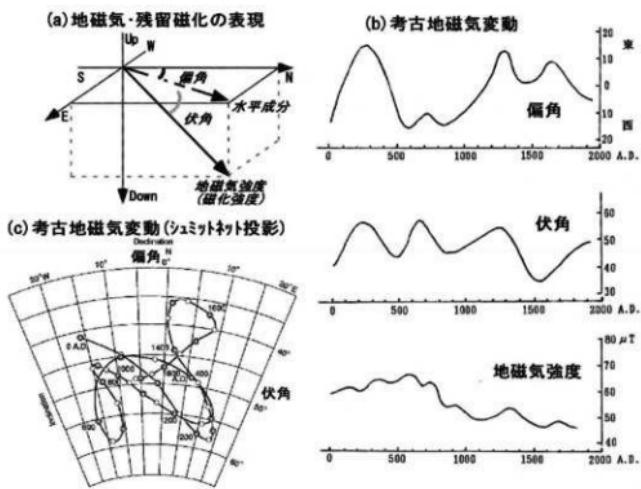


図2 (a) : 地磁気の3成分である偏角、伏角と地磁気強度 (b) : 地磁気3成分の過去2000年間の変動
(c) : 地磁気方向（偏角と伏角）の変動を、拡大したシュミットネット上で曲線として表示している

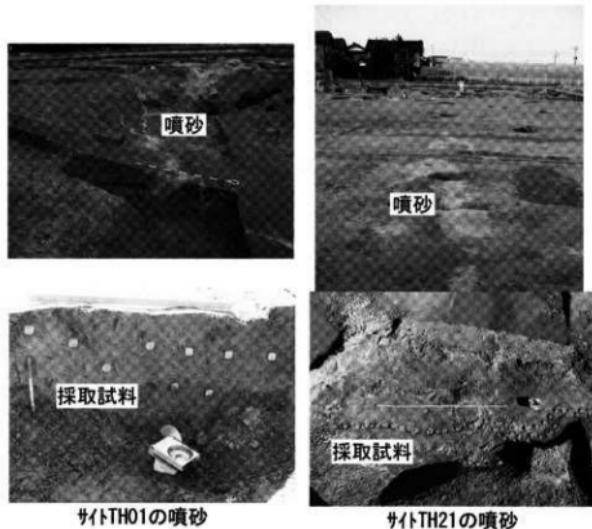


図3 噴砂の様子と試料採取地点

TH21 No. 033

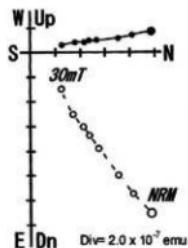


図4 交流消磁実験の例をザイダーベルト図に示している。黒丸は残留磁化の水平成分、白抜き丸は鉛直成分の方向を示す

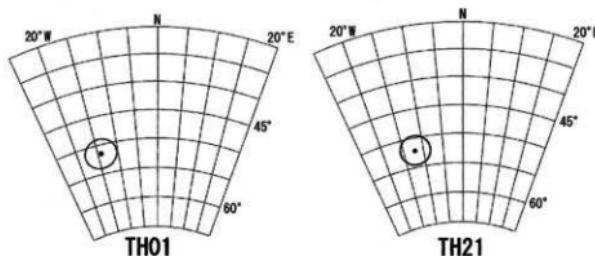


図5 各サイトの消磁後の残留磁化方向を示す。

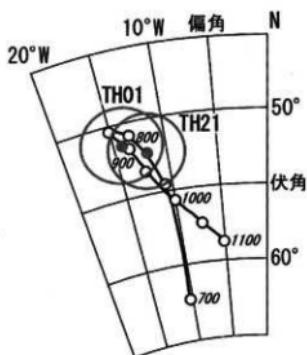


図6 サイト TH01 と TH21 の磁化方向と北陸版の地磁気変動との対比

第2節 高岡市石塚遺跡における噴砂を対象とした地中レーダ探査

富山大学大学院理工学研究科 岸田 徹

1. はじめに

石塚遺跡は富山県高岡市に所在し(図1)、庄川扇状地末端の標高約10mの微高地に立地している。同地域は、庄川と小矢部川が形成する扇状地であり、藤井・相馬(1971)によれば、砂、粘土、礫を主とする扇状地堆積物が主に分布している。

高岡市教育委員会により継続的に発掘調査が行われており、弥生時代中期の住居跡や大型土坑、装身具に使われた菅玉のかかけら、及び古墳時代初期の前方後円墳、方墳などが発掘されている。さらに、中世の遺構として、溝に囲まれた大型掘建住建物跡も複数発掘されており、大規模な集落があったとみられる。2005年度に行われた第27次と28次の発掘調査では、地裏による液状化の痕跡(噴砂)が認められた(図2)。

従来、噴砂を対象とした探査の研究は殆ど行われていないが、我々は地中レーダ探査を用いた研究により、噴砂の規模や噴出の様子を非破壊で把握することを試みている。2006年度に富山市背戸割遺跡で行った探査では、深度約1.8mの砂層を供給源として噴出した噴砂の様子を明瞭に捉えることができた(図3)。

本稿では石塚遺跡で見つかった噴砂跡を対象として行った探査の結果を報告する。噴砂が地中からどの様に噴出しているのか(砂脈の様相)及びその噴出深度(砂の供給層の深度)を探る目的で地中レーダ探査を実施した。

2. 探査の概要

探査は2005年11月に実施した。使用した装置は、Noggin plusとスマートカートシステムである。アンテナ周波数は250MHzと500MHzを用いた。遺構面上の南北10m、東西20mの範囲に探査区を設定し、各測線の間隔は0.5mとした。測線での測点間隔は、250MHzアンテナでは5cm、500MHzアンテナで2.5cmである。

探査深度の推定に必要なレーダ波の地中伝搬速度(v)は、Hyperbola fitting法を用いて求めた(Moldoveanu-Constantinescu and Stewart, 2004)。その結果、 $(v) \approx 0.06 \text{ m/ns}$ と求まり、本研究では、この値を適用し深度の解析を行った。

解析においては、レーダ波の往復に要した時間(伝搬時間)と反射波の強度を記録して測定順に並べた地下の疑似的な断面図(GPR profile)と共に、Time slice図法による三次元解析も行った(Conyers and Goodman, 1997)。この図法では、三次元で整理した解析結果をもとに、反射の強弱を色分けしながら様々な深度での平面図を作成し、異常応答の変化を検討する。Time slice図法は探査対象の平面分布や形状を検討する上で有効な解析手法である。

図4に探査範囲と代表的な測線の位置を示す。図中の黄色で示す部分に噴砂が認められた。噴砂は北東・南西方向に伸びると推定されたが、肉眼では確認できない。また、探査時には、遺構は完掘されており、噴砂の範囲の北東側は、発掘による凹凸があって、探査は困難であった。そのため、遺構の少ない南西側を中心に行い、南西方向への広がりを捉えることにした。

3. 探査結果

図5に代表的なGPR profile(LINE1)を示す。左の図は周波数250MHzで得られた結果であるが、測線距離

約10mの地点に、地表～深度約1mまで続く異常応答が捉えられた。同地点は遺構面で噴砂が認められた地点と一致しており、この異常が噴砂と考えられる。右の図は周波数500MHzによるGPR profileであるが、同様に、約10m地点で噴砂を示す異常応答がある。また、同結果において、深度0.5～1mにかけて起伏を持つ上層構造が認められた。噴砂はこの厚さ0.5～0.8mの地層を突き破るように噴出している様子が認められた。

図6は周波数500MHzのアンテナで得たGPR profileから作成した異常応答の三次元分布図(Time slice図)である。地表面から深度30cmまでは噴砂を示す異常応答(赤線で囲んだ部分)は南北方向に断続的に続いている様に見える。しかし、深度30～45cmでは噴砂を示す強い異常は東側だけに認められる。これは西側に認められた噴砂は地中から噴出しているのではなく、噴出した噴砂が当時の地表に溜まっていたものと考えられる。また、同深度及び、より深い領域では、噴砂以外の強い異常応答も認められる。これは、前述の様に、地中の土層構造(粘性土層)は成層構造でなく、凹凸(起伏)を持つ構造で延びているため、スライス面では、各解析深度に対応して、部分的反応として現れたのである。深度75～90cmの面では噴砂と考えられる顕著な異常応答は認められない。そのため、この深度の面が噴砂の供給層である砂の層を示していると推測される。

4.まとめ

発掘調査により認められた噴砂を対象に、地中レーダ探査を用いて、地下での分布と噴出状況を探った。その結果、噴砂は探査を実施した面より約1m深度から噴出していることが判明した。また、遺構面で認められた一部の噴砂は、地中より噴出したものではなく、噴砂が地表に堆積した砂溜まりであると考えられた。

従来、地震(噴砂)被害に関する研究は、文献史学からのアプローチによる研究が主であり、直接的に遺跡、遺構を対象とする考古学の立場からの研究は少ない。その理由は、部分的なトレンド調査では、災害の痕跡を広範囲で検出する事は容易でなく、被災状況を遺跡全体で把握することは難しいためである。しかし非破壊の地中レーダ探査を利用することで、噴砂の状況を広範囲で把握できることが可能であると考える。

自然災害(地震、火山、大雨・洪水等)による被害を受けた痕跡が遺跡で認められることは多く、考古学研究において自然災害が人々に与えた影響は重要な研究課題となってきた。地中レーダ探査による、噴砂の噴出範囲、深度の推定に、磁化特性による年代推定(酒井他, 2006)を加え、さらに発掘結果、遺物の年代や遺構の切り合ひ関係等の考古情報と併せた研究方法は、今後、災害考古学の新たな手法として大いに利用できると考える。

参考文献

- Conyers, L. B. and Goodman, D. (1997): Ground-penetrating radar: An introduction for archaeologists, Altamira press, 232p.
- 藤井昭二, 加馬恒雄(1971): 土地分類図(表層地質図-平面的分類図), 富山県, 武揚堂, 1p.
- 岸田徹, 酒井英男(2005): 富山市打出遺跡における噴砂の地中レーダ探査, 富山市打出遺跡発掘調査報告書, 富山市埋蔵文化財センター, 167-169.
- Moldovanu-Constantinescu, M. and Stewart, R. (2004): 3D ground penetrating radar survey on a frozen river lagoon, *SGRG Recorder*, 32, 34-36.
- 酒井英男, 岸田徹, 不破裕司, 山本謙治(2006): 富山市四方舟戸割遺跡で検出された噴砂の考古地磁気と地中レーダ探査による研究, 富山市四方舟戸割遺跡発掘調査報告書――般国道415号線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告――富山市埋蔵文化財調査報告, 11, 富山市教育委員会, 75-77.
- 酒井英男, 正和紗央里, 岸田徹, 伊藤孝, 鈴木葉(2006): 噴砂や新層近傍の土壤の磁化特性の研究―ベットボトルに

上の液状化の実験と古地震の年代推定、立山カルデラ研究紀要第7号、立山カルデラ砂防博物館、31-36。
寒川旭(1992): 地震考古学、中公新書、251p.



図1 石塙遺跡の位置



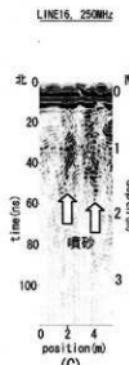
図2 発掘調査により認められた噴砂



(A)



(B)



0 2 4
position(m)

(C)

図3 富山市四方背戸割遺跡で見つかった噴砂、
及び地中レーダ探査結果。(A)遺跡の位置、
(B)発掘調査で見つかった噴砂写真、(C)地中
レーダ探査で捉えた噴砂の応答

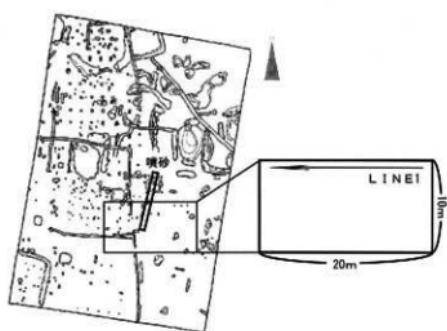


図4 噴砂の認められた場所及び地中レーダー探査範囲と代表的な測線の位置

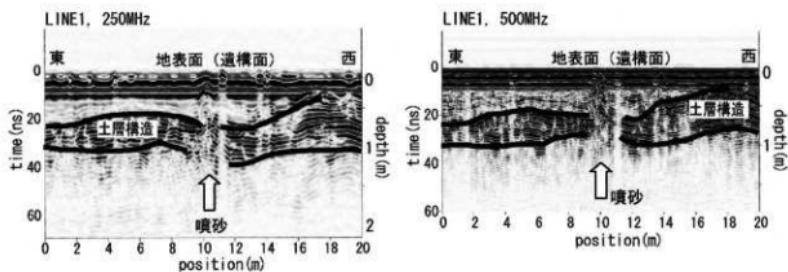


図5 LINE1におけるGPR profile. 左: 250MHzアンテナ. 右: 500MHzアンテナ.

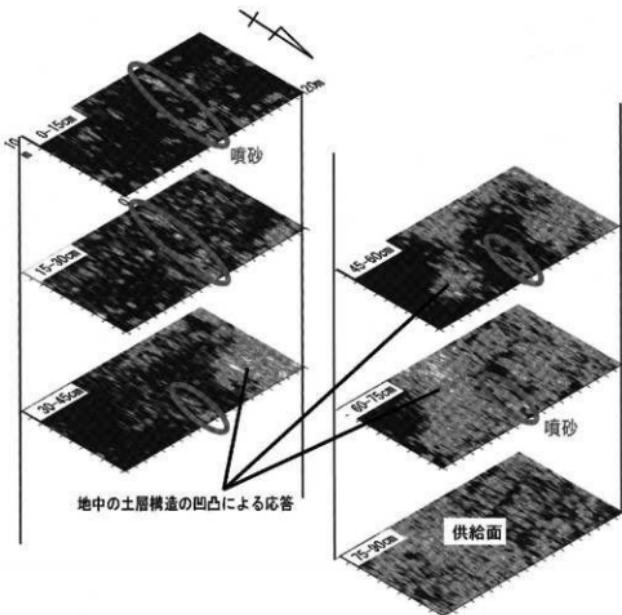


図6 地中レーダ探査による異常応答の三次元分布図

第7章 結語

1. 弥生時代中期

今回の調査において弥生時代中期中葉から後葉の遺構は、新鮮市場地区で検出した、周溝を持つ平地式建物1棟(S I O 1)、方形周溝墓2基(S Z O 1・O 2)、周溝状遺構1基(S X O 1)、周溝をもつ大型土坑3基(S X O 2~O 4)、土坑(S K O 6・1 9・2 6~3 0)などである。出土した遺物から判断して、それぞれの遺構を時期ごとに並べると、

S X O 4(8期併行) → S I O 1, S Z O 2, S X O 1~O 3, S K O 6・1 9・2 7~3 0・4 6(8期~9期併行) → S Z O 1(9期併行)

という順になる。7期併行の土器がS X O 4などから出土しているが、各自期の土器の出土量を検討すれば、7期併行の土器は混入したものと考えられ、今回の調査において検出した遺構の時期は、8期併行から9期併行にかけてのものである。

S I O 1とS Z O 1の新旧関係は、周溝の切り合い関係及び出土土器から判断して、S I O 1の廃絶後隣接地にS Z O 1が形成されていることが分かった。通常、集落においては居住地と墓域は明確に区別されるものと考えられるが、今調査においてその考えが一概には言えないことが判った。あくまで推測ではあるが、石塚遺跡内において同じ場所に複数の住居が検出された例が現時点ではないことから、生活の集団は極めて小規模であると考えられる。そして、生活を営んだ場所で死者がいると、死者をその地に埋葬し、生者は別の地へ、と言っても極近い場所へ移住を行うのが慣例だったのかもしれない。自然流路を挟んだ文苑堂地区では住居は確認できなかったが、同じ時期の土器が出土していることから、流路を挟んで西と東を交互に住み替えていたのかもしれない。あるいは、西と東では別々の小集団が生活を営んでいたのかもしれない。つまり、広範囲に及ぶ石塚遺跡において拠点と言われる中心地ではなく、小集団が小範囲の居住域を形成しながら転居を繰り返していたのではないかと考えられる。いずれにせよ、石塚遺跡はこの時期多くの人が生活できるほど住み良い環境ではなかったのではないかということは、住居や墓の検出例の少なさから想像する事は可能である。

次に、新鮮市場地区では玉作りを盛んに行っていた事も出土遺物から判った。ただ、今回出土したものは、完形の管玉1点を除き工具類や製作工程上で生じたものばかりであった。製作を行っていた以上その供給先は必然的に存在するわけであるが、現時点では近隣及び富山県内には確認されていない。この事は、仮に富山県内に拠点集落と言われるものがこの時期に存在していたのならば、石塚遺跡は拠点に物資を供給する衛星集落という機能を有していたのではないだろうか。しかし、管玉類などが単純に物々交換の代価として使用されていただけならば、拠点-衛星といった集落間の位置づけは意味を成さないということは言うまでもない。県内の同時期の遺跡として、近隣では射水市(旧新湊市)に所在する「高島A遺跡」や「作道遺跡」があげられる。両遺跡とも石塚遺跡との関係性が考えられる遺跡ではあるが、集落の性格を明確にするには、石塚遺跡同様まだ時間を要すると考えられる。

2. 中世(13世紀代)

中世では、新鮮市場地区西側の区画溝内に形成された獨立柱建物群である。自然流路西側に沿うように連続

並んでいた建物の中で一際目を引くのは大型柱建物で、近隣では類を見ないものである。少なくとも13世紀代に、このあたり一帯を治めていた一族の住居と考えられる。また、建替えがほとんどなく出土した遺物も時期的に限定できる事から、短期存続型であった事も言える。そうすると、「越中石黒党の福田二郎範高の子孫である在地領主層が倒幕運動にくみしたために所領を没収され幕府料所とされた」という1334年7月と記名のある「妙法院文書」の記述が目を引く。つまり、それまで権勢を誇っていた福田家が、倒幕運動の失敗により所領もろとも建物も取り戻しになってしまったと考えれば、この柱立柱建物群はまさに福田家のものと考える事は可能である。しかしながら、今回出土した遺物の時期が100年ほど古いことや、文字資料なども確認できなかった事から、当調査地を含む周辺が中世福田庄であると判断するには、更なる調査による根拠が必要である。

3.まとめ

以上、主だった2時期について調査成果を交えて所見を述べてみたが、どちらも断定をするには今後の発掘調査とそれに基づいた純然たる成果が必要であると痛感している。ただ、今回石塚遺跡において初めて5,700m²もの広範囲な調査を行ったことで、ある程度正確な遺跡の性格をつかむ事ができたと考えている。市道六家佐野線沿いは現在も様々な開発行為が行われており、今後も発掘調査が行われると思われる。石塚遺跡はもちろんの事、周辺の遺跡のさらなる調査成果を待って、今後石塚遺跡の集落についての詳細な検討を行いたいと思う。

引用・参考文献

- 石井清司 2005 「石針をさぐる」『季刊考古学 第94号 弥生・古墳時代の玉文化』株式会社雄山閣
- 石川考古学研究会 1999 『石川県考古資料調査・集成事業報告書 農工具』
- 石川考古学研究会 2001 『石川県考古資料調査・集成事業報告書 補遺編』
- 井上正昭・角崎大・財沢保 1989 『石動地域の地質』地域地質研究報告5万分の1地質図幅 金沢(10)第21号 通商産業省工業技術院地質調査所
- 上田尚美 1998 「富山県内の石包丁について」『富山考古学研究創刊号』(財)富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 上野章・上坂成次 1967 「高岡市石塚遺跡発掘調査概要」『オジャタ3』
- 越前 慶子 1996 「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』(財)富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 及川良彦 2005 「墓と伴生の敷跡」『宇津木向原遺跡発掘40周年記念シンポジウム記録集 方形周溝墓研究の今』
- 楳山林蔵・山岸良二編 株式会社雄山閣
- 岡田一広 2002 「佐野台地における弥生集落のありかた—石塚遺跡を中心として—」『第5回例会発表要旨集中部弥生時代研究会 弥生集落論』 中部弥生時代研究会
- 岡本淳一郎 1997 「周溝をもつ建物について」『埋蔵文化財調査概報-平成8年度-』(財)富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 岡本淳一郎 1998 「弥生時代周溝造構に關する一考察」『富山考古学研究 创刊号』(財)富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 岡本淳一郎 2005 「周溝をもつ建物の分類と系譜」『第11回例会発表要旨集中部弥生時代研究会 弥生建物の地域性と系譜』 中部弥生時代研究会

- 岡本淳一郎 2006 「岡津をもつ建物の分類と系譜」『下老子佐川遺跡発掘調査報告』(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡 I』
- (財) 石川県埋蔵文化財センター 2000 『金沢市 戸水C遺跡・戸水C古墳群 (第9次・10次)』
- (財) 石川県埋蔵文化財センター 2004 『小松市 八日市地方遺跡』
- (財) 石川県埋蔵文化財センター 2004 『加賀市猪籠遺跡』
- (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004 『京都府遺跡調査報告第35号 下狹野南遺跡II』
- (財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1994 『梅原前原遺跡発掘調査報告(遺構編)』
- (財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006 『下老子佐川遺跡発掘調査報告』
- 鈴木道之助 1991 『石器入門辞典 摘要』柏書房
- 高岡市史編纂委員会 1967 『高岡市史 上』
- 高岡市教育委員会 1982 『昭和56年度 高岡市埋蔵文化財調査報告書』
- 高岡市教育委員会 1986 『石塚遺跡—富山県高岡市石塚遺跡所在の弥生遺跡調査概報--』
- 高岡市教育委員会 1987 『高岡市埋蔵文化財調査概報第3号 石塚遺跡調査概報I－都市計画道路下伏間江・福田線建設に伴う昭和61年度の調査－』
- 高岡市教育委員会 1988 『石塚遺跡調査概報II』
- 高岡市教育委員会 1992 『1. 石塚遺跡、林地区: 『高岡市埋蔵文化財調査概報第18号 市内遺跡調査概報I－平成3年度、石塚遺跡、下佐野遺跡の調査－』
- 高岡市教育委員会 1993 『2. 石塚遺跡、森田地区』『高岡市埋蔵文化財調査概報第22号 市内遺跡調査概報III－平成3年度、柴野遺跡の調査他－』
- 高岡市教育委員会 1996 『高岡市埋蔵文化財調査概報第27号 石塚遺跡調査概報III－平成5年度高田地区的調査－』
- 高岡市教育委員会 1996 『高岡市埋蔵文化財調査概報第29号 石塚遺跡調査概報IV－平成5年度、旭建設地区、平成6年度、日本海ホーム地区的調査－』
- 高岡市教育委員会 1996 『2. 石塚遺跡、老子地区』『高岡市埋蔵文化財調査概報第30号 市内遺跡調査概報IV－平成7年度、石塚長光寺遺跡、石塚遺跡、中曾根遺跡の調査』
- 高岡市教育委員会 1997 『2. 石塚遺跡 正和地区』『高岡市埋蔵文化財調査概報第35号 市内遺跡調査概報V－東木津遺跡・石塚遺跡・下佐野遺跡の調査－』
- 高岡市教育委員会 1997 『1. 石塚遺跡高崎地区 2. 石塚遺跡安川2地区 5. 武相調査地区 II 石塚遺跡蘿井地区』『高岡市埋蔵文化財調査概報第36号 市内遺跡調査概報VI－平成8年度 石塚遺跡の調査他－』
- 高岡市教育委員会 1998 『3. 石塚遺跡、白石地区』『高岡市埋蔵文化財調査概報第39号 市内遺跡調査概報V－平成9年度 麻生谷新生園遺跡の調査他－』
- 高岡市教育委員会 1998 『高岡市埋蔵文化財調査概報第43号 石塚遺跡調査概報V－平成10年度、主要地方道高岡環状線道路拡幅工事に伴う調査－』
- 高岡市教育委員会 1999 『3. 石塚遺跡、福島地区』『高岡市埋蔵文化財調査概報第41号 市内遺跡調査概報IX－平成10年度、下佐野遺跡の調査他－』
- 高岡市教育委員会 2000 『高岡市埋蔵文化財調査概報第45号 日市内遺跡調査概報X－平成11年度出来田南遺跡の調査他－』
- 高岡市教育委員会 2001 『高岡市埋蔵文化財調査報告第7号 石塚遺跡、東木津遺跡調査報告－都市計画道路下伏間江・福田線建設に伴う平成9・10年度の調査－』

- 高岡市教育委員会 2003 「高岡市埋蔵文化財調査概報第 54 号 石塚遺跡調査概報VI—介護老人施設「きぼう」建設に伴う調査—」
- 高岡市教育委員会 2004 「I. 石塚遺跡—きぼう地区の調査—」『高岡市埋蔵文化財調査概報第 56 号 市内遺跡調査概報 XIV—平成 15 年度、石塚遺跡の調査他—』
- 高瀬重雄他 2001 『富山県の地名』 日本歴史地名大系 16 平凡社
- 寺村光晴 2001 「玉作とその流通」『ものづくりの考古学』 大田区立郷土博物館
- 寺村光晴 2004 『日本玉作大綱』 吉川弘文館
- 富山県教育委員会 1990 『北陸自動車道遺跡報告 捨 A 遺跡 石器編』
- 富山大学人文学部考古学研究室 1989 『富山大学考古学研究報告第 3 号 越中上木麻』
- 長瀬 明 2000 「東京都豊島馬場遺跡における『方形裏溝臺』の再検討」『法政考古第 26 集』 法政考古学会
- 中野山紀子 1998 「下老子笹川遺跡の管玉について」『富山考古学研究 別刊号』(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 中野山紀子 1999 「富山県の管玉製作について」『富山考古学研究第 2 号』(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団 2000 『平田遺跡』
- 新潟県上越地域振興局・上越市教育委員会 2006 『吹上遺跡』
- 馬場伸一郎 2006 「糸生管玉作りの施作分割技術」『季刊考古学第 94 号 糸生・古墳時代の下文化』株式会社雄山閣
- 羽咋市教育委員会 1986 『柴垣須田遺跡』
- 久田正弘・馬場伸一郎 2003 「石川県羽咋市東の湯タケノハナ遺跡における管玉加工技術と角柱体の形成」『アルカ研究論集第 1 号』 株式会社アルカ
- 福井県教育庁埋蔵文化財センター 1988 『下原遺跡・堀江十朱遺跡』
- 福海貴子 2003 「八日市地方遺跡出土上器の検討:『八日市地方遺跡 I』」 小松市教育委員会
- 北陸中世考古学研究会 1993 『中世北陸の家・城敷・暮らしぶり』
- 北陸中世考古学研究会 2004 『掘立柱建物から礎石建物へ』
- 宮田 明 2003 「八日市地方遺跡における管玉製作の技術的特長」『八日市地方遺跡 I』 小松市教育委員会
- 占岡 康輔 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

図 版

図版一 遺跡写真
石塚遺跡



1. 二上山を望む（南から）



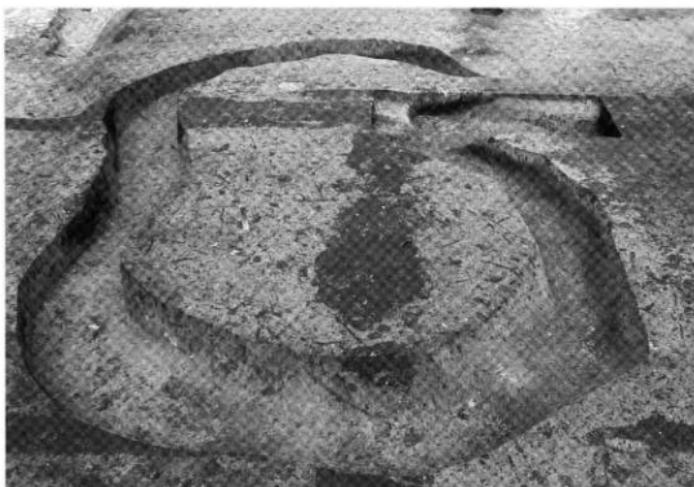
2. 調査区全景（東から）

図版二 遺構写真 文苑堂地区



全景（上方から、上が北）

図版三 遺構写真 文苑堂地区

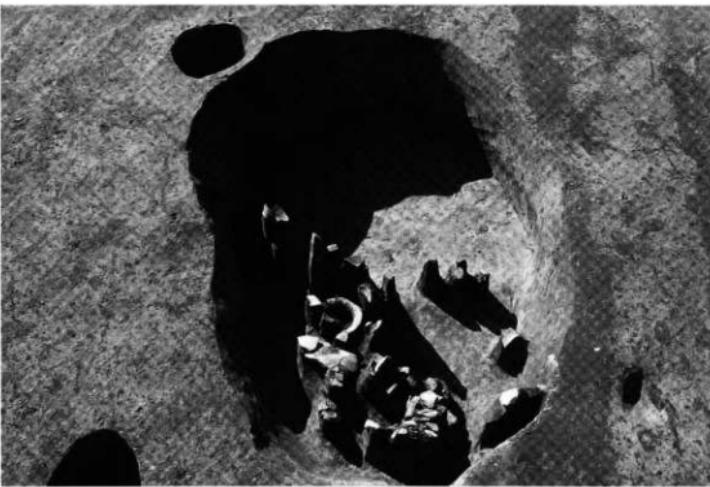


1. SX01 全景（南から）

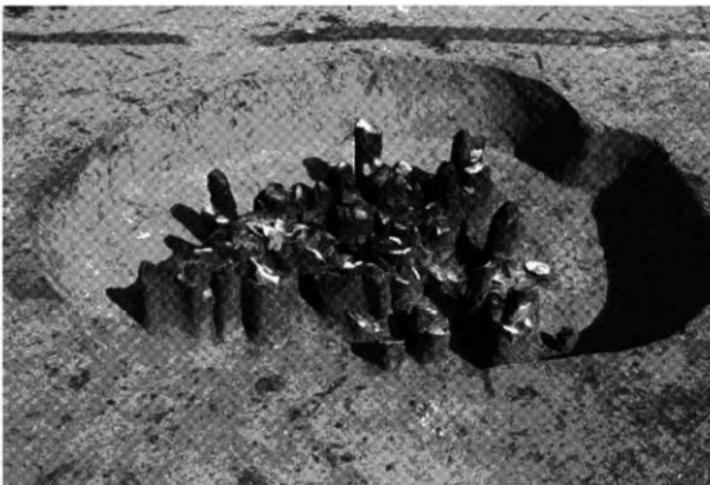


2. SX02 全景（北から）

図版四 遺構写真
文苑堂地区



1. SK19 遺物出土状況（東から）



2. SK43 遺物出土状況（南から）

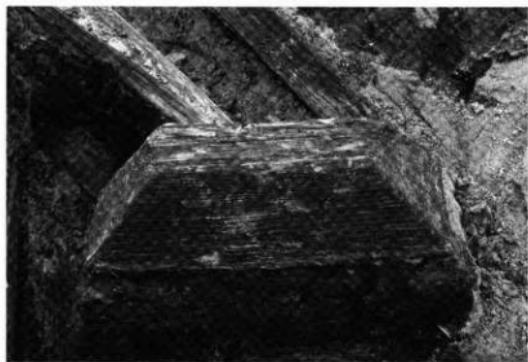
図版五
遺構写真
文苑堂地区



1. SD01 西側
中央土層断面
(南から)



2. SD01 西側
遺物出土状況
(南東から)



3. SD01 西側
遺物出土状況
(南から)

図版六 遺構写真 新鮮市場地区



全景（上方から、上が北）



1. SI01 全景（南から）

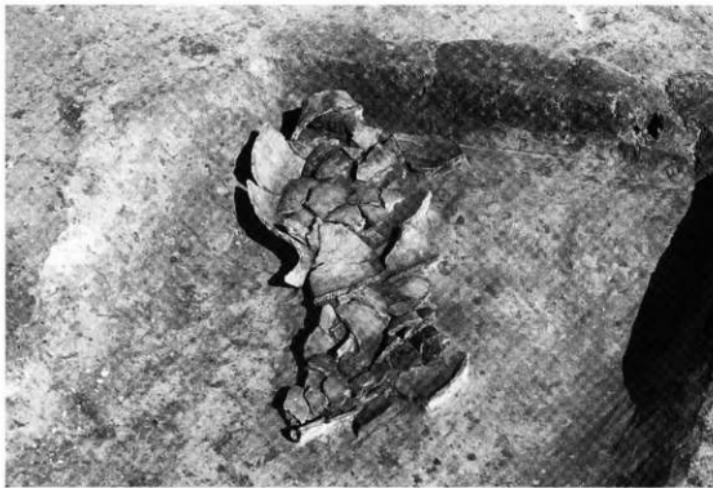


2. SI01 灰穴炉と柱穴群（南から）

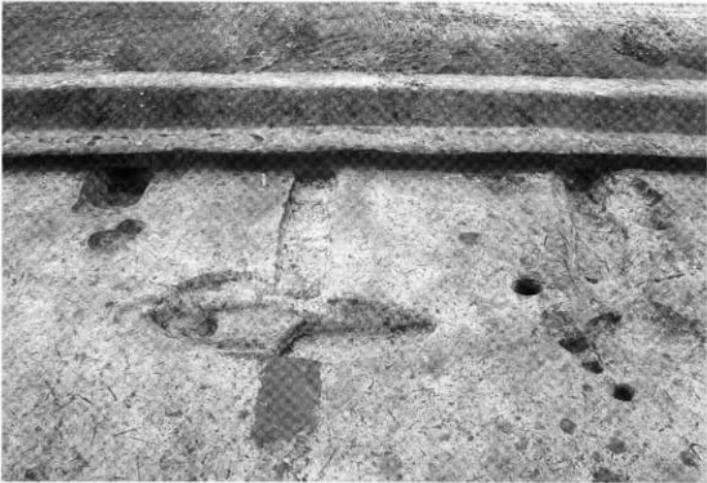
図版八
遺構写真
新鮮市場地区



1 . SZ01 全景（東から）



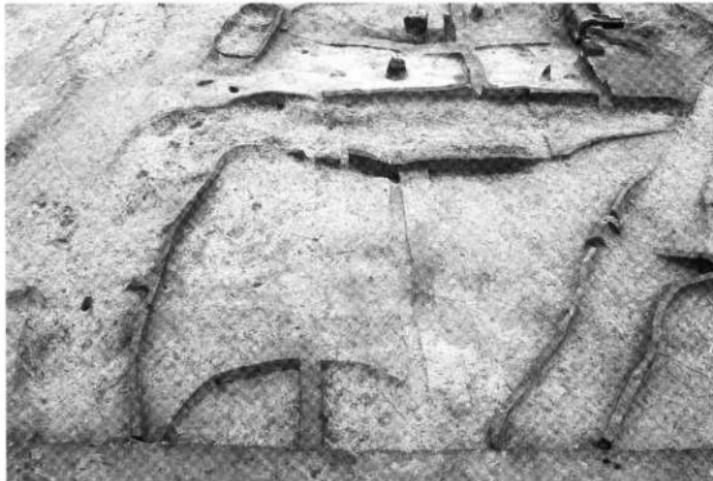
2 . SZ01 遺物出土状況（南西から）



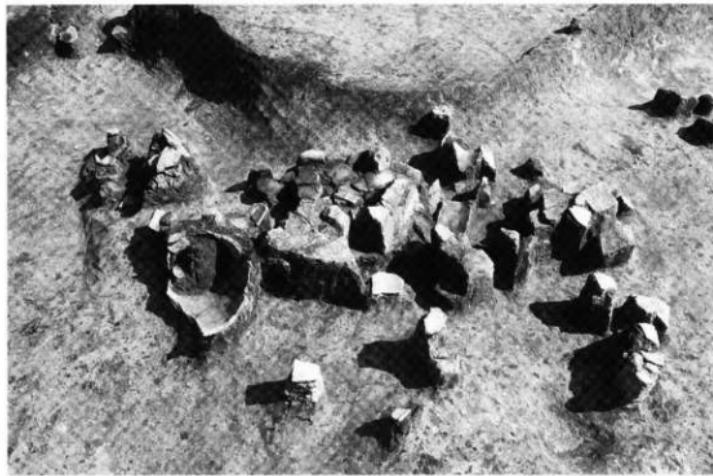
1. SZ02 全景（西から）



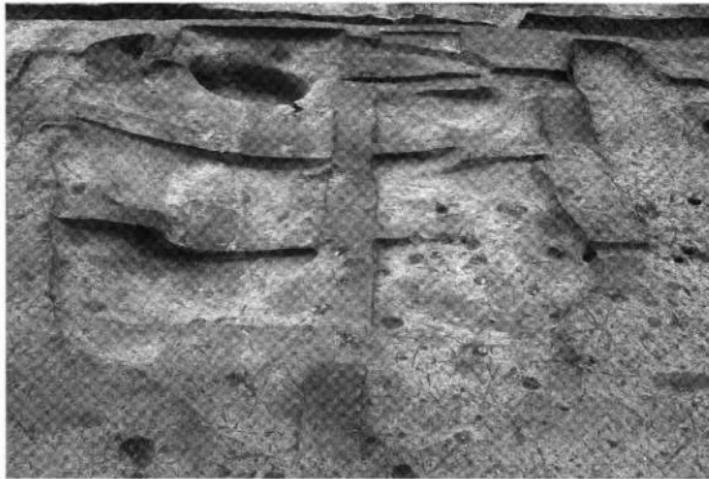
2. SZ02（南周溝部） 土層断面（東から）



1. SX01 全景（東から）



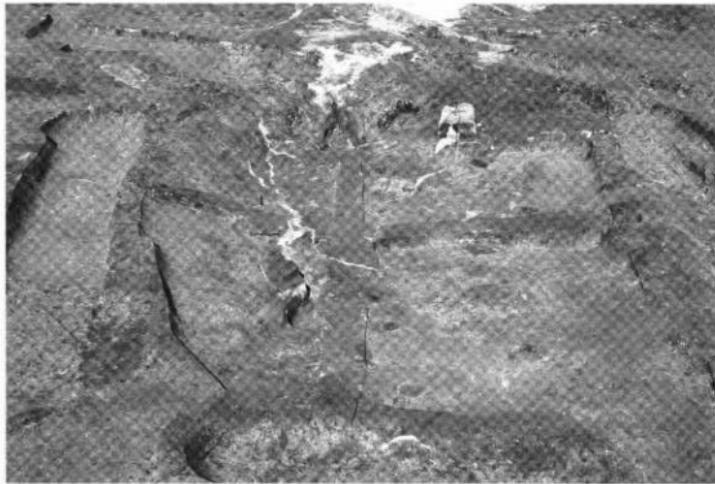
2. SX01 遺物出土状況（南西から）



1. SX02 全景（南から）



2. SX03 全景（東から）



1. SX04 全景（南から）



2. SX04
b-b' 西側土層断面
(南から)

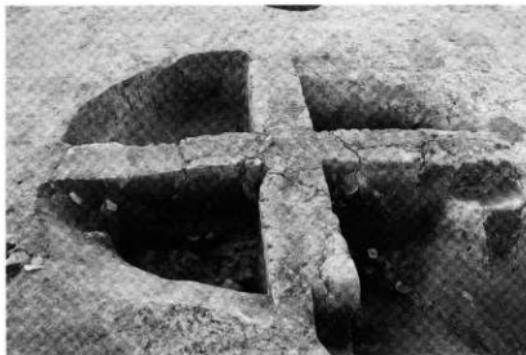


3. SX04
b-b' 東側土層断面
(南から)

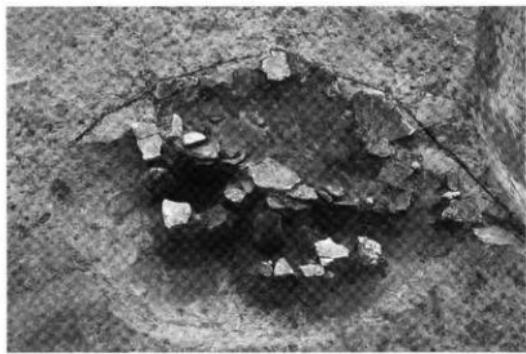
図版
一三
遺構写真
新鮮市場地区



1. SK06
遺物出土状況
(東から)



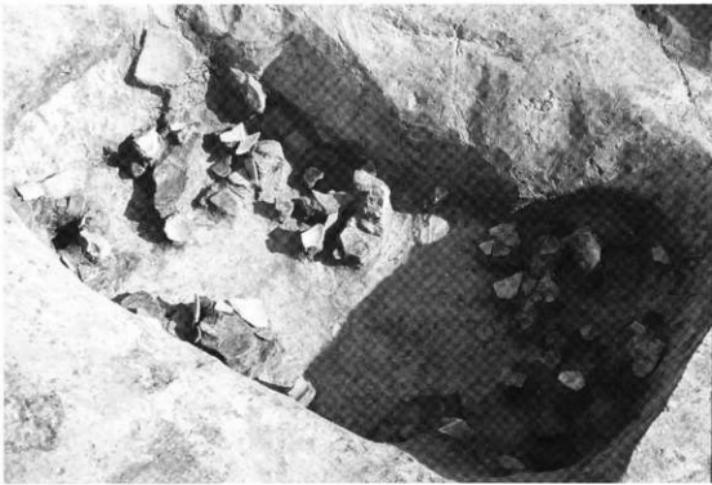
2. SK19
土層断面
(東から)



3. SK26
遺物出土状況
(東から)



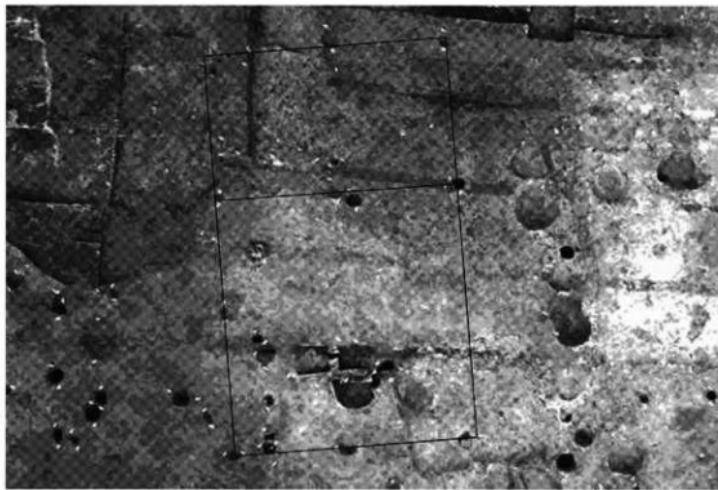
1. SK27~30 全景（北から）



2. SK27 遺物出土状況（南から）

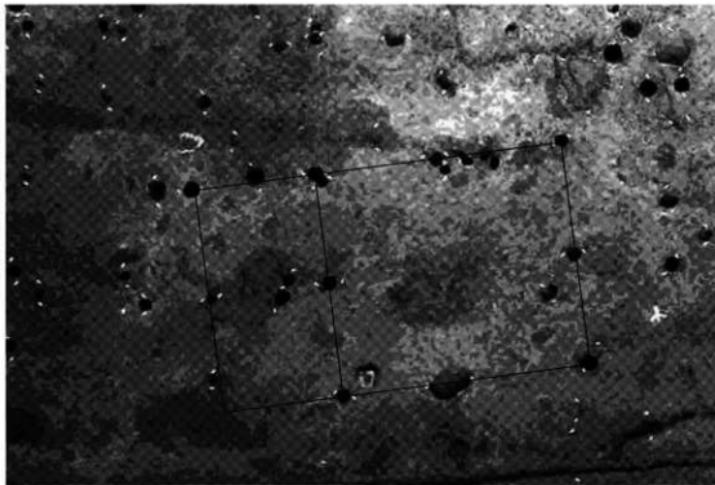


1. SB01 全景（南から）

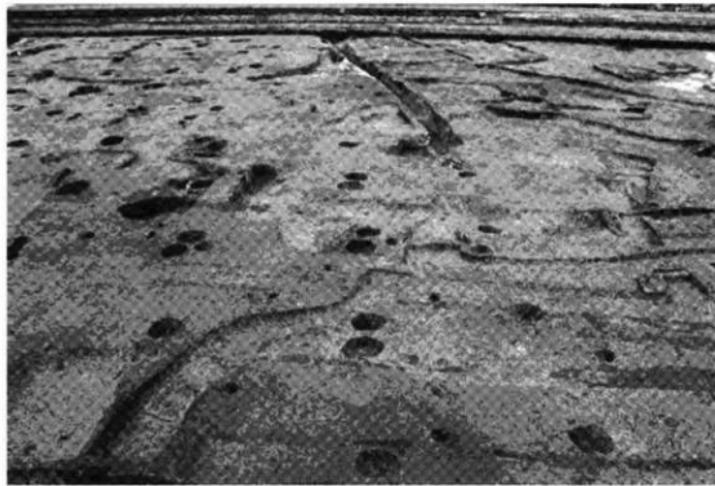


2. SB02 全景（上方から、上が北）

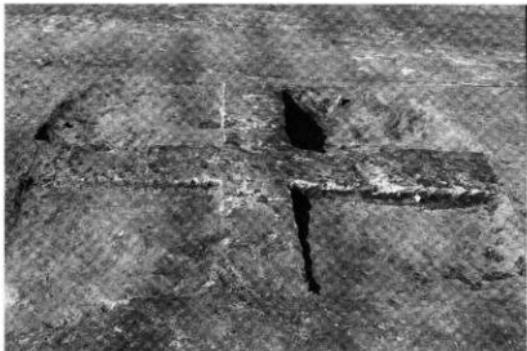
図版
一六 遺構写真 新鮮市場地区



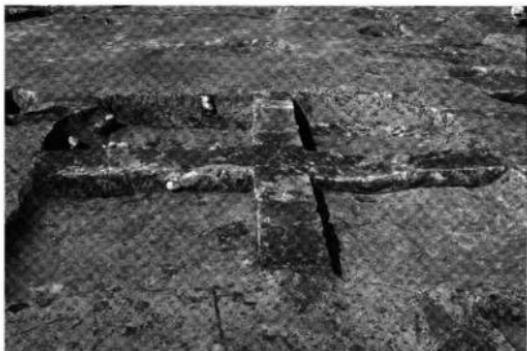
1. SB03 全景（上方から、上が北）



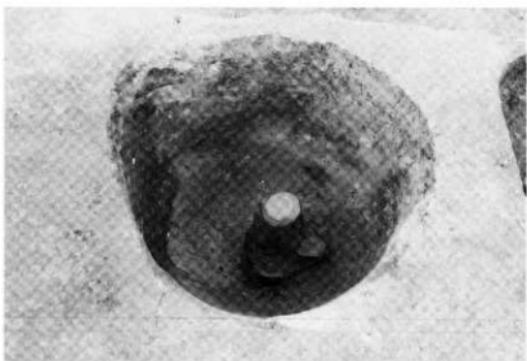
2. SB04 全景（南から）



1. SK01
土層断面
(南から)

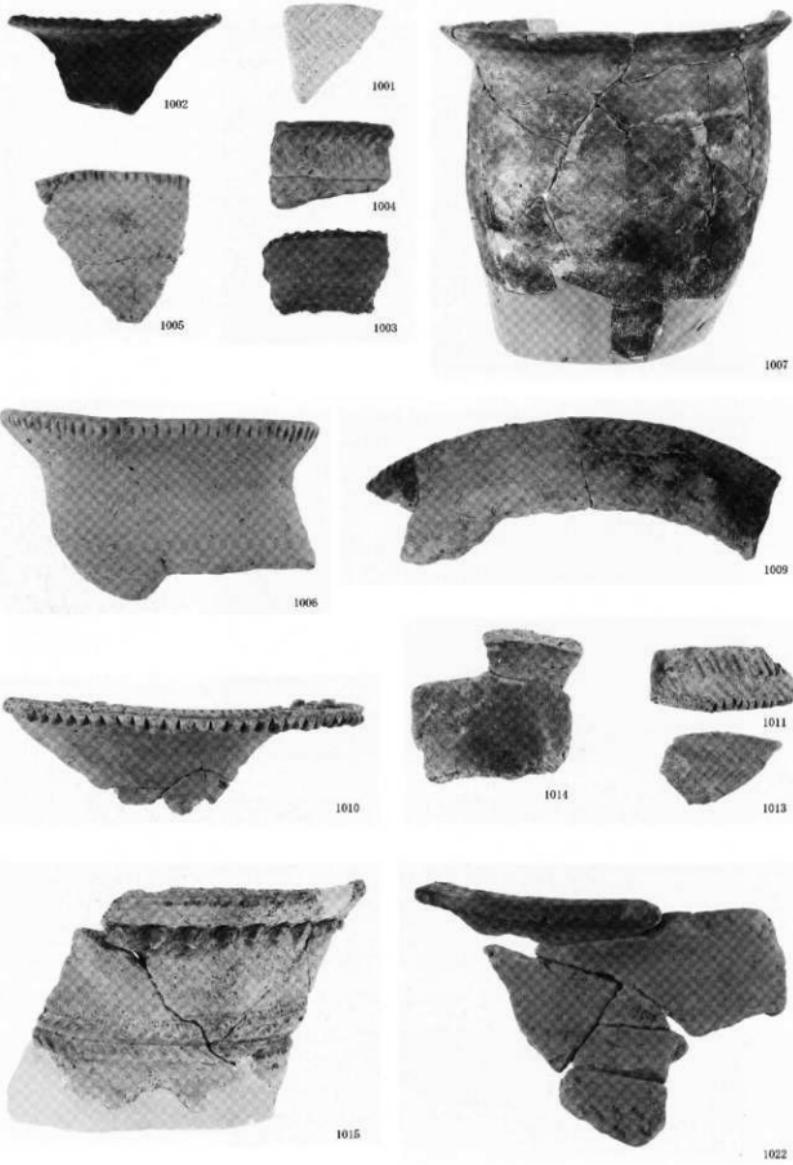


2. SK03
土層断面
(南から)

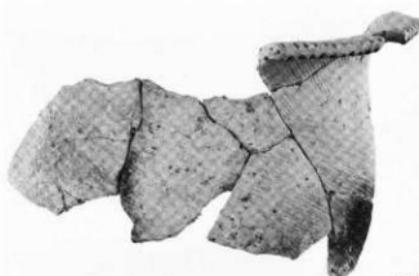


3. SK07
遺物出土状況
(北から)

圖版一八 遺物寫真 文苑堂地區



弥生土器



1023



1024



1028

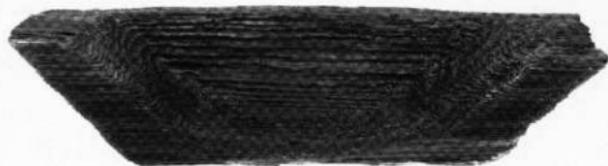
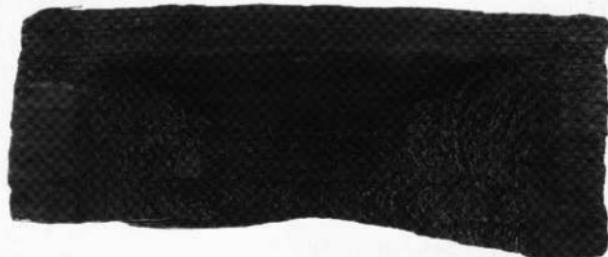


3001



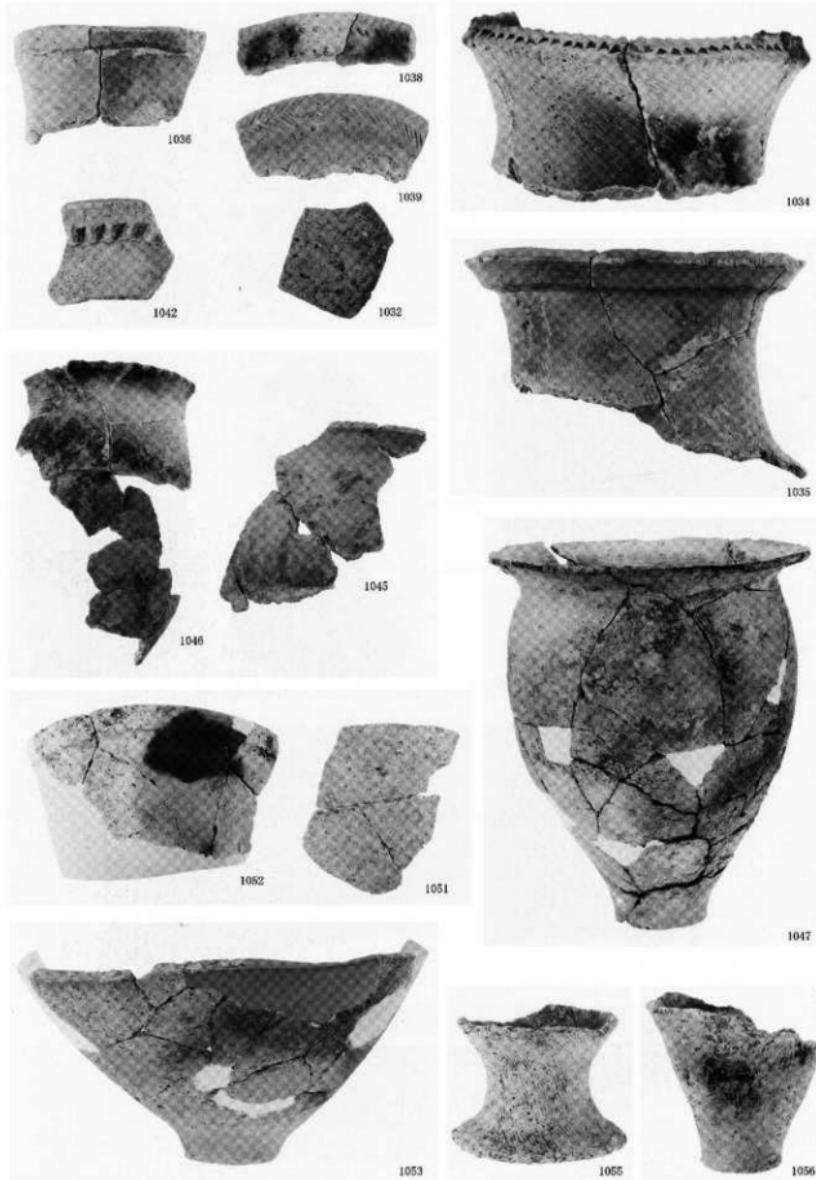
3002

3004

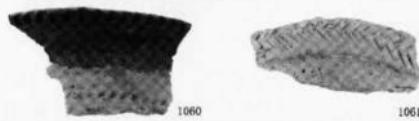
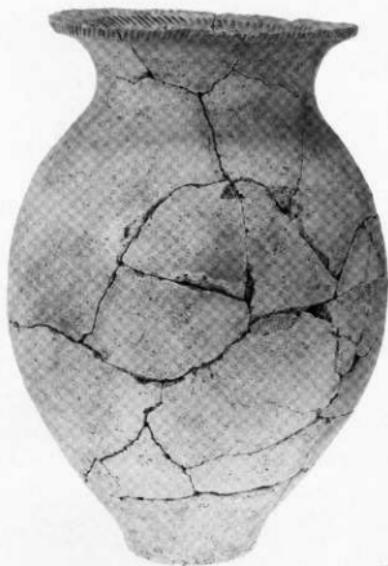


2008

弥生土器 須恵器 石製品 木製品



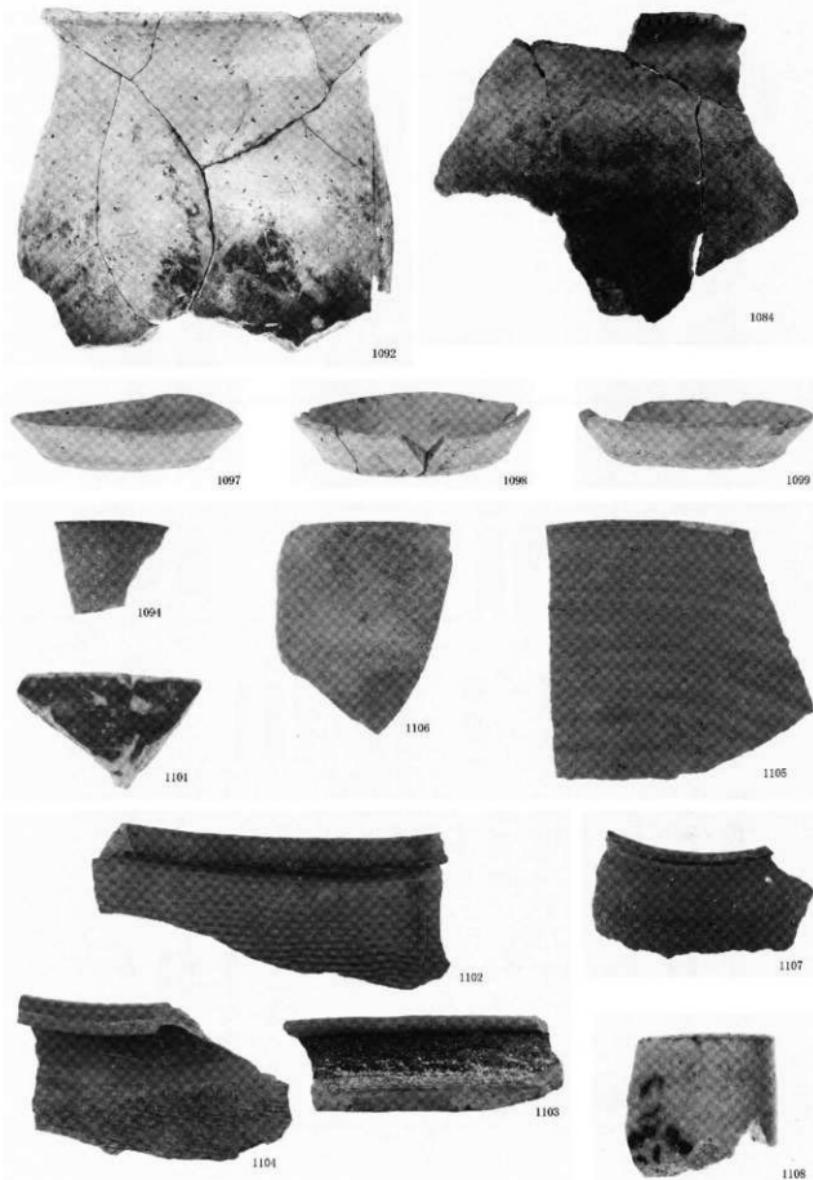
弥生土器



圖版二三 遺物寫真 新鮮市場地區



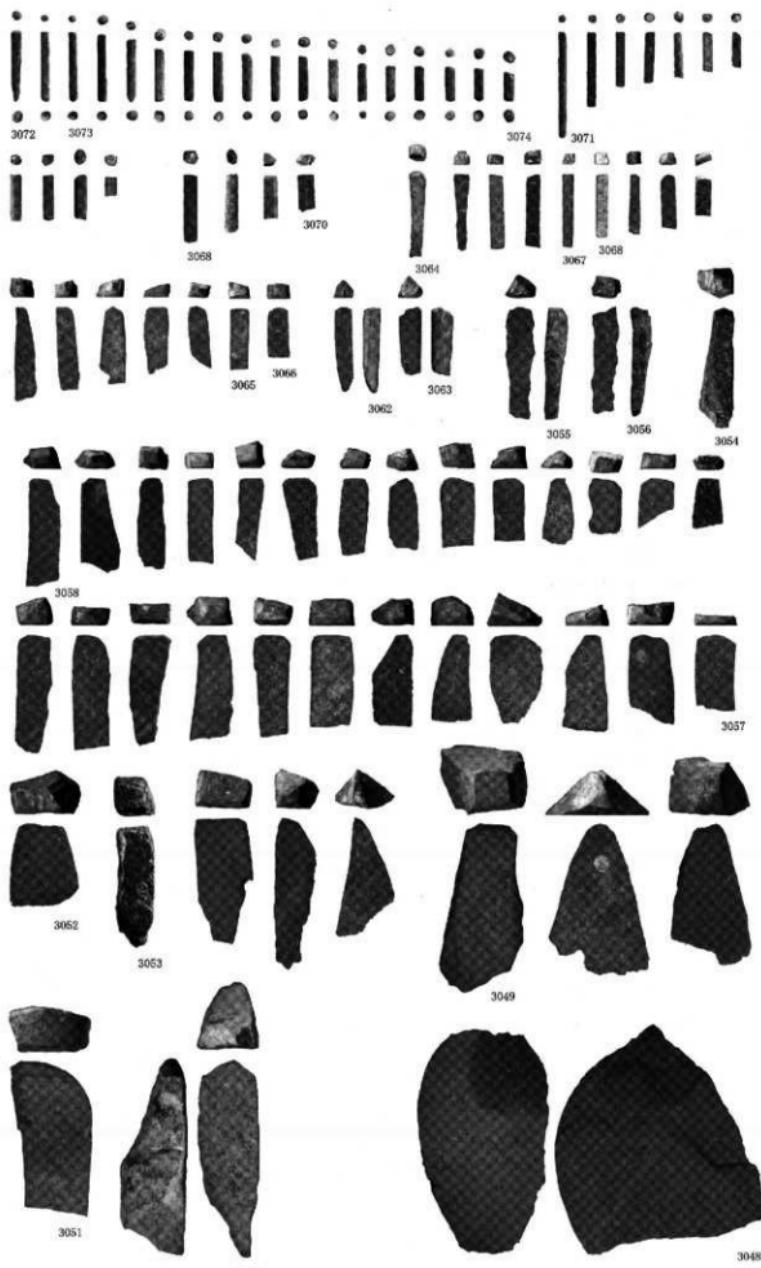
弥生土器



弥生土器 土師器（中世） 珠洲 瓦質土器（中世） 陶磁器（近世）



管玉関連



報告書抄録

ふりがな	いしづかいせきちょうしほうこく							
書名	石塚遺跡調査報告							
副書名	文苑堂書店福田本店・新鮮市場福山店新築工事に伴う調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	17							
発行機関	高岡市教育委員会							
編著者名	山口辰一（高岡市教育委員会文化財課） 酒井英男 岸田徹 香取明日香（富山大学） 阿部将樹 田中昌樹（株式会社アーキジオ）							
編集機関	株式会社アーキジオ							
所在地	高岡市西藤平蔵581番地							
発行年月日	西暦2007年 12月 28日							
所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 。'。' 36° 73' 54"	東経 。'。' 136° 98' 27"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
石塚遺跡	富山県 高岡市 福田・上北島	016202 202158	36° 73' 54" 36° 73' 60"	136° 98' 27" 136° 98' 20"	20050624 20051017	5,700m ²	店舗新築	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
石塚遺跡 文苑堂地区 新鮮市場地区	集落	弥生 中世	周溝を持つ平地式建物 方形周溝墓 周溝状造構 周溝を持つ大型土坑 掘立柱建物 区画溝 土坑 溝	弥生土器・古墳土器・古代須恵器・中世土器 珠洲・近世陶磁器 木製品(檣 線打具? 板状 棒状) 石器(石包丁 石鎌 磨製石斧 スクレイパー、 砥石 石劍 石針) 菅玉類				

高岡市埋蔵文化財調査報告第17冊

石塚遺跡調査報告

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

2007年12月28日

印刷所 キクラ印刷株式会社

富山県高岡市樋脇48-2